勇者って一人じゃないんですか？

Kelten

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者って一人じゃないんですか？

【Ｎコード】
Ｎ１１５７Ｙ

【作者名】
Ｋｅｌｔｅｎ

【あらすじ】
ドラゴンクエストの世界に勇者は一人しかいないのか？
ラダトーム城の兵士（転生者）は勇者の物語に深く関わっていく。

プロローグ

「勇者って一人じゃないんですか？」

ラダトーム城の謁見室に俺の素朴な質問が響いた。

人間は理解しあえるんだ。うん、今理解できた。だってみんな目が言ってる。

（お前はだまれ！）

そして俺は勇者５人の謁見が終わるまで黙って立っていた。

――――――――――――――――――――――――――――――

俺の名前はケルテン　ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士である。まだ新任の為任務が何なのか知らないが権限だけはすごい。王様と国務大臣以外の命令を拒否できるうえ、城の中に立ち入れない場所はほとんどない。

俺がこの世界がアレフガルドと認識したのは１０年前、何の脈絡もなくこの世界がドラゴンクエストの世界だと認識した。平和な時代で４００年ほど前に大魔王が現れロトの勇者が退治したという伝説がある。つまり近い未来に竜王が現れる。そう理解した俺はそれに備え自らを鍛えた。そう自分を育ててくれた湖上都市リムルダー

ルを守れるぐらいに。で何の因果かラダトーム城で兵士をやっている。しかも勇者の謁見とはこの物語の最高の見せ場だと張り切っていた。

ちなみに俺の位置は下の通り特等席である。

――

近衛隊長　近衛　近衛　近衛

王様　勇者

国務大臣　俺　近衛　近衛

――

プロローグ（後書き）

見切り発車

準備

時は5時間ほど前に遡る。

ラダトーム城兵士宿舎　食堂

俺はいつも朝のトレーニングの後食事をする。
食事の後は王室図書館にて史書を漁り、知識を貯める。
昼からは新任の挨拶周りをするのがここ一ヶ月の日課だ。
でも今日は違った。食事の最中、近衛のサイモンがやってきた。

「おっいたいた。お前昼からの謁見に立てって命令だ。大臣からの伝言な。」

こいつは不良近衛騎士のサイモン。見た目は金髪碧眼で美形、さらに貴族の三男坊のくせに少し残念なやつだ。一度俺と衝突してから俺お前の仲だ。

「おい、なんか失礼なこと考えていないか？」

「あれっ顔にでてたか。で、王様への謁見は近衛騎士が立つのが決まりじゃないのか？」

「お前なあ。まあいい、今日は勇者の謁見だからな。大臣の隣につけよ。」

「とうとう勇者のお出ましか。いや光栄なことだな。」

「そうか?まっ人それぞれだからな。昼の謁見１５分前に控え室に集合な、典礼用の装備で。」

「まじか！典礼用装備。あれ嫌いなんだけど。」

典礼用装備。鉄の鎧、鉄の槍、鉄の盾、腰に鉄の剣のフル装備で総重量２０ｋｇ以上、しかも無駄に豪華な作りをしている。

「俺は好きだけどな。いかにも騎士って感じだろ。」

「お前はムキムキだからな。俺みたいな軽装備にはきつい。」

「どうせ立っているだけだ。じゃまた後でな。」

他人事だと思って勝手なこと言う。俺の戦闘スタイルは革鎧に両片手刀、さらに魔法の併用だ。しょうがないから今日はいいとして、次の為に典礼用の革鎧を用意するよう大臣に頼もうかな。

おお勇者ロトの志を継ぎし者よ

「勇者ガルドどの、ご入場」

謁見室に勇者の入場を告げる声が響き、黒髪短髪、身長２m弱、ごつい体の男が入ってくる。しずしずと歩み寄り王座の手前で片膝をつく。

「勇者ガルド、まかりこしました。」

ブラボー！！！なんて感動的なシーンだ。俺はこの場にあることを精霊ルビスに感謝する。

「おお勇者ロトの志を継ぎし者よ、よくぞ来てくれた。」

あれ？なんかセリフがおかしいぞ。志？　血じゃないの？

「今アレフガルドは、竜王によって光を奪われ絶望の下にある。そなたがまことの勇者なら竜王を倒し光の玉を取り戻してくれ。なお勇者への支援に関しては大臣より仔細説明をうけよ」

俺の横で大臣が一歩前にでて説明を始めた。

「今ラダトーム王家ラルス１６世の名において勇者ガルドとの契約が成された。

一つ、ラダトーム王家は準備金として１００ゴールドを勇者に与える。

一つ、ラダトーム王家は勇者の生命に対しできる限りの支援を行なう。なお血の契約において生命失　　われしときでも蘇生が可能である。
一つ、勇者はラダトーム王家御用達の宿屋、武器屋、道具屋において割引サービスを受けることがで　　きる。
一つ、勇者は王家準騎士として扱う。なお装備品として同等のものを所持する権利も与えられる。

一つ、勇者が獲得したモンスター素材は王家が専属で買い上げる。

一つ、・・・・・・・・・・・・・

（なんだこれ？いやに生々しい契約だな。血の契約ってなんだ？割引サービス？買取？俺は混乱しているようだ。まだ大臣が何か言っているようだが何も聞こえない。というか聞きたくない。あ〜　あ〜　何も聞〜こ〜え〜な〜い〜）

ふと我にかえると勇者が大臣の差し出した紙に血判を押している。

「最後に王は公人ゆえに口にできぬが、さらわれし王女ローラの命を案じておられる。もしそなたが姫を助けてきたならば、臣下にして最高の恩賞が与えられるであろう。では行くがよい勇者ガルドよ」

そして勇者が退出していく。なんと言うか想像していたのとは違うが儀式は終わった。と思った。

「では次の勇者を入れよ」

「勇者ドゥーマンどの、ご入場」

で冒頭の一言「勇者って一人じゃないんですか？」

勇者支援官　兼　査察官って何？

今俺の前で大臣が怒って怒鳴っている。

「もう少しで台無しになるところだったのだぞ、次の勇者の耳に入らなかったからよかったものを。」

「まあまあ大臣殿、ケルテンも知らずに口にしたまでのこと、大事には至らなかったのですからよろしいではないですか。」

「私が怒っているのは知らなかったことではないですよ、近衛隊長殿。そなたの部下が十分な説明をしなかったことに腹をたてているのです。部下の教育は正しく行なっていただきたいものですな。」

（うへっ！怒りの矛先がかわった。近衛隊長もサイモンも小さくなってる。）

「いえね、大臣。俺は知らなかったのですよ、ケルテンが知らないことをね。てっきりすでに大臣が説明しているものだと・・・。」

大臣は苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「もうよい！では改めて説明しよう。ケルテン何か質問はあるかね。」

「はい、では質問させて頂きます。勇者は唯一人、しかもロトの血を引くものではないのですか。そう理解しているつもりでしたが？」

「なるほどよく勉強しているな。勇者ロトの伝説とロトの預言書か。

」

勇者ロトの伝説：およそ４００年前、アレフガルドを絶望に落とした大魔王がいた。この災難に対してラダトーム王家は異世界から勇者を召喚しこれを討伐させた。

ロトの預言書：大魔王は死に際して言い残した。我死すともいずれ第二の魔王が現れるであろう。

国民の噂：ロトの勇者の血を引きし新たなる勇者が現れ、この国を助けてくれるだろう。

ここ一月の間王立図書館で調べた中の公文書にあったのがロトの伝説とロトの預言書だ。俺の知っている事実といくらか異なるが大筋であってる。さらに国内にある無責任な噂（結果的には正しいのだが）を利用して半年前にラダトーム王家が国中に布告をだした。

『この国難に王家は勇者を公募する。我と思わん者はラダトーム城まで出でよ。』

（俺が知っている答えと現実の情報は大臣のそれと一致する。では何が違うのか？）

「そう怪訝な顔をするな。概ね正しいが問題がある。まず第一にもしロトの血に連なる者が現れても証明するすべがない。そしてその者が必ずしも竜王を討伐できるとは限らない。」

「では偽者かもしれない者を勇者として招き入れているということですか？」

「そうだ。だが一人一人にはお前こそロトの勇者として招き入れているのだ。だが何人の勇者が現れようと一向に構わぬ、そのうちの一人が目的を達成すればよい！」

いや、そこでキリッってどや顔されても困るんですが・・・。

「しかしそれでは泥棒に金をやるようなものではないですか？」

「だからお前がいるのだ。」

えっ！俺となんの関係があるんだよ。

「そこでだ。改めてお前に任務を与える。ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士　勇者支援官　兼　査察官だ。」

勇者システムの実情

「ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士　勇者支援官　兼　査察官？」

「そうだ。お前には今日謁見した勇者5人を担当してもらう。まず支援だが、勇者への助言、救助、レベル管理を主にする。」

「レベル？」

実のところ、この世界では敵を倒してもレベルが上がって強くなったりしない。地道な訓練と経験、素質でしか強くなれない。だからレベルなんてないのだが？

「うむ。各々の勇者の持ち込む素材によってレベルを決める。簡単に言えば倒したモンスターの証明だ。このレベルに応じてどの程度のことが可能か助言するがよい。詳しいレベル管理については素材買取所の者に聞くがよい。」

なるほど。スライムの素材をいくつか持ってきたら、次にスライムベス、ドラキー・・・と強いモンスターと戦わせればいいのか。これが経験値で、買取でゴールドを与える。つじつまはあうな。

「そして一番大変と思われるのが救助だ。もしなんらかの理由で勇者が行動不能もしくは死亡した場合、速やかに現地に行って救助するのだ。尚、死亡していた場合でも死体が残っておれば王家に伝わる秘術によって蘇生が可能だ。この任務ゆえにお前が特務隊士に抜擢されたと言っても過言ではない。」

どういうことだ。それだけなら近衛の連中でもできるような気もするが・・・？

「お前の疑問はわかる。この任務に大事なのは強さはもちろんのこと、魔法が不可欠だ。その中でもルーラ、ベホイミが最も重要になる。救助に行ったはいいが戻ってこれないのでは意味がないからな。現状ではそこまでの魔法が使える者で腕の立つものは少ない。残念ながら近衛でも隊長と副隊長ぐらいしかいないのだ。ケルテン、お前は全ての魔法を会得していたな。」

「ええ使えますよ、全てをね。」

「ならば勇者を救助後、ベホイミによる回復やルーラでの帰還を行なうのだ。」

「しかし勇者の行動不能、死亡、現在位置などは張り付いていなければわからないのでは？」

「その点は問題ない。私の執務室の壁にある世界地図があるな。あれで仔細がわかるようになっておる。それを含めての血の契約だ。」

「なるほど、そのような魔法があるとは知りませんでした。」

「これも王家の秘術よ。知らぬのも無理はない。それはともかくもう一つの任務だが、勇者として力量が足りぬ者、器量が足りぬ者がいたならば、査察官として解任する権限を与える。なお口頭による宣言だけでなく説得も必要だ。ちなみに先月までに旅立った勇者は２０名だが現在残っているものは５名しかおらぬ。」

「ちなみに力量や器量の基準はどういったもので？」

「それはお前に一任する。解任される者が納得いかぬ場合もあろうが説得の方法も一任する。」

「え～とっ、それは私の気分でやめさせることができて、さらに気に入らないやつはぶん殴ってでもやめさせろってことですよね！」

「そうだ。察しがいいではないか。ちなみに先月までに旅立った勇者は２０名だが現在残っているものは５名しかおらぬ。お前以外に２名の特務隊士が同じく任務についておるが大体実力行使が必要だったらしいぞ。まあお前は近衛隊長と互角に戦えると聞く。せいぜいがんばるがよい。」

ちょ、だれがそんなこと言った。大臣の隣で近衛隊長とサイモンがニヤニヤしている。お前らか。

「いえ、近衛隊長には一方的に負けています。」

「あの勝負は私の方が一方的に有利なルールの元行なわれたもので謙遜することはない。お前を推挙した私の顔もたててくれ。がっはっはっ！」

近衛隊長が腕を組んで笑っている。隣のサイモンがサムズアップしている。何がグッ！だ。あとで締める。

「それにこれはもう決定事項だ。快く拝命せよ。」

「はあ、わかりました。特務隊士ケルテン　勇者支援官兼査察官拝命いたします。」

腹が立つので嫌味たらしく片膝を付き、右手を心臓の前に沿える最敬礼で答えてやる。

「よい。任務に励め。」

くそっまるで嫌味が効かない。さすが国王の実弟で王位継承権２位だけはある。これだから高貴な生まれな方は困る。

「最後にもう一つある。もし今夜にでも城下で女を侍らせて酒宴に興じておる不届き者がいたら、即解任、さらに５００Ｇの罰金をさせよ。罪状は国王様への詐欺罪だ。これで国庫への負担はほぼ無くなる。」

うわっなんて悪辣な。５人のうち一人くらいそんなやつはいるだろう。準備金１００Ｇは高くないってわけだ。しかし素直に聞くはずもないから、全ての厄介事を俺に押し付ける腹だ。

「そう嫌な顔をするな。今までおよそ半数がそれで脱落しておる。無条件でお金や名誉がもらえると思っておる輩は少なくないぞ。」

「わかりました。もういいです。せいぜいがんばりますよ。」

おれは重装備を引きずるように退室した。

考察：魔法とステータス

部屋に戻った俺は重い装備を所定の木人形にかけていく。典礼用の装備は細部は結構華奢にできているので装備しないときは部屋の隅の木人形にて片付けておかないといけない。そこににやにやしたサイモンが入ってくる。

「よっおつかれ！さっきは悪かったな。」

「そう思うなら手伝え。片付けるのも手間だ。自分に着せるより面倒くさい。」

「了解。しかしそんなに重いのが嫌なら魔法使い用の正装でよかったんじゃね？」

「ああ、それも考えてはみたんだがある理由があって止めた。」

サイモンが手を止めて聞き返す。

「ある理由とは？」

「さぼるなよ。まあ大した理由じゃないが、まず魔法使いの地位が低い。」

「そうか？おれはすごいと思うけどな。ベギラマとかベホイミとか俺には使えないからな。」

この時代の魔法は過去のロト一行が使用していた魔法に較べてかなり劣る。物語のはじめの作品とかそういう問題だけでは解決でき

ない理由が実際にはあるはずだ。そう思って過去の文献等調べたのはもう5年ほど前からか、今ではそれでとんでもない量の報告書が書ける。ただ報告する義務もないし、唯一の俺のアドバンテージを知られるのも困る。そう俺は全ての魔法が使える。ベギラマではなくベギラゴン、ベホイミでなくベホマ、それ以外の全ての魔法すらアレフガルド中を旅して発掘、解読、会得している。そういった理由を踏まえてこの時代の魔法使いは地位が低いと理解している。

「そういうがベギラマの一撃と君らの剣の一撃、与えるダメージは大差ない。ならばＭＰを消費しない剣の方が強い。またベホイミで回復できる量もそれと大差ない。かつてのロトの時代の大地を焼き払い、天より雷を落とし、死人すら蘇らせる魔法が使えるわけではないからな。」

俺は嘘をつく。使える魔法を使えないふりをする。この強大な魔法を公表したくない。これは多分ロトの勇者の決定と違わないと思う。戦乱の時代には究極の武器になるかもしれないが平和の時代には強力な暴力となる。またもし竜王側が使えるようになると互いの使用する魔法は被害を拡大するであろうことは想像に難くない。

「ふ～ん、そんなものか？お前は学者みたいなことを言うんだな。でもよお、そんな強力な魔法が使えたら竜王軍もいちころじゃね？」

気軽に言ってくれる。物を簡単に考えすぎる。こいつは剣の力量は近衛でも上の方、魔法も簡単なホイミ、ギラ程度なら使用できるが双方を別物として考えることしかできない。もっとも片手剣と盾を使用する戦闘スタイルでは魔法は使いづらい。どちらかの手を空けないと魔法を発動できないから戦闘開始にギラ、ベギラマを放ち、戦闘終了後に回復を行なうのが一般的である。

「もしの話はいい。しかし懐かしい称号だ。ここの兵士になるまで戦う学者って言われてた。」

「一日の半分は図書館にいるお前らしいいい称号だ。よしできた。」

サイモンが最後のパーツを木人形に取り付け終わった。

「サンキュ。でさっきの話だが魔法使いのローブ姿は動きづらいから嫌だ。第一格好よくない。」

「プッ。クックック！やっぱりお前は面白いな。好きにするがいいさ、俺じゃねえし。」

「あきれたやつだな。よく近衛騎士になれたなお前？」

俺は肩をすくめて言う。近衛にあるまじき軽さだ。

「俺もそう思うよ。先の戦いで兄貴が死ななかったら間違いなく貴族の次男坊って気軽な身分でいれただろうよ。だれにとってかは知らんが迷惑な話だ。」

「お前が言うな！」

文句を言いながら革の服を着る。自作の特別製で動きやすく軽い。必要な場所だけ金属板で補強してある。篭手も脛当ても同様だ。最後にこれもマイラの鍛冶に作らせた特別製の刀を佩く。刀を作る技術は廃れていたが代々伝わっている秘伝書を解読して作ってもらった。それから更なる改良を重ねて今ではお気に入りの一刀だ。力の強くない俺には使いやすい装備である。

ここからは俺なりのステータスの考察である。

ちなみにステータスは確認できない。もちろんステータス確認画面なんか出てこない。他人と手合わせしたりして相対的に理解できるぐらいであるが俺、サイモン、近衛隊長の身体能力は次の通りである。

	俺	サイモン	近衛隊長
力	C	B＋	A
すばやさ	B	C＋	B
賢さ	A	D	C
HP	C＋	A－	A
MP	B－	D	C

記号は俺評価で、Aは数値にすると201～250　B151～200　C101～150　D51～100　E1～50で、数値の＋はふり幅の上、－が下と考えている。例外の数字としてSの250～255、Fの0（無）としている。Sはお目にかかったことはないがFは純粋な戦士のMPに該当する。

俺に較べて隊長の化け物具合がわかると思うが、サイモンも十分強い。しかもまだ伸びしろがある辺りに空恐ろしさを感じる。力のCというのは鉄の装備ができるぎりぎりの域である。ただし装備するとすばやさが犠牲になる。ゆえに俺は標準戦闘スタイルは捨てた。それでも普通に戦えば隊長には勝てない。多分サイモン相手でも5割勝てればいい方である。

次に賢さだが俺のAは転生ゆえの知識が上乗せされている。総合すると魔法使いか盗賊推奨のステータスだ。賢さはDあれば下級の魔法が使用できる。Cもあれば中級魔法、つまりこの時代の全ての魔法が使用できる。だからこの時代に賢さB以上は棄てステータス

になる。魔法はワンワードスペルではなく詠唱（発音必須ではない）方式で、理解できない詠唱を丸覚えで使用している。簡単に言うとギラといえば火の玉がでるわけでなく、口頭か頭の中で詠唱してラストワードとしてギラと唱える必要がある。実際はもっと難しくＭＰの消費、マナとの融合などの基本があるのだがここは割愛する。

総合して俺は隊長に勝てるかというと普通は無理だ。だが俺にしかできない魔法を使用すると可能になる。答えは能力上昇系魔法の使用、具体的にはピオリム（すばやさを元の値の０．２５倍上昇する）を2回かける。すばやさＢ：約１７０はすばやさＳ：２５５に化ける。他にはバイキルトやスカラの使用も有効である。騎士同士の試合は双方構えてからの戦いなので魔法を使用する時間はいくらでもある。かくして俺はそれなりの強さを認められている。

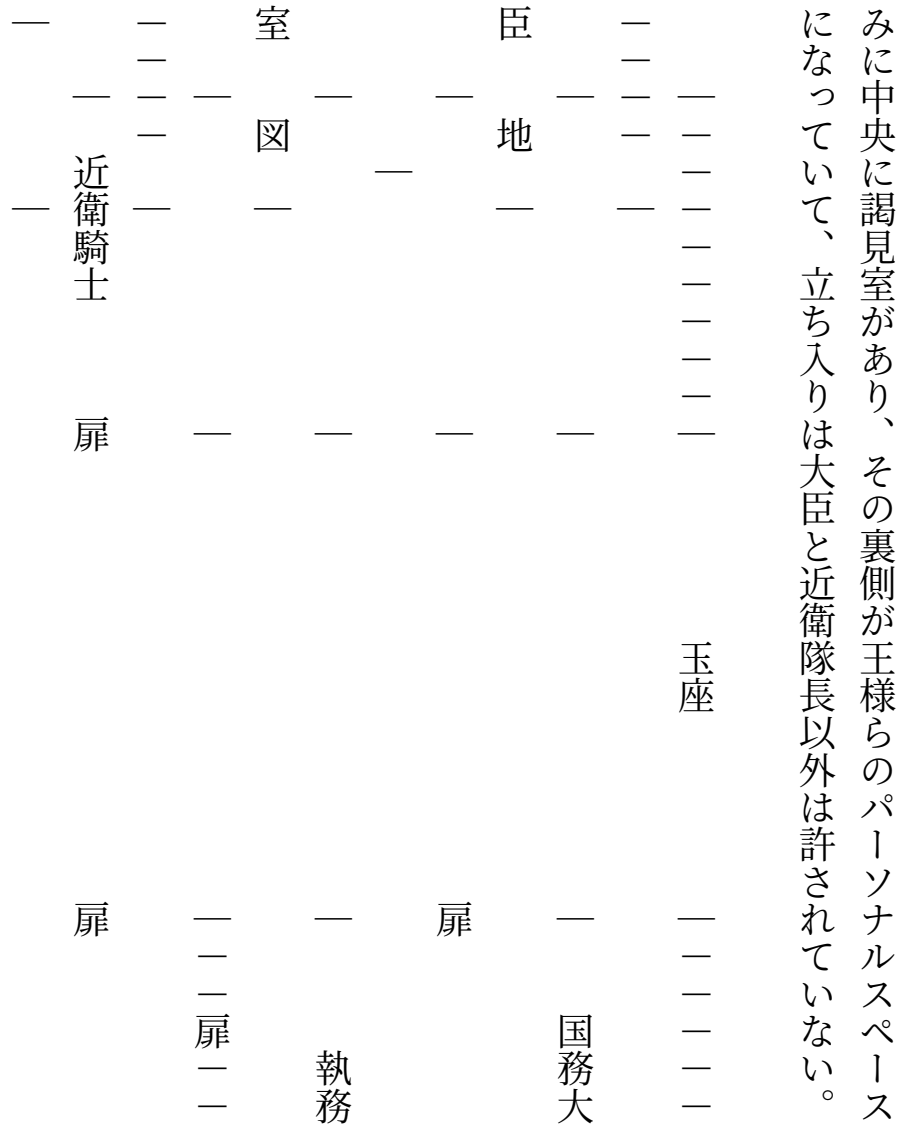
大臣室の地図

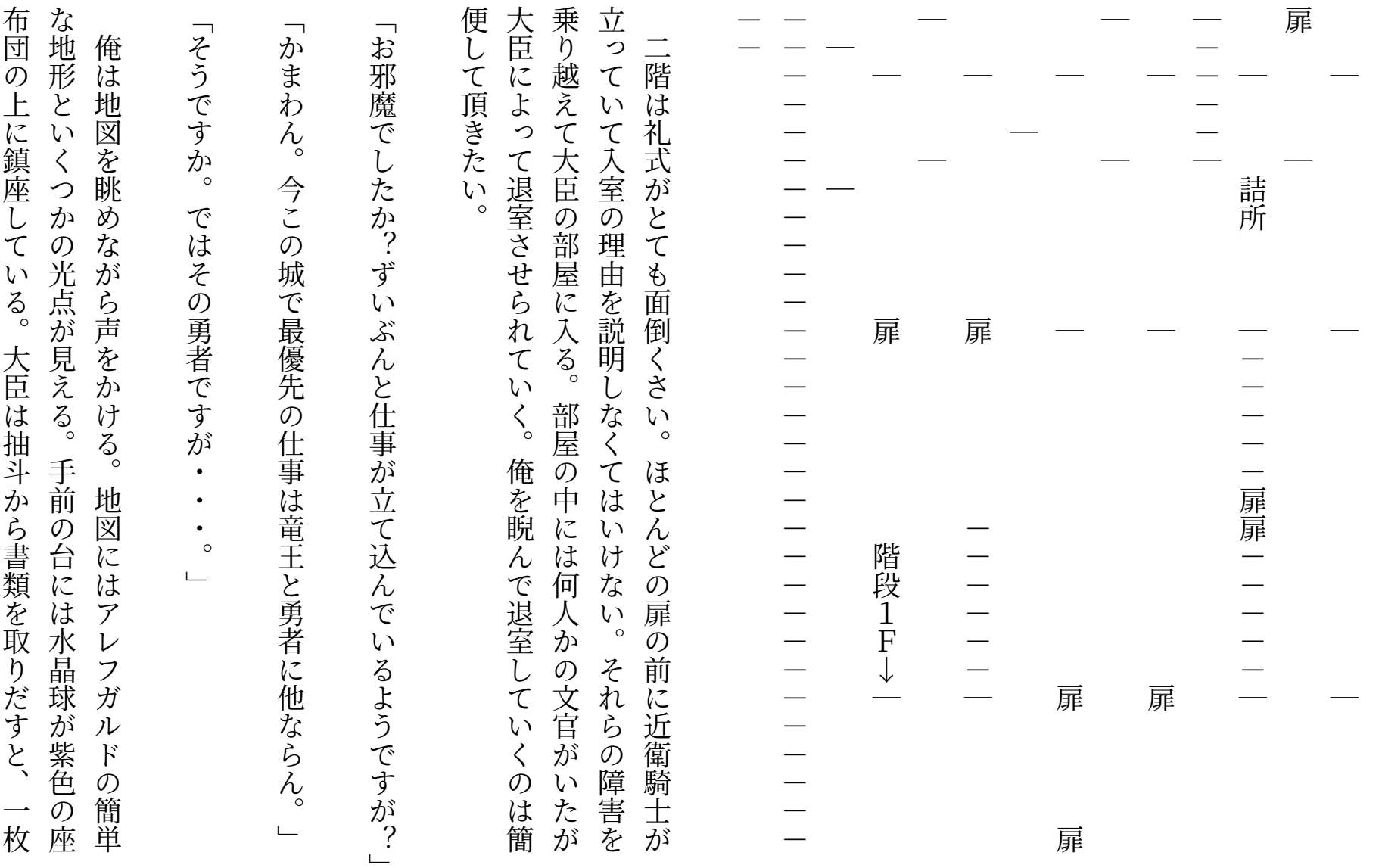
「よし準備完了。愉快な任務じゃないが行って来る。」

「おう、がんばれよ。応援しているぞ。」

「なんかお前に応援されると、馬鹿にされてる気がする。」

とりあえず今日の勇者5人の詳細と居場所を確認する為に大臣の執務室に向かうことにする。執務室へ行くには城の一階奥の二回への階段を上る。ここには常時二名の兵士が詰めている。もちろん俺は顔パスだ。他には大臣、近衛騎士なども顔パスだ。二階に上ると近衛の詰め所がある。反対側が大臣ら文官の執務室にである。ちなみに中央に謁見室があり、その裏側が王様らのパーソナルスペースになっていて、立ち入りは大臣と近衛隊長以外は許されていない。





二階は礼式がとても面倒くさい。ほとんどの扉の前に近衛騎士が立っていて入室の理由を説明しなくてはいけない。それらの障害を乗り越えて大臣の部屋に入る。部屋の中には何人かの文官がいたが大臣によって退室させられていく。俺を睨んで退室していくのは簡便して頂きたい。

「お邪魔でしたか？ずいぶんと仕事が立て込んでいるようですが？」

「かまわん。今この城で最優先の仕事は竜王と勇者に他ならん。」

「そうですか。ではその勇者ですが・・・。」

俺は地図を眺めながら声をかける。地図にはアレフガルドの簡単な地形といくつかの光点が見える。手前の台には水晶球が紫色の座布団の上に鎮座している。大臣は抽斗から書類を取りだすと、一枚

の書類の上に右手を水晶球に左手をかざす。すると一つの光点が強く光り水晶球に見知らぬ男達の姿が映った。

「見よ。これが血の契約の効果の一つだ。この契約書の人間をこちらの遠見の球に移すことができる。少量のＭＰを消費するが便利なものだ。」

「これはだれですか？」

「これは勇者１２とその一行だ。固有名詞は書類にある通りだ。」

書類にはエイブラムとある。固有名詞で呼べばいいのに。勇者１２ってひどくね？

「先も述べたが勇者が何人いようとかまわぬ。同じくそれが誰でも一向に構わぬ。現在いる勇者は１２、２５、４１、４２、４３そして今月の５１、５２，５３，５４，５５の十名だ。」

なるほど数字の前が謁見した月、後ろが謁見順か。

「なるほど一月、二月が一名ずつ三月は全滅で四月は豊作ってことですか。」

「ふん。だれがどうでもかまわん。お前は自分の担当勇者のみ気にすればよい。」

うわっ！一気に機嫌が悪くなった。やっぱ王族だ、下々のことなど気にも留めぬか。

「わかりました。では調べさせていただきます。今月の勇者はこの

5枚ですね。」

勇者５１　マイラ出身ガルド　大斧の使い手　嗚呼あのごついやつか。現在位置はと・・・水晶球に手を当て魔力を送り込む。もう城外にいるようだな・・・とりあえず問題なし。

勇者５２　ラダトーム出身ドォーマン　うっ記憶にない。居場所は・・・城下で同行者2名か。

勇者５３　ラダトーム出身クロウ　またしても全く記憶にない。こいつも城下で同行者2名っと。

勇者５４　ラダトーム出身ゲオルグ　やっぱり記憶にない。完全に意識が無かったようだ。反省せねば・・・　こいつも同行者2名？ちょっと映像を拡大・・・なるほど、こいつら三名はいっしょか。もしかするとあかんかも？

勇者５５　出身地不明アレフ　１５歳　若いな。まっ１８の俺が偉そうに言うことでもないか。ふむ居場所は城下町。ただし一人・・・。

最悪今日一日で４人解任しなくてはならないか。う～ん、我がことながら大変だな。

「大体わかりました。でも本当にいいんですか？５００Ｇとっても。」

「かまわん。我々王族に対して詐欺を行なったのだ。死刑でもかまわないぐらいだ。」

やべっ触れてはならないところに触れたようだ。とばっちりが来ないうちに退室することにしよう。

城下町の宿屋

城下町にやってまいりました。当たり前といえば当たり前だが、？の離れた所にある町ではなく同じ城壁内にある？、？のタイプである。この城下町はとても大きく公称の人口で１０万人、竜王出現後は集落を失った民が流れ込んでいて２０万人とも言われている。１０万人といえば多く感じられるかもしれないが、通常兵士一人を維持するには千人の民が必要といわれている。このぐらいの人口がなければ騎士団は維持できない。ちなみに各地の人口はマイラの村５０００人、地下の町ガライ８０００人、湖上都市リムルダール２００００人、砂漠都市ドムドーラ３００００人（現在不明）、城塞都市メルキド５００００人とされており、またそれ以外にも小集落が多数あった。過去形なのが残念である。リムルダール、ドムドーラ、メルキドはラダトームに多額の税金を払うことで一応の自治を許されている。

さてさっきの勇者達の光点の位置はたしか王家御用達の宿屋の辺りだが・・・なんだ俺が使っていた定宿じゃないか。この宿は俺も結構世話になってたし挨拶ぐらいしておくか。しかしここの宿代は５０Ｇほどだったと覚えているが、もしかして勇者割引で８Ｇとかになるとか言わないよな。としょうもないことを考えながら宿屋に入る。人の良さそうな親父がこちらを確認する。

「久しぶりです。親父さん。」

「おお学者か？城への任官はどうなった。一月も音沙汰無しで心配したぞ。」

「すみません。かなり忙しかったもので。」

心底うれしそうな親父さんがボトルを取り出しながら言う。

「ということは無事任官できたんだな。それはめでたい。今日は奢らせてもらうよ。」

「いやゴメン。まだ任務中なんでそれはまた今度で。」

「ふ～ん。まだ仕事ってどこに配属された？お前の腕なら一般兵ってことはなかろう。」

「うん。知らないかも知れないけど国務大臣付き特務隊士。」

その名を聞いて親父さんの顔が曇る。その表情からは心配そうな感情と嫌悪が感じられる。あまりいいイメージがないようだ。俺の顔色を見て親父さんの顔が元に戻った。

「嗚呼その任務自体は問題ない。まあできれば補助金の金額をもう少し上げてもらえると助かるが・・・。いや今のは忘れてくれ。」

？？？。なんか都合の悪いことでもあるのか？

「特務隊士なら勇者の視察だな。五月の勇者が四人ほどチェックインしてる。内三人の態度が以上に悪い。女の従業員に手出すは、部屋にけち付けるはで散々だ。全くあんな安い金でＶＩＰ扱いしろって冗談じゃない。　ああ城批判じゃないからな。念のためな。」

はあ。補助金も大した額ではないようだ。気の毒でしょうがない。しかしまあやっぱあの三人は駄目なようだ。気が滅入るな。

「そうですか。で、そいつらはどこですか？」

「さっき出て行った。ただで飲ませてやる酒はないって言ったら椅子蹴飛ばして出て行ったよ。」

「じゃあ。待たせてもらうよ。水もらえる？」

俺はカウンターに腰をかけた。親父がグラスに水をいれてよこす。

「水だけでなく何か食べていってくれよ。結構もらってるんだろ？」

「残念ながら初任給は四日後だ。しばらく我慢だ。それとこれから荒事になりそうなんだ。あまり腹を膨らませるわけにはいかない。」

「そうか？契約金とかあるはずじゃないか？」

「嫌なこと思い出させるね。契約金は推薦者のリムルダールの義父のものだよ。」

「お前の義父って、確かあの町長だよな。」

「そっ、全部税金だよ。去年は竜王のせいで十分な税金が集まらなかったらしい。なにが城で見識を深めて来いだよ。俺は売られたんだよ。」

「しょうがないさ。城の取立ては結構きびしいらしいぜ。お前さんの義父も苦労してるのさ。」

「わかってるよ。別に恨んだりしてないさ。ただ文句の一つくらい

言ってもいいだろ！」

自治権との引き換えの税金が各都市にある。これはその年の取れ高を考慮したりしない。だからお金や物で納められない場合は人で払う場合がある。その場合町で優秀な人材を城に推挙し契約金という形で納めたことにするのである。前例では近衛騎士になった者は数えるほどしかいないらしい。それでも一万Ｇだったらしいから、俺の１０万Ｇは破格だ。リムルダール町長と近衛隊長の推薦を聞いた大臣の顔は見ものだったらしい。まあ栄転ということで喜んでいる人が大多数だし、王立図書館の閲覧ができるようになった俺はその言葉どおり見識を深めることができてご満悦である。

宿屋の入り口の扉が音をたてて誰か入ってくる。若いというより幼さの残る顔をしている。見覚えがある。たしか勇者５５、ああ駄目だ駄目だ、番号で呼ぶのは頭の中といえ失礼だ。え～とアレフだ。

「只今戻りました。食事をお願いしたいのですがお金が少ないので一番安いので。」

「わかった。食事はどこへもっていけばよい。ここか？部屋か？」

「ここでお願いします。」

やけに低姿勢だな。まあ威張り腐っているよりは十倍はましだ。銅の剣、革の盾、皮の鎧。鎧が真新しいということは買い替えたのか。俺が勇者アレフを見定めていると俺の隣で直立した。

「先程謁見室でお会いしましたね。勇者アレフです。多分これからお世話になると思います。よろしくおねがいします。」

驚いた。俺は覚えていないのに俺を覚えている。（うそ。俺は呆けていただけ。）

「おっおう。俺は勇者支援官のケルテンという。こちらこそよろしく。」

「王様にお礼を伝えてください。鎧を買い換えることができました。」

なんか雰囲気に飲まれて敗北感でいっぱいである。謙虚さでも人は押されることあるんだな。

「ええ、必ず伝えますよ。君も頑張って下さい。」

「もう挨拶はいいだろう。さあ食事だ。食べて英気を養いな。」

宿屋の親父さんが食事をテーブルに並べる。結構な量だ。

「あの私が頼んだのは一番安い食事でしたが・・・？」

「いいんだ。若いんだ、たくさん食べて強くなってもらわないとな。勇者さまだろ。」

「そうだそうだ頂いておけ。城から補助金もでているしな。なっ親父！」

補助金の話でまた親父の顔が少し曇る。一瞬の間の後俺と親父は大爆笑する。アレフはあっけにとられている。不愉快なことだらけの今日一日だったがこいつに会えてよかった気がする。

衝突

ドーン！

宿屋のとびらが乱暴に開く。せっかくのいい気分が台無しだ。同じく親父もアレフも嫌な顔をしている。

「おらっ勇者様のお帰りだぁ～。」

女の肩を抱いた酔っ払い三人が入ってくる。反対の手には酒瓶。テーブル席のあたりを占拠すると酒盛りを始める。先程確認した装備と全く変わってない。同行している女は安っぽい香水の匂いにあからさまな露出度の高い服、いかにもな娼婦だ。さてどうしたものかな？どの程度から詐欺罪って申告できたかな？

「ねえ、いっつもお金がないって言ってたのに今日はどうしちゃったのぉ～？」

「そうよ！いつも冷やかしばっかだったのにぃ。」

「そりゃ言えねえな。お金はあるところからもらえばいいんだよ。げっひゃっひゃっひゃ～！」

「何よそれ。教えなさいよ。教えてくれなきゃ帰る～。」

「そうよ。あんた達だけず～る～い～。」

完全にできあがってるな。もう少し泳がせたら全部しゃべってくれないかな。娼婦頑張れ！今お前達は優秀な検察官だ。

「誰にも言うなよ。秘密だぞ。秘密だからな。絶対言うなよ！」

「うん絶対言わない。私達の秘密ね。」

もう一息だな。まるでトリオのお笑い芸人のようだ。

「じゃあ言うぞ。実はな、城に行ってなにを隠そう私がロトの末裔です。ってやってやった。」

「え～！三人とも～。それってなんか変じゃない。」

「細けーことはいいんだよ。それでとりあえず１００Ｇもらえたんだからよ。あとはスライムなりいじめてもっと金もらってくるからよ！」

おいおい。スライムは一匹で１Ｇにしかならんぞ。いや突っ込む所が違うな。はい言質とりました。さてお仕事お仕事ってあれ？アレフ君何するの？

「あなた方恥ずかしくないんですか！勇者ロトの末裔を偽証し、あまつさえそれで得たお金で遊興に走るとは恥を知りなさい。」

「なんだぁお前。なにをガキみたいなことを言ってるんだ。って本当にガキじゃねえか！ガキは帰ってお寝んねの時間ですよ～だ。」

「そうよ！もう少ししたらお姉さんがお相手してあげる。」ちゅっ！

「止めてください。私はこの人達と話をしているのです。」

「うるせえ！こっちはお前なんかとする話はねえな。」

あかん。そろそろ止めないと収拾が付かなくなる。俺は立ちあが

ってアレフの肩をポンと叩く。

「ああ君は正しいがそれだけでは世界は回らない。あとは任せてくれ。」

そして酔っ払い三人に向かって話しかける。

「では改めて、私は勇者査察官ケルテンと申します。勇者ドゥーマン、クロウ、ゲオルグ3名を解任します。尚血の契約において重大な偽証があるゆえ全員に５００Ｇの罰金を申し渡します。意味はわかりますか？」

「なっ！てめえ何言ってやがる。」

「理解できませんでしたか？私は勇者の査察官をしています。つまり私の権限で勇者を解任することができます。ここまではよろしいですね。」

皆静まり返っている。そこの酔っ払いも娼婦達も宿屋の親父、勇者アレフも。

「勇者の解任には次のいずれかの理由が必要です。まず勇者の力量に足りない者、こちらとしても無理に命を失わせるのが目的ではありませんし、支援には限度がありますから弱い者は辞めていただくことになります。次に勇者として器量の足りない者、これは素行の悪い者はモンスターとなんら変わりないと言うことです。勇者の名前の下、軋轢がうまれては意味がありません。そして最後に目的遂行の意思のない者、これにいたっては論外ですね。あなた方はこの三点すべてに当てはまります。」

「異議有り！」

一番弱そうなドゥーマンが何か言い出した。異議有りときたか。ここに至って何を言い出すか面白そうだ。

「俺達はいま酔っ払っているがこれは明日からの活躍に向けて英気を養っているだけで目的遂行の意思がないわけではない。」

「なるほど。続けてください。」

「それに素行が悪いとおっしゃられるがこれは酒による一時の過ち。どうかご甘受願いたい。」

こいつ結構弁がたつな。ローブ姿だから魔法使いタイプか？

「そして力量が足りないとおっしゃられたが試しもせずに判断はできないのではないのですか？」

なるほど詭弁とは言え、一応反論として成立している。

「わかりました。では力量を試させていただきましょうか。実践形式で結構です。」

「ちょっと待て、今俺達は酔っていてまともに戦えな「かまいません。酔いを醒まさせる方法がないわけではないですから。親父さん、例の特別ジュースを三杯頼みます。」

こいつらの戯言にいつまでも付きあってられるか！こんな嫌な顔を見るのは今日で最後にしたい。

さて目の前に緑色のドロドロした液体が運ばれてくる。これは昔

考案した対酔っ払い用の特別ジュースだ。製法は簡単、毒消し草をすり潰し適当な果汁とシェイクした物だ。アルコールは一種の毒なのである。キアリーを使えばもっと簡単なのだがこの時代には本来無いのでここでは使用しない。

「さあ、グッグッと飲み干しちゃってください。私のおごりです。10分もすれば酒が抜けます。ああまずいのは我慢して下さいね。」

しぶしぶ飲み干す三人。とても不味そうだ。というか実際不味い。親父もカウンター内で苦そうな顔をしている。俺はカウンターに50G置く。

「お釣りはいりません。必要経費ですから。」

「では酔いが醒めるまで試験の方法について話しましょうか。何か条件があったら聞きますのでどうぞ。」

「条件って何を?」

「ふう、何も考えていませんか。どんな戦いでも最低限の条件はあります。ルールと言ってもよろしいですね。例えば騎士同士の試合は双方同じ装備同じ人数で魔法無しで行います。一方冒険者ではほとんど決め事はありませんが宿屋の中ではやりません。大事な仕事の斡旋場所ですから暗黙のルールです。」

「じゃあ、俺達はいつも三人で行動している。だからこちらは三人でやる。」

「OK!それでいい。他には?」

「あんたのその武器はずいぶん立派だ。不公平だ。」

「おい！何勝手なことを言っている。あんたらは三人でさらに武器ま「アレフ君、私の為に怒ってくれなくてもよろしいですよ。その条件もＯＫです。じゃあこれはアレフ君に預けておきましょう。でこれだけでいいですか？」

「じゃあ場所はすぐ外の道路上でいいな。まさか城の兵隊さんは街中で火や雷の魔法をぶっ放したりしないよな。火事にでもなったら大変だ。」

「なるほどその通りです。忠告ありがとうございます。ではギラ、ベギラマは私は使用しません。」

よほど自分たちのとりつけたルールがうれしいのか奴等の顔色がよくなってきた。赤くなったり青くなったり戻ってみたり顔色だけで忙しいやつらだ。

「おい、本当に大丈夫か。必要なら城に行って騎士を呼んでくるが。」

「心配ないよ、親父さん。まあ見てなって。」

３０分後、３対１　さらに不公平なルールの試合が始まる。

決闘

ガヤガヤ　ガヤガヤ　ガヤガヤ　ガヤガヤ・・・・・・
いつの間にか宿屋のまわりは人であふれている。いったい何がおきた?窓からこっそり外を覗く。

「偽勇者三人相手に城の兵隊さんが喧嘩売ったってよ!」
「いや勇者は本物で兵隊が因縁つけたって俺は聞いている。」
「え～賭け金は１Ｇから、今の所オッズは勇者三人が１．５に兵隊が3、おいだれか兵隊にかけるやついないのか!賭けにならないぞ。よし兵隊のオッズは５だ。だれかいないか?」

いつのまにか祭りの会場になっている。屋台でもでてくれば完璧だな。

「大事になってすまない。うちのおんなどもが外に触れ回ったらしい。最近景気のいい話がなかったから皆話題に餓えていたらしい。なんなら今からでも止めさせるが・・・」

「あ～・・え～・・まあしょうがないかぁ。いや今更止める状況じゃなさそうだ。場所だけ確保してくれるかな、半径１０ｍくらいでいいから。」

「うちの前では狭いな。若い者に中央の広場を確保させる。しかしお前さんにはつくづく悪いことした。すまない。」

「別に親父さんが悪いわけじゃない。もう謝らないでいいよ。こっちが悪い気がしてくる。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

時と場所を移すこと　ラダトーム城下中央広場　二時間後、完璧な祭りの会場が出来上がっている。急遽用意された屋台、ロープと簡易な木で作られた１０ｍ四方の闘技場。山のような人、人、人。もう１０時は回っていて本来なら真っ暗なはず・・・誰だよわざわざレミーラで照明作ったのは。

「え~それではこれより自称勇者三名とラダトーム城兵士の決闘を行います。ルールは双方の申し出より決定しています。勇者側は三人パーティー武器魔法など制限無し、兵士は武器無しギラ、ベギラマ使用禁止となっています。」

宿屋の親父が立会い人兼司会者となってアナウンスする。

「おい！なんだそれ。勝負にならねえよ！！！賭けるの止めるぞ！」
「え~条件が変わっても掛け金の返金はしません。このまま続行します。なおオッズは１．２対１０に変更します。」

さてとそろそろ登場するとしますか。モシャスとか使っちゃ駄目かな。あまり個人として目立ちたくないし、いや駄目だなもう手遅れだ、あきらめるか。

俺がとことこと広場にでていく。そのあと自称勇者三人が出て行く。騒ぎが余計にはげしくなった。

そうだろうね、俺一見強そうに見えないから。身の丈１７０ｃｍ、筋肉は付いているが細身、顔も普通、しかも武器なし革の服のみ、これが俺の今のスペック。かたや対する三人はゲオルグ身長１９０弱、結構ごつい体をしている。銅の剣、革の盾、布の服で強そうに見えるな。クロウ身長は俺と変わらないが俺より肉付きはいいよう

だ。こん棒に布の服。多分三人の中で一番劣る。最後にドゥーマン身長１７０弱俺より細身ローブ姿で木の杖を持っている。どこから見ても魔法使いだ。大体の戦法は想像できるな。さてどうでるかな？とりあえず準備しよう。まずピオリムを二回かける。バイキルトはいらないか・・・スカラは念の為かけておくか。魔法対策にマホカンタでも使いたいが却下だ。あれは派手に効果がありすぎる。ロストマジックは使用がばれたくない。こんなもんでいいだろう。

「最後にこの決闘において故意に命を奪わぬこと、後に遺恨を残さぬこと、双方精霊ルビスの名の下遵守されること。ここにいる全ての者が見届ける。それでは始め！」

――――――――――――――――――――――――――――――

ゲオルグ（剣）　　俺　　ドゥーマン（魔）

クロウ（こん棒）

――――――――――――――――――――――――――――――

予想通りの布陣だ。ゲオルグとクロウが互いに目配せしている。そしてちらちらとドゥーマンの方を見ている。積極的に前に出てくるやつはいない。近接二人で俺を引き付け後ろからギラで一撃、基本だな。

「おいせっかく三人もいるんだ。そっちから仕掛けてきな。」

わざと挑発するように手を振る。動け！形が崩れないと攻め手がない。

安っぽい挑発だが効果があったようだ。クロウのこめかみがピクピクしている。

「この野郎！」

クロウが一歩踏み込み、こん棒を振り上げた。

そこっ！すばやさ２５５は伊達じゃない。俺は一足跳びにクロウの懐に飛び込み、こん棒を振り下ろす右手と襟をつかんだ。

「ギラッ！」

あせったドゥーマンがギラを放つ。俺はそのままクロウをドゥーマン側に背負い投げる。あえて叩きつけずに放り投げる。火の球が空中で逆さまになったクロウの背中を焼く。

「ぎゃぁぁぁ～！！！ぐふっ！」

地面に落ちてのた打ち回るクロウに近づき頭にサッカーボールキック。一つ！次二人目、ドゥーマン側に走る。先程と同じように踏み込む。

「ひぃぃ～」

ドゥーマンが頭を抱え込んでしゃがみこんだ。おいおい俺がいじめてるみたいじゃないか。しょうがない。

「寝ろ！ラリホー。」

ここまで多分二息。見ている者には一瞬で戦局が一変しただろう。静まり返っていた場が騒がしくなる。

ウワァァァァーー！！！

俺はゆっくりとゲオルグに向かって振り返る。ゆらぁっ～とでも不気味な効果音が聞こえていたらベストだ。

「さて残るはお前だけだ。続けるか？止めるなら今のうちだぞ。」

「なめるな！」

ゲオルグが激高し銅の剣を振り回す。袈裟斬り、右薙ぎ払い、左横払い、突き。傍からみると猛攻に見えるかもしれない。固唾を呑んで観衆が見守る

ピオリム。この呪文は最大ですばやさを1．5にする。しかし体が速くなっても意識は付いてこないし、慣性や重力は普段と変わらず発揮する。この状態になれるため結構無理な修行を詰んだ俺にとってこんな大振り見切るのは造作もない。しかし革の盾が邪魔になって懐に飛び込みにくい。いったん距離を置こうとバックステップ。ズルッ！踏ん張りが利かず片膝をつく。やばい！

「馬鹿め！もらったぁぁぁ！！！」

上段からの真っ向から竹割り。

「キャーーーー！」

観客の悲鳴があがった。そして静まり返る観衆。最悪の終わりが想像される。そこには銅の剣を両手のひらで挟み受け止めている俺がいた。真剣白刃取り。よく取れたものだ。俺は我にかえり腕をひねり武器を奪い取る。呆然としているゲオルグの腹を蹴飛ばし倒す。

「終わりだな。」

銅の剣を突きつけ宣言する。

「そこまで！」

観衆の歓声は最高潮に達した。多分ここにいるとやばい状況になると思われるので退散するとしよう。手にしていた銅の剣を放り出す。あ～うるさい。耳をおさえながら歩く。

「アレフ君。私の刀を返してください。」

アレフの耳のそばで大声で叫ぶ。

「えっああ！はい、これどうぞ。」

唖然としていたアレフが我に返り刀を差し出した。

「ありがとう。また会いましょう！」

俺は群集にまぎれるように姿を消した。

決闘の反響

う～ん、よく寝た。もう6時か、あれだけ身も心も疲れてたわりには起床時間は変わらないとは習慣とは恐ろしいな。うわっ手の平が痛い。昨日銅の剣を受け止めた所が青くなっている。やっぱり無茶だったようだな。銅の剣で助かったようだ、鉄の剣や鋼の剣だったら・・・もうあんなまね止めよう。手足が何本あっても足りん。とりあえず治療しておこう。

「ホイミ」

うんホイミは便利だ。多少の切り傷、打ち身、筋肉痛にも効く万能魔法だ。一人ぶつぶつ言っているとノックの音が聞こえる。

「ケルテン殿起きていらっしゃいますか。来客ですが。」

誰だよ、朝っぱらから。扉を開けると騎士見習いの一人が立っている。

「はいはい。起きてますよ。で来客ってどちら様ですか?私しか駄目なんですか?」

「はい名指しです。しかも勇者殿です。」

昨日の連中がクレーマーにでもなったか?そうだったら嫌だな。他には心当たりないし・・・。

「ではすぐ行きますので、応接室に通しておいて下さい。」

「わかりました。そう手配します。」

――――――――――――――――――――――――

ラダトーム城兵士宿舎　談話室

談話室は非常に重苦しい空気に包まれている。ここにいるのは俺と勇者アレフの二人だけだ。この空気を作った張本人は真剣な目で俺を見つめている。先程開口一番

「私を弟子にして下さい。」

ときたもんだ。それから5分ほどずっと沈黙が続いている。俺はさっきから考えているのだが考えがまとまらない。個人的に一人の勇者についていいものか？俺に何か教えることができるのか。俺自体何人かに師事したが基本独学で覚えたことの方が多い。そもそも昨日の決闘を見て、何か感じるものがあったのか？

？さっぱりわからん。

「ゴメン。よくわからないのだが何を師事するつもり？」

「全部です。必要なら武器も変えます。魔法もできる限り覚えます。」

「ああそれ駄目ね。いくら私の真似しても強くはなれない。今持ってる技術を昇華させるようなことをしないといけないよ。私と君は同じじゃないから。」

「それです。」

「えっ何が？」

「そういう考え方です。私にはそういう何かが足りません。孤児だった私は生きる為に武器を振っていました。更に必要なので魔法もかじりました。一応ホイミ、ギラは使えます。でも何か足りないのです。昨日の決闘をみてこの人だと思いました。」

なるほどね。必死で生きてきたんだ。よく曲がらずにいたものだ。

「ＯＫ。わかった。でもさっきも言ったように一から十は教えない。君が持ってる三なり五なりを十に近づける。そういう方法を教える。それでもいいか？」

「はい！それでかまいません。師匠。」

「ああ、それも駄目。俺にはケルテンという名がちゃんとある。肩書きとかで呼ばれると俺が俺で無くなった気がする。だったら俺も君のことを勇者５５で呼ぶよ。」

「勇者５５？」

「知るわけないか。君は五月の五番目に申請してきた勇者と城では認識している。失礼な話だろう。」

「では昨日の三人も？」

「そう、かれらは勇者５２、５３、５４だった。んっ？あれっ俺正式に解任してない。また探さないといけないか。まあいい、それは置いといて俺のことはケルテンと呼んでくれ。」

「わかりました。では私のこともアレフと呼んでください。この大地の名を頂いた大事な名前です。ケルテン師匠。」

「わかった、アレフ。今からお前は俺の弟子だ。ではまず技量がみたいから訓練場に行ってくれるか。案内はさせる。」

そして騎士見習いを呼んで案内をさせる。俺は自室に戻り自分の刀を佩き、アレフに使わせる鉄の剣と鉄の盾を持つ。これは支給品だが使っていない物だ。実は鉄の剣は市販では売っていない。正規兵の武器である為一般には販売が禁止されている。

――――――――――――――――――――――――――――――

兵舎訓練所　ラダトーム城の兵士は特に訓練義務があるわけではないが、一般的にここを使用して自己鍛錬を行なう。俺は毎朝一時間半ほど刀を振っている。

さてアレフと騎士見習いの二人がいる。とりあえず重いので鉄の剣と盾は置いておく。

「あ～君、名前は?」

「はっ!ジョルジョといいます。」

「そんなに緊張しなくていいよ。じゃあジョルジョ、アレフと木剣と木盾で模擬戦をやってもらう。双方手加減はいらない。もちろん攻撃は当てること。とりあえず三本勝負でいいかな?」

今目の前で模擬戦をやっている。ジョルジョ君は流石騎士見習いらしく正当な剣術を使う。基本に忠実でフェイントの使い方も教科

書通りうまいもんだ。だがまだ体ができていないからまだ剣筋が甘い。嗚呼そういえば不思議なのがサイモンだ。昔初めての模擬戦やった時、片手剣に盾を持つ正統スタイルでヤクザキックかましてきた。同じ剣術とは思えんな。いかん考えがよそに行った。さてアレフは型がない。ちからもすばやさも相手より上だから通用しているだけだがまだまだ可能性はありそうだ。三本勝負の結果は、アレフ二本、ジョルジョ一本だ。

「さて先に品評をしておこうか。
まずジョルジョ君。君はそのままでいい。ただフェイントに固執しすぎじゃないかな。たまには気合の一撃を入れるといい。それでフェイントが生きる。
次アレフ、君は身体能力に頼りすぎ。多分格下には強いが格上には通用しない。とりあえず基本の剣筋を確立しようか。よし大体やるべきことはわかった。ジュルジョ君ありがとう。もう戻っていいよ。またあいてをしてやってくれ。」

先程放り出しておいた鉄の剣と盾をとってアレフに渡す。

「まず先に行っておくが、理解できないことがあったら必ず質問すること。理解しないまま訓練しても身につかないから。また納得できないならいつ師事することを止めてもかまわない。ただしその場合は必ず口で言ってくれ。いいな。」

「わかりました。でも師事を止めるなんてありません。絶対に。」

「よし、練習だけだがその剣と盾を使ってくれ。やっぱり本物を使わないといけない。とりあえずそれを持って構えてくれ。」

アレフは右手の剣を少し掲げ、左手の盾を前に出す。左の軸足を

少し前に出し、かるく腰を落とした構えをとる。悪くない構えだ。

「それがいつもの構えか？」

「はい。何かおかしいですか？」

「いや別におかしなことはないよ。その状態をホームポジションと言うことにする。」

「ホームポジション？」

「ああ気にしなくていい。ではそこの木偶を思いっきり斬りつけてくれ。」

木偶とは直径１０ｃｍぐらいの木を十字に組んでそれに麦わらを巻きつけた物。必要ならここに甲冑を着けて使う。アレフは剣を思いっきり叩きつける。剣は振り下ろしたままだ。

「はいそれ駄目。攻撃の後は必ずホームポジションに戻す。」

「あっ！でもなんで？」

「まだ敵は倒れていないかもしれない。だから次に備えた姿勢に戻す。じゃあ次は木偶の無い所で素振りをしてくれ。ただしさっきと同じ威力のままで。」

アレフは思いっきり剣を振り下ろし、ホームポジションに戻す。そしてこちらをむいて笑う。

「そうだ、それでいい。では次はその一連の動作を１００回繰り返

す。」

これが結構大変だ。見ていると半分位から振り下ろしが甘く、ホームポジションへの戻りも不正確だ。
一応終わった後、肩で息をしている。

「結構きついだろう。まずこれができるまで他のことはしなくていい。最終的にこれを1分の休憩を挟んで１０セットできるようになってもらう。腕が動かなくなったらホイミを使うといい。」

「でもこんなので強くなれますか?」

「これはそれ以前の問題。さっきのジョルジョもこれに近いことをやってるはず。ちなみに」

俺は刀を中段に構え、一瞬の振り上げの後振り下ろす。そして中段に構えなおす。これを１００回繰り返す。これだけやって息もきれないしおよそ3分で終わる。

「俺のはこんな感じだ。１０年毎日やっている。まあ一週間でこれぐらいはできてほしいかな。午前中はここを使っていい。午後からはモンスターを狩ってくること。弱いモンスターでもいいから基本を抑えながら戦うこと。ついでにお金も稼ぐこと。では俺も日課の続きをするからアレフも続けるように。」

俺はいつもどおり刀を振る。振っている間は他の事は何も考えない。目の前にいるイメージを斬る。ここ一ヶ月の仮想的は近衛隊長である。１０セットが終わったら次の型に移る。自然体から居合い逆袈裟切り、振りかぶって両手持ちで幹竹割り、納刀の一連の流れを１００本、１０セット行なう。ふと我にかえると隣でアレフがあ

っけにとられている。

「おいおい、手が止まってるぞ。」

「すみません。なんかすごくて。」

「毎朝ここにいるから、そのときだけ教えてやる。じゃあ俺は終わったからあとは自分で続けること。剣と盾は終わったらその辺の見習いに返しておいて。」

言うだけ言うと俺は練習場を立ち去った。今日はやることがいっぱいあるからあまり付き合ってやれない。昨日の連中を解任しなくてはならないし、賠償金の支払い手続きもいる。さらに勇者５１はどこへ行ったのか気になる。今日も忙しくなりそうだ。

祭りの後と後の祭り

いつも通り食堂で朝食をとる。いきなりの運命の変転に気が滅入る。無意識にフォークで肉や野菜をつついている。誰か来たようだな。

「ケルテン師匠、ここにおいででしたか？」

サイモンが冷やかすように言う。

「てめえ！なんでそれを。」

「くっくっく！ジョルジョから聞いた。私もよい助言を頂きましたって喜んで皆に触れ回ってたぜ。」

頭を抱える。なんだよ、他に娯楽はないのかよ。俺で遊ばないでくれ。

「それともう一つ。」

そういいながらサイモンが袋をテーブルにドンッと置いた。何が入っているんだ？結構重そうだ。。

「いや～昨晩は儲かった、儲かった！なんせ１０倍の鉄板レース。」

サイモンが袋をひっくりかえして中のゴールドをテーブルにぶちまける。食堂にいた連中が寄ってくる。

「あ・あ・あ～お前・・・これ！」

俺は声にならない声を出して、ゴールドの山を指差す。１０００Ｇどころじゃない。その倍はあるか？

「昨日の夜な酒でも飲もうと城下に出たら祭りやっててな。でな！主催の決闘の賭けに有り金全部お前に賭けた。ああいうのって普通掛け金に限度額あるだろ！でもお前の無茶な条件にお前に賭けるやつがほとんどいなくて、胴元がお前に限り限度無しでのってきた。いや～お前格好よかったよ。」

もういい。もういいよ。お前、俺をおもちゃにして喜んでるな。

「よお～し、今日は全部俺のおごりだ。皆ここでなら何食ってもいいぜ！」

そして朝から酒宴が始まった。

「ケルテンに！」
「サイモンに！」
『かんぱ～い』「乾杯」「乾杯」・・・・・・・・・・・・・・・

俺はこの馬鹿騒ぎに巻き込まれないよう逃げ出した。逃げてばっかいるな、俺。

――――――――――――――――――――――――――――――

あいつら呪ってやる。大臣と隊長にたっぷり叱られるがいい。俺はぶつぶつ言いながら街中を歩く。見事なまでに人が俺を避けていく。きっと怖い顔しているのだろう。それはまあどうでもいいとし

て、目的地は昨日の宿屋である。あの連中がいればいいし、いなくても手がかりくらいはあるだろう。はたして・・・？

結論。連中は宿屋の一室に篭っていた。あの後ここに逃げ込んだはいいが、外の喧騒に一歩も出ることができなくなったらしい。三人とも目の下に隈ができている。眠れなかったのだろう。

「なんだよ。負け犬を笑いに来たのか。強い強い兵隊さんよ！」
「強いってのは気分がいいんだろうな。やる前から俺達のことを馬鹿にしていたのだろう？」
「５００Ｇなんて払えねえぜ。ないもんなないからな。」

なるほど。いじめられて拗ねてる状態だ。強くも出られず、かといって逃げるに逃げれないから開き直ったか？

「まあ馬鹿にしていなかったと言ったら嘘になるな。だが事が終わった後笑いに来る趣味は無い。だがやることはやらないと俺が大臣に怒られる。」

ここで言葉を止める。かなり心配そうな顔をしている。

「まず昨日の通り勇者は解任させてもらう。それと賠償金５００Ｇだが今すぐ払うのは無理なのは分かっているから、モンスター素材の優先買取の権利だけは取り消さずこれを持って支払ってもらう。」

「嫌だといったら？」

「ああその場合はもっと簡単だ。王様に対する詐欺ということで死刑だ。逃げても無駄だぞ。あの血の契約でどこに逃げても居場所が分かる。だから逃げるのあきらめろ。俺も追うのは面倒くさい。」

「わかった。死刑になるのは嫌だ。だろっ？」

残る二人に同意を求める。当然縦に首が振られる。

「よし、では詳しいことをつめようか。買取金額のうち半分は即賠償金としてもらう。残る半分は自由に使っていい。その金で余分に賠償金を払おうが、生活費や装備などに使用するのも自由だ。最高で三人で３０００Ｇ相当の素材を買い取ることができるな。」

「えらい段取りがいいな？もしかして最初から決定事項か？」

「そうかなり悪辣な罠だよ。大臣に聞いたときもそう思った。まあ高い授業料と思うんだな。」

三人がため息をついてうなだれる。

「あと一ヶ月に一度は報告に来てくれ。もし遠征で一週間以上連絡が取れなくなる予定がある場合も事前に相談してくれ。具体的に言うと徒歩ならガライは3日、マイラは5日、リムルダールなら2週間はかかる。例えばリムルダール近郊にいるゴールドマンなら1体で１０００Ｇになるが・・・」

ここで三人の顔を見る。

「なあ、人の顔を値踏みするように見ないでくれ。」

「いや悪気があるわけじゃない。どの程度までならいけるか考えていた。」

「で、俺達にいけそうなのはどこまでだ?」

「そうだな。二、三日はラダトーム近郊で遠征費用を稼ぐ。その後ガライへの遠征で野営に慣れるべきだな。あとはガライから帰ってきてから相談だな。」

このとき三人は呆れたような顔で俺を見つめていた。

「何?顔に何かついているか?」

「あんた自分が何言ってるか分かってるのか?その見識と自信はどこからでてくる?むしろあんたが勇者だって名乗りでてもいいぐらいだ!いや今からでもそうするべきだ。」

あれっそう言われりゃそうだ。自分が異分子だと判断して大きく世界に関わらないようにしてきたし、自分は勇者じゃないと思ってたから・・・。

「まあ俺のことは置いといて、君らの話を続けよう。さっきも言ったようにガライに行って帰ってこれるようになってくれ。いいな。」

「はあ。最初からあんたに会えてればよかったのに。そうすればこんなことにはならなかったのに。」

「なあ俺らはどうしていればよかったんだ?教えてくれよ。」

しばらく考える。こいつらはもともと銅の剣、こん棒、布の服3着、革の盾を持っていた。で前衛2、後衛1・・・ならば俺ならこうする。

「そうだな。まずもらった300Gで革の鎧を2着買う。ゲオルと

クロウの分だ。あとクロウに革の盾を一つ買う。これで残金は７０Ｇだ。ここまでやって残りで遊興にいそしめばよかった。最低でも翌日からの意思が表明できた。あと革の鎧だったら俺には投げられていない。襟がつかめないからな。じゃあ俺は次の予定があるからまたな。」

部屋をでて俺は外に向かう。物分りのいい連中でよかった。もっとごねてくるかと思った。次は勇者５１ことガルドだ。大臣の執務室で調べるかな。

美女と魔法談義

大臣の執務室だ。簡単に昨日の結末と後始末について大臣に説明する。さして興味もなさそうに大臣はいった。

「それについてはそれでよい。であとの二人は有望か？」

「分かりません。ただ内一名が私に師事してまいりましたので許可してしまいましたが、よろしかったですか？」

「かまわぬ些細なことだ。だが役に立たないと判断したなら速やかに放逐せよ。」

相変わらず大臣はある程度の身分以下の人間にたいして厳しい。選民意識の強い人だ。個人的には好きではないが国務大臣ともなると、いちいち下々のことなど気にもかけぬのも当たり前か。

「では残る勇者５１について調べます。」

抽斗から勇者５１ことガルドの書類をだす。書類に右手、水晶球に左手を置き魔力を送り込む。地図上の光点の一つがより強く光り、水晶球に歩く姿が映し出される。場所は・・・ここことマイラの中間ぐらいか。

徒歩にしては脚が速いな。問題は今の所無しか。

「では失礼します。」

退室する俺に大臣は一瞥すらしない。

――

厄介になると思われた今日の予定が半日ほどで終わった。残った時間は図書館で消費するとする。

ラダトーム城一階にある王立図書館。ここには美人の司書官がいる。彼女は宮廷魔術師を兼任していて、馬鹿は嫌いと公言しているにも関わらず近衛騎士やら貴族のぼんぼんの来館に頭を悩ましている。

「マギー！今日は来れたよ。」

俺は軽口を叩いて入館する。ここ一ヶ月毎日通っていたが昨日は来ることができなかった。しばらくここに来る機会はぐっと減るだろう。では今日のうちに俺なりの研究結果を教えてやってもいいかな？

「ケルテ～ン！もう昨日はどうしたのよ。ずっと待ってたのよ。」

「おいおい！聞いていないのかよ。勇者査察官に任命されたんだ。大変だったんだぜ。」

マギーが抱きついてくる。この人は自分が美人な自覚がない。おまけに胸が大きいのも気にしていない。俺はどきどきを通り越してばくばくしている鼓動を抑えるのに必死である。照れくさいのを隠すように文句を言う。俺の鉄の剣が大きくなる前に放してくれてよかった。

「それね、馬鹿どもが言ってたのは。」

「俺がここに来なくなるなんて無いよ。まだ読んでいない本がいっぱいあるしね。」

俺がこの城に来た最大の理由がここにある。この図書館には門外不出の文献がいっぱいある。ロトの洞窟、雨の祠、虹の祠（雨と虹の祠は単独で存在しておらず小集落に祠があった。）などのロトの足跡を追い始めたのは5年ほど前、存在していたはずの技術を捜し求めた。その集大成がここにあった。

「わたしは？」

マギーは怒ったように言う。

「いや君に会えるのもうれしい。また魔法談義ができるし。」

そう俺が気に入られているのはその一点に尽きる。彼女は二言目には『かつて魔法使いは天を地を人を思うように操れたはず。』と言って今の魔法に満足していない。

「じゃあその魔法談義で許してあげる。」

「OK！じゃあ準備するからそこで待ってて。できれば飲み物を用意してほしいな。」

図書館を歩き回って幾つかの本を持ってテーブルに付く。マギーは不器用にお茶を入れている。大体いつもの通りだ。

「じゃあ始めようか。今日は俺の推察したことについてだ。まず第一にギラはギラじゃない。さらにベギラマはベギラマでは

ない。意味分かる？」

「わかんない。ギラはギラでしょ？」

「そうだろうね。俺も同じこと聞いたらそう答える。じゃあこれ見て。」

俺は本を取って挿絵のあるページを開く。挿絵にはギラを使う魔法使いと説明書きがある。また別の本を取って開く。こちらにはの魔法の説明がある。

「これが何？ギラの説明でしょ？」

「この絵をよく見て、ギラで大地を焼き払ってるだろ。」

「そうとも見えるね。」

「じゃあ、君のギラで同じ事できる？」

「無理ね。火球が出るだけ、こんな風に焼き払うことはできない。」

「次，ここにある記述”ベギラマはギラの上位魔法である。”これについて、さてベギラマはギラの上位魔法か？」

この質問にマギーは首をかしげる。斜め右上を見上げながら何か考えている顔はとても美しい。

「そうね。そういえばおかしいわね。ギラは火球の魔法、ベギラマは稲妻の魔法。全然違う。」

俺はさもこの文献で解かったかのように説明する。ただ事実を述べているにすぎないのだが、この時代のギラは実はメラである。同じようにベギラマはなんとライデインである。この事実に気づいたとき俺は失われた魔法を再現できる可能性にも気づいた。今それを始めて他人に洩らしている。

「次に魔法の詠唱内容について、これは今意味の解からない言葉を丸暗記して詠唱している。そうだよね？」

「そうよ。はるか昔ロトの勇者一行から教えられた魔法は口伝のみね。」

「俺の考えでは当時アレフガルドは魔法技術が低かったと思っている。そこにそれらを自由に操る大魔王たちがこの地を征服した。そして同じく魔法を駆使できる勇者が光臨して大魔王を倒した。このとき少しの魔法が伝授された。」

「だめよ！その名前を口にしてはいけない。」

「なにが？大魔王のこと？本当の名前も知らないのに！」

「やめて！呪いが・・・何か悪いことがおこるかもしれないじゃない。」

「わかった。その名はもう口にしない。俺が悪かった。」

今現在、大魔王ゾーマの名は伝わっていない。大魔王と口にすることすら禁忌とされている。口にすることで蘇るかもしれないと無意識に恐れられている。

「話が逸れたね。考察を続けよう。魔法の詠唱文の一小節目についてギラ、ラリホー、マホトーン、トヘロスこの４つは同じ。ではこれらの共通点は？」

またマギーが首をかしげている。この顔が見たくて俺は毎日のように魔法談義をしているようなものだ。

「わかった。消費するＭＰだ。数値化はされていないが消耗が近い。」

「正解！まだ魔法を覚えたての頃やらなかったか？自分はホイミを一日に何回使えるか？ギラなら？ラリホーではって。」

「やったわ。最初ホイミは２回しか使えなかった。でもギラは４回使えたわ。ホイミが３回使えるように成ったらギラは６回使えるようになった。ホイミはギラの２倍疲れるって言ったら大人が驚いてた。」

「またまた正解。ちなみに具体的に数値化すると俺数値だがホイミは４ＭＰ、ギラ、ラリホー、マホトーン、トヘロスは２ＭＰ、レミーラは３ＭＰ、リレミトは６ＭＰ、ルーラは８ＭＰ、ベホイミは１０ＭＰ、ベギラマが５ＭＰだ。」

「ちょっと待って、記述が間に合わない。もう！ここに書いて。」

「了解。じゃあその共通する３ＭＰという部分が詠唱する文節にあるか？」

俺はさっきの消費ＭＰを紙に書きながら質問する。またマギーは俺が好きな顔で考えている。

「うん。あるわね。」

マギーの目が輝いている。ちょっと俺は意地悪をする。

「さて、じゃあ俺から質問。今俺が答えを持っているとする。君はその答えを知りたいか？」

「駄目！そんなカンニングみたいなことしたくない。」

「ＯＫ！じゃあヒントをあげよう。詠唱２小節目３小節目は全ての魔法で一致する。さてこれはいかに？」

「もういいわ。自分で解明してみる。時間はあるから。」

この勝気な感じもたまらないな。多分答えを教えたら二度と口をきいてくれないだろう。手元の紙に詠唱文をかきながらうんうんうなってる。俺も昔やったな。口述するのが日本語だとしたら、詠唱は英語みたいなものだ。意味が分からないから片仮名で詠唱する。口伝なので発音の仕方も習う。元々ロトは外国人みたいなものだから言葉も苦労しただろうし、魔法に使われる特殊言語に至っては説明するのは不可能だったに違いない。数ある魔法の詠唱文の解読は大変だったな。数ある魔法・・・そういえば開かずの間・・・あっできるかもしれない。

「そうだ。例の開かずの間、試してみていいかな。」

「はあ？あんた何言ってんの！昔から該当する鍵も見つからないし、有名な鍵師でも開けれないゆえに開かずの間なのよ！」

ここには開かずの間がある。ロトの時代より一切開けられていない開かずの間。鍵も無く万能鍵である魔法の鍵でも開かないから放置されている。その前には古い箱などが詰まれていて無いものとされている。

「やってみたいことができた。もし開いたら報告する？」

「う～ん・・・しない。ここが騒がしくなるのは嫌！馬鹿が増える。」

「だよね。報告の義務はないし。じゃあ荷物をどけようか。」

小一時間埃まみれになって荷物をどけた。

「もう！埃まみれ。これで開かなかったら荷物は自分で戻してね。」

「分かった。でも開いたら戻すのは手伝ってくれるってことだよね？」

「うっ！そう来る？いいわ！それでいい。」

扉の前に立って鍵穴を確認する。魔法の鍵にあう大きさよりずっと小さい。しかもやたら複雑な形をしている。いけそうだ。鍵を探していたから開かないのだ。閉めたのはロトに違いない。ということは閉めた鍵は最後の鍵、じゃあそれがないなら、詠唱開錠魔法・・・

「アバカムッ！」

カチッ！シリンダーが４００年ぶりに音をたてる。

「何？今の魔法。」

「ロストマジックの一つ開錠魔法アバカム。教えて欲しい？」

「意地悪ね。でもまだ駄目、私じゃあまだ早い。」

「君の意見を尊重するよ。じゃあ入ってみようか？」

開かずの間

４００年の封印が今解けた。そこにあったものは・・・埃だった。そうだよね。４００年も密閉しておけば埃ぐらい溜まるわ！後ろではマギーが布で口を押さえている。

「掃除をしないととても調査できないね。」

「そうね。でも誰がやるの？」

「そりゃあ俺達だ。他の人を入れるわけにいかないし。」

「じゃあ。新しいローブ買ってよね。汚れちゃうから。」

「いいよ、昔遺跡で見つけた絶対汚れないローブを進呈しよう。」

「やった！でもあんた一体何者なの？剣では近衛隊長に匹敵し、魔法を使えばまるでロトにつき従った賢者の様。」

「俺は戦う考古学者ケルテン。それ以上でもそれ以下でもないよ。」

「いいわ、それで。あなたらしいわ。」

それから埃を取るだけで2時間かかった。マギーのローブの袖は埃で真っ黒、二人とも頭が埃で真っ白だ。それで見つかったのは数冊の本と、小さな宝箱一つ。

「ねえ！なんか開かずの間にしてはしょぼくない？こんなに苦労したのよ！」

「それはこの宝箱の中身見てから決めようぜ。」

そう言って１０ｃｍ立方ほどの宝箱を空けた。中には紫色の布に包まれた鍵一つ。持ち手から伸びるただ一本の棒だけで一見してどんな鍵にもあうことはなさそうである。

「何これ？鍵にしては何の突起もないわね。使えるの？」

「そうだね。見た目は唯の棒みたいな感じだけどね・・・」

俺はそう言いながら先端を手で触ってみる。やはりそうだこの金属は不定形でいかなる形にでも変化する。

「うん。間違いないこれは最後の鍵。いかなる錠でも開けることのできるロトの秘宝。」

「え～！でも開かずの間の中にあったら意味ないじゃない？」

「そうだね。だけどそれ故にここに置いた勇者の意思が感じられるね。きっと勇者はこの鍵もこの世界には不必要なものと判断したんだ。」

「この鍵も？どういう意味。含みがあるわね。」

「鋭いね。一字一句に引っかかるとは。」

マギーはその豊かな胸をはって言う。

「馬鹿にしないで！これでもアレフガルド壱の賢者って言われたこ

ともあるのよ。」

「まあ賢者ってのは誇大だね。」

「単なる比喩表現よ！それはそうと話を逸らさないで。」

「ごまかせないか。うんじゃあまた俺の推察なんだけどロトの勇者達は可能なのに魔法や技術を伝承しなかったと思っている。」

「なんで？すばらしい技術は伝承するべきでなくて？」

「うんそうだね。君は善良で平和な人だからそう言うと思ったよ。」

「どういう意味よ！また馬鹿にしてるでしょ！！」

「いや褒めてるんだ。その考え方を忘れないで欲しいな。」

おれは肩をすくめて言う。

「ならいいけど、でも説明して！」

「例えば大人数を即死させるような魔法や一個大隊を一撃で爆死させるような魔法があるとして、それを君が嫌いな貴族のぼんぼんが覚えたとする。さらに今現在竜王がいないとして彼らはその魔法を何に使うだろうか？」

「そんなの敵がいないのだから使い道ないわ。」

「残念。答えは言うことを聞かない相手に使う。」

「そんなひどいことするわけないじゃない。」

「そう?君も貴族の御令嬢だから判ってると思うけど、言うことを聞かない奴隷や家来に暴力を振るう貴族は少なくないよね。」

マギーはその口に両手を当て驚きの声を上げる

「あっ！」

「そう。力の大きさの違いだけでやることは変わらない。現在リムルダールとメルキドが自治区になっているけど、このことを苦々しく思う人間は少なくないと思うよ。城側の意向はできるなら直轄地に戻したいし、自治側は最終的に独立を考えているかもしれない。これらの解決策に力は必須なんだ。」

「判った。もういいわ。」

「そう。続けるね。多分ロトは今言ったことを理解していたんだ。残念ながら彼の旅路はモンスターとだけの戦いではなかったからね。だからこそこの地ではその力を封印した。彼らの死後それらの力が使用されないようにね。」

「なるほどね。でもあなたはそれを掘り出して使えるようにしているのはロトの意思に反しているのではなくて?」

「うっ！耳が痛いね。でも各地に古文書なり口伝による伝承者がいたのは、再びこの地に災厄が襲ってきたときの為だと思うんだ。彼は災厄の復活を予言していたから。」

「そういえばそうね。じゃああなたはいいことをしているんだ。」

「さてね。もしかして豹変してこの国を征服するかもよ！」

「フフフッ！じゃあそのときは私があなたを殺してあげる。」

「怖っ！心しておくよ。死にたくないのでね。」

プッ！あっはっはッ・・・・・・。その雰囲気に耐え切れず二人は笑う。

「はあ。こんなに笑ったのは久しぶりね。でもあなたはさっき言った魔法も使えるのね。多分。」

「怖い？」

「いえ。あなたは力の使い方を知っている人だと思うから怖くないわ。」

「ありがとう。」

あれっ！目から涙が・・。悲しくなんかないのに？気が付くと俺の頭はマギーの胸に抱かれていた。しばらくそのまま時間が過ぎる。

・　・　・

「はあ！なんかゴメン。」

「いいの。あなたにも弱いところがあるのがわかってうれしいわ。」

「うわ～なんだか恥ずかしい。俺が俺じゃないみたいだ。」

急に我に返ってのたうち回る。そんな俺の肩をポンとマギーが叩く。

「なんかあったら私に相談しなさい。お姉さんが相談に乗ってあげる。」

「うん、そうするよ。お・ね・え・さ・ん！」

「君にお姉さんと言われるとなんかむかつく。やっぱそれ無し。」

そして二人で今日二回目の大笑いをした。そうだね。俺１８、マギーは２２、それは言っちゃ駄目だよね。

「とりあえずここを出ようか。また日を改めて調べるから。」

「そうね。お風呂にでも入りたい気分。」

「じゃあマイラにでも行く？いい温泉知ってるよ？」

「きっと君のことだから行けるんだね。もう何を言われても驚かなくなっちゃった。」

「うん。行けるよ。これも知りたい？」

「止めとく。今日の宿題ができてからでいい。でも温泉には行きたい。」

「OK！ではこの鍵は君に預けておく。俺には必要ないからね。」

「でもこんな大事なもの！」

「君に持っていて欲しいんだ。二人の秘密さ。」

「わかった。絶対身から放さない。」

二人は開かずの間改め、ロトの部屋を後にした。

マイラの温泉は行ったのかって？もちろん行ったさ。1泊して城に戻った。

何？昨夜はお楽しみでしたね？うるせ～よ。

開かずの間（後書き）

魔法の詠唱、時代考証等作者の勝手な妄想です。ご了承ください。

勇者二人

あれから3日が過ぎた。勇者ガルドはマイラ近郊で狩りをしている。まさに狩りだ。両手持ちの斧を振ってほぼ一撃でことが済んでしまうとはすごい膂力だ。もしかするとちからSかもしれない。期待できるかもしれない。城に戻ってきたら面談することにしよう。

さて我が弟子アレフだ。朝一で俺の部屋にやってくると、ぜひ見て欲しいことがあるとうれしそうに言う。それで訓練所に来て、今俺の目の前で素振り１００本１０セットを終わらせた。

「これは驚いた。まさか3日でできるようになるとはね～。」

「その気になれば２０セットでも３０セットでもできますよ。多分。」

まじか。才能って怖いね。多分って言ってるけど嘘だね。やったんだ。無茶をする。この訓練の最大のからくりはホイミにある。無理な負担を筋肉にかけると筋繊維が断裂する。それをホイミで強引に直すとなんと超回復する。

「よしっ！ではそこの木偶を斬ってみ。」

アレフは木偶の前に立つと鉄の剣をすらりと抜く。そして構えから一気に振りぬくと即元に戻す。元に戻した後得意げにこちらを見る。俺は斬られた木偶に近づき確認する。麦わらを切り裂いて芯棒を抉っている。もし人の腕なら骨までいってるな。

「合格だ。わざわざ言わなくても自分で判っているようだし、次の

ステップへ進むか。」

「はい！でも一ついいですか？」

「何？何かわからないことでもあるの？」

「違います。ケルテン師匠が斬るのを一度見てみたいのです。」

「えっ！木偶を？」

「はい！」

俺は頭をぼりぼりと掻きながら答える。

「あ～なんと言うか。後で怒られるんだ。備品を大事にしろ！ってね。」

「はあ？」

「だよね。そういう返事しか出てこないよね。判った。一度だけ見せる。」

刀を抜いて中段に構える。気合と共に斬りつける。そして残心。刀を納める頃、袈裟がけに斬られた上半分がすべり落ちた。アレフの顔が壊れた木偶と俺の顔を往復する。さらに斬り口を見ている。

「もうやらないよ。もったいないからね。」

「どうやったらこんな斬り口になるんですか？私にもできますか？」

「無理だね。武器が違う。君達の武器は叩き斬る武器、俺のは斬る武器。振り方も全く違う。だから同じことができる必要はない。」

「でもそれ使ってみたいです。」

「駄目。さっきも言ったように振り方が違う。君の振り方で使うと折れる可能性がある。これはちからの弱いのをカバーする為に特注した俺だけの武器。だから駄目。」

「そうですか・・・。」

「そう残念そうな顔をするな。純粋なちからならアレフ、君の方がずっと強い。俺の力はC評価、君はB評価、しかもまだ伸びしろがあるからもしかするとA評価もありえるかも?」

「A評価、B、C??? なんですか? それ。」

「ああ俺独自の評価だ。ちから、すばやさを大体5段階でする評価だ。もちろんAが上でEが一番下だ。」

「はあ?」

「ちなみに君はB、B－ってところだ。伸びればA－、Bぐらいになれるかもしれない。」

「そのマイナスってのは?」

「ああ、同じBでも幅があるからね。Aに近いBはB＋、Bに近いAはA－と表現しているだけ。まあ人はその日の体調や心理で多少上下するから参考までの評価だ。」

「面白い評価基準ですね。考えたこともなかったです。それでケルテン師匠は？」

「俺か？まあＣてとこかな。結構鍛えたけどちからはこれ以上伸びなかった。素質の問題らしい。ちなみにちからＣは鉄のフル装備ができるぎりぎりぐらいだ。もっともそうすると重くてせっかくのすばやさが生かせない。本当は攻防バランスのとれたいい装備なんだけど、死にたくないからその装備はしない。」

「なるほどよくわかりました。この装備が私には適していると言うことですね。」

「そういうこと。では次のステップだ。まず武器を納めて両手を下げ自然体で立つ。」

アレフは言われたとおり立つ。鉄の剣は腰に納められ、左手の盾は逆さまになる（盾は左上腕部に固定されている為、使用時には左手で握り手をつかみ、腕を上に曲げなくてはならない。）

「まずそこから抜剣しつつ斜め上に斬撃。」

アレフはシュパッと音を立てて抜き撃つ

「次、いつもの斬撃、即納剣。」

残撃はいいが納剣でもたつく。まあそんなところだろう。

「これを１００本。シュパッ、シュ、シャキーンぐらいのタイミングでできれば完璧。ああ剣を納めたら必ず自然体に戻る。」

「むずかしいですね。手本を見せてもらっていいですか？」

「いいよ。」

おれは自然体から居合いで逆袈裟、振り上げた所で両手持ちで袈裟懸け、そして納刀。自然体に戻す。ん！いま一瞬殺気？を感じた。

「流れるようですね。武器を戻すことの意味は？」

「ああちょっと待って。そこの影にいる方、見るならこちらでどうぞ。ここは訓練所です。見られて困ることはありません。」

建物の影から体格のいい大男が出てくる。

「わりぃわりぃ。別に隠れてみるつもりは無かったんだが、なんか昔師匠に教えられたようなことやってるなって思わず脚が止まった。ってお前学者じゃないか？懐かしいな。」

「もしかして達人ですか。２年ぶりくらいですか？」

こいつはサバイバルの達人（俺がつけたあだ名だ。俺のあだ名をつけたのはこいつ）薬草学が得意な武闘家。アレフガルドを旅してまわったときよくつるんで冒険したのはいい思い出。互いに右腕を当てて挨拶をする。

「なんであなたがここに？」

「おまえこそ？」

「今月から大臣の下で勇者の支援をやっています。」

「奇遇だな。俺はその勇者をやっている。2月からだ。」

「あの～すみません。」

いかんいかん。あまりに懐かしくて自分の弟子を忘れていた。

「紹介します。彼はガイラ・ガラ・ライガ、古い友人です。無手で闘う流派の末裔です。ガイラ、彼が私の弟子のアレフです。彼も勇者です。まあ見習いですが・・・。」

「なるほどねえ。お前さんが弟子をとったとは・・・」

「いえ。ちょっとありましてね。推しかけ弟子というかなんと言っていいやら。断れなくてですね。」

そこにアレフが口を挟む。

「挨拶が遅れました。師匠ケルテンの弟子アレフです。よろしくお願いします。」

「おう！俺はガイラ。武器も持てねえ、魔法も使えねえが拳一つで勇者やってる。しかしまあお前さん見る目あるよ。いい師匠もったな。」

「私もそう思います。ガイラさん。」

「アレフ俺のことはガイラでいい。さん付けされると背中がむず痒くなる。」

「わかりました。ガイラ」

「おう！それでいい。しかし学者よ。さっきよく俺がいたのに気づいたな。そっちからは見えない位置だったはずだが？」

「ええ！さっき刀を抜いた瞬間、殺気を感じました。」

「ああ一瞬反射的に構えたな。お前さん実は強かったんだな。一手お手合わせ願いたいものだな。」

「嫌です。多分命を懸ける勝負になります。まだ命は惜しいですから。それにまだ授業の続きがありますし。武器を納める理由でしたね。アレフ君。」

強引に話を戻す。

「はい。戦闘が続いているならそのままでも良さそうですし、終わったならそれこそ急ぐ理由は無いとおもいますが？」

「最もな意見です。でもアレフ君、武器を持ったままで魔法は使えますか？」

「無理ですね。私は右手を使わないと魔法は出せません。」

「だろうね。だから武器を納める練習をします。まさか魔法を使う度に武器を棄てるわけにはいきませんから。」

「そうですね。あまり戦闘中に魔法を使うことがありませんでしたから。」

「これは私独自の解釈です。あまり他にやってる人はいないでしょうね。じゃあ練習あるのみ。」

アレフは練習を再開する。やはり納剣にもたつく。これだけは慣れないと難しいだろう。俺とガイラが暖かい目で見守る。数回繰り返してアレフが手を止める。こちらをふりむくと

「質問です。毎回自然体に戻す理由は？」

「ああ！それはな常在戦場ってやつだ。うちの流派でもよくやらされた。」

「ジョウザイセンジョウ？」

「常に戦場に在りって意味ですよ。どんな時でも対応できる様鍛錬するんです。」

「そうだ。アレフ。気ぃ抜いてると死んじまうぞ。」

ガイラはそういいながらアレフに向かってとことこ歩く。そして直前で流れるような正拳突き。もちろん顔面に寸止め。

「わっ！」

「もし今のに対応できたら、私からは免許皆伝です。それとガイラ、私には止めてくださいね。反射的に刀で受けてしまいそうです。」

そういいながら刀を半分抜いて目の前に鞘ごと構える。ガイラがむぅと唸る。

「ではアレフ。後は自分で練習して下さい。とりあえず一週間はいつもの素振りを１０セット、その後にこの練習を１０セット行なって下さい。ではガイラ、積もる話もありますからあちらで話しましょう。お茶ぐらい出しますよ。」

そして二人で食堂に向かって歩く。ガイラが軽口を叩いた。

「しかしまあ、お前さん鬼だな！」

「なにが？」

「なにがってさっきの鍛錬だよ。ありゃきついぜ。根をあげても知らないぜ。」

「いつでも止めていいと伝えてありますよ。ただ今のまま放り出したら死にます。そうなる前に勇者を止めさせるか？自分で強くなるか？それだけです。」

「優しい鬼だな。」

「鬼ですか？私は桃太郎に退治されたくないですよ。」

「言うねえ。しかし桃太郎を知ってるとは博学だね。さすが学者だ。」

・　・　・

積もる話はしばらくやむことはなかった。

裏の事情

5／6　勇者支援官6日目

日課のトレーニング、日課の師匠の真似事、その後の食事。そこにサイモンがふらふら現れる。少し痩せたか?げっそりして目の下に隈ができている。

「よお!サイモン、久しぶり。4日ぶりか?何してた?」

サイモンが俺の前に座り、テーブルに突っ伏す。

「う～行軍訓練でガライまで行ってた。今帰ってきた。お前のせいだ。」

「何でだよ!理知的に説明して頂きたいな。」

「この間ここで大盤振る舞いしただろう。あの後隊長にばれて大目玉だ。お前のせいだろ。」

「あほか、全部自業自得だ。でもまあ徒歩3日でガライ、ルーラで戻ってお釣りが来る日程だろうが。」

「違う違うんだ、往復で4日。しかもフル装備、物資無しで一個中隊の行軍。しかも俺が中隊長で全員任せたって俺達だけで行かされた。死ぬかと思ったぞ。」

「なるほど、それはすごい。たるんだ馬鹿にはちょうどいい。」

ラダトームの軍組織は次の通りである。小隊長が3人の部下を率

いて一個小隊。それを４隊で一個中隊。一名が小隊長と中隊長を兼任する。同じく４部隊をまとめて大隊とする。この頂点に立つのが近衛騎士隊長である。つまり近衛騎士は６４名しかいない。ただそれだけでは足りないので一般兵士がもいる。さらに必要に応じて民兵を雇うこともある。

先の戦いで近衛の約半数が失われ、かつ先の近衛隊長も無くなったらしい。その後就任した今の近衛隊長は当時生き残った最高位で、身分などうるさい近衛の中ではめずらしい叩き上げだ。普段は結構気さくでフランクな人だが怒ると相当怖いようだ。

行軍訓練。総員で隊列を組み目的地までひたすら歩く。ただフル装備、物資無しというのはまず鉄の剣、盾、鎧を着込み、更に野営用の荷物を背負う。総重量は約５０ｋｇぐらい、俺には絶対無理。さらに最低限の水しか持たず食料は現地調達、もし手に入らなければ無しの過酷な行軍だ。もちろんモンスターは出現する可能性はある。まあ殺気だった１６人の兵士を襲ってくる魔物はガライまでにはいないだろうけど。

「今日は一日休息が許された。部屋帰って寝る。」

サイモンがふらふら出て行った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーー

俺は近衛控え室に来ている。隊長に聞いてみたいことがある。隊長室をノックして入室する。

「聞きましたよ、アイゼンマウアー隊長。」

「何をだ？ケルテン特務隊士。」

近衛隊長も心なしかやつれている。やっぱりな。

「行軍訓練ですよ。大変でしたね。」

「ふん！たるんだ連中を引き締めただけだ。俺はなにもしていない。」

「そうですか。でも隠れてついて行ったのは秘密ですか？」

「知らん、なんの話だ。雑談ならまた今度にしてくれ。書類仕事が溜まっている。」

この人なりの照れ隠しだ。しかし語るに落ちてるよこの人。

「まあそういうことにしましょうか。勇者について聞きたいことがあってきました。」

「俺に答えられることなら答えよう。」

「ええ、先日落第勇者に言われまして、お前が勇者やれってね。これは駄目ですか？」

「それは駄目だ。」

「即答ですね。不足しているのは力量ですか？それとも器量ですか？結構自信があったのですが。」

「そのどちらででもない。正規の軍人は勇者にはなれない。」

「なぜ？と聞いてもよろしいですか？」

「ふむ、ここからの話は極秘になるがよいか？」

「結構口は堅い方です。」

「よろしい。少し話しが長くなる。あちらで話そうか。」

隊長はソファに腰掛ける。隊長が座るまで俺は立っている。

「まあかけてくれ。」

「はっ！では失礼します。」

「ではさっきの話だが、ローラ王女が誘拐された件と関わりある。」

「話の先がみえませんが？」

「そう結論を急ぐな。その後竜王側より秘密裏に交渉があった。」

「交渉ですか？身代金とか、降伏勧告ですか？」

「君は頭がよすぎるな、まあ聞け。そうではなかった。あちらの要求は一つ。双方の軍事活動の停止。」

「はあ？でもまだ対立は続いてますよ？モンスターは相変わらず襲ってきますし、こちらも勇者を派遣してます。」

「そうだな。詭弁、茶番、俺の嫌いな政治的駆引きききらしい。」

「政治的駆引きですか？ということは交渉は大臣がなされたので？」

「そうだ。先の戦でこっちもかなりの犠牲があったが、あちらも結構な損害があったらしい。ドムドーラを落としたとは言え何か手に入ったわけでないからな。」

「なるほどラダトームは必死の攻防で追い返し、メルキドは城砦とゴーレムで、リムルダールは湖とちょっとした小細工で侵攻を止めた。」

「ほう、話には聞いていたがあれはお前の仕業か？」

「何の話です？まあ街が無事だったのです。よかったではないですか？」

「よい、そういうことにしておこう。で、これは想像の域をでないがあちら側はこちらの最大の利点を潰すのが目的と思われる。」

「最大の利点？」

「わからぬか？では聞こう。個々の強さでは我ら人間と魔物どっちが強い？」

「なるほど。個々の強さに自信のある魔物は人間の集団連携を恐れ、封印した。」

「そうだ。王女の命を盾に取られてはこの要求を呑まずにはおれなかった。」

「では今現在暴れている魔物は軍事行動ではないのですか？」

「それが詭弁だ。あちらが言うには個々の魔物全てが言うことを聞くわけではない。竜王様の崇高な深慮が理解できぬおろか者がいないとも限らないと。」

「ひどい詭弁ですね。主は知らない、馬鹿が勝手にやっているだけだとはね。それでこちらも同じ様なことが起きているだけだと言い張っている。」

「そうだ。だからお前は勇者にはなれない。２ヶ月前ならなんら問題なかったのだがな。」

「じゃあ今止めて勇者になるのは？」

「それも駄目だ。忘れたか？お前は３年１０万Ｇの契約金でここにきたのだぞ。」

思わず天を仰ぎ見た。そういえばそうだった。

「去年のリムルダールが大変だったのは承知しているが、残念ながら契約は契約だ。あきらめろ。」

「もしかして３年後がないかもしれないのに？」

「そうならないようお前はお前の仕事をしろ。有望な勇者を育成しているらしいじゃないか？」

「なんだ耳に入ってましたか？有望かどうかはこれから判ります。

駄目なら放逐します。死なれると目覚めが悪くなります。」

「さて話は終わったようだな。飲み物を用意させる。誰かある！」

それから二人でしばらく武術談義に花を咲かせた。

――――――――――――――――――――――――――――――

「アイゼンマウアー隊長の長剣は支給品ではありませんね。ちょっと見せてもらってもよろしいですか？」

「そうだな・・・お前の刀とやらを見せてくれるなら？」

互いに腰から武器を外して交換する。俺のは刃渡り８０ｃｍの大刀、隊長のは拵えが立派な長剣だ。

「すごいな、これはまるで剃刀のようだ。どこで手に入れた？」

「特注です。仔細は秘密です。この長剣もすごいですね。全てミスリルでできていて魔力も感じられる。由来を聞いてもよろしいですか？」

「秘密だ。・・・ふっ！冗談だ。一族伝来としか聞いていない。俺は貴族の生まれじゃないからな。代々雇われ戦士の家系にはすぎた一品だが気に入っている。」

結構古い。拵えの様式からすると多分これは・・・確認してみるか。

「代々と言われますが、どの程度遡れますか？」

「家系図があるわけではないから詳しくはわからないが、４００年ロトの時代までは遡れるらしい。」

間違いない！確信した。この剣の銘は？

　一息ついてからおれはしゃべりだす。

「判りました。この剣の銘は雷神の剣。ロトに付き従った戦士の一振りです。間違いはないかと。」

「なんとそのような謂れがあったとは・・・。」

「もう一つ確かめたいことがあります。少し時間をいただけますか？」

「ああ、ここまで聞いたら全て知っておきたい。」

「ではここでは狭いので訓練所で。」

　近衛隊長と俺は数名の兵士を引き連れて歩く。すれ違う者が何事かと目をみはっている。俺達の緊張が伝わっているようだ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

　訓練所で俺は木偶を４つ横に並べた。１０ｍほど離れて構える。

俺の後ろには近衛隊長を先頭に人の山ができている。

「業炎よ！わが敵を焼き滅ぼせ！」

　そう言い放つと剣で弧を放つ。的になった４つの木偶が業炎に燃え尽きた。炎はしばらく消えない。自然に火が消えるころ歓声が上

がった。

「なんだ今のは！」

「あんな魔法みたことないぞ。」

俺は振り返ると雷神の剣を隊長に渡す。

「お返ししますね。間違いありません。雷神の剣です。大事にして下さいね。」

「嗚呼。なんと言っていいか分からないがありがとう。本当にありがとう。」

「その武器を持つに相応しい人がその武器を持つ。当たり前のことです。」

俺と隊長は感動している。

「おい！今のはなんだ。説明してくれ！！！」

外野うるさいな。せっかくの感動のシーンを邪魔するなよ。今二人はロトの時代を旅していたのだぞ。収拾がつかないようなので説明することにしよう。

「これは雷神の剣といいます。ロトにつき従った戦士の剣です。剣に宿る魔力を先程の様に放つことができます。炎の剣と同じようなものです。正確に言うと炎の剣はこの剣のレプリカですね。だから宿る魔力が小さい為、小さな火の効果しかありません。」

「なんでお前にそんなことわかるんだよ。見てきたわけでもないの

に！」

「文献を読み、正しく推理する。それで分かることもあります。隊長には後でパワーワードを記述してお渡しします。」

ここで俺は手をパンッ！と叩く。

「はい、余興はもう終わりです。皆さん、仕事にお戻り下さい。いつまでも遊んでいると地獄の行軍訓練が待ってますよ。ねっ！アイゼンマウアー近衛騎士団長どの。」

俺は片目を瞑って、隊長に話しかける。それで皆蜘蛛の子を散らすように散っていった。しかし、その中から女性の声が飛んだ。

「ちょっと！こっち来なさいよ。」

マギーが俺の腕をとって強引に引っ張る。周りの視線を全く気にしないで俺の手を引くように歩く。おいおい簡便してくれよ。

「何なに？もしかして怒ってる？」

「うん、怒ってる。私のいないところで知識を披露しないで！」

「何それ？どんな嫉妬の仕方だよ？」

「いいの！私だけ知らないなんて許せない。」

「わかった、わかったよ。じゃあ詳しく説明するから図書館へ行こうか。先に行ってくれる？部屋に取りに行くものがあるんだ。」

「いいわ。でも何持ってくるの？」

「それは後のお楽しみ。じゃ１０分後にまた。」

俺は自室に戻り荷物を漁る。確かどっかに片付けたはず。

――――――――――――――――――――――――――――――――

王立図書館。ここはいつもマギーと俺しかいない。その他のマギーが目当ての男はマギーが追い返すから俺がいないときはだいたい一人で何か読んでいる。最近はペンを片手に紙と格闘している。

「何から知りたい？さっきの剣？約束のプレゼント？それともこの間の宿題？」

「当然もらえる物が先。ちょうだい。」

「まったく現金だな。とっておきの品だ。驚け！」

手にしていた包みを開くと半透明な水色の布を取り出して手渡す。マギーが手に取り開いた。

「何これ？ローブ？スケスケじゃない。」

「いや透けないから大丈夫。それは水の羽衣。炎のダメージを減少する効果がある。昔、雨の祠の集落で見つけた。多分勇者一行の女僧侶が着ていたローブじゃないかな。」

「そんな大事な物いいの？」

「いいさ。どうせ俺は装備しない。かさばる装備は俺にはあわない。」

「ありがとう。大事にするわ。でもさっきの武器もそうだけど今では売ってないよね。」

「そうだね。じゃあさっきの武器の話も含めて講義しようか。実はロトの時代の前には今より優れた武具が存在していた。例えばラダトーム王家の国宝、王者の剣、光の鎧、勇者の盾は順にオリハルコン、ブルーメタル、ミスリルで作られていて、これらの素材は通常では溶かすことができないとされている。ではどうやって加工したのか？」

「そんな武器や防具聞いたことないし、溶かせなければどうにもならないわ。もしかして魔物の技術とか、人知を超えた技術じゃない？」

「ああ、それもあるね。大体正解。答えは神々の技術、神々が自らの武具を作成させる為技術を貸した。もっとも調子にのったある国はその後神々に滅ぼされるのだけど、まあそれは別の話。」

「でもなんでそんなこと分かるの？」

俺はある棚の前まで歩き古ぼけた一冊の本を取り出した。

「アイテム図鑑。はるか昔から伝わる幾つかの話が載っている。童話みたいな本だが結構面白い。暇があったら読んでみるといい。」

「ふ～ん。こんな本あったのね。確かに挿絵とか童話っぽい。」

手にした本を開いて中をパラパラめくる。彼女が本を見る目はいつも輝いている。

「まあね。で、さっきの王家の秘宝の話、今は別の名の方が有名だ。ロトの剣、ロトの鎧、そしてロトの盾だ。ただし今現在は所在不明。とても残念だ。」

「そう。でも見つけることができたら竜王も倒せる？」

「さあ？それは分からない。強い武器を持つだけで強くなれるわけじゃないからね。」

「そんなの知らない。武器なんて握ったことないもの。」

「君はそれでもいいさ。でも武具によっては魔法と同じような効果を持つ物がある。さっきやった雷神の剣とかね。」

「でもあんな魔法見たことない。」

「いや君は一度見てるよ。本の挿絵でね。」

「えっ！ああ、この間のギラ・・・でも炎の大きさが違う。」

「うん。挿絵のはギラだったね。でもさっきのはベギラゴン。ギラ系の上位魔法だ。」

「でも、ベギラマはギラの上位魔法だって・・・。」

「言ったね。正確にはギラ、ベギラマ、ベギラゴンの順に効果が大

きくなる。」

「もう！いつになったらあなたの知識に追いつけるのかしらね。」

ちょっと拗ねた顔で俺を見つめる。

「まだまだだね。宿題はできたのかい？」

「また馬鹿にして。いいわ、研究の成果を見せてあげる。ちょっと待ってて資料取ってくるから。」

マギーはいつも座っている机に歩いていく。

魔法の武器（後書き）

長いので分けます。

美女と魔法談義　その？

準備される黒板、教卓、チョーク、支持棒、資料を教卓に積むマギー。

「ちょ！なにそれ。先生みたいだ。」

「もう馬鹿にして！これでも宮廷魔術師筆頭で弟子もいっぱいいるのよ。」

「あ～ごめんごめん。そうだった。じゃあ先生質問です。３サイズは？彼氏いますか？」

「あのね～そういう質問一番嫌いなんですけど・・・次言ったらぶっとばすよ。」

「冗談だよ。そういう質問多いんじゃないかって？」

「心配？」

「そりゃあ・・・まあ・・・心配じゃないって言ったら嘘になるかな？」

「もうはっきりなさいよ！いいわ！では講義を始めます。今日は魔法の詠唱についてです。」

チョークのカツカツ言う音が響く。結構手馴れている。書かれているのは４行のギラの詠唱文だ。次に比較し易いようにラリホー、マホトーン、トヘロスを並べて書く。少し離してホイミも書く。

「まず第一にほとんどの呪文は大体４小節でできています。その後に呪文の名前を口にすることで発動させるのが基本です。」

ここで確認するかのように俺をみる。俺は無言で頷く。

「実は全ての魔法の詠唱において第２小節はまったく同じです。さらに第一小節は一部を除いて一致します。しかしこの４つの魔法はその全てが一致します。」

ここで言葉を止めて俺を見る。心なしか心配そうだ。

「いいよ。続けて。」

「ここで一度魔法の使用法の基本をおさらいします。
?:自分のうちにある精神力、通常ＭＰを放出
?:自然に存在するマナとＭＰを合成
?:魔法によっておこる現象をイメージ
?:目標を決定し呪文を唱える。」

ここまでを先の４小節の横にわかりやすく書く。

「これらから、第一小節は消費ＭＰの決定、放出を第二小節はマナとの融合を司るものと考えられます。先に提出された資料から、この部分は２という数字を意味する単語である可能性が高いでしょう。またホイミのここは４の単語と思われます。また他の魔法から３、５、６、８、１０の単語が導き出されます。」

パチパチパチッ！俺の拍手の音が鳴り響く。

「だいたい正解。大筋で翻訳するとこうだ。
?私はＭＰをＸ放出する
?ＭＰとマナは融合し万能なる力となれ
?おお万能なる力よ、Ａとなり
?Ｂを、Ｃせよ。呪文名。
という感じだね。Ｘは数値、君の言うとおりだ。Ａは効果イメージ、たとえば火球、稲妻、癒し。Ｂは目標、ここには触れていなかったけど我、かの者、かの空間など目標の設定、ＣはＡに類似したイメージした放出方法、焼け、撃て、癒せなどの命令系の言葉になる。」

「ちょっとそこまでは分からなかったわ。参考資料が足りない。」

「じゃあご褒美をあげよう。」

俺は本棚から真新しい本を一冊取り出し、手渡す。

「何これ?こんな本この間までここにはなかったわよ?」

「この間の宿題出した後に置いといた。俺が書いた世界に一冊しかない魔法の本だ。」

「意地悪ね。」

「法則性、違和感とかに気づかないと学者として失格だね。精進あるのみだ。」

俺の軽口を無視したふりでマギーは本を開く。目を丸くしている。
そりゃそうだ。その本には全ての魔法が原文で書いてある。

「まったく読めない。でもさっき魔法の本って言ったわね。」

「言ったよ。１ページに一つずつ魔法詠唱文が大きな字で書いてある。」

「意地悪なのか？親切なのか？判断に悩むわね。」

「そう？君もやらない？有望な生徒を答えに誘導したりしてしない？」

「やる。でもやられるとむかつく。」

マギーが目の前でムキー！ってなってる。うわっ！めちゃくちゃかわいい。

「よし、では教師と生徒交代だ。テキストはそれね。７ページを開いて。」

「当然読めないはね。でもちょっと他のページと違う。下にいくつかの単語が並んでいる。」

「その通り。よく気づいたね。」

「さっき言われたばっかりだからね。法則性と違和感だったかしら？」

「脱帽です！お嬢様。」

そう言いながらかぶってもいない帽子を脱ぎ、一礼する。

「続けようか。実はそのページはルーラだ。」

「ルーラ？こんなにいろいろ書く必要あって？」

「うん。今のルーラは城に戻る魔法とされているけど、本来は指定した場所に行く魔法だ。」

「この間マイラに行ったのがこれね。ねえ、じゃあなんで普通のルーラはラダトームにしか戻れないの？」

「それはラダトームを指定しているから。下に指定場所の登録名が書いてある。一番上がラダトーム。別の言語で地下の城という意味。」

「地下？意味深ね。」

「文字通り、勇者はこの世界に落ちてきたからそう名づけた。」

「名づけた？もしかしてルーラの指定場所は勇者が登録したの？」

「その通り！勇者が訪れた場所にある魔法儀式を行い、登録名を決めた。そこにあるのがラダトーム、マイラ、ドムドーラ、メルキド、リムルダールだ。ああドムドーラに取り消し線引いといて。」

「取り消し線？」

「もう使えない。多分座標指定石が破壊された。該当する魔術儀式はまだ解明できていないから仮名ね。でもその基準はなくなったら困るでしょ？だから人の力では動かせないくらい大きい石に魔術儀式で登録名を掘り込んである。」

「へえ～すごいね。でもなんで普通に名前じゃないの。ラダトームって書いておけばいいのに！」

「便利すぎるから駄目。その気になれば何人の兵隊でも送れてしまう。多分勇者はそう考えて自分達の専用魔法としたと俺は思っている。」

「ふ～ん。徹底した平和主義者ね。自分が死んだ後まで心配しすぎじゃない？」

「ははっ！まあ尊敬する勇者様のことは置いといて、まずそのページから学習してごらん。他の魔法の解読に参考になるよ。」

「そうね。他のページはどれがどの魔法だかさっぱりわからない。あれ？ちょっと待ってその勇者専用の登録名はどうやってわかったの？またどこかの遺跡ででも見つけたの？」

「外れ！その基準石に書いてある。普通は見えないけどレミーラで照らすとうっすら見えてくる。魔法による隠し文字だ。実は王家の秘術：血の契約書にも同じからくりがある。結構えぐいことが隠して書いてある。これは絶対秘密ね。ばれたら消される可能性が高い。」

「じゃあそんなこと教えないでよ。」

怒ったような顔でおれを見る。怒った顔も美しい。もうちょっとこの顔が見てみたい。

「あともう一つ。そこには書かなかったが実は竜王の城にも基準石がある。」

「え！じゃあ行けるの？」

「行けるよ。でもこれは勇者が置いたものではない。じゃあ誰が置いたのでしょう？」

「それは簡単ね。魔物が帰るために置いた。」

「その通り。だから以外な名前が登録されていた。知りたい？」

「まあ教えてくれるなら。」

「じゃあ言うよ。怒らないでね。勇者達とは違う言語で『大魔王ゾーマ様の城』って書いてあった。」

あっと驚く。そりゃね禁忌中の禁忌とされ、しかも伝わっていない名前が耳に入ってしまったから。

「ああ、もう最悪。それは言わないでって言ったじゃない！」

「教えてっていったじゃない。それに今更恐れることなんかないさ。」

「どういう意味よ！」

「もう第二の魔王が現れているんだ。これ以上悪いことは起きないさ。第三の魔王が現れるにはまた２００年ぐらいかかるのさ。」

「何それ。今度は預言者のつもり？過去から未来まで全てあなたのものなのかしら？」

俺は預言者じゃない。ただ知っているだけ。でもこれだけは教えない。

しばらく沈黙が続く。

「まあまだ来ない未来の問題は未来の住人に任せよう。今はその問題を解くのが先、レポートにして提出してね。期限は特に決めない。随時質問には答える。途中経過を披露してくれてもいい。」

「わかったわ。絶対負けない。あなたの知識は全部私のものにしてあげる。」

俺は退室することにした。彼女が本に集中しだしたらもう誰の声も聞こえなくなるから・・・。

5／7　勇者支援生活7日目

いつも通りのトレーニングをする。横でアレフも剣を振っている。まだ納剣がぎこちない。結構な頻度で左手に刃を当ててしまいホイミで治療をしている。あれでMP足りるのかな。そうだ！

「おい！アレフ。そんなんで昼から実戦行けるのか？MP不足で危険じゃないか？」

「わかりますか？実は昼間までに大体使い果たしてます。まあここ近辺は強い魔物がいないので薬草数個ですみます。」

「わからんでか！ではいいことを教えてやろう。城の一階、中央十字路右から行った奥まった所にへんな爺さんいるの知ってるか？」

「・・・？もしかして祝福爺さんですか？」

「祝福爺さん！言いえて妙だ。そうだ。昼から外に出る前に会ってからいくといい。」

祝福爺さん（アレフ命名）俺がアレフガルドで解けない謎の一つ。彼は基本『勇者に祝福あれ！』としか言わない。だけどMPが全快する効果がある。アレフが怪訝そうな顔をする。

「騙されたと思っていってみな。じゃあ俺は終わったから行くよ。」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

いつも通り朝食をとっている。。起床6時、2時間のトレーニング、それから食事。もう10年近く続けている。なるべく生活リズムは崩さない。

「ケルテン殿よろしいですか?来客です。」

騎士見習いの一人が控えめに話しかけてくる。俺そんなに怖いかな。対外的には紳士なつもりなんだが。

「ああいいよ。ところで誰かな?」

「ゲオルグ、クロウ、ドゥーマンを名乗る三名です。」

「ああ彼らか。いいよ通して。」

「ここにですか?」

「かまわんよ。待たせるのも悪いしね。」

「判りました。では案内してきます。」

どうしたのかな?ガライに行く許可でも得にきたのかな?ならいいのだが・・・。そんなことを考えていると見習いに連れられて三人が入ってきた。ほう、装備が変わっている。先日教えた通り二人が革の鎧、革の盾になっている。武器は変わっていない。

「お久しぶりです。ご指摘どおり装備を整えました。近くで野営などの練習もしました。ガライへ行く許可を得たいのですが?」

言葉遣いも変わっている。最初からこうだったらよかったのに、つくづく惜しいな。

「いいよ。行っておいで。今いくらぐらい持ってる？」

その言葉に三人の顔が曇る。

「ああ別に返せって言ってるんじゃない。どうせガライに行くなら鉄の斧を買った方がいいと思ってね。たしか５６０Ｇだったかな。」

「今５００Ｇ弱です。だいぶ足りませんね。」

「そうだね。ガライで数泊するのと帰りの食料を考えると・・・ＯＫ！俺が２００Ｇ貸してやる。」

「いいのですか？持ち逃げするとは思わないのですか？」

「そうだね。かまわない、地の果てまで追いかけて殺すから。何なら今すぐにでも・・・。」

俺は頭でザラキの詠唱を始める。第３小節まで唱え止める。なんとなく雰囲気で判ったのか三人は真っ青になって震えている。

「よく判りました。あなたに殺されるのは嫌です。のたれ死ぬ方がましな気がします。」

「判ってもらえてうれしいよ。ああ、それと俺に敬語はいらない。じゃあ、これ使って。」

俺は懐から２００Ｇ出して渡す。

「お借りし・・いや借りとく。必ず返す。」

「それでいい。がんばれよ！」

三人は食堂から出て行った。案内してきた見習いが突っ立ったまでいる。

「どうした？もう終わったよ。」

「先ほどの・・・いえ何でもありません。失礼します！」

なんだよ。別に逃げなくてもいいじゃないか。

その後騎士見習いの中に根も葉もないうわさが流れたのを俺はしらない。

　視線だけで人を殺せる。

　機嫌を損ねると死ぬまで追い詰められる。

そうだ。勇者ガルドはどうしただろう？後で調べることにしよう。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

　国務大臣執務室

おっ！ガルドの光点が移動している。あいつの移動速度だと明日の昼には戻ってくるかな？ちょっと気になるから担当外の連中も見てみよう。

このリムルダールに向かっている一つだけの光る点はガイラかな。あとは雨の祠付近に四つ固まった光点がある。

「この４人の勇者はもしかして同郷ですか？」

「調べるがよい。」

はいはい、聞いた俺が馬鹿でした。書類を取り出し並べる。勇者１２：エイブラムはラダトーム。勇者４１：ローランド、勇者４２：メルカバ、勇者４３：レオパルド、三人ともガライ出身・・・エイブラムがガライで三人をスカウトしたと考えるのが妥当か。

「そんなに担当外の勇者が気になるか？」

「ええ、まあ気にならないことはないですが。」

「そうか。ならば勇者２５もそなたが受け持て。」

ありゃ薮蛇だったか？勇者２５ってガイラだな。あいつなら放っておいても大丈夫だ。

「はぁ？かまいませんが理由を聞いてもよろしいですか？」

「ふむ。そなたの先任者は知っているか？」

「いえ、存じません。」

「２名いた。内１名は先月３月の勇者と共に死んだ。それで残るシュミットがあの４名の勇者を支援しておる。勇者２５は現在支援する者がおらぬ。」

「判りました。拝命します。」

よしリムルダールについた頃に会いに行こう。

模擬戦

5／8　勇者支援生活8日目。
いつも通りの訓練所である。昨日と違うのはアレフが少し興奮している。

「祝福爺さんのところ行きました。驚きました。MPが全快です。あれ何なんですか？」

「判らん。まったく判らん。調べても欠片もわからん。」

「ケルテン師匠でも判らないことあるんですね。」

「俺は全知全能じゃないよ。ただ判らないことは調べないと気がすまないだけだ。」

「もう一つ質問。この間魔法の価値が低いって言いましたよね。例えば距離とって逃げながら撃つとか、人数集めていきなり打ち込むとかすれば強くないですか？」

「もっともな意見だ。でも魔法は必中じゃない。あまり距離を置くとベギラマならともかくギラは当たらない。弾速が遅いからね。ベギラマでも身を隠せば当たらない。あと俺の本気の速さ、逃げられると思うか？」

「あ～それは無理ですね。じゃあいきなり打ち込むのは？」

「まあそれは特殊な例だね。不意打ちで斬りかかるのと変わらないから。どちらにしろ武器にしろ魔法にしろ使い方次第さ。ただ手段

は多い方が勝ちやすい。よしじゃあ手合わせしようか。ルールは殺す以外は何でもあり。」

「本当ですか？本気で行きますよ。」

「もちろんだ。武器も好きなのを使うといい。手加減なんざ許さない。」

俺はまわりで訓練している連中に声をかけて場所を空けてもらった。自然と人集りができる。

「よし。とりあえず互いの距離は１０m。はじめの合図はそこの君にお任せします。」

アレフは鉄の剣、鉄の盾に革の鎧。武器を抜いて盾を前に出した左半身の構え、俺は腰を落とし居合いの構え。はじめの合図は鉄の剣で鉄の盾を叩く。ゴンと鈍い音がする。

アレフは俺の居合いの速さも間合いの広さも知っている。警戒しながらにじりよってくる。予定通りだ。

「ベギラマッ！」

居合いの構えからいきなり右手を突き出し稲妻を放つ。狙いは鉄の盾。痺れて棒立ちになったアレフの元まで距離を詰め、居合いで右篭手を打つ。もちろん峰打ちだ。鉄の剣が落ちる。

「ひでぇ・・・。」

「卑怯な！」

外野から非難の声が聞こえた。

「今、卑怯だと言ったやつ前に出ろ！」

人集りのほとんどが顔を伏せ目を合わせない。前に出るやつはいない。

「まあいいでしょう。今私は殺す以外はルール無しとした。もちろん魔物にはルールはありません。今卑怯だと思った者全員死んだと思え。アレフ！お前は卑怯だと思ったか！」

「いいえ。私は師匠の間合いや剣速に気を取られて、魔法の存在を忘れていました。さっきまでその話題をしていたのに。」

アレフは悔しそうに話す。左手で打たれた右手をさすっている。

「よろしい。なぜ負けたか理解できればそれでいい。ここなら次があるからな。手をだせ。・・・ベホイミッ！」

赤く腫れていた右手が元通りになる。

「一本で終わりか。終わりならいつもの練習だ。」

「まだやります。」

「そうか。では次は木剣と木盾を使おう。俺も木剣を使う。ちなみに木の盾ならベギラマは通らん。」

「判りました。同じミスはしません。」

「よし。では合図！」

互いにさっきと同じ様に構える。始まりの合図と共にアレフが飛び込んでくる。俺は合図がなる頃にはすでに抜剣して上段に構えている。盾を前に間合いに入ってきたアレフに木剣を叩きつける。受け止めた盾が真っ二つに割れた。以外な結果に止まったアレフの右篭手に軽く剣をあてる。

「おい！あれか？噂の盾割り。」

「聞いたことがある。近衛のサイモンさんが盾を割られたって。」

ちょっと外野うるさい。問題はそこじゃないんだ。

「さてアレフ。今回の敗因は？」

「木剣で盾が割れるとは思いませんでした。」

「残念、そこじゃない。一番の問題は俺にはお前の行動があらかじめ解かっていた。正直に言うとそう誘導した。ベギラマが使えることを意識するとまず間合いを詰めてくる。しかも事前に木の盾にはベギラマは効かないと教えてある。そうでなければ上段からの渾身の一撃はできない。」

「なるほど、私の動きはケルテン師匠の手の内にあった。」

「さっきも言っただろう？武器も魔法も使い方だって。あとわざわざ木の盾を持たせたのはもう一つ理由がある。」

「鉄の盾なら斬れないからですか？」

「いや刀なら斬れるんだ。ただそうすると高くつく。８００Ｇも弁償したくない。」

「本当ですか？はあ、かなわないな。」

「まだいろんな戦法がある。さらに魔物なら人間にできない戦法ができる。
例えば飛ぶ魔物、メイジドラキーはギラを放ってくる。キメラは火を噴いてくる。がいこつとか鎧の騎士は痛覚も感情もないから多少斬られても平気で懐に入ってくる。近くが毒の沼地でもお構いなし、多分崖なら一緒に落ちるだろうね。あとドラゴンとかゴールドマンとか体の大きさが違いすぎるモンスターには常識は通用しない。」

「まだまだですね。ありがとうございました。いつもの練習に戻ります。」

「よし皆解散。時間のある者どうしで模擬戦でもやってみろ。多分さっきまでと違う戦いができるぞ。」

俺とアレフは隅によるといつものメニューを始めた。あちらこちらで模擬戦が始まる。今日の訓練場はいつもより活気があるようだ。

模擬戦（後書き）

アレフが皆さんの替わりに質問をします。

勇者ガルドと買取センター

さて今日は勇者ガルドが買い取りセンター（俺命名）に来そうな日である。そういえば支援官になってから行った記憶がない。顔をだしておくか。城の一階にあったな。

・・・・怒られました。

「勇者のレベル評価が貯まってます。一週間も何やってたんですか!?」

「いや連絡はしたよ。勇者５２、５３、５４の勇者資格停止、買取継続と半額の徴収については。」

「それだけでは駄目です。勇者５５の買取品の書類が貯まってます。この書類に目を通して現在レベルを決定してください。」

「大丈夫。レベルでの評価なんていらない、俺の弟子だし。」

俺は一応買取リストを眺めている。ふ～ん見事にスライムとスライムベスとドラキーだけだ。当たり前か。城から半日で移動できる範囲しか行かせてないからね。しっかしまあよくこんなに集めたな。結構は多いぞ。それにしても効率の悪い書類だな。素材一つにつき一つチェックを入れるんだ。別途数数えてスライムの核何個って書いておけば見やすいのに。

「それでもレベルを決めて下さい！」

「じゃあレベル３。」

「適当に決めないで下さい。こんなに書類があるんです。そんな低いわけないでしょう。」

「ふん。書類なんかで何がわかる。それにあいつはできるだけレベル上げてから次に行くタイプだ。おれがそう決めた。」

「言っている意味がわかりません。」

「細けーことはいーんだよ！Ｌｖ３、これは決定事項です。異論は認めません。」

「もうそれでいいです。」

「そうだ。今日は多分勇者５１ことガルド来るよ。」

「へえ～ちゃんと把握してるんですね。」

「何、その不信そうな目は？」

「文官の間では噂になってますよ。女子供と遊んでばっかりいる人だって。」

まじか。そんなことはないはずだ。勇者３人を落第させただろ。次にアレフを弟子にして、マギーと魔法談義して・・・・・・・・なるほどアレフが子供でマギーが女か。否定できねえ～。いやいやいや、これは竜王討伐を含む壮大な人類補完計画の一部だ。誰かにけちをつけられる覚えはない。大体女と遊んでいるって本人が聞いたら激怒するぞ。

そんなこんなやっていると２ｍはありそうな筋肉隆々な男が現れた。ガルドだ

「これを引き取ってくれ。」

ドサッ！と布袋を床に置く。

「いらっしゃいませ！当店は初めてご利用ですか？当店のシステムは説明した方がよろしいですか？」

俺は一気にまくし立てる。隣の文官は呆れたような顔で俺を見ている。

「おっおう！そうしてくれ。」

多分調子が狂うのだろう。なんとなく返事をしてしまっている。

「はい！では説明致します。まず持ってきた素材によってＥＸＰポイントとＧポイントがつきます。　例えばスライムならＥＸＰポイント１、Ｇポイント２です。詳細はこちらの紙で確認して下さい。一定以上ＥＸＰが貯まると勇者レベルが上がります。７ポイントでレベル２、同じく２３，４７，１１０でレベルが上がります。これについてもその紙にありますので確認して下さい。このレベルでどの程度の地域に行けるかの判断材料になります。必要に応じてご相談下さい。相談は無料です。担当は私ケルテンになります。

次にＧポイントですが、これはそのままゴールドを受け取れます。また必要分だけ受け取り、残りを貯金しておくことも可能です。

以上理解できましたか？」

「べらべらとうるせえやつだな。別に俺はお前の助言なんぞいらねえ。ゴールドは全部よこせばそれでいい。」

ガルドはこめかみに青筋を立てている。気の短いやつだな。

「では鑑定を行ないます。時間がかかりますのでお待ちいただけますか？または宿に届けることも可能ですが？」

「いや待つ。」

「ではそちらのソファにお掛けになってお待ちくださいませ。」

俺と文官で手分けしてテーブル上に並べる。メイジドラキーの翼膜、おおさそりの毒尾、がいこつの大腿骨、魔法使いの杖。ひどいな。折れたり割れたり素材として半分は使えない。二人で小声で話す。

（なあ。ちょっとひどすぎない？）

（ええ。これなんかわざと折ってあるみたいですよ。数が増えると思ってるんですかね。）

（微妙だね。故意かどうか判断しづらいね。）

（これとこれは同じですね。ほら断面が一致する。こんなパズル嫌ですよ。）

（俺だって嫌だよ。何が悲しくて骨でパズルせにゃならんのよ。）

「いつまで時間かかってるんだよ！」

（ちょっと注意してくるわ。正確に続けて。）

俺は申し訳なさそうに話す。

「申し訳ございません。数が多いのと状態が悪いので正確な数をだすのに時間がかかります。また買い取った素材は加工、売却することにより支払うゴールドを得ていますので、次からはなるべく完全な形での納品をおねがいいたします。」

怒ってる。怒ってる。手出してくるかな?予想通り俺の襟を掴みに来る。見切ってかわす。やつの体勢が少し崩れた。

「うるせえんだよ!てめえ!・・・・ってなめてんのか!」

「いえ、そんなことはありません。ああちょうど計算が終わったところみたいですよ。」

俺は文官の所まで歩き用紙を受け取る。もどりながら話す。

「今回はメイジドラキー３０匹、大さそり２５匹、がいこつ１３匹、魔法使い３２匹でＥＸＰ１９６６、２３８３Ｇとなります。おめでとうございます。レベルが1から9に上がりました。なお次のレベルになるのにあと３４ポイント必要になります。」

ガルドはゴールドの入った袋を引っつかむと無言で出ていった。

「いや～怖かったねぇ。短気な人でしたね。」

「なんで笑いながらそんなこと言えるのですか?どうかしてますよ。」

「失礼だな。正常ですよ。」

「もういいです。武官の方の神経はわかりません。最初からわざと挑発したでしょう？」

「わかる？人柄を確認したくてね。ありゃ駄目かな。次来る時もなるべく立ち会うよ。もし俺がいない時来たら近衛に声かけて立ち会ってもらう様に。いいね。」

「頼まれなくてもそうします。ああいう人は嫌いです。」

「君の評価も参考にさせてもらいます。そういえば名前を聞いていませんでしたね。」

「メイヤーです。一応男爵号を持っています。あなたのことは存じてます。ある意味有名ですから。」

「あっそう。これからもよろしく。メイヤー男爵。ではまた来ます。」

「毎日一回は来てください。」

「はいはい。」

俺は背中を向けて軽く手を振ってここを去った。

弑逆未遂事件

さて不愉快なことばかりおきたので気晴らしにマギーのところにでも行こう。

「よお！マギー。はかどってる。」

「駄目っ！邪魔しないで。今いいところなの。」

マギーが顔も上げずにそう言い放つ。

「あっはい。すみません。失礼しました。」

それだけ言うと俺はそっと扉を閉めた。ああなると駄目だ。きっと誰が来たかすら判ってないな。なんか俺寂しい。兎は寂しいと死んじゃうんだよ。嘘だけど。ぼやきながら歩いていると何やら騒がしい。

「なりません。殿下と言えどその命令には従えません。」

「黙れ！衛兵ふぜいが殿下に命令するな！」

城の2階への階段前で衛兵2名と貴族風の男7名が問答している。貴族側でしゃべっているのは後ろに立つ3人の内の一人だ。二人の衛兵が鉄の槍を交差させ、通行を阻害している。その前には貴族の護衛と思われる二名、二歩下がって高価な貴族服の男、さらに三歩下がって貴族服三名。

「騒がしいですね。どうしました？ここは場内ですよ。」

俺は間に割り込み衛兵に声をかける。衛兵が少しほっとした顔をする。

「こちらのフレーゲル殿下がここを通せと仰せです。」

フレーゲル殿下？誰だっけ？殿下ってことは王家の誰かだよな。

「いいんじゃない？特に断る理由があるわけでもあるまいし。」

「いえ、護衛の方の武器が・・・。」

そう指さす。なるほど帯剣してるね。俺は振り返り

「お連れの方の武器を預からさせて頂きます。それでお通しできますが？」

「無礼な！国王様の甥にして王位継承権第3位のフレーゲル殿下に命令するな！」

「そうだそうだ。直答するも恐れ多いぞ！」

ああ、後ろのガヤが五月蠅い。当の本人は見下したような目で俺を見ている。そうか王位継承権第3位ってことはたしか国務大臣の息子で・・・他にはなんの取り得もない男だったような。

「後ろの方々、少し黙って下さい。今あなた方とはお話していません。それで殿下、先も申した通り武器をお預かりしたいのですが？」

「このフレーゲルの武器を取り上げると言うか。」

「いえ、殿下の武器はかまいません。ですが護衛の方の武器をお預かりすると申し上げております。」

「私の部下の武器は私の武器そのものだ。それでも預かると言うか。」

「ええ、なりません。殿下と言えど遵守して頂きます。」

「貴様、大臣殿の覚えがいいからと増長するな！」

「ふん。貴様など図書館ででも大人しくしているがいいわ。」

「おのれ、筆頭魔術師殿もこんな男のどこがよくて。くっ！」

また外野が騒ぐ。なんか個人攻撃に変わったぞ。しかも筆頭魔術師って、ああマギーの言ってた馬鹿ってこいつらのことか？フレーゲルが片手を挙げると外野が黙った。よく調教されているな。

「ではどうしても通さぬというのだな。」

「ええ、どうしても通さぬと申してます。」

「ふん！この馬鹿者をやってしまえ！」

そう言い放つとフレーゲルは3歩下がる。護衛の二人が剣を抜いた。馬鹿か、ここで剣を抜くか！剣を構えた二人が威嚇するように剣を構える。

「引いてもらえませんか？事を構えたくありません。」

「ならば貴様が手を引け。」

これは時間稼ぎだ。この間に思考詠唱でピオリムを二回、さらにバイキルトを自身にかける。

「危ないですよ。そのままだと後ろの人に当たりますよ。」

そう声をかけると思わず二人が後ろを確認する。今だ！抜く手も見せぬ居合い、狙いは鉄の剣。向かって左の男の剣の刃を斬り裂く。さらにかえす刀でもう一人の鉄の剣も斬り落とす。鍔鳴りの音が響いた時、俺がとぼけた声で話しかける。

「面白い剣ですね。刃がありませんよ？」

「なっ！貴様・・・」

真っ赤になったフレーゲルが口述詠唱を始めた。消費ＭＰ５の魔法、ベギラマか。間に合え！

「私はＭＰを５放出するＭＰとマナは融合し万能なる力となれる。ＭＰとマナは融合し万能たる力おお万能なる力よ、雷となる力よ、不可視の力となり我が敵を、撃て」

（俺はＭＰを２放出するとなれ。おお万能たるかの者の魔法を封じよ。）

「ベギラ「マホトーン！」」

何も起こらない。俺が上からかぶせた魔法が効果を発揮した様だ。フレーゲルが手を突き出し口をパクパクしている。

「衛兵！この者たちを拘束して下さい。」

「しかし・・・」

「私が全責任を負います。拘束して牢屋に入れて下さい。」

騒ぎを聞きつけた近衛騎士達も階段を下りてくる。

「国王、及びに国務大臣に対する弑逆未遂、ならびに城内騒乱罪になります。近衛の方々も手伝って下さい。」

次々に取り押さえられる6人。往生際が悪く暴れているが容赦なく取り押さえさせる。

「父上に会わせろ！」

「下郎が！私の体に触れるな。」

騒がしい声が遠ざかっていく。衛兵が引きずる様に連れて行く。

――――――――――――――――――――――――――――――

俺の前に不機嫌な国務大臣と近衛隊長がいる。

「これはどういうことだ。説明せよ。」

「はっ！かの者達が帯剣したまま2階への通行許可を求めました。拒否したところ抜剣、さらに魔法の行使を行いましたので身柄を拘束しました。なにか不都合がありますか？」

「何が不都合だ。あれは私の息子だ。それでもか？」

「大臣、いけません。この者の言が正しい。我が国にはこの者を罰するいかなる法もありません。」

「しかし・・・」

ここで俺が口を挟む。

「よく考えて下さい。さきの者は自称王位継承権第3位です。その者が国王様と継承権第2位の大臣、あなたがいるここに武器を携えてくる、ということは反逆の恐れがあります。ローラ王女が行方不明の今あなた方がいなくなれば、かの者が国王になれるのです。」

「なっ！私の息子であるフレーゲルが私を殺しに来るわけがなかろう。」

「残念ながら私はあなたの息子の顔を存じ上げません。自称の称号や名前を信じて法を犯させるわけにはいけません。さらにそういった前例は枚挙に暇がありません。弑逆という言葉があるぐらいですから。それに今は平時ではありませんから、最悪を想定して行動すべきです。王女が誘拐された前例があります。」

隣で近衛隊長が声にならない声を上げる。

「この件は国務大臣にお預けします。そのかわり絶対にうやむやにはしないで下さい？」

「ではどうせよというのだ。」

「そうですね。まずは不見識な行為に対する叱責、さらに一ヶ月の

登城自粛といったところですか？またこの件は公にはするが公文書には載せない。これで大臣の面目も立つでしょう。」

大臣が苦虫を噛み潰したような顔をしている。これでも妥協した方だぞ。汚名返上、名誉挽回のうまい手だと思うのだが。

「判った。そなたの言うとおりにしよう。」

がっくり肩を落とす大臣。俺と近衛隊長が退室する。かける言葉はない。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「しかしお前。何をした？見ていたはずの衛兵もはっきりせん？」

歩きながら近衛隊長が質問する。そうか、見えなかったか。狙い通りだ。

「ただ剣を斬り飛ばして、ベギラマをマホトーンで封じただけですよ。」

「軽く言ってくれる。お前以外の誰にもできぬだろう。まあいい。一部の増長した者共もしばらくは自重するだろう。」

「だといいですけどね。」

「しかしまあお前、損な役回りをする。本当は俺の役割だ、すまんな。」

俺に頭を下げる。

「理解してくれる者がいるなら、それほどでもありませんよ。」

この人は敵にまわしたくない。数少ないそう思える人だ。

弒逆未遂事件（後書き）

なんの捻りもありません。あの人です。
一部修正しました。指摘ありがとうございます。

最悪な一日の終わり

自室に戻り革の服と刀を放り出し、ベッドに大の字になる。目を瞑る。疲れた。今日は不愉快なことだらけだった。正々堂々を旨とした騎士、増長した貴族、降って沸いたうまい話に浮かれる平民か。無理もないか。４００年の平和だ。きっと竜王さえ倒せばまた平和が訪れると思ってるのだろうな。上から下まで平和は他人任せ・・・竜王亡き後の時代は開拓の時代。無能な者は置いていかれる。ラダトーム王家も例外じゃない。いずれ辺境の一王家にすぎなくなる。いっそのことそう言ってやりたい。誰も信じてはくれないか・・・。だめだ。ネガティブになっている。夕飯ぐらい豪勢にするかな。

コンコン。控えめなノックの音が部屋に響く。

「いる？私よ。」

ああマギーの声だ。ほっとする。

「ちょっといるんでしょ！返事ぐらいしなさい。入るわよ。」

かってに扉を開けて入ってくる。前言撤回。ほっとはしない。

「じゃあ立って、出かけるわよ！」

俺の手を取って強引に引っ張る。あわてて刀だけ掴んで引きずられていく。

「ちょっ出かけるってどこに？もう８時だぜ。」

「いいからいいから。とりあえず屋外に出ればいいから。」

・・・屋外?兵舎から外にでる。何人かに見られていたような気がする。

「さ～て、よく見てなさいよ。」

マギーの周りのマナが変化する。おい魔法を使うつもりか?マホトーン・・いや間に合わない。やばい。一瞬景色が失せ、気づくと湯気の見える村の外に立っていた。

「マイラ・・・か?「やったぁ～!できたできた。やっぱりマイラのことだった。」」

マギーが両手を広げてくるくる回っている。俺はあっけにとられている。

「何?俺を実験に付き合わせたん?」

「そうよ。なにかあったら困るでしょ。そうだっ!」

返事をほったらかして走るマギー。村の入り口の大きな岩。花が捧げられている。

「基準石ってこれね。レミーラ。うん確かに書いてあるわね。温泉の村ってセンスないね。」

そこまで言うと俺の方に振り返って胸を張る。

「どう？ルーラは解読したわよ。」

「はあ。そうみたいだね。」

俺はため息をつく。

「なにそれ。もっと驚くとか喜ぶとかしなさいよ。」

「いや十分驚いた。大したもんだ。」

「もうもっと褒めなさいよ。じゃあ行くわよ。」

「えっどこに？もしかしてリムルダール？メルキド？」

「なによそれ、ここはマイラ。温泉以外にどこ行くっていうの？」

再び俺の手を引っ張るマギー、いま多分俺はにやけているだろう。
不愉快な一日の終わりは最高だった。

――――――――――――――――――――――――――――――

翌朝、俺は隣のマギーを起こさない様にそっとベッドから出る。
こんな時でも同じ時間に起きてしまう。刀を手にとって外へ・・・

「ねえ！どこへ行くの？」

「ゴメン。起こした？いつものトレーニングさ。やらないと調子が悪くなるから。」

「そう・・・じゃあ。私は見てる。ちょっと待ってて。」

マイラの町の北側、木がまばらに茂る場所で俺が刀を振る。切り株に座ってじっと見つめるマギー。気になってしょうがない。いかん、平常心だ。無心で刀を振る。もう視線は感じない。

「よし、これで終わりだ。ごめん、退屈させた?」

「いいえ、楽しませてもらったわ。やっぱりすごいのね。それで鉄の剣を斬ったって本当?」

「なんだ、君の耳にも入ってたんだ。本当だよ。」

そうか。昨日の一件で俺が落ち込んでいると思って、ここへ連れてきたんだ。ルーラの披露も踏まえて・・・。

「これも伝説の名剣?一体何でできてるの?」

「違うよ。ここで作ってもらった。材質は鉄と鋼の二層構造だった。今はさらにミスリルを含む三層構造。」

マギーが首を傾げる。気づいたかな。

「入手も加工もできないはずのミスリルが使われてるの?」

「まあ説明が長くなるからまた今度ね。まだ魔法の解読終わってないでしょ?」

「まあいいわ。魔法が一段落したらまた聞くことにする。」

少し脹れている。

「じゃあチェックアウトして城に帰ろうか？」

「ルーラは私が使うわ。リムルダール、メルキド経由で。」

「まだ実験する気？」

「駄目？」

「そんなことないけど。」

・・・・・・俺達にとってはたわいのない話をしながら宿屋に帰る。

――――――――――――――――――――――――――――――――

私の横でケルテンが安らかな顔で眠っている。

さっき部屋で見た時ひどい顔をしていた。この人かなり無理してる。私はわがままを利用して慰める。今は道化でもいい。

最初は何でも知っているような顔にむかついた。武官のくせに！でも本当に私の知らないことまで知っていて、しかもそれを惜しげもなく教えてくれる。まるで子供を教え導くように・・・。

いつからだろう？一番大事な人だと気づいたのは。多分あの開かずの間が開いた日。そうあの開かずの扉は私の閉ざされた心の扉。格式や身分しか重要視しない貴族の子弟、正々堂々にこだわる騎士、全て馬鹿にしていた私の心を真正面から開放した。

強大な力を持っている。だけどそんなことなんでもないことの様

に言ってのける。誰にでもできることだって。私は武器は持てない。じゃあ私はこの人の知識だけでも追いついてみせる。でも力の使い方は間違わない。それができるようになったら本当の意味で横に立てる気がする。今はその背中を追いかけるだけでいい。

おやすみ、ケルテン。あなたに安らぎがありますように。

勇者アレフの成長

５／１０　勇者支援生活　１０日目

毎朝の教練である。昨日はここには来れなかったのでちょっと気恥ずかしい。一昨日はここで説教したせいかいつもいる兵士や見習いが俺を見てこそこそ何か話している。人の噂をするなら聞こえない所でしてくれないかな。

アレフがいつもと違っていきなり抜き打ち、縦切り、納剣の練習を始める。シュッ、シュパッ、シャキン！１０回くらい繰り返す。いい音をしている。なるほどね。

「ああ判った、判った。できるようになったって言いたいんだな。」

「できてますか？じゃあ・・・」

何か期待するような目で俺を見ている。

「次の準備するから少し待ちなさい。」

俺は自室に戻り、支給品の鉄の鎧を持ち出した。

「これを着なさい。」

「頂けるのですか。」

「違うよ。やっぱり貸すだけだ。いつものメニューをそれ着たままやるんだ。それが問題なくできるようになったら剣に関しては教え

ることはもうない。」

アレフは目を輝かせながら鉄の剣を振り始めた。流石に流れる汗の量が半端じゃない。今日は自分のメニューが終わっても帰らない。最後まで見ていることにした。体を冷やさないように汗を拭き待つ。

「はあ。はあ。はあ。終わった。」

アレフがしゃがみこんで休む。

「いずれその装備で外へ出るんだぞ。ばててるようじゃまだまだだ。でも俺は優しいからな。直してやる。ベホイミ!」

「ありがとうございます。ずっと楽になりました。でもすごいですね。」

「なにが?ベホイミ?」

「違います。よく無詠唱で魔法が使えますね。」

「ああ、それね。悪いが誰かが魔法を使用するために口述で詠唱したら、第一小節の時点で何使うかわかるぞ。」

「ええっ!本当ですか?」

まあ驚くか。まだアレフはホイミとギラしか使えないからパターンに気づいてないだろう。

「本当だ。だから口述詠唱でなく思考詠唱を推奨する。だから魔法の名前だけで呪文が完成したように見える。これはロト一行が当た

り前にやってたことだ。」

「まだまだですね。」

「では飯食ったら、魔法の学習だ。ベギラマが使用できるまでは午前中は魔法の練習をしよう。」

「はい楽しみです。もう一つ質問いいですか？」

「何？」

「一昨日の夜は筆頭魔術師殿といっしょだったんですか？」

思わず口にしていた水を噴き出した。周りでこそこそしていたやつらが手を止めてこちらを注目している。

「プッ、プライベートな質問には答えられない。」

まずい、ごまかしきれていない。

『ウワーン！本当だったんだぁー！俺あこがれてたのにー！』

誰かが泣きながら走りさっていった。その辺、ざわざわするな。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「お前なあ。あそこであの質問はないんじゃないか？」

食事中、肉をつつきながら文句を言う。

「どうしても聞いてほしいと昨日言われまして、断れずに・・・すみません。」
「もう済んだことだ。もうやるなよ。ちなみに魔法の先生はその筆頭魔術師殿だ。」
「いいんですか？」
「なにが！別に魔法を教えることぐらい俺がとやかく言うことじゃない。」
「わざわざ筆頭魔術師殿に教えてもらえるってことですよ。」
「あっ！やられた。お前策士になれるよ。」
「やった。初めてケルテン師匠から一本取りましたよ。」
　俺は頭を抱えた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

図書館である。初めて二人を会わせる。なんで俺がこんなに緊張しなきゃならんのだ。
「あ～マギー。こちらが勇者アレフ。しばらく魔法の先生をお願いしたい。
　そしてアレフ、お前は知ってるな。筆頭魔術師のマギーだ。」

「ケルテン師匠の弟子アレフです。筆頭魔術師どのに魔法の指導をして頂けるとは光栄です。」

「王立図書館司書のマギーよ。・・・ちょっとケルテンこっちへ・・・」

（なに？聞いてないわよ。どういうこと、説明しなさいよ。）

マギーが俺の手を引き隅に行く。しゃがみ込んで小声で話す。

（さっき決めた。俺が教えるより君が教えた方がいい。）
（どういう意味。あなたの方が教えるの上手でなくて？）
（そうでもないと思うけど・・・それより人に教えることで初めて気づくことがあったりするんだ。多分だけど今例の魔法書、行き詰っているでしょ？）
（何でわかるの？）
（わかるさ。マギー君の事ならね。まあ騙されたと思ってお願い。）
（しょうがないわね。いいわ。やってあげる。）
（とりあえず魔法の思考詠唱から、最終的にベギラマまで使えるようにしてくれ。例の詠唱文の意味も説明もしていいから。魔法の授業は朝９時から昼１２時までの３時間。じゃあ頼んだよ。」

何も無かったようにマギーがアレフの前にもどる。

「はあ～い、私はマギー。筆頭魔術師なんて他人行儀な呼び方止めてね。」

「はい。ではマギー先生。よろしくお願いします。」

「なんか素直でいいわぁ。こんな生徒今までいなかったわ。でも私の指導は厳しいわよ。」

「望む所です。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

例の黒板を出してマギーが板書を始める。１０種の魔法を並べて書く。順番に魔法を指し詠唱文の共通点などを説明する。アレフがしきりと感心している。途中マギーがアッと叫ぶといきなり魔法書を１０ページほどパラパラめくる。

「ごめんなさい。続けるわね。」

続きが再開される。任せておいても大丈夫だろう。俺は確信した。

どうやら気づいたようだね。あの魔法書にはからくりがある。最初の１０ページは今の魔法が順番に書いてある。それだけわかれば・・・まあ頑張れよ。

俺は背中を向け、右手を上げひらひらさせながら出て行った。

湖上都市リムルダール

5／14

ここ4日ほど落ちついた日を送っている。朝の調練、魔法学校、買取センター、国務大臣室。単純な作業を繰り返すだけになってきた。実に詰まらない。アレフはまだまだ。ガルドはあいもかわらずマイラあたりで狩りをしている。落第勇者達はガライを出発した頃か。そろそろガイラがリムルダールにつく頃だ。

普通リムルダールへは二週間ほどかかる。距離的には馬さえ使えれば10日もあれば余裕でつくのだが、竜王があらわれた頃地下道の両端が毒の沼地になってしまった。馬での通行は不可能に近い。トラマナを使用できれば問題ないがこの時代にない。ゆえにラダトームから全て徒歩で行くか、マイラ村まで馬で行き残りを徒歩で行くしかない。

ガイラがラダトームを出発したのが5月7日、一週間で到着するとはどういうことだろう？担当変更の挨拶をしにリムルダールに跳ぶか。久しぶりに家に帰るのも楽しみだ。

俺の一番古い記憶は馬車から投げ出された自分、ひっくり返った馬車、襲い掛かるキメラの3つだ。養父が言うには馬車でリムルダールに引越してくる際、運悪く野生のキメラに襲われ、馬車の操作を誤ったらしい。このとき実の両親を失ったそうだが記憶にないので涙すらでない。リムルダールに墓だけある。俺は町長に引き取られて、今現在18歳である。

じゃあルーラで跳びますか。誰かにばれるとまずいので隠れて思

考詠唱する。
（俺はＭＰを８放出する。
ＭＰはマナと混ざりて、万能たる力となれ。
おお万能なる力よ、風となりて
我を、湖上都市へと運ばん。ルーラ！）

さて久しぶりの故郷です。昔は陸と中州が完全に繋がっていたが、砂地ゆえ不安定かつ防衛上の問題で吊り上げ橋で渡るように提言した。いまでは橋での通行が当たり前になってます。半年前の魔物の侵攻はこれでほとんどが入って来れなかった。竜王の率いる魔物の中で強力なモンスターはほとんど空を飛べない為、陸路さえなくせば防衛は比較的簡単だった。もちろん飛行してくる魔物や無理に泳いでくる魔物に備えてバリスタや投石器を準備し、さらに上陸されにくいよう湖岸線に木の囲いをした。もっとも囲いといっても牧場レベルの簡単な物だ。

では宿屋から確認しよう。うおっ！でけえ馬。黒王号か？松風かと思わんばかりの馬が宿屋の厩舎にいる。多分これだ。俺は宿屋に入ると気安く声をかける。

「やあ親父さん。元気？」

「おお！町長さんちのケルテンか。お前城に行ったんじゃなかったか？なんだもう戻ってきたか。」

「に・ん・む・だ。勇者来てない？」

カチンときたのでちょっと変な区切り方をして答える。

「ああ昼過ぎにきたよ。城から指定宿扱いされてから初めてだ。っ

てなんでお前がそんなこと知っているのだ。」

「だからそれが任務。勇者が十分な活躍できる様支援するのが俺の任務。」

「ふ～ん。お前は腕も立つし何より賢い。まあらしい任務だな。それはそうと勇者を半額で止める様お達しだがどういうことだ？割が合わんぞ。」

「ああ、それね。とりあえず半額で泊めてやってよ。記録しておけばその分税金から控除されるから。」

「じゃあ、それまで損じゃないか。やってられないな。」

「すまないな。俺に言ってもどうにもならんよ。しかしどうせ片手間の仕事だろ？」

「違いねえ。このご時世のんびり旅するやつもいねえ、開店休業中だ。」

「そうだろうね。で、ガイラはどこへ行った？」

「ああ、しばらくここを拠点にするからって町長に挨拶に行ったぜ。」

「以外に律儀だな。わかった。俺も行ってみる。じゃあまたな。」

「おう。元気でな。」

それから俺は懐かしい面々に挨拶しながら家路についた。しかしま

あなんで会う人会う人、俺が落第したかの様に言うのか？甚だ疑問だ。３年１０万ゴールドの契約金で雇われたって言うてやろうか？まあ養父のことだ余計な気苦労をさせない為、町民には何も言ってないのだろう。

さて俺の家である。町長宅であるとは思えないぐらい普通の家だ。自治権と引き換えの税金は高く、町長といえど贅沢はできない。むしろ蓄えを削って捻出しているぐらいだ。俺が一番良く知っている。

「爺さん、帰ったぞー。」

大きな声で帰ったことをアピールする。ちなみに俺がもらわれた時すでに爺さんだった。ゆえに呼称は爺さんのままだ。なんかお父さんとか言いづらい。

「おうおう、ケルテンか。よう帰った。元気か。」

「そりゃあもう元気ですよ。１０万ゴールド分働かないといけませんからね。」

「そう言うな、おかげで町も助かっておる。ほれ客人の前じゃ、ちゃんとせい！勇者ガイラ殿、我が息子のケルテンじゃ。ケルテン、挨拶なさい。」

「よう、ガイラ！結構速かったな。」

「これ！ケルテン。なんじゃその挨拶は！」

「いえ、いいですよ。町長さん。こいつは昔からこういうやつです。何も気にしてません。」

「そうそう。俺、お前の仲だ。しかも今じゃ一蓮托生だ。聞いてますよね。俺の任務。」

「そうじゃったな。よく奉公するんじゃぞ。ガイラ殿もよろしく頼みます。」

話が長くなりそうだったのでガイラを連れて外にでる。宿屋に向かって歩く。

「お前さん。いいところの坊ちゃんだったんだな。」

「そうでもないよ。町長だって言っても贅沢一つできねえ。まあ食い物には困らないから悪くはないな。」

「ふん！あの町長も只者じゃないな。一見人格者だがなかなか中身は大したものだ。」

「そうでないと自治区の町長はできないよ。そうだろ？」

「だなっ。で、本当は何の用だ。しかもなんでここにいる。」

ちょっと不信の目で俺を見る。そりゃそうだ。普通に考えて追いつくはずがない。

「実はお前の担当が俺になった。前任者がなくなったらしい。」

「そうか。しばらく見てないと思ったらそういうことか。しかしまだ半分しか答えてないぞ。」

「まだ聞くか。前いっしょに旅したとき見つけた古文書があっただろう？あれにあった秘術だ。これ以上は教えない。それより毒の沼地をどうやって通った。一人ならまだしも馬だろう？」

「飲み薬と塗り薬、あと薬を染み込ませたマスクを使う。これ以上は教えない。」

ガイラが俺の口ぶりをまねて返す。二人して笑う。実に面白い。

武闘家

リムルダールの町外れの牧場、俺の目の前で巨馬が草を食んでいる。ガイラの馬だ。しかしまあでかい馬だな、まあガイラもでかい（１９５位かな？）からな。

武闘家、ここアレフガルドではマイナーな職業（・・・違うな。戦闘スタイルと言うべきか？）である。こいつ以外に見たことがない。ガイラ・ガラ・ライガ。ガイラが本人の名前、ガラが師匠の名前、ライガが始祖の名前で流派の名前らしい。

ゾーマには次元を切り開く力があったと思われる。勇者ロトの地球とアレフガルドの間を繋ぎ、バラモス、ヤマタノオロチ、ボストロールを送り込んだ。そのときの次元の狭間から、幾人かの人間がアレフガルドに落ちてきた。さらにギアガの大穴からきた者たちがこの世界に残った。マイラの鍛冶屋、盗賊カンダタ、ロト一行、その他この世界から戻れなくなった者達。その中に武闘家があったとしてもおかしくはない。

「なあガイラ、一つ頼みたいことがあるんだが？」

「なんだよ他人行儀な。いいぜ。」

即答！せめて内容ぐらい聞け。

「そうか。今はまだいいが、いずれアレフと組んでほしい。」

「まあ俺はかまわないが、あいつには言ったのか？」

「それは問題ない。俺が言えばまず断らない。」

ガイラがニッっと笑う。なにか良からぬ事を企んでいる顔だ。

「一つ条件がある。」

「どうぞ。」

続きを促す。

「試していいか。」

「当然の答えだ。好きに試せ。殺すつもりでやってもいい。」

「よお～し、楽しみになってきた。いつごろになる?俺はいつでもいいぜ。」

ガイラが急に型を始めながら言う。バトルジャンキーめ!

「そうだな、今魔法の修行をさせ始めたから・・・速くて2週間、遅くても一月。もしそれを超えることがあったら、この話はなかったことにしてくれ。」

「OK!OK!お前のことだ、話がなくなることはないだろ。」

「まあね。しかしお前、試合ができることが楽しみなだけだろ?」

「判るか。いやー実に楽しみだ。」

食み終わったのか馬がこちらに歩いてくる。

「おう、ライ！もういいのか。じゃあ行こうか。」

ガイラが馬のたてがみをなで話しかける。その馬はライというのか。きっとその馬も友達なんだな。お前らしいよ。

俺達は宿屋に戻ることにした。

――――――――――――――――――――――――――――

俺達は今一緒に食事を取っている。ふと思ったのだが、こいつとコンビを組ませるのはいいが、まさか銅の剣、革の鎧、革の盾のままではまずいよな。せめてフルで鉄の装備ぐらいは・・・いやそれじゃ不足だな。せめて鋼の剣は用意したいな。２０００Ｇか、補助金がでて１５００Ｇになるか。アレフが持っているか聞いてみよう。

「何考えている？心配事でもあるのか？」

「ああ、アレフの装備だ。まだラダトーム周りでしか戦わせていないから大した武器を持ってない。」

「かまわんさ。武器が強いんじゃない、本人が強ければいい。」

「そうだな。お前は素手だしな。だがこれから困ることになるぞ。この辺だとゴールドマン、いずれドラゴンなど超重量の敵とどう闘う。」

「やってみなきゃわからんさ。」

ゴールドマンは身の丈５ｍ、体重は１ｔを超える。ドラゴンも個体差があるが体長５ｍ以上、体重も１ｔ以上。普通に攻撃してもまず通用しない。

「殺られてからじゃ遅いぜ。まあやばいと思ったら逃げろよ。」

「そんなものか？まあ忠告はありがたく受け取っておくよ。」

「じゃあ、忠告ついでだ。お前使える武器はないのか？」

「そうだな・・・棍なら使える。あと鉄の爪という武器が流派にはあることはある。ただ金属製品は駄目だ。」

「ああ金属アレルギーだったな。」

なぜかこいつは金属アレルギーだ。武闘家は武器も鎧も装備しないし、今までそこまでの相手には相対していないから問題なかった。

「例えば革越しとかメッキでは駄目か？」

「短時間なら問題ない。だが汗が染み込むと駄目だ。あとメッキも駄目だ。」

駄目か、何とかしてやりたいのだが・・・そうだ！

「なあ、これ触ってくれ！」

俺は刀を抜き、刃を差し出す。

「どういうことだ？これも金属には違いないだろ？」

「いいから！先端の三角のところだけ触ってみろ。」

ガイラが訝しげに刃に触れる。そのまま待つ。約１０分。異常はない。

「いけるな。それはミスリルだ。」

「ミスリルってあの伝説のか？どうやって手に入れる？」

「このアレフガルドでは採れない。だが手には入る。」

「はあ？意味わかんねーよ！」

「お前メタルスライムは知っているか？」

「ああ、あの金属のスライムな。昔何度か倒したことある。」

軽く言ってくれる。まあ相性はいいか。表面の金属面に斬撃はほぼ通らないが、こいつの打撃は中の核にダメージを与えることができる。

「じゃあ、今度倒したらその表面の金属を回収してくれ。それがミスリルだ。」

「さすが学者だ、よく知ってるな。それでどうするのだ？」

「あとは持ってきてからだ。ここに無い物ではなんともならん。お前は使える武器がないか再考してくれ。手に入れた量で作れる武器が変わる。さらに加工の難しい形も無理だ。よく考えておいてくれ。

」

「わかった。期待していいんだな。なんなら今すぐにでも・・・。」

ガイラは立ち上がり飛び出さんばかりだ。

「そこまで急ぐ必要ない。大体ドムドーラ南はここらよりずっと危険だ。半年前までとは違う。」

「そういえばそうだった。思わず興奮した。」

「なんだ。お前も武器を使いたかったんだな。」

「まあね。やっぱり剣に盾、鎧姿の騎士には一度はあこがれるだろう？」

「そうだな。俺も一度はあこがれた。無理だったけど。まあいいや、用件は済んだ、じゃあ死ぬなよ。さっきも言ったがやばいと思ったら絶対逃げろよ。」

「わかった。心に刻んでおく。」

よし、今後の予定も決まった。ラダトームに帰ろう。

正と邪

５／１５　勇者支援生活１５日目

いつも通りの朝練である。アレフは鎧にも慣れてきたようでもたつくことなく、剣を振っている。魔法はどこまで使えるようになっただろうか？

「アレフ、魔法はどうだ？」

「まだまだです。覚えていたギラ、ホイミは思考詠唱できるようになりました。ただ新しい呪文がまだ詠唱文が記憶できてません。なんていうか、口には出さないのですが噛むんです。あと消費ＭＰが大きい魔法が増えて祝福爺さんと、図書館を往復してます。」

「ははははっ！そりゃ大変だな。まあがんばれ、全部できるようになったらとりあえず卒業だ。」

「えっ本当ですか？頑張ります。」

嬉しそうに返事をする。

「それはそうと、お前いくら持ってる？」

「ゴールドですか？貯金含めると１０００Ｇくらいですかね。」

それはすごい。ラダトーム周りだけで１０００Ｇ貯めたか。約３００匹の敵を・・・レベル７ぐらいかな。登録レベルを変更しておこう。

「あと５００貯めろ。」

「何に使うのですか？」

「貯まってから教える。無駄遣いじゃないから心配するな。」

「はあ？そうですか。」

何か期待していたのか、がっかりしている。ある意味チートみたいなものだからな。秘密だ。

「まあそうがっかりするな。わかった。じゃあここで模擬戦をやって５連勝したらすぐにでも教えてやる。」

「本当ですか？約束ですよ。」

「ああ、いいよ。ルールは相手まかせな。」

ここにいる連中を集めて趣旨を説明する。もちろん賭けの話は内緒だ。

「とりあえず誰とやらせるかな。希望者いるか？」

「はい、私にやらせてください。」

ジョルジョ君か。やる気だね。ライバル視してるのかな？

「いいよ。ルールは？」

「何でもありでいいです。武具の制限もいりません。距離は１０ｍ。」

「いい覚悟だ。よしでは俺がこのコインを投げる。落ちたら開始だ。あと賞金をだそう。アレフに勝ったら１００Ｇだ。本気でやれよ。」

俺がそう言うと周りで日和見していた連中がざわざわしだす。金出さないとやる気にならないのかよ。そのうちにアレフとジョルジョが所定の位置につく。双方鉄の剣、盾、鎧、剣を抜き互いに構える。俺はコインを投げる。コインが落ちる音が響いた。

時計周りに摺り足で動く。距離が地道に縮まる、あと８ｍ。ここでアレフがいきなり剣を納める。そして口述詠唱。消費ＭＰ２、ギラか・・・待てよ、なぜ口述詠唱？ジョルジョが慌てて距離を詰める。居合い一閃！アレフの剣がジョルジョの剣をはじき飛ばした。そして鍔鳴りの音が響く。

「そこまで！勝者アレフ。」

見物していた連中がざわざわする。中には卑怯だと言う声も聞こえる。先日いなかったのだろうな。

「ジョルジュ、何か言いたいことはあるか？」

「いえありません。私の負けです。」

「そうか、じゃあいい。次誰かあるか？」

「俺がやる。ルールは木剣、木盾。距離は５ｍ。武器のみの一本勝負。」

若い男が前に出る。真新しい紋章入りの正規の鎧、アレフを見下したような目、自信に満ちた顔、貴族出身の近衛の新人か？話にならんな。まあいい、俺はコインを高く投げ上げた。

互いに構えにじりよる。木剣は居合いに向かない。そう思って選択したのだろう。まあ正解だが・・・。双方手をださないまま、盾がぶつかりそうな距離になった。アレフが盾を相手の盾に思い切り叩きつける。意表をつかれた男がのけぞった。がら空きの右手にアレフが剣を当てる。

「そこまで。勝者アレフ。」

「なんだ、こんなもの！認められるか！」

「お前は負けた。負けた者の言い訳は見苦しい。」

「いや騎士の闘いは勝てばいいというものではない。おい！なぜ皆黙っている。こんな下賤な者に言わせておくことは無い。」

木剣を振り回し激高して周りを見渡す。目を合わせる者はいない。重い空気が流れる。その雰囲気に耐えられなかったのか剣と盾を叩きつける。

「いいか！俺は絶対にお前達を認めない。」

その若い近衛騎士は出ていった。明らかに場にほっとしたような空気が流れる。皆、俺の顔を見ている。何？もしかして俺が怒るとでも思った？残念、俺はアレフの成長が見れて機嫌がいい。

そして3戦、4戦とアレフが順調に勝ちを収めた。相手がアレフの奇策を警戒している間に普通の攻撃が的確に入る。こうなるとアレフが負けることはないな。

「よし、俺がやろう。勇者アレフの実力、このサイモンが見定めさせてもらう。」

いつの間にかやってきたサイモンがしゃしゃり出てきた。場の雰囲気が変わった。そうだろう、見習いだけでなく正規の兵が負け続けたのだ。悔しいが自分ではどうしようもない。そんな思いが各々の心にあった。そこに救世主が現れた。

「サイモン。ルールはどうする。君に決める権利がある。」

「馬鹿め、俺にルールはねえ。お前も知っているだろう。」

「OK！じゃあ一つだけ、距離は１０mだ。アレフ！こいつは強いぞ、今までの相手といっしょだと思うな。」

「望むところです。」

サイモンが剣を抜き構える。アレフは腰を少し落とし、柄に軽く手を当てる。気が高まる。俺が投げたコインが地面に落ちた。

「ギラッ！」

いきなりアレフが魔法を放つ。火球がサイモンの１mほど前の地面に着弾し、砂煙があがる。アレフが一気に距離を詰め居合い、金属と金属がぶつかる激しい音がする。サイモンの盾が剣を受け流している。

「甘い！」

そう言うとサイモンが下段から切り上げた。アレフが仰け反ってかわす。崩れた体勢にそのままサイモンが右足で蹴りを入れた。倒れるアレフ。

「そこまでだ。勝者サイモン。」

サイモンがアレフに手を貸し引き起こす。

「残念だったな。」

「完敗です。読まれてましたか？」

「ああ、前にこいつにやられた。ベギラマだったけどな。」

サイモンが俺を指差す。俺とサイモンがにやつく。

「サイモン。賞金だ。もうどんちゃん騒ぎするなよ！」

「しばらくはやらねえ。隊長が怖いからな。じゃ、ありがたくもらっとくよ。」

それだけ言うとサイモンは去っていった。集まっていた皆が解散していく。思うことがあってジョルジョを引きとめる。

「ジョルジョ君。君に頼みがある。」

「私にですか？」

「ああ、明日からアレフに型稽古を教えてやってほしい。」

「でもアレフ殿は私より強いですよ。」

「そうかな?まあそれはともかく、貴族騎士の言う正統な剣を教えてやってほしい。ちょっと邪に傾きすぎた気がしないでもない。そういう訳だアレフ、明日からジョルジョ君にもご教授してもらうように!」

「はい、ジョルジョ殿。よろしくお願いします。」

「ジョルジョ殿は止めてください。今まで通りジョルジョでいいです。」

訓練所に三人の笑い声が響いた。

考察：魔物の分布と対策

５／１６　勇者支援生活１６日目

落第勇者達が帰ってきた。買取センターへ行ってその足でで俺に会いに来たようだ。

「ほら。借りてた２００Ｇ返す。」

金の入った袋を投げてよこす。俺はひっくり返して中身を全てテーブルにあける。

「１０、２０・・・２００、２１０。少し多いぞ？」

「利子だ。つまらんこと言わすな。」

ドゥーマンが言い放つ。後ろの二人がそっぽを向く。こいつらなりの礼らしい。

「そうか。じゃあ、ありがたくもらっておく。でいくら返せた？」

「１０００Ｇ。実際は９００ちょっとだったが、手元から出して１０００Ｇにしてきた。」

「結構、結構。なら本当はマイラの村あたりを勧めたい所だが・・・あまり気が進まないな。」

「都合の悪い事でもあるのか？」

「大いにある。俺が担当している勇者一人が乱獲している。それだけならいいが、ちょっと人柄に問題がある。多分村の宿でぶつかるだろうね。」

そう言う俺を見て三人の顔もゆがむ。

「そんな顔するとはなんかあったのか？」

「顔にでてた？買取素材がぼろぼろでね。指摘したら怒鳴りやがった。多分素材の数をごまかそうとした。」

「そんなことできるのか？」

「例えばこのがいこつの大腿骨ってあるだろ、これを真ん中あたりで折る。あら不思議２体分に見えないことも無い。」

「へえ～そんな方法があったのか？そんなこと教えていいのか？」

「いいさ。やったら鑑定にやたら時間かけてやる。立体パズルには時間がかかるんだ。」

それを聞いた三人が心底嫌そうな顔をした。

「あんたらしい仕返しだ。俺達は止めておく。」

「賢明な判断だ。マイラへは行けないとなるとやはりガライしかないな。今度はもう少し長期滞在してくるといいよ。あっちに一週間はいてもいい。」

「ガライから南へはどうだ？」

「止めとけ。ドムドーラに近づくとかなりやばい。ここまでは大丈夫と線引きが難しい。まあ橋は渡るなよ。とんでもない魔物がでるぜ。キメラだろ、影の騎士、鎧の騎士・・・あとは」

「よーく判った。みなまで言わなくていい。俺達のできることだけをする。」

「判ってもらえてうれしいよ。一人でも知り合いが死ぬのは嫌だからな。」

なぜ三人共俺を見てにやにやしている。そんなに変なこと言ったか？

「そうか。俺達はあんたの知り合いなんだな。」

「じゃあな、次戻ってきたら俺達は自由だ。」

「出会いが最悪だったからな、嫌われてなくてよかったよ。」

三人は口々になにか言って出て行った。よく聞こえなかったが悪い気はしない。

――――――――――――――――――――――――――――――――

そうか、そろそろ行動範囲がぶつかり始めるか。一度魔物の勢力について整理しよう。

まずこの城のから北西のガライ、そこから南に行って橋の手前まで、また北東マイラ村への街道を橋の手前まで・・・このあたりまでならそう危険な魔物はいない。スライム、スライムベス、ドラキ

ー、ゴースト、まあそんなところか。ゴーストのギラが嫌だな。これらの中央にロトの遺跡があるが魔物はでない。除外していい。

次がマイラ周辺、メイジドラキー、魔法使い、おおさそり、がいこつ。どれも癖のある魔物ばかりだ。前者2つはギラばかり唱えてくる。おおさそりは毒、特に鋏で拘束されてからの毒針がやばいな。あとはがいこつか。半年前までは見なかったのだがな、やはり魔王の力のせいなのだろう。不死の魔物は嫌いだ。どこを見ているか判らない。気配が無い。感情がない。人間との戦闘に慣れた者には特にやりづらい。

さっきも話題になったドムドーラ方面、ラダトームから山脈を越えて南西方向。通称岩山の洞窟のあたりまではそれほどではないが、旅程が長くなり補給の関係上危険が高まる。ドムドーラ方面は論外だな。ある意味竜王の支配地域、眷属のドラゴンもいたはず。装備を整えないうちは誰も行かせない。

マイラから南、リムルダール方面へ。一番の問題は敵ではないが一日中続く毒の沼地。海底トンネル・・・まだ誰も知らないがローラ王女はここに監禁されている。ここを守るは竜王の眷属のドラゴン。それも強い個体。もし王女の存在が知れたらどうなる?手柄を求めて幾人も挑戦するだろう。駄目だ、死者の山を築いた挙句、王女がどこか別の場所に移されかれない。把握できる場所にいてもらえるなら問題ない。あちらにしても大事な人質、無碍には扱うまい。王女には気の毒だがしばらくそこにいてもらおう。

そしてリムルダール。魔道士、リカント、リカントマムル、死霊の騎士、ゴールドマン、キメラ、そんな所か。ガイラ基準で考えよう。魔道士は数種の魔法を駆使する。眠らされたら終わりだな。リカント、リカントマムル、死霊の騎士、人に近い動きをする魔物な

らあいつの敵じゃないな。ゴールドマン、これは逃げろと言った。キメラか・・・空中からの火の息にどう対処するのだろうか?まあよほど南に行かなければ出てこないからいいか。よく考えたらまずい魔物ばかりだ。助言が足りてないな、また会いにいかなくてはならない。

よくよく考えると問題が山のようにあるな。うまく事が進んでいるつもりだったが思慮が足りないようだ。そういえばあったことも無い特務隊先任士官もいる。一度相談すべきだな?よしそちらから片付けるとしよう。

王家　光と闇

国務大臣執務室

今日もここに来る。最近2階に上がってくると近衛も文官からも、ものすごい敵意を感じる。俺に話しかけてくるのは少数派だ。ここにいるほとんどが、自称貴族出身のエリートだから気持ちはわからないでもない。もっともだからといって俺が何か加減したりする必要はない。

「今日はお願いがあってまいりました。」

「なんだ?言ってみるがよい。」

ふう・・・この人の機嫌がよくなることはないようだ。いや～嫌われたものだ。ある意味あの馬鹿息子の高い鼻を叩き折り、この人の顔を潰したのは俺だ。いっそのこと解任してくれないかな?そうなったら一人の人間として勇者の従者でもなんでもやってやれるのに。いかん、余計なことを考えている場合じゃないな。

「先任特務隊士のシュミット殿にお会いしたいのですが?」

「ふむ、なるほど。そろそろ互いの協力が必要になるか。よろしい、これを使いたまえ。」

そう言うと自らの机から一枚の書類が取り出した。引き出しに二重の鍵、やけに厳重だな、。

「これは誓紙ですか?シュミット殿のものですね。」

「そうだ、それも勇者の血の契約と同じ役割を果たす。調べるがよい。」

そういえば俺も着任したときに提出したな。血判まで押していやに恭しいと思ったらそういうことだったのか。もしかして・・・俺は大臣に背を向けレミーラを唱える。もちろん口述はしない。やはりこの隠し文字は・・・。

一つ、この者は王家と血の契約を結ぶ。
一つ、この者は血の契約により王家の秘術、蘇生を受けることができる。
一つ、この者は王位継承権のある者に武器を向けることはできない。
一つ、この者は王位継承権のある者に敵意のある魔法を使用することはできない。
一つ、この誓紙を破棄することによりこの者は命を失う。

やはりそうか、勇者のものと同じだ。ひどいな。しかし最後の一文、生殺与奪の権利までいっしょとは・・・必要がなくなるか、害があると判断されたらいつでも処分されるか。

俺は動揺を隠しながら魔法の地図を起動させる。シュミット殿はマイラ付近か、近くに４つの光点があるから監視、支援の最中か結構真面目だな。ガルドは近くにはいないな、この光点・・・城に帰ってくるのは二日後だ。

しかし事がうまくいって平和が訪れる、勇者や俺、功績があった者に十分な報酬や地位を与えた後、邪魔になるなら暗殺でする。報われないな。いやだめだ、俺はあの二人は助けてやりたい。

俺は言葉もなく退出した。

――――――――――――――――――――――――――――――

よくもまあこの男は毎日毎日私の前に来れるものだ。私とわが息子を貶めたのはお前だ。それは宮中全ての者が知っている。宮中の者に嫉まれていることに気づいていないのか？いやそんなわけが無い、こいつは全てわかった上で飄々としている。切り捨てるか？いやまだ駄目だ。先日息子に説教したばかりだ。

「この！痴れ者がっ！」

私の杖が息子フレーゲルに叩きつけられる。

「しかし父上、あの者は私の顔だけでなく父上の顔にも泥をぬったのですよ。」

「そんなことはわかっておる。」

「ではあの者に処分を！」

「できぬ！忌々しいがあの者には罪はない。」

「しかし私を牢に入れました。あの薄汚い牢に！」

「自業自得じゃ。聞いておるぞ、お前はあの場で剣を抜かせた。その前に『私の部下の武器は私の武器である』と言うてな。自分でその意味を理解しておらぬのか！」

「それは・・・。」

「しかも城内で魔法を行使するとは・・・」

「しかし私は魔法を出しておりません。」

「防がれたのだ。お前はあの者に命を助けられたのだぞ。若気の至りです。叱責で済ませてはどうでしょうか？と私に命令した。そう国務大臣であるこの私にだ。この腹ただしさお前にはわかるまい！」

「しかしそれでは王族の面目が。」

「王族の面目、お前がそれを言うか。王族の務め理解できるか？」

「王族の勤めですか？それは貴族、騎士、以下民衆を支配、導くことです。」

「話にならん。そんなことは前提条件に過ぎぬ。一番大事なことは権力基盤を磐石にすることだ。その為にはいかに不快な道具であろうと使いこなせねばならん。」

「あの者は不快な道具ですか？」

「そうだ。不快だが実に有能な道具だ。使い終えた後処分すればよい。しばらくお前は大人しくしておれ、ローラ王女無き今お前は今一番王位に近いのだ。自重せよ。」

「王女無き今ですと、どういう意味ですか？」

「知らぬでよい。今は十分な根回しをせよ。あの者にも礼を言っておけ、そうする事でお前の度量の大きさを示すことができよう。そう思わせることが必要だ。よいな、しかと命じたぞ。」

――――――――――――――――――――

さて公式にマイラの村に行くことになった。常識的に考えると往復で6日、いや馬を使って4日はここには戻って来れないことになるな。近衛隊長、マギーには不在を知らせておいた方がいいな。しかしまあ面倒くさい、ルーラは公表するかな・・・あかん、俺の利便性だけでそうするわけにはいかない。

近衛騎士控え室

「今をときめく国務大臣特務隊士殿がなんの用ですかな?」

含みを持つ言い方で近衛騎士の一人が声をかけてくる。誰だっけ、お前?どこかで見た様な覚えがある。首を傾げる俺にいらだって大声を上げる。

「エックハルト子爵だ!近衛騎士の名ぐらい覚えておきたまえ。」

ごめんなさい。名前はまったく記憶にございません。多分この間アレフに負けて捨て台詞を残していったやつだ。そうかお前か、近衛まで俺に冷たいと思ったら。エックハルト・・・意味は強き刃、ププッ!名前負けだな。

「失礼致しました。しかし際立った方は記憶していたつもりでしたが・・・。」

「私を無能と言うか！」

怒鳴るなよ。そう言ってるんだよ、お前なんぞかまってられるか。

「騒がしいぞ、大声をだしてどうした？」

近衛隊長が部屋から出てくる。

「はっ！しばらく城を留守にします。少し厄介な用件をお願いすることになります。」

「そうか、では聞こうか。私の部屋に入りたまえ。」

近衛隊長がうんざりした顔をしている。

「あまり挑発しないでくれ、腑抜けばかりなのは自覚しておる。」

「別に私が挑発したわけではありません。あちらが喧嘩を売ってきたのです。」

「まあよい。で、厄介な用件とはなんだ。」

「明日にでも勇者ガルドが戻ってきます。少し素行が悪い為、素材買取の際に近衛の方に立ち会って頂きたいのです。」

「ふむ、では腑抜けでは駄目だな。サイモンをつけさせる、それでいいか？」

「お任せします。では急ぎますので失礼します。」

俺は出て行く。刺さる視線は気にしない。

――――――――――――――――――――――――――――

「はい、マギー！調子はどう？」

「あっケルテン！聞いて聞いて。このページなんだけど「ちょっと待って。」

おれが言葉を遮る。

「急な用件でマイラに行く。４日は戻らない。」

「なんで？ルーラで行くんでしょう？すぐ戻ってこれるじゃない？」

「公務なんだ。あまり非常識な時間では戻って来れない。
悪いな、また埋め合わせはする。アレフにもそう伝えておいてくれ。じゃあ急ぐから！」

「もうっ！」

何か聞こえた気がするがかまっている時間はない。俺は厩舎に行くと一番速い馬を借りた。まあ使わないけど連れては行く。とりあえず今日はリムルダールに行こう。

王家　光と闇（後書き）

まだ魔法は発動していない
ということは俺は魔法は使っていない

ノーカン　ノーカン　ノーカン！

サバイバルの達人？

リムルダールに跳んだ。ただ俺は先日ここをでたばかりだ。この姿のままでは町には入れない。馬を引きながらモシャスを唱える。これでなんの特徴もない兵士に見えることだろう。入り口の門番に声をかける。

「すみません。城からやって来ました。大きな馬に乗った勇者殿を探しております。どちらに向かったでしょうか？」

不信な目で見る番人達に一気に言い立てる。顔見知りだ。俺とばれる前に終わらせたい。

「ああ、それなら朝に南に行くって言ってたな。」

「探すのは大変だぞ。町で待ったほうがいいのじゃないか？」

「いえ、至急伝えねばならぬことがあります。ありがとうございます。では急ぎますので！」

俺は馬に乗ってここを離れる。モシャスは効果時間が短い。維持するのにもＭＰが必要だ。俺の最大ＭＰはＢ－、つまり１６０前後しかない。消費ＭＰ１２の魔法はあまり使いたくない。

さてガイラはどこへ行っただろう？日没まで3時間か、それまでに見つかるか？この辺で待ってればリムルダールに帰ってくる・・・いやいや常識で考えてはいけない。あいつはサバイバルの達人、そう名づけたのは俺じゃないか。食べられる植物の見極め、狩猟、調理、水の確保、薬草学、安全な野営場所の確保、あいつの本当の強

さはそこにある。以前かなり世話になった。俺と組んでいたときは、俺が魔法で援護、撹乱を担当し、あいつが各個撃破するのがパターンだった。盗賊だろうが、当時野生化していた少ない魔物も敵じゃなかった。

ん？そうか。夜営を待てばいいじゃないか？火をつかうはずだ、遠くからでも発見できる。少し安心した。冷静になると周りがよく見えるようになった。所々ばかでかい蹄の跡がある。・・・俺馬鹿だな、こんな簡単なことに気づかないとは。よしこれを追いかけよう。

日が落ちる。暗くなる中レミーラの明かりで進む。火の光が遠くに見えた。

「おっ！いたいた。お～い。」

俺が大きく声をかける。

「誰だ！」

身構えるガイラ。攻撃でもされたらたまらない。慌てて名乗る。

「俺だ、学者だ。攻撃するなよ。」

こちらを確認するガイラ。ほっとしたように構えを解く。近づいても良さそうだ。馬を降りて近づく。

「脅かすなよ。魔物かと思ったぞ。で、なんか様か？アレフが仕上がったか？」

「そんなに早く仕上がるものか。ちょっと心配になってな。この辺の魔物はお前と相性の悪いやつが多い。それを思い出した。それで闘ってみてどうだ。」

「ふん、心配性だな。問題ない・・・と言えないのが癪だな。実はちょっと困ってる。」

「だろうな。虚勢を張るような馬鹿だったら、どうしようかと思ったよ。で具体的には？」

「ああリカントだっけ？直立する狼みたいのと、それの色違いは問題ない。剣を持った骸骨、あれ昔はいなかったよな？まああれも問題ない。数でかかられると困るがな。」

「リカント、リカントマムル、それと死霊の騎士だ。覚えとけ。不死の魔物は魔王の影響で蘇った。俺の見立てどおり人型の魔物は問題ないな。」

「魔道士？あいつはうざいな。魔法をいろいろ使いやがる。これまた一体ならまだいいがあの骨といっしょに襲ってくるとたちが悪い。一度眠らされて死ぬかと思った。それ以来、真っ先に殺すことにした。」

ガイラが思い出したのか顔をしかめる。

「ゴールドマンは一度やってみた。確かにあれは駄目だ。先に聞いておいてよかった。まああの図体だ、発見が遅れることはないからな。それ以来相手にしていない。」

「それでいい。超重量ゆえに打撃も効かない、関節も投げも無理だ

な。」

「だな。それ以外には鉄の蠍、あれはまあ弱い。あとキメラがいたが、あれもまだ楽だった。」

「本当か？空中から火の息を吹いてくるだろ、どう対処してる？」

「こうする。」

そういってポケットに手を入れ何か投げる。少し離れた木で弾ける音がする。俺が驚いている。

「飛礫だ。羽根に当てて落ちた所を踏み潰す。」

「ああ、なるほど。俺はベギラマが使えるからそういう考えはなかった。」

拳に入る位の石か、金もかからないし補充の心配もない。ふむ・・・ならば無茶かもしれないが言ってみるか？

「一つ提案がある。メルキドに跳ばないか？」

「メルキド？なにかあるのか？」

「メルキドには用はない。あの周辺はここより強い魔物だらけだ。」

「それこそ意味がわからんな。どうする。」

「メルキドから西ドムドーラから南、例のミスリルを手に入れよう。」

「それはいいが、大丈夫なのか、その辺の魔物はどうなんだ。お前のことだ、知っているのだろう？」

「ああ知っている。影の騎士、影に潜む骸骨の魔物。鎧の騎士、甲冑だけの魔物。死の蠍。メイジキメラ、魔法も使うキメラだな、メタルスライム・・・まあこんな所か？」

思い出すように順に答える。ガイラが呆れている。

「しかしまあよく知っているな。実は竜王の城の魔物も知ってるのじゃないか？」

「ハハハッ！流石にそれはね・・・」

かわいた笑いしかでねぇ。ああ知ってるよ。言わないけどね。

「竜王の城のことはおいといてだ。今言った魔物でお前と相性が悪いのはメイジキメラだと思ったが、その飛礫があれば何とかなりそうだ。俺の魔法でメルキドまで跳ぶ、そこからは二人で現地まで行こう。そこまで行ったら俺は戻る。」

「なんだ置いてくのか？」

「他の用件もある。そうは行かない。できると思ったから言ってる。どうだ？」

「そこまで言われたら、やるしかないな。」

「よし、じゃあメルキドに跳ぶか。ここで休むより宿屋の方がいい

だろう。」

それが迂闊な提案だと気づくのに時間はかからなかった。

サバイバルの達人？

うわー！それ駄目っ！死ぬーーーー

俺達は逃げている。地面に振り下ろされた拳は地震の様に地をゆらす。

「おい、学者！話が違うぞ！」

「話は後でいくらでも聞いてやる。とりあえず逃げろー！」

そして今メルキドを目の前にして夜営の準備をしている。まさかルーラでゴーレムの足元に飛び込むとは思わなかった。この間マギーがここに跳ぶと言ったときは思い出して止めさせた。さっきは忘れていた。

「なあ、宿屋で休むのは無理かな？」

「そうだな。」

「学者、お前賢いけど馬鹿だろ。」

「そうだな。」

「さっきからそれしか言わないな。」

「そうだな。」

「いいっっかげんにしろよ！お前のろくでもない提案のせいでとんでもない目にあったわ！」

「ああ・・・達人。あんまり大きな声だすとドラゴンに見つかる・・・。」

慌てて口を押さえるガイラ。ここら辺にはドラゴン、大魔道、スターキメラ、キラーリカントが生息している。しかし最も強いのがさっきのゴーレム、城塞都市メルキドの守護神・・・だったのは半年前まで度重なる侵攻に故障し、今は無差別にその力を振るう。身の丈１０ｍ、重量は不明、火、冷気、真空、呪詛などほとんどの魔法が効かない。雷がそこそこ効き、爆発はまあ有効だろう。なぜか妖精の笛で寝る。ラリホーが効くかな？試す気にはならない、失敗したらまたさっきの追いかけっこをすることになる。

そして翌朝まで俺達はほとんど口を開くことなく、身を隠し眠った。気休めかもしれないがトヘロスは使う。あまり眠れなくても朝はやってくる。

馬に乗り駆け抜ける。魔物はできるだけ相手にしない。俺の馬が泡を噴いている。

「達人止まってくれ、俺の馬が潰れる。」

ガイラが馬を止める。流石にいい馬だ、強行軍に関わらずまだ元気だ。俺は自分の馬にベホマをかける。人間より体の大きい馬を癒すにはベホマを使わないといけない。思わず馬に声をかけた。

「無理をさせてすまないな。もうしばらく我慢してくれ。」

ライにも癒しをそう思い近づく、流石に息が荒い。こいつにもベホマをかける。昨日からろくにＭＰが回復していない。ルーラＭＰ7を2回、トヘロスＭＰ2、ベホマＭＰ8を2回、まだだ、まだやれる。

「おい！学者、敵だ。金色のリカント、４体だ。」

くそっ！休ませろよ。馬はまだ駄目だ。

「俺がやる。達人残ったやつがいたら頼む！」

思考詠唱、この呪文は聞かれるわけにはいかない。

（俺はＭＰを7消費する。ＭＰとマナは混じりて万能たる力となれ！

万能たるマナよ、死神の鎌となりて、我が敵の生命を狩れ！ザラキ！）

３匹のキラーリカントが突然倒れた。１匹は漏れたか、達人なら大丈夫だろう。仲間を失って動揺している魔物にガイラが詰め寄る。正拳突きが腹にめり込む。蹲るキラーリカント、容赦のない膝蹴りが顎を砕く。仰向けに倒れた魔物の頭を踏み抜く。さすがだ。ガイラの息は少しもみだれていない。

「すげえな、学者。今のはなんだ？」

「すまない。さっきから魔法の使いすぎで疲労が溜まっている。しばらく休ませてくれ。」

疲労を理由にごまかす。ガイラもそれ以上も聞かない。実際短時

間で多くのＭＰを消費すると頭痛がしてくる。消費したＭＰはトータルで３９、約４分の１。２０分ほど休憩、ガイラに声をかける。

「もういいぜ、行こうか。」

再び馬で駈ける。明日には目的地につきたい。逸る気を抑える。あせりは禁物だ。いきなりガイラが落馬した。なんだ？木陰に金色のローブ、大魔道だ。ベギラマをくらったか？ならば！

（俺はＭＰを2消費する。ＭＰとマナは混じりて万能たる力となれ。
おお万能たる力よ、不可視の力となり、かの者の魔法を封じよ。）

「マホトーン！」

ガイラに聞こえる様わざと大声で魔法をかける。飛び起きたガイラが大魔道に向かって駆ける。大魔道が口をぱくぱくさせる。馬鹿め！もう詰んだ。

「てめえ、やりやがったな！覚悟はできているんだろうな。」

ガイラの拳が大魔道の頭を打ち砕く。改心の一撃！俺はガイラに近づき、ベホマをかける。ベギラマ一発と落馬の衝撃は軽くない。今は時間が惜しい。薬草での治療をしている暇はない。

「すまない、油断した。しかし昔通りのコンビネーションだったな。楽しいな。」

「言ってろ！なにが楽しいものか。」

しばらく休憩してから出発する。途中ドラゴンをやり過ごす。あの巨体を見逃すのは逆に難しい。さらに先に進む。何度か敵に遭遇する。その度に相手をするがＭＰの消費が激しい。夜には俺は動けなくなった。夜営の準備、食事の用意、全てガイラに任せる。

「すまんな。全部やらせて。」

「謝ることなんかないさ。お前の回復呪文には助けられてる。」

薬草や毒消し草もあるが当然即効性はない。それを補い回復魔法を使う。また敵を倒せばすぐ強くなるわけではない。強くなるのは日々の鍛錬のみ、戦闘経験は自らの力を効果的に使うため、人は一朝一夕で強くはなれない。俺が知っているこの世界はフィクション、しかし俺がいるここは現実。眠くなってきた、最低でも６時間は眠りたい・・でないとＭＰが十分に回復しない・・・いつの間にか俺は眠りに落ちた。

はっ！いきなり覚醒した。毛布がかけられている。ガイラは？・・・焚き火の横で座ったまま眠っている。まだ朝には時間があるな。今度は俺が毛布をかける。ガイラがうっすら目を開ける。

「まだ時間はある。横になってくれ。」

ガイラが横になり俺に背中を向け、丸くなって眠る。俺は焚き火に枯れ木を投げ入れる。

サバイバルの達人？（後書き）

日間ランキング１位、お気に入り登録が１０００件突破

読んでくれているすべての人に感謝します。

サバイバルの達人？

今日も馬で駆ける。先程よりメイジキメラがちらほら見えるようになった、もうそろそろだ。

「右前方１００m、メイジキメラ４匹だ。」

「やっていいか？」

「駄目だ！数が多い、あいつのラリホーは厄介だ。やり過ごすぞ。」

進路を左に変える。やらなくていい戦闘はやらなくていい。闘いは遊びじゃない、負けたら次はない。

「駄目だ、追ってくる。やるぞっ！」

ガイラが馬から飛び降り突っ込む。俺は馬を棹立ちにし、向きを変える。メイジキメラが空中で止まる。俺とやつらでは距離がある、魔法を撃つには少し遠い。メイジキメラはガイラを標的に決めたようだ。やつらの必勝パターンはラリホー・・・ならば！

（俺はＭＰを3消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、
　おお万能たる力よ、春の息吹をなりてかの者を目覚めさせよ。
）

「ザメハ！」

ガイラの膝が崩れかける、が再び力が漲る。ガイラの左手が下手

から大きく振られ、一匹のメイジキメラが墜落する。さらにガイラが追撃、喉元を踏みつけ仕留めた。あと三匹！どうにか落とさなくてはいけない。馬を走らせるながら声をかける。

「ガイラ！伏せろ！」

（俺はＭＰを9消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、破壊の力となりて爆ぜよ！）

「イオラッ！」

イオラは発動場所を指定する魔法だ。右手を手綱から放し空中に突き出す。爆発させる場所はメイジキメラの上空！

ドッゴォォォンンン！爆音が響く。俺も爆風で落馬する。慌てて飛び起きるとガイラがメイジキメラにとどめをさすのが見えた。とりあえず安心だ。

「おいおい俺まで巻き込むかよ。おかげで真っ黒だ。」

煤で黒く染まったガイラが文句を垂れる。

「贅沢言うな、命あっただけ儲けものだ。ちょっとまってろ・・・ベホイミ！」

見た目ではわからないがガイラの負傷をいやす。。ガイラが水を取り出し頭からかぶり、布で煤を拭き取る。

「そうだ、命あってのものだな。しかしまあ自分の魔法で落馬する

とは間抜けだな？」

「久しぶりで距離感覚がわからなかった。実のところ実戦で使うのは初めての魔法だ。」

「まあ詳しいことは聞かない。次はうまくやってくれ、毎回ああなるのは簡便してくれ。」

「善処する。急ごうか？」

先を急ぐ。幾つかの戦闘をこなす。消耗が激しい。そんな時に鎧の騎士が現れた。ガイラがいれば大丈夫であろう。そうだ、いいことを思いついた。

「ガイラ、おとり頼む。しばらく倒さないでくれ。」

「了解、1分待ってやる。」

鎧の騎士、マホトーンを使えたな。じゃあMPがある。マホトラで吸ってやる。

（俺はMPを1消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、
おお万能たるマナよ、不可視の力となりて、我が敵の力を奪え！）

「マホトラ！」

放出された力が鎧の騎士に当たり、MPを引き寄せる。よしできた。ぐあっ！なんだこれは？

「がぁぁぁぁーーー！」

俺は頭を抱え地を転げまわる。感情が入り込んでくる。

（死ね！死ね！死ね！）
（もう嫌だ、もう戦いたくない。殺してくれ！）
（命だ。それをよこせ、よこせ、よこせー！）
（俺は誰だ！ここはどこだ！お前は誰だ！）

俺はのたうちまわる。駄目だ自分を保て、取り込まれるな！これは・・・鎧の騎士に封じられた魂か？死して尚魔物として使われる人の魂か？・・・・誰かが俺を呼ぶ。学者？そうだ！俺は学者、戦う学者ケルテン、そうあだ名をつけたのは・・・。

「おい！学者、ケルテン、しっかりしろ！」

「はあ、はあはあ・・・」

這いつくばったまま息を整える。もう亡者の声は聞こえない。俺は座り直し水を飲む。ガイラが心配そうに俺の顔を覗き込む。

「すまない、醜態をみせた。もう大丈夫だ。」

「そうか、どうしたんだ？」

言うべきだろうか？いま戦った相手の正体を。

「おい、何か考えている。俺にも言えないことか？」

「そうか？わかった、言う。だが今後やりにくくなるぞ。」

「いいぜ、一人で抱え込むな。俺なら大丈夫だ。」

そうか、なら教えてやる。これはある程度想像していたが公表しなかったことだ。

「今戦った敵、骸骨や鎧の魔物は人間だ。いや人間だった。」

「相変わらずお前の言うことは謎だ。中身からっぽの鎧が人間だと？」

「そうだ。正確には死んだ人間の魂が魔王に惹かれ、魔物と化している。」

「馬鹿な・・・。」

「今そんな魂が俺の中に入り込んできた。生命への渇望、憎悪、恐怖、そんな感情だ。」

しばらく沈黙が続く。耐え切れなくなったかのようにガイラが言う。

「俺には関係ねえ、俺の前に敵として現れたら倒すだけだ。」

「そうだな、流石純粋闘士。だが心しておけ、おそらく元が強かった魂は同じく強い。死んでも生前有していたスキルは健在だ。同じような外見だからってなめてかかると危険だ。」

「わかった。お前の忠告に間違いはない。」

「ああ今の所はな。余計な時間をとったな。先を急ごう。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

　遠くに山が見えてきた、目的地は近い。

「よしこの辺だ。この山に囲まれた砂漠が目印だ。」

「ふ〜ん。そういえば昔倒したのもこの辺だったか？なんとなく景色に記憶がある。昔あの金属を鍛冶屋に持ち込んだ事がある。金になるかと思ってな。」

「使えない。そう言われただろ？」

「ああそうだ。温度を上げても溶けない上に、硬すぎて加工できない。屑鉄以下だと・・・」

　ここアレフガルドで加工できる金属は鉄、金、銀、銅、錫、亜鉛、鉛まででミスリル、ブルーメタル、オリハルコンの加工はできない。ミスリル、特に純粋なミスリルの融点はとても高い。

「まあ、それについてはなんとかする。金属の入手だけしてくれ。」

「わかった。前も言ったがお前さんの知識はすごいな？」

「ふん。前にも言ったが秘密だ。じゃあ俺は行くが、お前も用が済んだらすぐ帰ってこいよ、キメラの翼は持っているだろう？」

ガイラが懐を漁り、キメラの翼を取り出す。おれに見せびらかしながら言う。

「当たり前だ。これを持たずに遠征する馬鹿はいない。」

「ＯＫ！無理はするなよ。」

「お前こそな！」

互いに軽口を言い合う。ここは任せればいい。そう判断した俺はマイラの村に跳んだ。

マイラの村

マイラの村についた。ここでの用は二つある。特務隊士シュミットとの顔合わせ、ミスリル加工の準備、そんなところか。まあ今日は疲れたし温泉でも入って休むか？

「いらっしゃいませ・・・今日は一名様ですか？」

「ああ頼む。小部屋でいい。あと厩舎に馬を入れておくから世話を頼む。」

ちょっと待て。今日は？一名？余計なこと言うなよ。どうも顔を覚えられたか。俺は不貞腐れながら部屋に手荷物を放り込む。鎧と刀を外して身軽になる。さて風呂に入ろう。久しぶりに戦闘とか夜営とかしたから汗、泥まみれだ。

温泉に行こうかと部屋を出る。よく見るとこの部屋以外2部屋も埋まっている。へえ～このご時世に泊まる物好きもいるんだな。ここは元々温泉が取り得で平和なときには結構湯治客が全国から訪れていた。この村唯一の宿屋も部屋数は多い。残念ながら今はほぼ開店休業に近いだろう。

まあ余計なことを考えながら温泉に行く。おお客がいる、金髪ロンゲのチャラい男だ。互いに軽く会釈をする。俺は軽く体を流すと湯船につかる。ふう～生き返る様だ。なんかチャラ男が俺をじっと見ている。

「なんすか？なんか俺の顔についてます？」

「お前さん、どっかで見たことあるな？・・・そうか一人だから気

づかなかった。」

お前もか！俺はそうじゃないけどマギーは目立つ。なるほど迂闊だった。

「俺もヴィッセンブルンの嬢ちゃんは狙ってたんだけどな。」

ヴィッセンブルン・・・ああマギーの家がそんな苗字だったな。もしかしてこいつ・・・。

「失礼、もしかしてシュミット隊士？」

「そうだ、俺がシュミットだ。お前さんがケルテンか、噂には聞いてる。」

「失礼しました。特務隊士を拝命しましたケルテンです。」

「めんどい挨拶はいい。俺は女たらしの放蕩者でとおっている。素行が悪いから仕事を与えて城から追い出されているようなもんだ。」

「そんなものですか？」

「敬語も要らない。放蕩者だと行っただろ、堅苦しいのはきらいだ。」

「はあ。」

我ながら間抜けな返事しかできない。拍子抜けしたが用件は済ませておきたい。そう思っていると

「お前さん、真面目だな。もうちょっと気楽に生きた方がいいぞ。」

「はあ、まあそうしたいんですけどね。平和になってから考えます。」

「それじゃ駄目だ。考えちゃいけない。」

禅の教えかよ。もしかしてこの人意外に深いのかもしれない。このチャラいのは演技か？

「違うよ、これが素だ。事実俺には全ての町に女がいる。格式とか儀礼とかまっぴらだ。」

なんで俺の考えていることが判る？

「お前さん、顔にでてるぞ。まあ大体俺に会うやつは同じ質問をする。別に心が読めるわけじゃない。」

怖いな。この洞察力並じゃない。なるほど、性格はともかく使える人らしい。ならば

「ＯＫ！では改めて、シュミット。」

「そうだ、それでいい。でマイラになんか用か？一人で来て楽しい場所でもあるまい。」

「まだ言うか・・・用があるのはあんたにだよ。シュミット。」

シュミットは怪訝な顔をする。やっと一本取れた。

「あんたの勇者達に見込みがあるか？聞きに来た。」

「ふむ・・・やっぱり真面目だな。いいだろう、こっちの勇者はまあ駄目だな。俺がある程度押さないと進まない。未だここで足踏み中だ。ただまったく見込みがないわけじゃないから逆に性質が悪い。そっちはどうだ？」

「ああ三人いるが・・・一人はこの辺にいたはず、強さは問題ないが我が強い、いずれ誰かと衝突する。そのうち止めてもらうことになるだろう。あとはあんたも知ってるだろうが、ガイラはリムルダール辺りでも一人でやれる。」

ここで一息いれる。シュミットが真面目な顔をして聞いている。

「実の所、今一人育てている勇者がいる。名前はアレフ。まだ未完成だがそのうちガイラと組ませる予定だ。ガイラにはもう伝えてある。」

「ふ～ん・・・面白いことしてるな。今どこだ？一度見ておきたい。」

「ラダトームだ。他の場所には行かせていない。」

「はあ、そんなんで大丈夫か？」

「俺に弟子入りしてきたんでな。半月基本だけをやらせている。」

「半月基本だけか？仮にも勇者に対して厳しい鍛錬だな。普通嫌になるぞ。」

「そうなると思った。だけど腐らず続けている。毎朝6時から2時間の鍛錬、9時からの魔法の学習。それだけだ。もし会いたければ訓練所か図書館に行けばいい。」

「朝は苦手なんだけどな。わかった、近いうちに見に行く。じゃあ女を待たせてるから行く。」

そういい残すとシュミットは出て行った。軽そうに見えて実は深いところがあるがやっぱりチャラ男か。底がしれないな男だな。でもそう言ったら違うと言うだろうな。

――――――――――――――――――――――――――――――

もう一つの用件、鍛冶屋に顔を出す。ここにはあの王者の剣をオリハルコンから作り直したジパングの鍛冶屋の末裔がいる。そう思ってここにきたのは3年前か。残念ながら技術は伝わっていなかった。しかし読めない秘伝書はあるとのことでこれを解読、全てではないがそれなりの技術は復興させた。俺の愛刀もここで作ってもらった。

「やあ久しぶり。元気にやってる?」

いかつい顔の親父がいる。いかにもな頑固な職人顔だ。ちなみに名を一文字と言う。俺ができた刀を見て菊一文字か、正宗かといろいろ言っていたら、気に入ったのか改名した。なにか響くものがあったらしい。

「おう、ケルテンか。刀の手入れか?」

「いや、曇り一つないよ。今日は頼みがあって来た。」

「そうか、まず刀を見せろ。俺の仕事の成果を見たい。」

相変わらず武器のことになると回りが見えなくなるな。俺は刀を鞘ごと渡す。渡された刀を真剣な顔で抜く。

「ふむ、確かに曇り一つないな。やはりミスリルはすごい・・・できれば全てミスリルで作りたいものだな。」

「それだ。今日の用向きはそれだよ。」

刀工一文字の顔が輝く。

「なんだ。ミスリルを持ってきたのか。だせ！」

「おいおい、なんだよ。今はねえよ。今度持ってこさせる。俺の知り合いに今取りに行かせている。そいつ専用の武器を作ってほしい。」

「そうか、楽しみだな。どんなやつだ。いつ来る？」

「う～ん。いつになるかははっきり判らん。一週間はかかるか？もしかしたら知っているかもしれんがこの辺出身のガイラって男だ。徒手での戦いを得意としている。」

「記憶にないな。しかし徒手なら武器はいらないだろう。」

「そうはいかないことになったから頼みに来た。だから今素材を取りに行かせている。」

「そうか、判った。今から準備しておく。」

そう言うが速いか、石炭をひっくり返し一つ一つ吟味しだす。ああもう駄目だ、きっと話しかけても無駄だ。なんで俺のまわりはこんなやつばっか何だろう？

俺はここを後にした。今日はゆっくりしてから明日朝一にでも帰ろう。

マイラの村（後書き）

今更ながら感想の返信の仕方を理解、

過去に遡って感想に返信を書きました。

帰還

5／19　勇者支援生活19日目

朝一でラダトームに跳ぶ。久しぶりに訓練所に来た。目が合ったアレフが駆け寄ってくる。

「ケルテン師匠、4日ぶりですか?」

「それくらいかな?ガイラに話をつけてきた。いずれお前とコンビを組んでもらう。」

「えっ!いいんですか?私で。」

「ああ!いいか悪いかはお前次第だ。」

「私次第ですか?」

「あいつは弱いやつとは組まない。なんらかの力を示さないとな!」

「力ですか・・・期待に添えるよう頑張ります。」

それだけ言うといつもの鍛錬を始める。大分板についてきたな。もう剣に関しては俺から教えることは無さそうだ。あとは実戦訓練か・・・いいかげんスライムとドラキーではあかんな。そうだ、魔法はどうなった?とりあえず終わるのを待つか。俺も刀を振る、無心で振る。一通り終える。アレフがジョルジョと型稽古をやっている。互いに剣を振り合う。型稽古だから殺陣みたいに全て決められた順にやっているだけなのだろうが、はたから見ると激しい戦いの

様だ。互いに礼をして終わる。

「アレフ、魔法はどこまで修めた？」

「使うだけならベギラマまで全て、まだ口述詠唱ですが。」

「なるほどね、よし続けろ。卒業は近いな。」

「本当ですか？」

「ああ嘘は言わん。俺を卒業したらガイラの試験。それで実戦開始だ。」

「じゃあ、朝食をとって速く図書館へ行きましょう。」

アレフが食堂へ駆ける。急いでも9時になるまでの時間は変わらない。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――

王立図書館　マギーがつまらなさそうに空を見ている。手元の魔術書を見る。付箋でいっぱいだ。行き詰っているな。

「ただいまマギー！いま帰ってきた。宿題は終わったのかい？」

俺を見るとマギーの目が輝いた。

「もう遅い。あなたのせいで2日は無駄にしたかもしれないのに。」

「ひどい挨拶だな。お帰りくらい言ってもよくないか？」

「じゃあ、お帰り。今日こそ話を聞いてもらうわよ。」

「ＯＫ、ＯＫ。アレフの魔法を見てからな。君の生徒の上達とやらを見せてもらおうか。」

「いいわ、アレフ見せてやりなさい。」

アレフが図書館の隅にある魔法実習室で木偶に向かって魔法を放つ。なるほどギラの扱いは大したものだ。ピンポイントの攻撃までできるか。ラリホーやマホトーンの効果は判らないが発動はしている。よし、ちょっと痛いが的になるか。俺は木偶の隣に立つ。

「アレフ、俺に向かってベギラマを撃て！口述でかまわん。」

「えっ！痛いじゃすみませんよ。」

「判っている。それでもやれ、俺を敵だと思ってな。」

「ちょっと危ないわ、止めなさいよ！」

マギーが止めさせようとする。俺は真剣な目でアレフを見る。アレフがマギーを押しのける。もしアレフにこれができないならもう勇者は続けさせない。先日の鎧の騎士の件もある。やさしいのは美点だが戦場では役に立たない。敵と判断したら俺でも撃て。そう目で語りかける。

「やります。・・・私はＭＰを5消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能なる力よ、雷となり我が敵を撃て！ベ

ギラマッ！」

ラストワードとともに俺に向かって右手を突き出す。右手から稲妻が俺を襲う。がぁぁ！判っていても痛いものは痛い。この魔法は本当の名はライデイン、ＨＰに８０ポイントのダメージを与える。俺のＨＰはＣ＋、およそ１５０。半分以上持っていかれる計算だ。痛みに耐えアレフに言う。

「よし、次だ俺にベホイミを。」

「はい。私はＭＰを１０消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、血肉となりこの者を癒せ！ベホイミ！」

アレフの手が俺に当てられる。痛みが引いていく。

「よしいいぞ。後は思考詠唱ができるようにしろ。」

「はい、でももうこんな無茶止めてください。」

「あんた馬鹿よ！死んだらどうするの？」

二人とも涙目だ。

「すまないな。試さないといけないこともあるんだ。俺の計算では死ぬことはない。はずだ。」

「馬鹿！」

おれにビンタが飛ぶ。避けるのはわけないが避けない。俺が馬鹿なのも悪いのも判っている。

「ゴメン。もうやらない。」

俺がマギーを抱きしめる。アレフが後ろを向いて見てないふりをする。

魔法談義？

俺は今とても困っている。

「ああもう泣き止んで。せっかくの美人が台無しだ！」

どうしたものか？これではこの間の戦闘の話なんかしたらとんでもないことになるな。子供みたいな過保護な扱いされたくない。ならばアレフと同じく鍛えるか。肉体でなく心を・・・仮にも筆頭魔術師、目の前の出来事に心を乱されてはいけない。できないなら、深窓のお嬢様に戻せばいい。

「よし！じゃあこの間の続きだ。俺の魔術書の解説をしよう。なっ！そうしよう。アレフ、黒板用意してくれ。お前にも講義してやる。」

マギーを座らせ、アレフと講義の準備をする。今の魔法と失われた魔法の相違点に関する俺の考察、これを聞けば、好奇心が勝るはず。まず黒板にホイミの呪文を二つ書く。左に現行、右に旧魔法。

「ではこれ！左が君らが使ってるホイミ、右が俺の使うホイミ、マギー違いは判るか？」

少しためらってからマギーが話す。

「うっうん。それ例の魔道書の最初のページにあったホイミ。普通のは消費ＭＰが４、でもそれは３、どういうことかしら？この前聞こうかと思ったの。」

狙い通り好奇心が勝ったようだ。

「そのとおり、これは純粋に伝承の間違いかと思う。これ以外にも消費ＭＰ１０のベホイミは実は５ですむ。」

「でも他のギラ、ラリホー、マホトーンも違うわ。」

「いいところに気づいたね。実はギラとその他の魔法の消費ＭＰの違いは理由が異なる。」

「理由が違う？」

マギーが少し首を傾げる。隣のアレフはぽかんとしている。ここで黒板を消し、ギラとベギラマを同じ様に新旧並べて書く。

「さてマギー、多分気づいてると思うけど相違点は？」

「ええ、これは気づいたわ。ラストワードが違う。今までギラとしていた魔法は文字からするとメラ、同じくベギラマはライデインとあるわ、これはどういうこと？」

「そのとおり、なんと別の魔法だ。ギラと呼んでいた魔法はメラ系の初級にして初歩の初歩の魔法。これに対してベギラマはなんと勇者にしか使えないと言われたライデイン。何がどうなったか判らないがこれが真実だ。」

「ふ～ん、メラ系とか前に言っていたギラ系とかは、更に発展形があるってことよね？」

「あるよ。メラ系はメラ、メラミ、メラゾーマと発展する。消費Ｍ

Pは2、6、12と順に多くなり、威力はメラ基準で10倍、20倍といったところか。」

マギーは興味津々で、アレフは真剣に話を聞いている。

「さらにデイン系の魔法、これはライデイン、ギガデインとある。同じ魔法とは思えないが雷を操る類似の魔法だ。消費MPは8、30だ。MP30なんて気軽に使えないね。」

「類似するってのはどういう意味?」

「いい質問ですね。ベギラマことライデインは手から稲妻を射出する。だけどギガデインは天から雷を落とす。まさに”天を裂き地を割る”の表現が正しい魔法だ。」

「でもそんな魔法使ったら味方にも当たるのじゃなくて?」

「そうだね。こういった範囲魔法は器用に味方を避けてくれない。使いどころが難しい魔法だ。まあ詠唱文は魔術書とにらめっこしてくれ。それとアレフは無理に覚える必要はない。」

「ええっ!覚えなくていいって?」

「お前なあ、自分の総MP判ってるのか?」

「あっ!そうでした。・・・でもさっきの話だとベホイミの消費MPが半分で済むので助かります。」

「ああそうだね。実はさらに上級の魔法がある。ベホマっていってどんな状態からでも無傷に戻る。」

「それ聞いてない。」

「今始めて言ったからね。自分で学習すること。ちゃんと書いてある。」

「うっ、そうだけど・・・でもパワーワードが判っただけでも収穫ね。」

しまった、情報を与えすぎたかな。

「まあそれはいいとして、次にラリホー、マホトーン。これは先と違って現行魔法の方が消費ＭＰが減っている。」

「減ってる？なんで？」

「ん～、これは戦闘における使用法の違いによって変わったのか・・・ロトの時代には集団戦が主だったが、平和になってからは騎士同士の個人戦が主流になったことに原因があると思われるかな。」

二人とも全く意味が判らないといった顔をしている。自分でもよくわかってないからね。

「簡単に言うと、旧魔法は範囲魔法、現行魔法は単体魔法。だから現行魔法の方が少なくて済む。どうしてそう変化したかはともかく実質そうなっている。まあＭＰだけでなく詠唱内容も変化してるから気にしなくていい。両方使えると状況によって使い分けることができるから便利だ。」

「なるほどね、それは気づかなかったわ。細かい文法はまだ理解で

きてないから・・・でも参考になったわ。」

「俺はアレフにこういった補助魔法を使いこなして欲しいと思っている。ガイラは純粋闘士だから魔法は使えない。あいつは突っ込むしか能がないからもう一人が全体を見て、有効な魔法を使うべきだ。実際俺が組んでいたときもガイラが前衛、俺が遊撃で有利な状況を作った。」

「有利な状況ですか？」

「そうだ。実のところ一番怖い魔法はラリホーだ。寝てしまったらいくら強くても終わり。だからラリホーを使う敵がいたら真っ先に倒すか、ラリホーかマホトーンで封じる必要がある。あと敵の前衛を眠らせたり、味方の負傷を癒したり、俺がよくやる囮としての魔法の使用だったりで、戦況のコントロールが勝敗を分けた。」

「難しいですね。私にできますか？」

「できないなら剣を捨てろ。最悪ガイラや俺が目の前で倒れていたとしても、なんとかできる方法をかんがえろ。それが逃げることでも一向に構わない。常に冷静でいろ。」

これはマギーにも言っている。今日はこのぐらい言っておけばいい。

「まあ、最悪王家の秘法で蘇生できるからいいか。でもあまり遠くまで迎えに行くのは簡便してもらいたいな。」

「心しておきます。」

二人とも神妙にしている。

「まあ難しい話はこの辺で終わろう。いずれ判る。じゃあ実際に魔法を見せるぞ。他言無用な！」

俺たちは魔法実習室に入った。

遠征

５／２０　勇者支援生活　２０日目

いつもの朝の訓練所である。もう特に教えることもないので自分の鍛錬だけ行なう。んっ？出入り口が騒がしいな。人垣が真っ二つに割れ、貴族服と護衛２名、取り巻き３人、計６名が歩いてくる。ああフレーゲルだ。こんな所に何の用だ。自分の屋敷に引っ込んでろよ、謹慎中だろ？そう心の中で罵る。なぜかこっちに向かっているような気がする。やばい目を合わせるな！

「先日は世話になった。礼を言う。」

俺の願いむなしく、俺の前にふんぞり返ったフレーゲルがそうのたまう。世話をした覚えもないし、第一礼をするなら、”ありがとう”とか、頭を下げるとか、金をよこすとかいろいろあるのではないかと・・・はあ返事待ちですか？後ろの取り巻きがプルプルしている。そろそろ何か言っておくか。

「いえ、差し出がましいことをしました。お恥ずかしい限りです。」

「そうか、こちらこそ王族の心得勉強になったぞ。これからも父上をよく補佐してくれ。」

「はっ！かしこまりました。」

言いたいことを全て終えたのか、踵を返して立ち去っていく。取り巻きが一睨みしていくのはまあご愛嬌ってもんでしょうか？いまいち納得いかないが嵐が去っていくのは歓迎する。しかしまあ、我

ながら心無い返事をしたものだ。

「あの～あの人、一体何しにきたのでしょう？」

「あ～、あの人って言わないほうがいいぞ。あれでも王位継承権３位、国務大臣の長子フレーゲル様だ。」

「はあ、その割には１ｍｍも尊敬の念が感じられませんが？」

「わかる？」

「それはもう。顔に書いてありますよ。」

思わず自分の顔を撫で回す。

「この間、城中でこっぴどくやりこめてやった。今謹慎中のはずだ。向こうも俺の顔なんぞみたくもないはずなんだけどな！」

「大丈夫なんですか？」

「う～ん・・・どうなんだろうね。反省して謝りにきたと考えていいのかな。」

「判りません。そんな偉い人に知り合いはいませんから。」

二人して首を傾げる。まあ悩んでもしょうがない。俺も嫌いだし、あっちも俺のことなんか歯牙にもかけていないはずだ。放っておこう。

「そうだ。今日は昼から俺もついて行く。そろそろ大臣にそれなり

の成果を報告したい。」

「いっしょに戦えるのですか？」

「いや、俺は見てるだけだ。とりあえず昼1時にここに来いよ。」

アレフが納得いっていないようなので適当に切りあげる。昼までにしばらく城を開けることを各所に挨拶しておくか。

――――――――――――――――――――――――――――

昼すぎ、俺は兵舎前で馬を二頭用意して待っている。馬には夜営用の道具を載せてある。さっきはわざと言わなかったが3、4日ほどの遠征をするつもりだ。しばらくするとアレフがやってくる。意外な重装備に驚く。

「これからマイラ付近まで行く。馬には乗れるな？」

「えっ？そんな所まで行くんですか？何も用意してませんが？」

「かまわんよ、現地調達すればいい。」

「判りました。馬には乗れます。行きましょう。」

あまり納得していないようだが知らないふりをする。意地悪だが実際にはもっと理不尽なことが多い。

「よし行こう、しばらくは駆けるだけでいい。特に相手にしたい魔物もいないし。」

俺が先に駆ける。アレフは黙ってついてくる。馬の扱いは慣れていないらしい。とりあえずは乗れてはいるが、股が痛いらしい。時々馬の休憩も兼ねて降りて歩く。アレフが痛む所にホイミをかける。

「いずれ慣れる。慣れてもらわねばならん。」

「ええ、判ってます。」

「あと馬の息も気にしておけ、馬を潰すなよ。じゃあそろそろ駆けるぞ。先に走ってくれ。」

今度はアレフを先に走らせる。馬の様子を見ながら駆ける訓練でもある。さっきは俺が馬の様子を見てペース配分を決め、疲れる前に休憩させた。わざわざ説明したりしない。馬の息があらい、少しペースが速いか?すまないな、しばらく我慢してくれ。馬にそっと話しかける。しばらくして速度が落ちてきた。

「アレフ、止めろ。馬が潰れる。」

「はい、まだ行けますが?」

「どうも俺の馬の方が劣るようだ。お前は自分の馬は見ていたが俺の馬は見ていない。」

「すみません。気づきませんでした。」

馬から降りてベホマをかける。それでも今日はもう無理をさせない方がいい。体力はともかく馬の気力が持たない。それに日没が近い。

「それはいい。次から気をつければいい。今日はここまでだな。よし水場を探してくれ。馬も頼む。俺は食い物を探してくる。」

そう言って自分の馬の手綱を渡す。アレフが怪訝な顔をしている。

「早くしないと日が暮れるぞ。水場を見つけたら次は火をおこしておけよ。薪は馬に積んである。」

それだけ言い残すと俺は獲物を探す。魔物が出るようになってから野生の動物は少なくなった。獲物がいなければ食べられる野草などで腹を満たすしかない。今日は俺がやるが明日はアレフにやらせる。こんなことはガイラが得意なのだがなあ。

取ってきたのは蛙と野草、それを火で炙り塩をかけて食べる。そう嫌な顔するなよ。食えるだけましだぜ。馬は遠慮なくその辺の草をムシャムシャ食んでいる。アレフガルドの夜は速い。竜王に光の玉を奪われてから特に顕著だ。もう8時ぐらいか。

「俺が先に見張りをしておく。お前は寝ろ。夜中になったら起こすぞ。いいな。」

「トヘロスは使わないのですか?覚えたばかりなので使ってみたいのですが?」

「それもありだが今回は無しだ。そういう訓練だ。帰ったらサイモンに自慢できるぞ。」

「判りました。それでは先に。」

アレフが毛布をかぶって横になる。少し腹を立てているかもしれないな。悪いな、俺の馬が遅いのも、食い物を持ってきていないのも、最低限の食い物しか獲ってこなかったのも全部わざとだ。もっと困ったことはいくらでも起きる可能性がある。俺がいるうちに困っておけばいい。深夜2時くらいになったら起こしてやろう。アレフは6時間は眠れるはずだ。俺は火を絶やさぬように薪を足す。

遠征の目的

5／21　勇者支援生活　21日目

眠い。俺は4時間ほどしか寝ていない。それでも起きて、いつもの鍛錬を行なう。食事は昨日の夜の残り。

「アレフ、出発前に薪を集めてくれ。」

「判りました。探してきます。」

俺は水筒に水を詰める。馬の分もあるので結構面倒だ。ちなみに本当の意味での水筒だ。なんせこのアレフガルドには竹槍があるくらいだから、水筒は竹の節を抜いたものを使う。しばらくしてアレフが薪を持って戻ってくる。縄でまとめて馬に縛り付ける。

「よし行こうか、今日も先に行ってくれ。」

「はい、今日は馬を潰しません。」

俺は馬に飛び乗り、無言で手を前に振る。アレフが先に駆ける。時々こちらを見る。こちらの馬の息を確認しながら必要に応じて休憩をしたり、降りて歩く。少し慎重すぎるきらいはあるがもう同じ間違いはしないようだ。思わすニヤリとしてしまう。

昨日も今日も魔物は相手にしていない。スライムやドラキーは無視して駆け抜ける。あっちも駆け抜ける馬にはついてこれない。橋が見えてきた、そろそろマイラと海底洞窟の分岐点だ。

「よし、アレフ。橋を渡ったら降りるぞ。目的地だ。」

アレフが無言で手を挙げる。ずっと馬に気を使ってきて精神的に疲れているのだろう。

「ここから北へ行くとマイラだ。馬なら3時間くらいか。で、東に進むと毒の沼地が広がる。それを抜けると海底洞窟がある。リムルダールへ続いている。行くなら徒歩だ。残念ながら馬は毒の沼地に入る事を嫌がる。」

「どうやってリムルダールに物を運んでいるのですか?」

「もっともな質問だ。竜王が現れるまでは普通の泥濘だったんだがね、魔王の瘴気のせいか毒の沼地に変わった。以来リムルダールに訪れるものはほとんどいない。もちろん物も入ってこない。」

「そうですか、やはり早く竜王を倒さねばなりませんね。」

「そうだ。ならもっと強くなれ。この辺から魔物が強くなる。明日の夜までこの辺で狩れ。」

「判りました。では馬は頼みます。」

アレフが馬を預け自分の装備を確認する。歩き出すアレフに声をかける。

「途中食える獲物がいたら狩ってきてくれ。それが今日の夕食だ。俺はここら辺で野営の準備をしておく。」

アレフが張り切って歩いていく。この辺の魔物なら問題ないだろ

う。がいこつには苦戦するだろうか？あとで聞いてみよう。俺は野営の準備をする。もしもの雨を避けられる様濡れぬ場所を確保する。あとは焚き火をする。馬に草を食ませる。眠い、少し眠るか。トヘロスをかけ安全を確保してから目を瞑った。

誰かが近づいてくる気配で目が覚めた。アレフか。

「どうだった？この辺の魔物は。」

「それなりに相手できるってところでしょうか。」

「それなり、とは？」

「おおさそりは武器がまともに効きません、メイジドラキーも空中から魔法を使ってきます。この２つの魔物にはギラを使ってますから消耗が激しいです。魔法使い自体は強くありませんが、やはり魔法は曲者です。ホイミが欠かせません。」

アレフが疲れた顔で語る。まあ予想通りだ。

「がいこつには会ってないか？」

「見てませんね。どんな感じですか？」

「そうだな・・・嫌な相手だ。感情がないから動きが読めない。それでいて技術は持っている。」

「そうですか。気をつけます。」

「焦ったり侮らなければ怖い相手ではない。それはそうと夕飯は？」

アレフは布の袋から兎を取り出した。少し焦げている。

「ギラで仕留めたか、昨日よりはマシなものが食べれるな。捌けるか？」

「できます。やりますので休んでいてください。」

「わかった。お前に任せる。明日はもう少し北へ移動する。しっかり食っておけ。」

アレフが夕飯の準備をしている。ふん、俺に気を使うとは生意気な、自分も疲れているくせに。だがそれでいい。ガイラに自信をもって渡せる。さあ食事の準備ができたようだ。

「さっきＭＰの消耗が激しいって言ってたな。ちなみに飛んでる魔物にはこんな方法がある。」

俺は落ちていた石を近くに投げつける。ガイラの見よう見まねだ。

「これで落とす。ガイラがこうしてた。」

「投石ですか、あまり威力は期待できませんが？」

「ああ俺は得意じゃないからな、ガイラのは飛礫といってもっと速さも威力もある。」

食事が終わる。今日はもう寝る時間だ。

「今日も先に寝ておけ。昨日と同じ位におこす。」

「では先に寝ます。おやすみなさい。」

トヘロスを使っていることは秘密だ。緊張感のなか寝ろ。

――――――――――――――――――――――――――――

朝だ、今日も眠い。日課の鍛錬はやる。何があってもアレフの前では泣き言は言わない。

「今日は薪を集めなくていい。今日の夜にはラダトームに帰る。マイラが見える辺りまでは行こう。」

「先行します。ついてきて下さい。」

「生意気だな。ＯＫ、ついて行こう。」

２時間は走っただろうか、遠くにマイラの村が見える。この辺でいいか？

「よしいいぞ。この辺から別行動だ。馬は連れて行くぞ。」

「では私はこの辺りから魔物を探します。」

「ああ、しばらくはマイラにいる。日が落ちたらラダトームに戻れ。キメラの翼はあるか？」

「・・・？ルーラが使えますが。」

「疲れて使えない場合もある。護身用に一つ位持っておけ。ほらっ！」

俺は懐からキメラの翼を取り出すと、アレフに投げつけた。

「すみません。借りておきます。」

今日が終えたらきっとアレフはいろいろな意味で前より強くなっている。そう確信した俺は馬を引いてマイラに向かった。

重体

俺は今ラダトーム城下町の入り口にいる。ルーラの基準石のある場所でアレフが戻ってくるはずだ。
果たしてアレフは戻ってきた。顔に疲労がみえる。

「疲れただろう。今日は帰って寝ろ、何か報告があるなら明日にでも聞く。」

「はい、では失礼します。」

重い足を引きずる様にアレフが歩いていく。定宿にでも行くのだろう。戻ってきてほっとした。もしかしてもしかすることがないわけではない。ならずっと見ていればいいとも考えたがそれも駄目だ、過保護になりかねん。俺自身が否定したことをアレフには押し付けたくない。さて俺も宿舎に帰ろう。

ジョルジョが兵舎の番をしている。なんかそわそわしているな。

「戻りました。何かありましたか?」

「お待ちしておりました、昨日の夜から何度もケルテンさんがいないかと問い合わせがありました。」

ジョルジョが慌てたように言う。俺に客?ガイラか?特に急ぐ話はないはずだ。

「誰だった?もしかしていかつい男か・」

「いえ、城下町の宿の方の使いです。1時間おきに何度もです。帰ったらすぐ来て欲しいと伝言を承っています。」

「わかった。馬を頼む。」

馬を預け、宿に向かって走る。あの宿の親父が伝言で急いで来いだと?・・・何が起きた?気が逸る。蹴飛ばさん勢いで宿の扉を開けた。

「学者か?よく戻った。」

「何がおきましたか?急ぎの用みたいですが。」

「ああそうだ、こっちだ。昨日ガイラが担ぎこまれた。重体だ!」

親父が部屋に飛び込む。俺も急いで入る。重体だと・・・そこには全身包帯でぐるぐる巻きのガイラが寝ている。意識はない。

「どういうことだ?説明してくれ。」

「昨日夕方、町の入り口に血みどろで倒れていた。とりあえず応急処置はしてあるが、右足がひどい。」

「右足の具合は?」

「ああ膝から下、中ほどで完全に折れている。お前の言ってた開放性骨折ってやつだ。無理にあわせて添え木がしてある。」

「判った。それでいい。あとは?」

「頭から上半身にかけて火傷がひどい。こいつの持っていた薬を塗って様子を見ている。魔法で治療がまともにできる知り合いはお前しかいない。そう思ってお前を探していた。」

俺は包帯を少しめくり火傷の具合を見る。範囲が広いがホイミを数回かければいいだろう。この場合回復力の強いベホイミやベホマをかけると全身場所を選ばず回復してしまう。折れている足が折れ曲がったままくっつくともう直しようがない。手間だが少しずつ直すとしよう。

俺は包帯を切り取り、何箇所かに手をあてホイミを唱える。少しずつ火傷のあとが消える。

「これで火傷は大丈夫だ。まだ熱があるからしばらくは安静にしなくてはいけない。もしかしたら感染症があるかもしれません。」

「あっああ。よく判らんがここで様子を見る。任せてくれ。でも足はどうなんだ。」

俺はガイラの脚の包帯をとり添え木を外す。痛むのか、ガイラがうめき声をあげた。

「つっ！悪いな。へまをした。」

「気づいたか、しゃべらなくていい。少し痛むが我慢しろ。」

ガイラが左腕を軽く挙げる。俺はガイラの右足に両手を当て探る。ガイラがうめき声をあげる。うん、骨の合わせ目はずれていない。これならベホマで直せるな。

「どうやら応急処置がよかった様です。魔法をかけます。」

俺はベホマをかける。これで大丈夫だ。

「もう大丈夫です。しかしまだ熱も引いていません。明日迎えに来ます。それまで絶対動かないようにして下さい。」

「わっ判った。宿の者に面倒見させる。何、ひっぱたいてでも動かさせん。」

「というわけです、ガイラ。屈辱的かもしれませんが言う事はきいてください。」

「く、屈辱的？」

「ああ、便所も自分で行けません。」

ガイラと宿の親父のあっ！と声を上げる。

「異論は認めません。あともう眠りなさい。・・・・・ラリホー！」

不意打ち、さらに体力が落ちているガイラは抵抗できずに眠りにつく。俺たちは部屋からでた。

「実は動いても問題ない程度には治ってます。ただ体力が落ちていますから休息が必要です。あとこうでもしないとまた無茶をしますからね。」

宿の親父が呆気に取られている。

「お前、やっぱり悪辣だな。」

「悪辣とはひどいな。治療までしてやって、心にも薬をやったのに！」

「子供には苦い薬か？」

「ええそうです。あいつは少し自信過剰なところがあります。バトルジャンキーでね、戦いこそ我が人生。うらやましくもあるが、それで死なすには惜しい友人です。」

「そういうことにしとくか。明日まで責任もって預かる。それからどうする？」

「しばらくマイラででも湯治をさせます。回復には時間がかかりそうですから。」

「マイラの湯か、俺も行きたいな。」

「いずれ平和になったら行きましょう。では俺は帰ります。」

俺は宿舎まで歩く。三日ほどまともに寝ていないもう限界だ。なんとか足を引きずるように自分の部屋まで帰る。ベッドに倒れこむ。意識が途切れた。

とんぼ返り

5／23　勇者支援生活　23日目

朝目覚める、ものすごく腹が減っている。昨日は疲れて飯も食わずに寝てしまった。とりあえず食堂に行き肉を咥えてから訓練所に行く。アレフはもう鍛錬を始めている。

「おはよう。」

肉を咥えたまま、声をかける。

「行儀が悪いですよ。ケルテン師匠。」

「そうだな、昨日あれから大変でね。さっきまで死んだ様に寝てた。」

「大変？もしかして私のことで迷惑をかけましたか？」

「違う違う、ガイラの件だ。怪我で宿に運ばれていた。」

「・・・あの部屋ですか。急病人がいると聞いてました。」

「まあそんなところかな。それでまたマイラに行くことになった。やつを休ませる。またしばらく戻らないから自分で予定をきめて動いていいぞ。」

「そうですか、大変ですね。予定ってどうすれば？」

「そうだな・・・今いくら貯まった？」

「１５００Ｇは預かってもらってます。手元に２００Ｇちょっとあって、昨日までの素材を売れば全部で２５００ぐらいになるかと。」

「そうか、結構貯めたな。じゃあガライへ行って鉄の盾を買って来るといい。そろそろ装備を整えよう。」

「剣や魔法の修行はもういいのですか？」

「そうだな。もう自主訓練だけでいいだろう。ただその旨はマギーには伝えておけ。」

アレフが首を傾げる。

「伝えてもらえないのですか？」

「今から馬を手配してガイラを迎えに行く。あまり時間がないからもう行く。じゃあな。」

それだけ言うと訓練所から飛び出す。少しして戻る。

「ああそうだ、遠征するときはマギーかサイモンに予定だけ伝えておけ、俺が戻ってきた時予定がわからないと困る。じゃっ！」

――――――――――――――――――――――――――――――

宿屋に来ている。中が騒がしい。扉を開ける。ガイラが暴れている。

「学者とめてくれ！この馬鹿、言うことを聞かん。」

「ガイラ五月蝿い。いいかげんにしろ！子供か！」

怒鳴りつけてやった。昨日死にかけていた癖に。

「学者聞け！、俺はもう自分で歩けるし、誰の世話もいらねえ！」

「救いがたい馬鹿だな。まだお前の体の中には毒が残っている。放っておくとそのうち仰け反って死ぬぞ。聞いたことないのか？大した傷じゃなくても死ぬ病だ。」

正確には違う。破傷風菌の概念なんぞアレフガルドにはないが経験測では知っているだろう。しかし破傷風菌にキアリーは効かないかな？それ自体は毒じゃないし・・・菌が出す毒にだけ効くとかありえるな。ガイラが黙り込んだ。

「・・・そんな感じで死んだ同門がいるらしい。最後は弓なりになって死んだと聞いている。」

「それだ。しばらくは様子を見る。毒は毎日俺が抜く。その間はマイラで湯治三昧だ。激しい運動は禁止、いいな。」

「マジか、体が鈍るな。」

「つくづく馬鹿だな、武闘家ガイラメイジキメラに死すって墓に書いてやろうか？」

「嫌なことを言う。わかったよ。でもじっとしているのは性に合わ

ん。」

「ふん！別にそれだけが用事じゃない。例の物は持ってきたんだろうな？」

「2匹分ある。欲張ってもう一匹と思って山を散策していたら崖が崩れて落ちた。そこをメイジキメラに襲われた。キメラの翼がなかったら死んでいた。」

「阿呆、馬鹿、強欲、そんなことだと思った。無理はするなといっただろうが！」

「面目ない。」

ガイラが小さくなっている。俺が本当に怒っているのが判ったらしい。

「もういい。マイラに行くから準備しろ。5分で用意しな！」

――――――――――――――――――――――――――――――

厩舎で馬に荷物を載せている。ガイラはふらついている。さっきはよく暴れていたな。

「しばらくは馬で進む。辛いだろうがしっかり掴まってろ。」

「なあ、お前の魔法で跳ぶわけにはいかんのか？」

「あれは便利すぎて公表したくない。対外的には馬で移動すること

になってるから我慢しろ。城が見えないところまで行ってから使う。」

「そうか。わかった。」

俺たちは馬を並足で進む。ずいぶんゆっくりとしたペースだ。

「しかしまあ、お前の馬もよく戻ってこれたな?」

「ああ、メイジキメラに襲われていた俺を咥えて走ったんだ。それでキメラの翼を使えた。命の恩人だ。」

「ライは主より賢いな。まあそれはいい。マイラに行くのはもう一つ用がある。お前の武器を作ってもらう。これも時間がかかるから丁度いい。」

「そうかそれは楽しみだ。」

「馬鹿!馬上で素振りをするな!しばらく安静だろうが・・・。」

「いや~楽しみで思わず。」

「馬鹿につける薬はないな。馬鹿ついでに聞くがこの間の魔物の素材はあるか?」

「あるぜ、メイジキメラの翼だろ、影の剣、魔物の兜、死の毒針。」

ガイラが馬にぶら下げた袋から一つずつとりだしながら言う。

「それ絶対出すなよ。」

「なんでだよ?金になるだろ!」

「やっぱり馬鹿だ。どうやってそこに行ってきたんだよ!」

「あっそうか!」

「勘弁してくれ・・・しかしそうだと死にそうになったのは好都合か。」

絶句。そうだろう、死にそうになって良かったって言ってるんだからな。

それからしばらくどうでもいい話をしながら進む。城が遠くに見える頃になってルーラで跳んだ。

武器発注

マイラの村、宿屋で二人部屋を取る。こいつと二人きりというのはぞっとするが、何か起きたらすぐに治療を行なわなくてはならない。おれは真剣な顔でガイラに語る。

「ガイラ、あらかじめ言っておく。今はまだ発症していない病がある。発症したら生き死には五分の病だ。実感は沸かないかもしれないが認識しろ。ここまでは判るか？」

「今はなっていない病気があって、病気になったら死ぬかもしれない。であってるか？」

「そうだ。ならないかもしれないが、それがはっきり判るまで最大で三週間かかる。それを踏まえてお前が好きにやりたいなら好きにしていい。だがその場合は一人で死ね。俺はお前を看取る気はない。」

「判った。お前がそういうなら正しいのだろう。俺の体を預けよう。」

「よし、今現在の発熱、悪寒、眩暈は火傷や骨折によるもので、これから起きることとは関係ない。魔法で皮膚や骨を直したが失われた血は失われたままだ。これからは次の症状になったら即言え。舌がもつれ会話に支障がでる、顔が引きつる、筋肉の強い痛みなどだ。深夜だろうが構わないから起こせ。」

「よく判った。これは俺の中の闘いなんだな？」

「そうだ。体の中にできた毒は俺が消す。だがその毒を出す目に見えない何かは、お前の体力でしか勝てない。食欲はないかもしれないが食え。体力が尽きたら終わりだ。」

「そうか・・・闘いなら負けるわけにはいかないな。」

ガイラの目に光りが宿る。闘いを前にしたガイラの目だ。

「なら次はもう一つの用事に行こう。ミスリルを出してくれ。」

ガイラが袋を漁る。メタルスライムの残がいを取り出す。すごいな、殴ったと思われる箇所がへこみ、反対側が破裂している。

「これだ、この通り二つある。」

「OK！それでどんな武器がいい？」

「やっぱり殴る武器がいい。棍や爪は性に会わない。」

俺は手持ちの紙にDのような形を描く。

「ならばこんなのはどうだ。こっちのまっすぐの方を握りこみ反対側で殴る。」

「ちょっとイメージがわかないな？」

「じゃあこれではどうだ？」

手持ちのタオルを自分の手に巻く。拳を握り巻いた布の部分でガイラを殴るふりをする。

「なるほど、布では意味ないが硬いミスリルなら効果的かもな。」

「更にこっちの打撃面に棘なり刃をつける。これでこちらより硬い敵に効果的にダメージを与えることができるだろう。」

「で、これはなんと言う武器だ？」

「ナックルダスターとかサックとか、単純にナックルとも言う。ミスリルナックルとでも名づけるか。」

「なるほどミスリルナックルか、楽しみになってきた。」

「そうか。なら鍛冶屋を紹介する。ついて来い。」

――――――――――――――――――――――――――――――

独特の何かが燃える匂いがする。村はずれの小屋にガイラを案内する。

「ここだ。職人らしい頑固な親父だ。機嫌を損ねるようなことは言うなよ。」

「そういわれても判らん。」

会った事ないから判るわけないか。まあいいや、ミスリルを見ればやる気になるだろう。

「おいケルテンだ。入るぞ！」

大声を出して小屋の扉を開ける。普段から鎚の音や火のせいで耳が少し遠い。いつもここでは大声だ。

「おう、ケルテンか。今石炭を蒸している。」

「そうか。客を連れてきた。こいつがガイラだ。」

「ガイラだ。よろしく頼む。」

鍛冶屋の親父がガイラの全身を舐めるように眺める。

「いい体つきだ。少し元気がないが大丈夫なのか？こいつ。」

「ああ先日大怪我をしたばかりだ。まだ本調子じゃない。それよりミスリルを持ってきた。ガイラ出してくれ。」

「おう、これだ。」

ガイラがミスリルを差し出す。鍛冶屋が目をむく。

「なんだこれは！スライムみたいな形だな。」

「ああそうだ。実はメタルスライムというスライムの表皮だ。倒すのは結構大変だ。それを二つ用意してきた。もちろん倒してきたのはこいつだ。」

「そうか、世の中には変な魔物がいるのだな。一つ試していいか？」

「ああ、なんだ。」

「こいつの一撃を見たい。」

ガイラが俺を見る。

「いいのか？安静だろ。」

「いい。どうせ言っても聞かない。この親父は力量の足りない者に武器を売らない。そのメタルスライムを殴れ。それで力量が知れる。」

ガイラが殴りやすいようメタルスライムの残骸を台の上に置く。念の為、親父をガイラの後ろに下がらせた。俺は残骸の横に立つ。

「よし、ここだ。思いっきりだぞ。」

ガイラが腰を落とした構えを取る。心気を整える、正拳突き。普通は金槌で叩いてもへこまないミスリルが一撃でへこむ。鍛冶屋の親父がへこんだ残骸を触る。

「なんて一撃だ。」

「親父、合格か？」

「もちろんだ。鍛冶屋冥利に尽きるとはこのことだ。ぜひやらせてもらう。断ることは許さん。」

「そうか、よかったなガイラ。お前合格だってよ。お前はどうだ。」

「おっおう！頼む。」

二人が固く握手をしている。暑苦しいな、こいつら似たもの同士だ。親父が俺に向き直り言う。

「それでどんな武器を作る？さっきのだと剣とか槍ではないな。」

「それなんだが、これを見てくれ。」

俺はさっき書いた絵を見せる。親父がまじまじと眺める。

「ふ～ん、なるほど！拳を保護しつつ殴るか。加工はどうすればいい。」

「そうだな。まずミスリルを棒状にする。それを曲げて円形にしてから叩いて形をこう変える。細かい所は例の方法で少しずつ削る。できるか？」

「もちろんだ。だがそれは大変だな。削るだけでも2、3週間はかかるぞ。」

「ああ、構わん。こいつの病気療養にそれぐらいかかるしな。」

「そうか、判った。ならまず手の型を取ろう。」

鍛冶屋の親父はそこら辺にあった粘土を取り出して、太さ３ｃｍぐらいの棒状にする。真ん中辺りをガイラに差し出す。

「よし、ここを軽く握ってくれ。」

ガイラが素直に握る。親父は粘土をガイラの拳に巻き付け押し付

けた。

「少しずつ手を抜いてくれ、型が崩れないようにな。」

ガイラの拳の型ができる。親父が大きさを確認する。なにか納得したかのようにうんうん首を縦に振っている。

「おい、一人で納得してないで何とか言ってくれ。」

「ああすまない。思わずな・・・。しかし、これだと材料が余る。どうする?」

「なら余った分は１０ｃｍ×３０センチ、厚さ１ｍｍぐらいの板状にしてくれ。」

「前といっしょか?」

「そうだ。２枚作ってくれ。」

「判った。」

隣でガイラが怪訝な顔をしている。

「なあ、二人だけで会話しないでくれるか。なにができるんだ?」

「秘密だ。楽しみにしてろ。お前は病気を治すことに全力を尽くせ。使う人間がいなくなったらこの親父が困る。」

「そうだ。俺が作るまでくたばるな。死んだら許さねえ。」

「なんか理不尽だな。激励だと思うことにしよう。」

三人が笑う。きっとそれぞれが出来上がりを想像しているのだろう。俺もガイラがミスリルナックルでドラゴンを殴るところを想像してみる。それは空想をはいえ究極の一撃だった。

勇者アレフの冒険

僕は今ガライの町に向かっている。馬は借りられないので荷物をいっぱい入れた背嚢を背負っている。装備と合わせて結構重いが慣れた。ただこのまま戦闘をするにはかさばるので魔物は避けることにしている。

一人で黙々と歩く。慣れているはずなのになぜか一人が辛い。師匠といっしょの3日間はもっと辛かったはずなのに・・・。あの3日間は必要最低限の会話しかしてない。その会話もほとんど命令だけで暖かい言葉なんてかけられなかった。

だいたいまず城の外について来るといったが、まさかマイラの村に行くなんて聞いてない。馬があるから問題ないと言ったが野営など今までしたことない。多分そういった準備など万全かと思ったら全然そうじゃなかった。

腹が立つことばかりだった。馬のペース、自分の馬だけならともかく同行者の馬の調子なんて判るわけない。あげく“止まれ、馬が潰れる。”と言われた。そうなる前に言ってくれればいいのに・・・口には出さなかったけどそう思った。

次に食事、携帯用の食事や保存食くらい持ってきていると思っていた。ないから獲ってくると言う。しかも獲ってきた物は数匹の蛙と少々の野草、とても食い物には見えなかった。調理されたそれはまあ口に入れるのに抵抗がないくらいにはなっていたが、それでも量が少なすぎた。

さらにまだ日が落ちたばかりなのに寝ろと言う。こんな時間に寝

られるかと思ったが腹が満たされないのと、慣れない馬の移動で疲れているので寝ることにした。夜中に起こすと言われた。この辺ならトヘロスを使えば見張りを立てなくても大丈夫と言ってみたが却下された。むちゃくちゃだ。

本当に起こされた。まだ真っ暗だ。硬い土の上で寝たので体の節々が痛い、疲れが取れた気がしない。星を見ると二時くらいだろうか、6時間くらいしか寝ていない。文句を言おうと思ったがすでに師匠は僕に背を向けて寝ている。不貞腐れて薪を火に放った。

朝6時、師匠はいつも通り起きてきた。そしていつもの鍛錬だ。鍛錬のあと薪を集めて来いと言われた。不承不承集めながら考えた。この遠征目的はなんだろう?まるでいじめだ。・・・あれ?なんか聞いた覚えがあるな、そうかサイモンさんの3日連続行軍訓練。

師匠は答えを教えることはしない、ヒントはくれるが結論だけを述べることはしない人だ。昨日からのことを改めて考えてみる。

まずは馬・・・これは馬に限ったことではないな、同行者に気を配るのは大事だ。今まで一人だったから気づかなかった。次に食料・・・常に安定した食べ物があるわけでないということか。不足の事態はいくらでもあるだろう。サイモンさんもぼやいてたな、何もなければ食べないって・・・笑いながら。多分当たり前だと思っているのだろう。

よく考えると僕は6時間寝ている、あまり眠れてはいないが・・・。でも師匠は4時間しか寝ていないじゃないか!僕は馬鹿か!全て大変なことは師匠がやっている、昨日の食事も今日の食事も僕の方が量はあった。ならばと今日は僕が全ての荷を負うことにした。目的地で魔物を狩って帰ってきたとき、師匠は座ったまま寝ていた。

遠くから見てわかった。残念ながら近づくとおきてしまった、隙を見せてはくれない。

そんな3日間だった。もうそろそろラダトームからでる時、今回のガライ行きはその予行練習を兼ねる。もちろん装備を充実させるのも目的だ。１５００G貯めろと言われていたが何を買うのだろう？ラダトームの武器屋しかしらないが、そんな高い装備は知らない。楽しみだ。この間の模擬戦5番勝負、最後に負けたのが残念だ。サイモンさんも余計な時に来てくれたものだ。・・・これは駄目だな、負けたのは僕でサイモンさんが悪いわけではない。

ガライに向かって歩く、歩く、歩く。いろいろ考えていたら足取りが軽くなってきた。僕が選んだ師匠は間違いでなかった。あの夜の決闘を見たとき、この人についていけばいいと思った。都合よく勇者支援官だと言う。好都合だ、断られることはない。弟子にして下さいといった時の師匠の顔は今思い出しても笑える。今思うと最初の一本だったんだろう。あとはマギーさんのことを聞いたときだけだ。それ以外では剣でも魔法でも策でも何一つ勝てていない。今は勝てなくてもいい、全て吸収する。

さてもうしばらくしたら日が落ちる。たしかこの辺にロトの遺跡があると聞いた。そこは聖なる地なのか魔物が出ないらしい。今日の夜はそこで過ごそう。そこに行くまでに今日の食事を採ろう。実のところ背嚢に携帯食はある。でもこれは獲物がなかったときに食べるためだ。そりゃそうだ、ガライやマイラなら2~3日だから携行した食事だけでも行ける、でもリムルダールへは?竜王の城へはどうだ?当然無理だ。現地調達が必要だ。これができなかったことは魔物より怖い、今はそう思える。

ロトの遺跡だ。たしかにシーンとして魔物の気配はない。安全は確保できているのでそんなに早くは寝なくてはいい。そうだ、ロトの石碑を見に行こう。レミーラを革の盾に唱える。明かりは万全、石畳の通路を歩く。安全が確保されるとそれはそれで面白くないな。いつも緊張して歩くのが癖になっている。

ロトの石碑がある。大きな墓標のような石版に文字が彫られている。

「私の名はロト。私の志を継ぎし者よ。ラダトームから見える魔の島に渡るには、３つの物が必要だった。私はそれらを集め、魔の島に渡り魔王を倒した。そして今その３つの神秘なる物のを、３人の友に託す。彼らの子孫がそれらを護ってゆくだろう。再び魔の島に悪が蘇った時、それらを集め戦うがよい。」

なぜか涙が出てきた。ロトの想いが心に響く。これから厳しい冒険になるだろうが、彼の志は僕の心の支えになるだろう。今日はここで寝ることにする。ロトの勇者様、おやすみなさい。

夢を見た。

青い鎧をきたロトの勇者様が３人の人といっしょにいる。重厚な鎧の男、優しい眼差しの女性、理知的な顔の男、みんな笑いあっている。４人で拳を打ち合わせ背を向け、それぞれ違う方向に歩き出す。空の太陽がまぶしい。

はっと目が覚める。僕はロトの伝説についてそんなに詳しくない。でもまるで見てきたかの様に詳細まではっきりとした夢だ。石碑の前で寝たからなのか、ロトの勇者様が本当に夢に現れたのか？・・・

面白いことを考えた。この夢の内容を師匠に話そう。きっと驚いてくれるだろう。

ロトの遺跡をでてガライに向かって歩く。竜王が現れてからくすんだ太陽しか見れないが、今僕にはまぶしい太陽が見えている気がする。

衝突

5／31　勇者支援生活　31日目

ガイラをここに連れてきて8日目、発症して5日。ガイラの状態は良くない。痙攣、引き攣りが起きるたびにキアリーをかける。毒素は消すことができるが、破傷風菌自体が消えたわけではない。最初の懸念通りだ。こんなことが当たっても少しも嬉しくない。衰えた体力を補うために回復呪文を使う。もうまともに食事をとることもできなくなってきた。昨日から流動食を与えている。

昼は鍛冶屋の手伝いをしている間、宿の主人にガイラの様子をみてもらう。何か異常があったら俺を呼びに来させている。鍛冶屋ではミスリルをうっている。ミスリルは硬い、コークスを使って赤熱化する。赤熱化して少々柔らかくなったミスリルを大槌で叩いて形を変えている。まずメタルスライムの表皮の型でしかなかったミスリルを一つの塊にする。その塊を棒状になるようさらに成形する。

コークスはアレフガルドにはなかった技術だ。ジパングの鍛冶の秘法にあった質のいい石炭を蒸し焼きにすることで炭素の純度をあげる技術。他には空気を送り込むための特別なふいご、コークスの高温に耐える窯などジパングの秘法から得た技術の粋だ。町外れにある窯小屋で汗だくになりながら大槌を振るう。なんとかDの形まできた。工程の半分と言った所か。

「あとは冷えるのを待つだけだな。温度管理だけはしっかりしてくれ。俺は宿屋に戻る、何かあったら呼んでくれ。削るのは明日からにしよう。」

「大変だな。あいつは大丈夫か？本当に死んだらこの努力も無駄になるな。」

「無駄になんかするものか！ガイラは死なない。あいつもこれを待っている。」

「そうだな。こいつも使う人間がいなくなるのは嬉しくないと言っている。」

「ふん！物がしゃべるものか。では行くぞ。」

俺は小屋を出る。武器の声か、鍛冶屋らしい言葉だ。

宿屋。なぜか怒号がする。もしかしてガイラか！

――――――――――――――――――――――――――――――

「なぜ部屋が開いていない。俺は勇者だぞ。」

「そうは言われましても病人を預かっています。部屋は開いていても十分なサービスをすることができませんゆえ、お断りしています。」

「馬鹿か！そんな病人追い出せばいい。この勇者様が泊まってやると言っているのだ。」

「お預かりしているのも勇者様です。」

「それこそ無駄だ。弱い勇者などいらんだろうが！」

この声はガルドか。ある意味正論だろうがあまりにひどい。何より疲れ果てた俺の神経に触る。

「そこまでだ、ガルド！」

「誰だ、俺の名を気安く呼ぶのは？なんだ、城に籠もっている勇者支援官とやらか。この俺様になんの忠言だ。」

馬鹿にした口調でガルドが言う。かちんときた。今俺の機嫌は悪い、ならば言ってやる。

「お前の言動は聞くに堪えないな。尊大すぎるその態度は目に余る。」

「はん。城の連中が困った、助けてーって言うから助けてやってるんだ。尊大になって何が悪い。」

「ならば城に帰ってからそう言え、こんな村でそれを言ってどうする。」

「そんなことは知らん。支援援助をするといったのはそっちだ。だが今ここではそれがなってない。怠慢だな。」

「そうか、俺は支援すべき勇者を支援している。大体俺の助言などいらんと言ったのはお前だ。今更そんなこと言われても困る。」

宿屋の主人が右往左往している。それはそうだ。俺とガルドがものすごい声で怒鳴りあっている。村の人々も興味深げに集まってきている。

「だが弱い勇者はいらないと言うのはお前の言う通りだ。」

「そうだ、そうだろ！なら俺を優遇しろ。」

「馬鹿か！何を勘違いしている。お前が弱いと言っているんだ。」

「俺が弱い、言うに事欠いて弱いだと！馬鹿な、お前みたいなひょろひょろに言われる筋合いねえ！」

別に俺はひょろひょろじゃない。お前らがガチムチなだけだ。だが売り言葉に買い言葉、

「じゃあ、そのひょろひょろの俺がお前より強いことを照明してやる。お前が負けたら勇者は解任させてもらう、いいな！」

「そんなこと天地がひっくり返ってもありえねえ。いいぜ、やってやる。怪我しても文句を言うなよ！」

「その言葉そっくりそのまま返してやる。大勢の前だ、恥ずかしくて二度と表を歩けなくしてやる。ここでは狭い、表にでやがれ！村の中央広場でやる。ついて来い！」

「判りきったことを一々命令するな！こんな所でやれるか！」

散々怒鳴りあった俺たちは大勢の村人を引き連れ、村の中央広場にやってきた。俺とガルドが１０ｍほどの間隔を開けて対峙する。その周りには大勢の野次馬、これから起きる決闘に村が騒がしくなる。

俺は革鎧に細い剣、ガルドは革鎧に両手持ちの大斧。体格は俺が

細身で背の高さも普通、ガルドはがっしりした体格で背の高さは2mを超える。一見大人と子供の喧嘩に見えるようで、口々に村人がやめるよう言っている。もちろん聞く気はない。俺たちの間に一人のお年寄りが出てくる。

「私はこの村の村長をやっておりますグスマンといいます。村長の名に免じてこの騒ぎを収めてもらえませんか？」

「駄目だ、こいつは俺を弱いと言った。身をもって思い知らせてやる。」

「これは国務大臣付き特務隊士としての職務になります。村長どのには申し訳ありませんが、残念ながらこちらから引く気はありません。」

村長がため息をつく。

「判りました。では私がこの決闘の立会人になります。よろしいですか？」

「つべこべうるせえ、早く始めろ！」

「よろしくお願いします。」

「では、この決闘において故意に命を奪わぬこと、後に遺恨を残さぬこと、双方精霊ルビスの名の下遵守されること。ここにいる全ての者が見届ける。始めてください。」

村長の手が挙げられ振り下ろされた。

結末と再会

「おい、どうした！かかってきな。もしかしてギラやべギラマが怖いのか？ああ単純そうだからラリホーで即効寝るかもな。もしかしてトヘロスで見えなくなるかも？よし、ハンデだ。今の魔法は使わないでやる。感謝しな！」

当然ここにいたるまでにピオリム2回はかけてある。やつは皮鎧だからバイキルトは無用だ。こういった衆人環視の中の決闘では目立つ魔法は使わない。

「てめえ、舐めやがって！ぶっ殺してやる！」

ガルドが大斧を上段から振りかぶり俺に叩きつけてくる。馬鹿め、安い挑発に乗って大振りをするとはそんなもの当たるか！俺は斧が当たる寸前にバックステップ、斧が叩きつけられたら速攻懐に入って終わりだ。そう思っていると予想を裏切って大斧が強引に横に向きを変えた。何かいやな予感がする！俺は更に下がる。居合いの型は崩さない。ガルドは斧の勢いを利用して一回転、そこから袈裟切り。強烈な一撃が地面に叩きつけられた。俺は抜いた刀を納める。

「はんっ！よく避けたな。普通今ので死んでるぜ。武器を抜いても俺様には届かなかったか！」

「なるほど、いいコンボだ。まさかあそこから軌道を変えられるとはな！ちょっと実力を見誤っていたかな？」

ガルドが大斧を引っこ抜き、力を誇示するように振りかぶる。底意地の悪い笑みを浮かべる。

「なら前言を取り消して、土下座でもするんだな。みっともない姿で俺の気が済んだら許してやらんでもない。ゲハハハハッ！」

「馬鹿笑いは止めろ！そんな武器で勝てると思うな。いつまでも木こりじゃないんだぜ。」

「うるせえっ死ねや！」

ガルドの斧が俺に叩きつけられる。俺は棒立ちの状態から動かない。斧が当たる。観衆にはそう見えただろう。だがしかし斧が当たる音は聞こえない。時間差で俺の後方で大きな音がする。俺は刀を抜き、斧の柄だけを持って唖然としているガルドの眼前に突きつける。

「終わりだな。」

「なっなんだ、これは！こんなもの認められるか。俺の斧が壊れなければお前は死んでいたっ！」

ガルドが吼える。

「負け犬はよく吼える。馬鹿が・・・よくその柄を見ろ。壊れたんじゃない、斬ったんだ。」

ガルドが柄を見つめる。観衆もその柄を凝視する。その先端は途中まで斜めの切断面があり、さらにその先がささくれだっている。

「なっ！いつの間に？」

「最初にたたきつけた斧に切れ込みを入れておいた。あの時は届かなかった訳じゃない。お前の体に攻撃する必要がなかっただけだ。」

「くそっ！まだだっまだ負けていない！」

ガルドが柄と拳を振るう。斧の攻撃にくらべ緩慢なその攻撃はいとも簡単に避けられる。

「くそっ！くそっ！くそっ！くそっ！くそっ！」

ガルドが何度も振るう。避ける、避ける、避ける・・・。やがて息が切れたガルドが肩で息をしている。

「そこまでです。」

村長のグスマンが静かに声をかける。

「もうあなたの負けです。ここにいる全ての者がそう思っています。決闘にも作法があります。負けを認めなさい。」

ガルドの肩が軽く震えている。

「くそっ！勇者なんかこちらから願い下げだ！」

ガルドは斧の柄を叩きつけ村人の輪を断ち割って出て行った。俺はその背中を見送る。だから助言はすると言ったのに・・・人の言うことが聞けない勇者なんていらない。

「がっ学者よ。見させてもらった。やっぱりお前強いな。」

宿屋の主人に支えられたガイラがでてくる。

「お前見てたのか？安静にしてろと言っただろう。」

「あれだけ騒げば全て聞こえる。俺が馬鹿にされているのは我慢ならん。」

「そうか・・・。じゃあ早く直せ。今度見かけたら自分でやれ。」

「判った。だがその前にお前と勝負したい。」

「俺は病人とはやらん。それこそ早く直せ。」

「約束だぞ。直ったら勝負だ。」

ガイラが崩れ落ちる。気絶している。やられた、病気を利用して言質をとるとは・・・まあいい。気力が蘇っただけでもいい。

「だれか手を貸してください。この馬鹿を宿屋に連れ帰ります。」

ガイラを担架に乗せて運ぶ。世話のやけるやつだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――

ガイラを看ている。まだ治る見込みはない。俺は椅子に座ってうとうとしている。なにか騒ぎが聞こえる。もしかしてガルドが戻ってきたか？扉の外で足音が響き、扉が乱暴に開いた。マギーが立っている。後ろにはアレフ。

「マギー、それにアレフまで、なんでここに？」

「ケルテン！あんたっ何やってるの！自分が病気になったら意味ないじゃない！」

何を言っている？別に俺は病気じゃない。

「マギーさんの言う通りですよ。自分の顔を見てください。」

どういう意味だ。手渡された鏡を見る。うわっ！なんだこの顔は。目の下の隈、げっそり痩せた頬、確かに病気に見える。

「大丈夫だ。まだガイラの様子を見なくてはいけない。」

マギーが俺の胸に飛び込んでくる。

「駄目っ！もう止めて！」

「でもこれは俺にしかできない。止めるわけにはいけない。」

「じゃあ私がやる！どうすればいいの！教えて！」

マギーが半狂乱で騒ぐ。そうか、その手もある・・・。

「判った・・・替わりを頼む。魔道書１８ページ、解毒の魔法キアリー。呪文は
俺はＭＰを3消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、
おお万能たるマナよ、癒しの力となりて、この者の毒を打ち消せ！だ。」

マギーは魔道書を開きページを開く。キアリーのページを開き、指で文字をなぞる。

「この魔法ね。わかったわ、でもどうすればいいの？」

「この病は体内で毒素が作られる。できた毒素を解毒すればいい。その症状のサインは筋肉の痙攣、表情筋のこわばり、会話がまともにできなくなったり、口に水を含んで飲めなくなるなど。症状がでたらすぐに使ってくれ。」

「判ったわ。もうあなたは寝てっ！」

「でもまだ様「寝なさい！そんな顔した人に何ができるの！久しぶりに会ったら死相なんて！アレフッ！ケルテンを別の部屋に連れてって！寝るまで監視しなさい。」

アレフが俺に近づく。

「ケルテン師匠、無駄ですよ。ああなったらマギーさんは言うことを聞きません。それに私も同感です。寝て下さい。ラリホーをかけてでも寝てもらいますよ。」

「すまない。じゃあ寝させてもらう。もし急変することがあったら起こしてくれ。」

俺は肩を落とし隣の部屋に行く。アレフが黙ってついて来る。俺がベッドに入る。俺が寝るまで監視つもりだな。監視なんてしなくていい。もう起きていられない・・・。

いざマイラへ

時は遡って5月28日、ラダトーム城図書館

昨日ガライの町からラダトーム城に戻ったアレフは久しぶりに図書館に向かう。今回の遠征中にやっとベホイミの思考詠唱ができるようになった。それを報告したい、そう思ってここに来た。本当に報告したい相手はここにはいないがその次にで報告すべき人だ。

「マギーさん、戻りました。聞いて下さい、ベホイミは思考詠唱できるようになりました。」

「ふ～ん。あっそう。それで?」

なんか機嫌が悪い。そうか、一週間も師匠にあっていない。

「いっいえ、それだけです・・・。」

やばい。これ以上言葉がない。どうしよう。

「え～とっ!いま師匠とガイラさん、マイラの村にいるんですよね。」

そんな顔で僕の顔を睨まないで下さい。僕が悪いわけじゃありません。

「マイラの村と言えば、この間師匠といっしょに馬で行ったんですよ。それが師匠ったらひどいんですよ。マイラまで2日かかるのに何の食料も持ってこなくて大変でした。ははははっ!はあ。」

沈黙が続く。誰かこの間を助けてください。

「そうね、それだわ。」

マギーさんの顔が輝く。まずい、なんかたくらんでいる顔だ。

「アレフ、あなたマイラまで護衛しなさい。あなたもケルテンに会いたいでしょ?」

「まあそうですけど。でも勝手にマイラに行ったら・・・。」

「馬鹿ね!自由に予定を決めていいって言われてるんでしょ?なら自分でマイラに行く予定を決めればいいじゃない。」

なるほど、名案だ。僕は僕の意思でマイラに行く。でも護衛って・・・。

「じゃあ私は馬を借りてくるわ!後何がいるの?私野営とかしたことないし、よく判らないわ。」

えっとこの間の荷物を思い出す。

「馬、毛布、マント、2~3日分の食料、それだけあればなんとかなります。」

「えー。じゃあ雨とか降ってきたらどうするの?それとどこで寝ればいいの?」

じゃあ、ここで待ってて下さい。僕一人で行ってきます。とは口

が裂けても言えない。そういえばこの人は貴族のお嬢様だった。こういった場合どうすればいいのだろう？

「ちょっと待ってください。サイモンさんに快適な旅の仕方を聞いてきます。」

「そう、頼むわ。ここで待ってるから。」

――――――――――――――――――――――――――

兵舎でサイモンさんを見つけたので聞いてみる。

「すみません、貴族のお嬢様を護衛してマイラに行くことになりました。何を持っていけばいいでしょうか？なるべく快適にしたいのですが？」

「なんだ？女連れでマイラまで行くって？止めとけ止めとけ。無茶無謀だ。」

「じゃあ、そうマギーさんに行ってください。図書館にいます。」

「ヴィッセンブルン嬢かぁ。ケルテンがらみか？お前さんも大変だな。」

「そう思うならなんとか助けてください。」

「う~ん、なら馬車を使うといい、御者もいるな。馬で駆けるよりは遅い、さらに乗り心地も良くない。心しておけ。」

「ああそういえば馬車なんてありましたね。使ったことがないので

思いつきませんでした。ありがとうございます。じゃあそうマギーさんに伝えてきます。」

「おう、まあ頑張れ。ケルテンによろしくな。」

急いで図書館に走る。今日はどうにも日が悪い。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「馬車を用意して下さい。それと御者も。それでマイラまで行けます。」

「判ったわ。馬車は家の物があるし、使用人が御者をやってくれるはず。」

「それでいいです。じゃあすぐに行きましょう。時間が惜しいです。」

それからマギーさんの屋敷に行く。使用人によって準備がされる。出発の時がきた。ただまだ確認しておかなければいけないことがある。

「マギーさんいいですか。例え馬車でも快適ではありません。急げば揺れますし、いつものような快適な眠りは保障できません。食事もおいしくないです。また魔物が出てきたら数によっては戦ってもらいます。私の指示に従ってもらいます。これは遊びではありません。できないならこの話は無しです。」

じっと見つめる。条件を指定して譲歩をさせる。師匠なら多分こ

うする。

「わかったわ。あなたの指示に従いましょう。外の世界ではあなたの方が先達です。」

「結構です。では行きましょう。」

馬車がゆっくりと出発する。

「ねえ、アレフ。あなたなんかケルテンに似てきたかも?」

「最っ高の褒め言葉です。」

「そう、私もあなたもあの人の弟子みたいなものね。目指しているのはいっしょ、そうね?」

「そうです。これから師匠から一本を取りに行きましょう。僕たちの顔を見た師匠の顔はきっと面白いですよ。」

そして二人であの人に対して愚痴を並べる。マイラまで3日はかかるだろう。ずっと放っておかれたんだ。愚痴ぐらい言っても罰は当たらない。

二つの意味で次の工程

6／1　勇者支援生活　32日目

目が覚めた。ここ何日かは寝ているか起きているのかよく判らない状態だった。久しぶりに意識がはっきりと覚醒したようだ。ベッドで上半身を起こし昨日までを省みる。・・・ああそうだ、苛立ってガルドと決闘をした。よくあんな状態で勝てたな。そうだ、ガイラの容態を見に行かねば・・・。俺はもぞもぞと立ち上がり着替え始める。コンコン！控えめなノックがされる。

「アレフです。入ってよろしいですか？」

「ああ、いいよ。」

袖に腕を通しながら返事をする。心配そうなアレフが入ってくる。俺の顔をみて安堵の表情を浮かべる。

「すまなかったな、心配をかけたようだ。」

「私のことはいいです。でもマギーさんにはちゃんと謝罪した方がいいですよ。」

思わず右手で頭を押さえる。目の前のことにいっぱいいっぱいで結構な期間連絡していなかった。

「そういえばなんで君達がここにいるんだ？」

「私の遠征です。ガライ周辺は手ごたえがなかったのでこちらに来

ました。」

「ふ～ん・・・マギーを連れて？」

「えっ！ええっ！そうですよ。魔法修行の成果を見たいとおっしゃられて。」

「へえ～・・・誰の差し金かねえ？・・・まっそういうことにしておこうか。」

着替え終えた俺は腰に刀を佩く。これだけはないと落ち着かない。

「じゃあガイラの様子を見に行こうか。」

二人で隣の部屋に移る。ベッドに横になっているガイラ、その寝息は規則正しい。椅子に座ったまますうすう寝ているマギー。俺はしゃがみ込んで顔にそっろ手を当てる。

「マギー、マギー。」

「んっ。うん・・・！あっケルテン起きたの。」

「ああ、おかげでよく眠れた。ゴメンね。」

ぎゅっっと抱きしめる。抱きしめかえされる。泣き声がする。

「また泣いて、美人が台無しだ。これ前にも言ったね。ごめん、俺のせいだね。」

「そうよ、全部あなたのせい。」

マギーが半泣きのまま笑顔を浮かべる。

「うん。もう泣き止んで。君も隣で寝てきなさい。睡眠不足は美容に悪い。」

「そうね、じゃあそうさせてもらうわ。・・・チュッ！」

そう言うとマギーは俺に軽くキスをすると部屋を出て行った。アレフは見ない振りをしている。照れ隠しにアレフに声をかける、

「アレフいつもの鍛錬だ。行くぞ。」

「ここはいいのですか？」

「ああ、宿の人に任せる。いつもなにかあったら呼ぶよう言ってある。」

――――――――――――――――――――――――――――――

久しぶりに隣でアレフが剣を振っている。銅の剣、鉄の盾、革の鎧のなんともちぐはぐな装備だ。思わず笑みが漏れる。

「どうしたのですか？なにかおかしいですか？」

「ああ、その装備がおかしい。」

「いや、ケルテン師匠の勧めに従っただけですよ。笑うのはひどい。」

「すまん、すまん。そうだったな。とりあえずこの村の武器屋でも見てくるんだな。まあこの間の１５００Ｇも使ってもかまわない。もし手元に無くても貯金分で買ってもいい。手続きは俺がしてやる。」

「いいのですか？」

「ああ、多分買いたくなる装備があるさ。」

「そうですか。後で見てきます。」

「それとその後は外で実戦、魔物の被害もあるそうだからちょうどいい。ただ、昼には戻って来い。頼みたいことがある。」

「頼みたいこと？なんですか？」

「あとで言う。そう難しいことじゃない。」

一通り鍛錬が終わるとアレフは武器屋に行った。俺は鍛冶屋一文字に行く。次の工程だ。ちなみに鍛冶屋と武器屋は別ものである。

――――――――――――――――――――――――――――――

「来たか、昨日は大活躍だったな！」

「そうきたか。いや感情のままに動いたことを反省している。」

「いいんだ。あいつには村人が困っていたと聞いた。胸がすう～っ

としたって感謝していたよ。」

「そうか、もっと早く言ってくれればいいのに。」

「言うも何も誰もお前の身分なんぞ知らん。知っているのは宿の主人と俺ぐらいだ。お前は俺のところに来る変わった兄ちゃんとしか思われておらんかった。」

「そうだな。そう言われればそうだ。印籠を見せびらかして歩くのは趣味じゃない。」

「いんろう？お前はたまに意味のわからないことを言う。」

「まあそれはいいや。次の工程に移ろう。例の砥石はまだあるか？」

「ああまだあるが、砥石だけでは駄目だ。」

例の砥石。これはダイヤモンドの粉末をまぶした砥石だ。もちろん俺オリジナルだ。ダイヤモンドはそう産出しないし、貴重ゆえその粉末は市場にでていない。

「判った。じゃあ粉末は用意してくる。とりあえず武器の加工はできるところまで頼む。」

「はん！武器は俺の領分だ。頼まれるまでも無い。」

「じゃあこれはもらっておくぞ。」

俺は石炭の袋を一つ担いで外にでた。さてどこで加工しようか・・・あまり離れるわけにはいかない。村の中を歩いていると豪華な馬

車をみかけた。あいつら馬車できたのかよ！やっぱり鍛えてやることにしよう。改めてそう決意した。

ダイヤモンドの砥石、それは炭素の立方晶であるダイヤモンドをまぶした砥石。ダイヤモンド粉末を作るには炭素に爆発などで高温、高圧をかければいい。あとはこれを接着剤を塗った金属棒や板にまぶす。もちろん俺の刀ミスリルブレードはこれで仕上げた。

宿の主人にしばらく留守にすることを告げると村の外にでる。重たい石炭袋を担ぎ、それなりに離れた山まで走る。岩山のくぼみに石炭を置きイオナズンを唱える。響き渡る轟音、強烈な衝撃。多分村からでも見えるだろう。爆発の跡の黒い粉末をかき集める。よしこれでいい。早く村に戻ろう。ルーラ、マイラへ！宿屋に戻る、特に異常は無いようだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――

鍛冶屋の小屋に戻る。親父が座り込んで粘土の塊を触っている。近くにいろんな棒が転がっている

「例の粉だ。で、それはなんだ？」

「ああ、この間とった型を焼いた物だ。これからさらに手の型をとったのがこれだ。これにピタリ合う様、削っていく。この型に合う様削るには、丸型、半月型、それも大きさの違うものがいる。それで用意したのがこの棒だ。」

いろんなサイズの丸棒、半月状の断面の棒を取り出す。

「なるほどね。いつの間に作ったんだ？」

「そりゃあお前があいつの看病をしている間にだ。お前がやつれていたので粉末待ちだったのさ。」

「それはそれは・・・。」

俺は苦笑しかできない。どうも周りが全く見えてなかったらしい。

「だが今日はいい顔をしている。例の姉ちゃんか？大事にしろよ。俺一人でやすりを作るから、今日はもうお前の手はいらない。邪魔だから帰れ！」

俺は小屋から追い出された。しょうがない、帰ろう。大事にしろか・・・やはり昼から鍛えることにしよう。放っておいて怒られるなら横にいても困らない様鍛えてやる。

真のつよさ

昼になってマギーが起きてきた。寝ぼけ眼でひどい顔をしている。

「ん、おはよ～その人だいじょ～ぶ～？」

まだ半分寝ているな。

「ああ大丈夫。それより温泉でも浸かって目を覚ましてきなさい。あとで用件があるから。」

「は～い。じゃそうする。」

足をひきずりながらでていった。流石に看病は辛かったのだろう。

「おい、ケルテン。よかったのか？」

目を覚ましたガイラが俺に声をかける。

「なんだ、起きてたのか？人が悪いな。」

「ははははっ！俺は人の恋路を邪魔するつもりはない。だから目をつぶっていただけだ。」

ガイラがサムアップをする。

「で何がよかった？なんだ？」

「普通後を追ったりするんじゃないのか？」

「それはないな。もし俺が義務と責任を放ったらかしにしたら幻滅される。そんな仲だ。」

「ふ～ん、そんなものか？しかし夜中に目が覚めたら知らない女がいた。びっくりしたぞ。」

そういえば互いに紹介してないな。やはり全く頭が回っていなかったのだろう。

「改めて後で紹介する。それで体はどうなんだ？」

「なんとも判らん。急に痛みや引き攣りが来る。お前の魔法ですっとそれが消えるだけだ。」

まだ破傷風菌は消えないか。確か抗生物質は効く。だがそんな物はアレフガルドにない。このまま体力に任せて快癒させるしかできない。三国史や戦国時代に戦争の後、大したこと無い戦傷で死んだ武将の死因はこれだ。

三国史？戦国時代？実のところ俺の頭には未知の知識が沸いてくる。神の知識か、前世の知識。多分前世、別の世界の知識。残念なのかどうかわからないがはっきりとした記憶がないから、前世とやらに全く未練などない。１８年生きてきたこの世界の方には執着はある。最低でも自分が関わった人々には寿命をまっとうしてほしい。それが俺の生きる目的。

１０年ほど前、記憶とも知識とも判らないものが頭に蘇った時、周りの人にこれから魔王が蘇ると言った。子供の言葉だと一笑された。それでも言い続けたが悪い夢だと言われた。長い平和だったの

だ、それも仕方ないだろう。なら自分で何とかしよう。そう思って自らを鍛え、過去の知識を蘇らせた。

もしかしたら自分が何もしなくても、勇者が現れ竜王を退治してくれるかもしれない。だけどそれまでに犠牲になる人はどうなる。利己的かもしれないがせめて自分の周りだけでも犠牲はださない。事実俺はドムドーラの陥落は見逃した。正確な侵攻時期が判らないのと、これから新しい勇者の伝説が始まるからだ。

俺自身で事が始まる前に竜王を倒せばいいとも思ったが、実は俺はそこまで強くない。日々の鍛錬とロストマジックのアドバンテージで瞬発的な強さはあるが、敵を倒しながらあの長い竜王の城を降りていく持久力はない。それ以前に俺はロトの血をひく勇者ではないと思い込んでいたのもある。まさかの勇者システムには驚かされたものだ。もしかして攻略ルートを間違えたのかもしれない。

「おい！どうした？もしかして俺は治らないのか？」

「ああすまない、思考が他所に行った。毒の症状を見逃さず毒を早急に消せば死ぬことはない。やはりお前の体力と見えない敵との勝負だけだ。」

「やはりそれしかないか。一つやってみたいことがある。」

「なんだ言ってみろよ。」

「俺の流派に体の中の氣を整え、全身に廻らせる鍛錬がある。まあ外に出せるものではないし目にも見えないから説明しても理解されないと思うが・・・。」

ここでガイラが一度言葉を止める。

「なんとなくは判る。続けて、」

「俺の氣を全身に廻らせれば、その見えない敵とやらに勝てるかもしれない。」

「お前はつよいな。そんなことを考えていたのか？お前の体だ、やってみればいい。だがそれは昼からにしよう。」

「何かあるのか？」

「ああお前のことじゃない。まあすぐに終わるから見ていろ。」

――――――――――――――――――――――――――――――

しばらくしてアレフとマギーが揃う。ガイラとマギーを互いに紹介する。何を今更と言った感じだ。アレフは真新しい鋼の鎧を着ている。

「やはり鋼の鎧を買ったか。まあ俺でもそうする。」

「でもお金が大分なくなりました。残金は５００Ｇぐらいです。」

「問題ない。しばらくここを拠点に稼げばいい。そこで一つ頼みがある。」

「朝教えてくれなかったやつですか？」

「そうだ。昼からマギーを連れていって欲しい。」

「えっ！私？」

自分は関係ないと他所を見ていたマギーが驚く。

「ああそうだ。アレフ、ここに来るまで何回か魔物に襲われたと思うが、マギーはどうだった？お前のことだ、特等席で見物はさせてはいまい。」

「はい、魔法の発動の早さは流石です。」

「なにか含むところがある言い方だな。続きを言ってみろよ。」

「はあ、マギーさん怒らないで下さいね。なんと言うか、その、なんていうか、結構力押しなんです。よくあんなにベギラマを使えるなと関心していたのですが・・・。」

「何よ、それ！何も言わなかったじゃない。現に敵は倒していたでしょ？」

「マギー、そうアレフを責めるな。なんとなくは判っていたんだ。君には実戦経験がないからとりあえず一番効きそうな魔法を使うだろうとね。じつはこの辺りの魔物はギラでも十分だ。アレフもいたのだから敵の行動を牽制するだけでもよかった。」

「今まで誰もそんなこと教えてくれなかった。父上も兄上も！」

マギーがつぶやくように言う。

「多分君の父上も兄上も知らなかった。だって実戦経験なんてないもの。城の騎士だって魔術士だってそうだ。だから先の大戦で多くが亡くなった。今重職についている者の半分はそれ以前の未熟者にすぎない。君も父上、兄上を失って心ならずも筆頭魔術士になったと聞いている。」

「あなたにそんなこと言われたくない。」

泣きながら叫ぶ。心を抉っているのは判っている。

「そうだね。今が平和な時代ならこんな事言わない。だけど今は城にいても絶対平和ではない。いずれ竜王の軍勢が襲ってきたら君も戦わなくてはならなくなる。ここまでは判るかい？」

「ひっく、ひっく！うん、判る。」

「そうすると君はベギラマを乱発するだろう。これはいろんな意味で危険だ。」

「いろんな意味？」

「ああまず第一にいつ終わるか判らない戦い最中にＭＰが切れるかもしれない。君は俺よりずっと多い潜在ＭＰを持っているとはいえ限度はある。第二に俺は戦いになったら魔法を使える敵を一番にマークする。はっきり言うとまず先に殺すか、魔法を封じる。なぜか判るかい？」

「魔法が怖いから？」

「半分正解。ギラやベギラマはまだ怖くない。一発では死なない自

信があるから、この間やって見せたようにね。でもラリホーは怖い。確率は低いかもしれないけど一発で行動不能になるから。まだ理由はあるけどそれらを踏まえると君は敵の第一目標になってしまう。君には死んで欲しくない。」

「じゃあどうすればいいの？」

「そうだね。今言った危険なことを逆にすればいい。後ろで必要な魔法を効率的に使う。これが今の魔術師の戦い方だ。その為には敵の特性を理解しなくてはいけない。実戦にも慣れてもらわなくてはならない。だからアレフに同行して欲しいと言った。」

俺が語ることに興味がいって、もうマギーは泣いていない。

「わかったわ。私は強くならなければいけないのね。」

「ああそうだ。アレフ、改めて頼む。いいか？」

「判りました。謹んで筆頭魔術士殿の護衛を勤めさせてもらいます。」

「よし、じゃあ行ってこい。マギー、足が痛いとか、疲れたとか、泣き言は無しだぞ。」

「もう判ってるわよ！」

マギーが膨れる。皆が笑う。

マギーはこの前やった水の羽衣を着ている。二人の背中を見送る。結構きびしいことを言った。理解しているだろうか？必ず無事に帰ってこい。

「なあ、お前！なんて言うか・・・」

「言わなくていい！判ってる。」

思わず怒鳴る。

「そんな顔するなよ。泣きそうな顔してるぞ。」

「ああ、それも判ってる。」

「前にも言ったよな。優しい鬼だなって。」

「ああ言われたな。はっとしたよ、俺の行動が矛盾してるってな。」

「獅子は我が子を千尋の谷に落とすってか！本当にやるやつがいるとはな。」

「難しい言葉を知ってるな。それも流派の教えか？」

「そうだ。流派の教えだ。教えついでにさっきのやってみるか。」

そう言うとガイラが立ち上がる。目を瞑り腰を落とし両腕を腰に当てる。独特の呼吸法、ガイラの気配が大きくなった気がする。俺

には何をやっているか判らない、ただ見守ることしかできない。

その時間は永遠に感じられた。いやもしかして一瞬だったのかもしれない。ガイラが構えを解いた。

「ふう！ずいぶん体が鈍っているな。たったこれだけで疲れた。だが嫌な疲れじゃない。しばらく寝させてもらう・・・。」

ガイラはそれだけ言うとベッドに横になった。これで病が癒える、そんな気がした。

――――――――――――――――――――――――――――――

一人で村の中を歩く。すれ違う村人達が俺を見て声をかけてくる。

「やあ兄ちゃん。あんた強かったんだな。」

「ありがとね、これであいつも大人しくなるといいんだけど。」

「城の役人さんだったのかい。そうは見えないね～ちっとも偉そうに見えない。」

そうだな。少しはこの村の為になることができた。そう思ったら気が楽になった。とりあえずやるべきことは無くなった。村の入り口に見たことのある3人が見える。落第勇者たちだ。へ～ここまで来れるようになったのか。

「あれ？なんであんたここにいるんだ？」

「ああ久しぶり。俺の担当の勇者がこの村に滞在している。」

「そうか、その割にはのんきな顔してるぞ。」

思わず顔をなでまわす。

「そうか、のんきな顔か。それはよかった。」

「まあいいや。あんたに言っておきたいことがあったんだ。」

嬉しそうにドゥーマンが言う。

「なんだ。吉報か？」

「ああ吉報だ。俺達は自由になった。全部払い終えたんだ。」

「それはよかった。おめでとう。ならなんでここへ？」

三人の顔が少し沈む。ゲオルグが真面目な顔になって言う。

「あの一件以来、ラダトームには居づらくなった。流石に三人がかりで一人に負けると人の目が気になる。一応これでもあそこではそれなりに名前が通っていたんだ。」

「それでゲオルグとクロウ、俺で相談して城を出ることにしたってわけだ。」

「で、どっか俺達を雇ってくれる所はないかとここまで来た。」

なるほど、そこまでのケアをしないといけないか。

「そうか、もしよければだがリムルダールに行かないか？」

「リムルダール？なんか伝手でもあるのか？」

「ああ、俺の養父が町長をしている。」

三人があきれた顔をしている。

「あんたには驚かされてばかりだ。結構いいところの出だったんだな。」

「それほどでもない。行けばわかるが町長といっても金持ちではない。まあ俺のことはいいさ。紹介状を書くからそれを持って町長に会えばいい。」

「それでどうなる？」

「ちょっと前に俺が城に勤めるようになったから、町を護る兵士に負担がかかってる。君らが行ってくれればその負担が軽減できる。そう紹介状に書く。もちろん腕は俺が保障すると付け加える。」

「いいのかよ？そこまで保障して。」

「まあいいさ。町にはそれなりの装備も設備もある。実戦経験者なら役にたつだろうよ。」

「頼んでいいか。俺達が少しでも役にたつなら、そうしたい。」

「こちらから頼む。俺の大事な町なんだ。・・・だけど」

「だけど何だ？」

「リムルダールまで行けるか？ここからまだ１０日はかかるぞ。しかも毒の沼地を越えないといけない。」

「１０日か・・・厳しいな。魔物は当然いるよな？」

「そうだな。この辺のがいこつより強いやつらがな。」

「うへっ！そりゃあ無茶だな。」

そうだな、我ながら名案だと思ったんだけどな・・・どうしよう。

「しょうがない、送り届けよう。あんまり気が乗らないけど。」

「いや、それはあんたに悪い。いくらなんでも１０日もつき合わせられねえ。」

心底困った顔でクロウが言う。

「俺だって嫌だよ。１０日も付き合えるか。」

「じゃあどうするんだよ？」

「ここに特別性のキメラの翼がある。行ける場所はリムルダールだ。」

「・・・いやもう驚くことにも慣れてきた。まあなんでもいい、まかせた。それは多分すごいことなんだろうが俺達には関係ない。」

「物分りが良くてよろしい。じゃあ跳ぶぞ。」

もちろん嘘だ。そんな器用なキメラの翼なんて無い。まあルーラを使うための方便だ。

――――――――――――――――――――――――――――――

リムルダールの基準石は砂州の外側にある。今は吊り上げ橋の外に当たる場所だ。今俺達はここについた。三人がきょろきょろしている。

「本当に着いちまった。呆れたやつだ、もう何が来ても驚かねえ。」

「そりゃあ頼もしいな。今紹介状を書くから待ってろ。」

懐からとりだした紙にペンを走らす。

『爺様へ、訳あってこいつらを預ける。番人でも兵士でもすきにこき使ってくれ。ケルテン』

俺は折りたたむとゲオルグに渡す。

「門番には俺の名前を言えばいい。多分大丈夫だ。」

「多分てなんだ。」

「それはお前ら次第だ。尊大に行けば入れてはくれないだろうし、うまくやれば入れる。それくらいはできないと紹介する意味がない。じゃあ俺は戻るぞ。あとは任せた。・・・ルーラ！」

取り残された三人。思わず顔を見合わせる。

「忙しいやつだな。」
「そうだな。」
「まあ任されたわけだ。うまくやろうぜ。」
晴れ晴れとした顔の男達が橋を渡っていった。

鍛冶屋一文字

６／４　勇者支援生活　３５日目

あれから三日たった。アレフとマギーは毎日村の外にでて実戦訓練を行なっている。マギーは帰って来る度に疲れただの、足が痛いだの俺に文句を言う。アレフに聞くとそんなことは聞いていないらしい。俺の前だけか。まあそれはそれでかわいいとしておくか。

ガイラはあれから軽快した。彼の言う氣が破傷風菌を倒したのか、氣とやらによって抵抗力が上がったのか判らないが悪くなるよりはずっといい。ガイラは毎食前に例の構えで氣を廻らせる。今俺達の毎朝の鍛錬につきあっている。

「なあ、俺も型稽古していいか？」

「ああ～激しいのは駄目だぞ。ゆっくり体を慣らしていけ。」

「了解。」

そう言うとガイラはゆっくりと太極拳みたいな型稽古を始めた。なぜみたいなのかと言うと正解を知らないからだ。まあゆっくりやっている踏み込みや突きを、そのまま早送りすればいつものガイラの動きである。横でアレフがじっと見ている。

「あんな鍛錬の方法があるんですね。」

「そうだね、ゆっくりに見えてあれで結構大変なんだ。なんだったらいつもジョルジョとやっている型稽古を同じ位ゆっくりやってご

らん。ただし目の前にジョルジョがいるとして一つ一つの型をを確かめながらやること。適当にやっては駄目、意味が無くなるから。」

「なるほど、やってみます。」

そう言うとアレフがゆっくり稽古を始めた。

「ねえ、何やってるの？」

マギーが起きだしてきた。怪訝な顔をしている。俺はただ微笑む。

「なんかふざけてるみたい。」

「まあそう見えるだろうね。正確な型をゆっくり確かめるながら体を動かす、そう言う鍛錬だ。別にふざけているわけじゃない。やってみると大変だよ。武人にしかわからないけどね。」

「ふ～ん。」

「君なら、呪文の詠唱をゆっくりやる、もちろんＭＰの放出、マナとの融合を意識しながらの詠唱ってところか？」

「それはそれで大変そうね。ちょっとやってみる。」

そう言うとマギーが何か真剣な顔をしている。そして手を動かして何かを俺に向かって打ち出した。

「あの・・・俺を的にするの止めてくれない？」

「いいじゃない、どうせ出さないし。でもこれいいわね、おさらい

と思ってやるわ。」

そう言い放つと身振り手振りを加えて、魔法の型稽古を始めた。

魔法を使うのに身振り手振りは必ずしも必要ない。ただ目標に正確に当てる為に手を突き出したり、人によってはマナの融合を意識して行なう為に身振りをしたりする。範囲魔法は範囲の指定に手でここからここまでとするし、単体魔法でも一点で目標を指定したりする。ちなみに上級呪文、ベギラゴン、マヒャド、バギクロス、イオナズンなどの使用にはあまりに大きな力の為、両手を使用しなくてはいけない。

4人それぞれが自分の鍛錬を行なう。マイラの村には珍しい光景がここにあった。

――――――――――――――――――――――――――――――

ここ3日鍛冶小屋では地味な作業が続いている。一文字の親父はミスリルナックルにやすりを当て少しずつ削る。少し削ったらガイラの手の型に合わせる。首を傾げてはまたやすりを持って削る。俺はそれとは別に残りのミスリルを熱し叩き続ける。用意してもらえる予定だったミスリル板は自分でやれと言われたからだ。叩きすぎで腕が痛い、音で耳が痛い。暑さで汗が止まらない。それでも手を止めない。

「なあ、そっちはどうだ?」

「ああ、まだかかるな。そろそろ当の本人に感触を確かめてほしい。」

「そうか、俺も腕の型を取りたい。昼からでも連れてくるよ。」

「そうしてくれ、こいつも待ってる。」

「また武器の声か・・・。じゃあ昼も近いから一度戻る。」

宿屋に歩いても戻る。ガイラが温泉の辺りでまた型稽古をしている。適度に体を動かすよう注意すべきだろうか?部屋に戻って椅子に座る。目を瞑って思考する・・・もう少しでアレフもガイラも仕上がるな。やっと物語が進むな・・・

部屋の扉が開く音で目が覚める。どうも寝ていたようだ。時はそれほど経っていない。

「すまん。起こしたか?」

「いや、いい。体の調子はどうだ?」

「ああかなりいい。もう外に出たい気分だ。」

「駄目だ!あと三日は様子をみる。鍛錬もいいが程々にしろよ。」

「なんだ見ていたのか?人が悪いな」

「帰ってくるとき目に入っただけだ。監視してるわけじゃない。」

「そうか、お前に土産がある。これを見てくれ。」

ガイラが懐から古ぼけた笛を取り出した。

「どこで見つけた？」

「ああ、温泉の近くで鍛錬していたら、一箇所踏んだ感触が変でな、掘ったら出てきた。結構古そうだし価値があるかなと思って持ってきた。」

「まあ金銭的な価値はないな。」

「なんだ、残念だな。」

「だがそれは妖精の笛、かつて大魔王に封じられた精霊ルビスを開放した笛だ。」

ガイラが呆れている。

「相変わらずお前は大事なことをさらっと言うな。」

「この笛は聖なる者を癒し、世に在らざるものを鎮める効果がある。まあアレフにでも渡しておくんだな。」

「そうする。こうちまちました物は性に合わん。」

「そうだろう、懐にいれたまま折れでもしたら困るしな。」

「そりゃそうだ。ガハハッ！」

それから二人で昼食をする。ガイラも普通に食事ができるようになった。アレフとマギーは昼は帰ってこない。まずい携帯食でも文句を言わないらしい。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ガイラを連れて鍛冶小屋に戻る。

「暑いな、ここは！」

「そうか、俺はいつもここにいるからな、もう慣れた。で体調はどうだ？」

「大分よくなった。もう大丈夫と思うがこいつが許してくれん。」

ガイラが俺を指差す。一文字の親父は笑う。

「それは言うことを聞いたほうがいい。こいつは怒ると怖いからな。」

「もうその辺にしとけ、用件だけ済ますぞ。ここは病人にはよくない。」

「ああそうだった。ちょっとこれを握ってくれ。」

ナックルを差し出す。ガイラが握る。

「どうだ、違和感はないか？変にあたる場所があったら言ってくれ。」

「ああ、この辺が・・・」

「こっちはいいのか？・・・」

二人で話している。細かい所まで詰めている。俺は粘土を用意す

ることにした。腕の型をとるつもりだ。

「ガイラ、いいか？ここに左手を当ててくれ。」

ガイラが素直に腕を当てる。俺は型が取れるよう粘土をしっかり押し付ける。

「これどうするつもりだ？」

「篭手を作る。盾の替わりになる。右手も出せ。」

「こっちはいらない。あの武器を握ると邪魔になる。」

「そうか。なら他はいいか？まだ材料は余っている。」

「いらない。あまりつけると動きを阻害する。そっちの方が困る。」

「だ、そうだ。残りのミスリルはやるよ。好きに使うといい。」

余ったミスリルは一文字の親父にくれてやることにした。これだけの武器を作ってくれるのだ、それなりの報酬はやりたい。多分お金は受け取ってくれない。刀の時もそうだった。秘伝書の解読とミスリルの加工法の確立，それが一番の報酬だといって１Ｇも受け取ってくれなかった。今回もそうなるぐらいなら残りを渡した方がずっといい。

「いいのか？もらっちまって。」

「ああいい。もう使い道はない。」

「あの坊主のはどうする？」

「あいつはいい。あいつのは他にある。」

「そうか悪いな。ありがたくもらっておこう。」

鍛冶屋一文字、最高の笑顔を浮かべた。

約束の試験

６／７　勇者支援生活　３８日目

この三日間、毒の症状は出ていない。その当の本人は今俺の目の前ですごい勢いで一人乱舞をしている。

「よしっ全快だ。これでベッドともおさらばだ！」

「わかった、わかった。治ったと判断しよう。もう好きにしていい。」

「よっしゃー！アレフ！約束どおり勝負だ！」

「いいですよ。手加減しませんよ。」

アレフが快諾する。

「ちょっと待て、病気は治ったが体は鈍ってるぞ。半端な勝負すると怪我するぞ。」

「構わん、闘いに餓えてるんだ。やらせろよ、別に勝敗が目当てじゃねえ。」

「もういい、好きにしろよ。ただしアレフ魔法無しな！」

「了解です。」

アレフとガイラが５ｍ開けて対峙する。アレフはすでに抜剣して

いる。

「よ～しはじめるぞ～。できれば寸止めで終わらせてくれ。絶対殺すなよ！俺は大臣に叱られたくない。行くぞ～。」

気合の入らない声で俺が言う。コインを投げる。高く舞い上がったコインが落ちた。

「せいやっ！」

ガイラが間合いを詰め、正拳を叩きつけた。まだ様子見のアレフの鉄の盾に直撃、アレフが２ｍほどズサーッと下がる。思わず右手を地についた。ガイラの追撃はない。

「よっしゃあ！これだこれだ。この手ごたえ！」

ガイラが吼える。アレフが立ち上がり構えなおす。左腕を軽く振る。次の瞬間袈裟切り、ガイラが完全に見切ってスウェー、アレフの斬り返し、ガイラが仰け反った勢いを利用してバク転で避ける。アレフが跳び下がり距離を取り納剣する。

「舐めすぎです。行きます！」

アレフが踏み込みながら抜きうつ。さっきと同じ様にガイラがスウェー、すかさずアレフの突き。同じ避け方はできない。ガイラが右に避ける。突きからの横薙ぎが入る。避けられないと悟ったガイラが左上腕で受け止める。鈍い音が響き渡る。二人が再び跳び下がって距離をとる。アレフが剣を納める。

「これで互いに左腕が使えなくなりましたね。」

そう言いながらアレフが右手で盾の固定具を外す。外した盾は右手。

「そうか、最初の一撃で左手がいったか？」

「おい、もういいだろう。これ以上怪我を増やすな。」

俺は思わず声をかけた。いいかげんにしろよ、誰が治すと思ってるんだ。

「そう言うなよ。まだ楽しませろよ。」

ガイラが俺の方を見て文句を垂れる。

「そうですよっ！と！」

アレフが右手の盾をガイラに軽く投げる。ガイラが思わず盾を受け止めてしまう。そこにアレフの居合い、狙いは脚。そこでアレフの剣が止まった。

「はい、それで終わり。ガイラももういいだろ。お前足腰が弱ってるぞ。」

「ああ、判ってる。しかし容赦無いな、避けるので精一杯だ。しかしまあアレフこれはひどいぞ。」

ガイラが鉄の盾をアレフに返しながら言う。文句を言っているわりには笑っている。

「勝負の最中に目を離す方が悪い。僕はそう習いました。」

「そうだな、お前の言う通りだ。これからよろしくな！」

「はい、こちらこそお願いします。」

俺はマギーと顔を見合わせる。マギーは呆れ顔だ。

「馬鹿が移るぞ。部屋に戻ろう。」

「いいの？怪我してるけど・・・。」

「ああっいい！あれぐらいなら折れてない。アレフのベホイミで十分だ。」

俺はマギーの手を強引に引っ張って宿屋に戻る。

「あー腹立つ。今の体調では勝てないのを判っているくせに！」

「そんなものなの？剣のことはよく判らないわ。」

「あいつは二週間ずっと寝ていただけだ。まともなステップも取れないから上半身だけで避けていた。」

「ふ～ん。で、何に腹を立ててるの？」

「・・・何に腹立ててるのか？俺にもよく判らん。なるほど君は聡いな。」

そうか。アレフの成長、ガイラの体、二人の勝敗、将来の展望、

心配になることでいっぱいだ。なるほど俺はそれらをまとめた何かに心配して、腹を立てていたのか。マギーが微笑んでる。

「そうだ。聡いと言ったついでにマギー、君を褒めてやろうと思っていたことがあるんだ。」

「何？褒められるようなことした？」

「君達は馬車でここマイラに来た。ルーラで来れるにも関わらず。」

「あのルーラを使ってはいけないと言ったのはケルテン、あなた。ならあなたに会う為にそれは使ってはいけない。」

「そう俺が言ったことだ。だからそこまで考えてここまで来た覚悟を褒めてる。」

「褒めるってのは頭をなでるとか、抱きしめるとか、褒美をくれるとか行動で示すものよ。」

「そうだね。」

俺はマギーの頭をなで、抱きしめる。

「続きは城に帰ってからにしよう。扉の外で聞いてる馬鹿がいる。」

扉の外から逃げる音が聞こえた。思わず噴出す。

「いつになったら城に帰れるのかしら？」

「そうだね・・・ガイラの武器ができるまであと二日といったとこ

ろか。それまであの二人に付き合ってくれ。馬鹿二人を使いこなすのは大変だぞ。」

「いいわ。どんな馬鹿でも使いこなすのが筆頭魔術士。そうよね？」

「そうだ、城にはもっと馬鹿が多いからな。今のうちに慣れとくといいさ。」

俺は笑う。マギーも強くなった。皆強くなった。もう俺一人強くなくていい。

旅立ち

６／１０　勇者支援生活４１日目

とうとうミスリルナックルが完成した。握ったガイラが嬉しそうに素振りしている。さらに左手に篭手を装備させる。これはミスリル板をメイジドラキーの翼膜で包んで、一見革の篭手に見せている物である。実は俺が使っている革の篭手も同じものである。

「おい、ガイラ。一人喜んでないで聞け。その篭手は一応盾の替わりになる。この前のアレフの攻撃を受け止めたように使えばいい。ただ刃物など受け止めると表面が切れるから、必要に応じて修理すること。中身は絶対に見られるな。ミスリルナックルも同じだ。一般的な品物じゃないんだぞ、気をつけろ。」

「ああわかった。なんにせよこれは普段は使う必要はないな。拳が効かない相手にだけ使用する。篭手はまあ状況次第だな。」

「本当に判っているのかよ。ではこれからの予定だがアレフと一緒にリムルダールに行ってくれ。まず鋼の剣を買うといい。今もっている素材は俺が替わりに城に持っていく。貯金から購入できるよう連絡はしておく。」

「鋼の剣ですか？楽しみですね。」

「まだまだ、そのうち炎の剣、魔法の鎧、水鏡の盾は購入してもらう。値引き後で９８００Ｇ、７７００Ｇ、１４８００Ｇだ。」

「うっ！そんなお金どうやって集めるのですか？」

アレフがあまりの高額に肩を落とす。

「大丈夫だ。もうガイラに必要な装備はない。これからの収入は全てお前の装備に使えばいい。」

「勝手に言ってくれるねえ。まあいいけどな。」

思わずガイラが突っ込む。

「でも悪いですよ。私が強くなればいいだけなのに。」

「駄目。手に入る装備を考慮して、お前は鍛えてある。大体鋼程度では竜王どころかドラゴンにすら、傷がつくか怪しいな。」

「そうなんですか？」

「さあな、俺もドラゴンに会ったことは無い。でもやってみて駄目だったじゃすまないだろう？」

「ガハハッ！違いねえ。王家の秘法とやらで生き返るかもしれないがそれは嫌だな。」

ガイラが気楽に言う。アレフが嫌そうな顔をする。

「あのなあ・・・だれがそれを回収しに行くと思ってるんだ！」

俺一人でドラゴンと闘えと、魔物の巣窟へ忍び込めと・・・それ無理。

「そうならないよう気をつけます。」

「そう心掛けてくれ。それにいずれロトの装備を手に入れることがあるかもな。」

「でたわ、またケルテンの予言ね。よかったねアレフ、ケルテンの予言は当たるわよ。」

マギーが横から口を挟む。マギー違うんだ。これは予言じゃない、予定だ。

「そうなんですか？でも頑張ります。」

「俺の予言とやらはいい。ガイラ、アレフ。ロトの石碑は読んだか？」

「ああ一応読んだ。」

「僕もこの間読みました。」

「じゃあやるべきことは判っているな。」

ガイラとアレフが首を縦に振る。

「ならいい。これからロトの軌跡を辿ることになるだろう。頑張れ。」

「おう、任せろ。」

「はい、でもロトの遺跡で勇者様が男性の戦士、優しそうな女性、理知的な男性が一緒にいる夢をみたんですが単なる夢ですかね？」

「えらい具体的な夢だな。それで正解だ。ロトの勇者に付き従ったのはまず男の戦士、なんと近衛騎士団長どのが末裔にあたる。次に女性の僧侶、最後に男性の賢者だ。あとの二人の末裔は自分で探せ。」

「はあ、よくご存知ですね。驚いてくれると思ったんですが・・・」

「ああ昔調べた。ある意味驚いたな、俺の長年の調査は夢一つと等価か。お前さん、もしかしたら本当にロトの血を引きし者かもな。」

「冗談は止めてくださいよ。僕はそんな大層なものじゃありません。」

アレフが両手を大きく振って否定する。

「まっそんなの関係ないしな。大事なのは血より志、そうだろ?」

「だなっ!俺らはその志とやらの絆で結ばれている。たとえ離れていてもお前もいっしょに戦っている。」

「私は?」

「そうだった。嬢ちゃんもいっしょだったな。」

「ガイラ、嬢ちゃんなんて言ったら駄目ですよ。ケルテン師匠より怖いですよ。」

「そうだ。マギーを嬢ちゃんなんて言えるやつは城にもいないぞ。」

「そっか、気をつける。」

「おい話題が逸れとるぞ。それとアレフ、もう師匠はいい。名前で呼んでくれ。」

「えっ師匠は師匠ですよ。」

「駄目。ガイラにはガイラって呼ぶくせに、俺にだけ師匠とかつけるのもう無し。」

「わかりました。じゃあケルテンさん。」

「まあ、とりあえずそれでいい。じゃあアレフ、お前に俺の馬を貸すからそれでガイラと行け。俺はマギーと城に帰る。」

「判りました。ではガイラ、行きましょう。」

「おう、俺の馬は速いぞ。遅れるなよ。」

「駄目です。僕が先行しますからついてきて下さい。」

二人が駆けていった。しばらく面倒をみる必要はないな。

「さあマギー、城に帰ろう。（俺はＭＰを・・・」

マギーが人差し指で俺の口を押さえる。

「駄目、ルーラは私が使う。私の方がＭＰは多いのよ。」

「そうでした、お嬢様。では城に戻りましょう。」

そして一つの光がラダトーム城に跳んだ。

急転

6／11　勇者支援生活　42日目

国務大臣執務室に行こうと約2週間ぶりに城の2階に上がる。それはともかく様子がおかしい。文官側でそわそわ、ざわざわしている。さらに大臣の執務室の前に人だかりができているのだ。俺に話しかけてくるやつは少ないはずなのだが何人かに声をかけられた。

される質問は皆同じ「担当の勇者は大丈夫か?」ばかりだ。何か気持ちが悪いのであいまいにしか答えは返さない。なんとか人だかりを割って執務室に入る。そこに顔色が青くなったシュミットがいる。なにやら大臣と深刻に話をしているようだ。

「勇者支援官ケルテン戻りました。長期留守にして申し訳ありませんでした。」

「よい。ご苦労であった。してそなたの担当の勇者はいかに?」

「はっ!勇者51は素行不良にて解任、勇者25、55共にリムルダールに向かいました。概ね順調です。」

「よろしい。この者の報告を受けていたのだがそなたも聞くがよい。もう一度説明せよ!」

「はっ!小官が担当する勇者12、41，42、43が昨晩から今朝にかけて消息を絶ちました。当人達の申告からリムルダール方面に向かったはずです。5日前のことです。光点も消滅しております。」

「と、いうことだ。そなた何か心当たりはないか？」

「そうですね・・・小官は昨日までマイラの村におりました。それまでに見かけたことはありません。」

「なるほど。ではシュミットよ、ケルテンと協力して探すがよい。そなたもよいな。」

それだけ言うと大臣は自分の席に戻るとベルを鳴らす。何人かの文官が入室し次々に書類を渡し始めた。

シュミットの青い顔はそのままだ。

「シュミットもそんな顔をするんですね？真っ青ですよ？」

「そうか？いや自分でも驚いている。他人のことでこんなに動揺するとはな。俺らしくもない。」

「飄々としていても意外に人情家ということですか・・・」

「なるほど、同行している間にねえ・・・よしならば早く探し出してすっきりしよう。」

そう言うと魔法の地図に目を移す。今見える光点は毒の沼地辺りに二つ。契約書を取り出して映像で確認する。

「間違いない、これは俺の担当のアレフとガイラだ。」

「しかしここからリムルダールに向かうと5日の距離はこの辺だな。

」

そういって地図の海底洞窟を指差す。

「そうですね。普通ここは南北の通路をまっすぐ使用するだけで、それなら一日もあれば通過できるはず。」

「何だ、通ったことがあるのか。俺もそうだがあまり実入りのよくないというか東側の入り組んだ所には行かないな。」

「ですよね。人為的に整備された本道と、東に広がる複雑な自然窟。」

「迷い込んだか？しかしこの辺りはそれほど強い魔物はいなかったはず。」

「そうですね。魔法使い、ゴースト、メーダ、おおさそりといったところですかね。」

「驚いた、よく知っているな。まあ土着のメーダ、おおさそりくらいしか知らなかった。」

アレフガルドには平和なころにもある程度魔物はいた。スライム類や野生の動物に近い魔物おおさそり、メーダ、キメラなどがそれにあたる。しかし魔王の復活によってそれらの魔物が瘴気により凶暴化、他に様々な魔王の手下が散らばった。さらにあの洞窟の最奥には王女がドラゴンに監禁されている。それに遭遇したか・・・。

「まあそれはね・・・いろいろと。しかし魔法の地図から光点が消えるとはどういうことでしょう？」

「そうだな、可能性としては肉体の消滅・・・食われたか、灰にされたか。なんにせよ生存は絶望的か。やりきれないな。」

シュミットが頭をかるく横に振る、そして俯いて黙っている。かける言葉が浮かんでこない。しばらくの沈黙の後シュミットが提案する。

「しかし事の顛末を確かめなくてはならないな。ケルテン、一緒に行ってくれるか？」

「了解です。しかし時間がかかりますよ？馬では毒の沼地を渡れないし、手前で馬を乗り捨てるのも気が進まないですね。」

「ならば馬を回収できる者を同行させる。まず沼地の前まで馬で行く。俺達はそこから徒歩、同行者が馬を連れて帰る。俺達は調査の後ルーラで帰ればいい。」

「ＯＫ！それで行こう。では急ぎましょう。一時間後に兵舎の厩舎でいいですか？」

「わかった。では一時間後に！」

俺達は退室の挨拶も程ほどに走り出した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

自室で出発の準備をしている。時間が無いので騎士見習いにも手伝わせる。馬の手配、野営用品、食料など用意する物は多い。それも昨日帰ってきたばかりだ。どうもこの部屋に縁が無いようだ。

さて緊急の課題がいくつかある。整理してみよう。

まず第一、王女の監禁場所とドラゴン。これは今から行かねばならないがどこまで調査しようか？仮定の話として王女がここで監禁されていることが公表されるのは事態の好転になるだろうか。いや駄目だな。今のところドラゴンを確実に倒せる手駒はない。軍隊を送るにしても秘密裏に送るのは無理、しかもあの狭い中では力を発揮できない。さらになんらかの方法で奪還に成功したとする・・・これも駄目だ。今は不完全ながらも戦局は膠着、所謂冷戦状態になっている。バランスがくずれたとき竜王はどうするだろうか？同族が殺された怒り、王女奪還の焦りで全面攻勢にでてくるかもしれない。しばらく公表は控えたいな。

第二に血の契約書対策、俺、アレフ、ガイラ、そしてマギー。昨日ピロートークでなんとなく聞いてみたら、やはり文官も誓約書を提出していた。この４人分の対策が必要だな。方法はあるが準備には時間がかかる。先の問題も含め、時間稼ぎをしよう。

第三、時間稼ぎができたと仮定して、ロトの神器の収拾、雨雲の杖、太陽の石、虹の雫・・・まあこれは先の二つが解決してからでいいや。あとロトの装備も集めないといけないな。

そうこう思考していると準備が終わったようだ。どうも途中から見習いに全部やらせていたらしい。かわいそうなので１０Ｇの駄賃をわたす。ついでにマギーに手紙を渡すよう頼む。現金なやつだ、快く引き受けてくれた。

海底洞窟

6／13　勇者支援生活44日目

目の前に毒の沼地が広がっている。正直気が進まない、竜王が現れるまで毒の沼地なんぞごく一部しかなかったし、無理に通る必要がなかったから入ったことない。しかしここから海底洞窟までここを通っていくしかないのである。

「薬草と毒消し草を絞った汁を布に染み込ませて、それで口を押さえるんだ。これで瘴気を吸う量がある程度軽減できる。」

「お前いろいろよく知っているな。その若さでその知識量、油断ならないな。」

「無駄口叩くと瘴気を吸い込むぞ。まあ俺も気に入っている他称だが伊達に“戦う考古学者”とは呼ばれていない。」

「なるほどねえ、いいあだ名だな。俺も女たらしとかすけこましよりそんなあだ名がいいな。」

「普段の行いが悪いからだ。そのあだ名をつけてくれた友人が教えてくれた方法だ。そいつは馬ですらここを通すぞ。」

「マジか！すげえな。俺にも紹介しろよ。」

「もう知っている。勇者25ことガイラだ。俺がつけてやったあだ名はサバイバルの達人。」

「それも格好いいな。」

「もう黙れよ。頭がおかしくなってくるわ！」

それから何を話しかけられても俺は返事をしなかった。ずっと沼の南側、山に沿って歩いている。俺が先行して足場を確保する。返事をする余裕なんかあるもんか。

――――――――――――――――――――――――――――――

日没を2時間ほど過ぎてやっと海底洞窟についた。レミーラも使用しての強行軍だ、俺もシュミットも肩で息をしている。毒の沼地ではキャンプはできない。そうでなくてはこんな強行軍はしない。

「どうする？ここで寝るか。トヘロスは効果が薄そうだ。どっちかが見張りをしなくてはいけない。」

「よし、ケルテン。お前が先に寝てくれ。お前が先行してくれたおかげでまだ余裕がある。」

「わかった。言葉に甘える。5時間寝たら起こしてくれ。」

俺は毛布に包まり目を瞑った。トヘロスは多少残っている精霊ルビスの加護を得る魔法。ただし洞窟などルビスより魔王の影響の強い場所では効果が薄い。そんなことを考えていると意識が遠くなった。

「ケルテン！ケルテン！」

誰かが俺の体を揺すって名を呼んでいる。ああそうだ。ここは海底洞窟、もう5時間たったたか？

「ああっ、もう時間か？」

「そうだ。外で星を見て確かめた。すまんな、もう少し寝させてやりたかったが・・・。」

「いやいい。見張りは変わる。寝てくれ。」

「了解。日が昇ったら起こしてくれ。」

シュミットが眠った。周りを見渡す。永遠の闇が広がる、そんな気がする洞窟内だ。ここはまだ洞窟の入り口に近いからほんの少しの光りが入ってくる。洞窟内では目立つため、今は明かりをつけていない。

暗闇に目を凝らす。少し離れた所に魔物の死骸、その傷口は焼きったようだ。炎の剣・・・雷神の剣のレプリカ、そう結論付けた。素材はミスリルではないが、内包させた魔力により抜剣時は常に灼熱化している。間違って自傷する可能性が高いため、未熟な者は使用できない。つまりシュミットは強い。なるほど今のこの状況では明かりの確保もできてちょうどいいか。

どうせ目を凝らしても魔物の姿は見えない。なら立ったまま目を瞑り意識を広げる。何も考えていないが意識のある状態を保つ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・無理だった。

仕方がないので暗闇の中でいつもの鍛錬をする。シュミットを起こ

すのは悪いので少し離れて刀を振る。これが一番落ち着くな。結局俺の剣気によってかどうかは判らないが、魔物は現れなかった。日が昇るまでの時間が永遠に感じられた。

――――――――――――――――――――――――――――――

俺達は暗闇の中進む。ここにいないはずの強敵を恐れて、レミーラの明かりを布で隠して光量を調節している。メーダやおおさそりは闇でもこちらを発見してくる。もっともこちらでもその気配が音だけでもはっきり判るからまだ楽だ。魔法使いが持っている明かりは先に見つけやすいので、こちらが闇に紛れて過ごすか、不意打ちで倒す。問題はゴーストだ、気配がほとんどなく壁をすり抜けて不意打ちをしてくる。不意打ちに対応するのは諦めて、不意打ちを受けてから二人で背を合わせこちらの隙をなくした。ゴースト自体はそれほど強くはない。

半日ほど進んだだろうか?時間の間隔はない。腹が減ってきたので携帯食を口に運ぶ。俺が小声で話題を振る。

「なあ、もしこの先にとんでもない敵がいたらどうする?」

「どの程度の強敵だ?」

「そうだな・・・例えばドラゴン、悪魔の騎士、ストーンマン、大魔道とかかな?」

「ドラゴンならすっ飛んで逃げるね。鎧の化け物や魔道士系は相手の数次第だ。そのストーンマンとやらは聞いていないな。」

「メルキドでゴーレムと激戦を繰り広げた魔物だ。まあゴーレムの

方が強かったから街は守られた。」

「それこそこんな所には入らないだろう。まあいずれにしろ相手にはしないな。」

「その通りだ。しかしやつらはなぜここにいるのだろう?」

言葉を選んで話す。

「それは判らんな。考えても無駄だろう。もう行こうか。」

再び暗闇の中を進む。暗闇と静けさの中に違和感が現れた。耳を澄ます。俺は小さな声で囁く。

「おい、何か聞こえないか?」

「ああ聞こえる。獣の呼吸音だ、それもかなりでかい。」

「俺が偵察に行く。あんたの魔法の鎧よりは俺の革の鎧の方が静かだ。」

「いいのか?危険だぞ!」

「どっちにしろ、誰かが行かねばなるまい。もし俺が戻らなかったらリレミトで帰って、強い魔物がいたと報告してくれ。できればしばらくここには誰も来させるな。いいな。」

「・・・判った、お前の言う通りにしよう。俺が行くのは適任ではない。」

「戻らない基準だが、俺の悲鳴や断末魔が聞こえたら即逃げろ。呼吸で１０００回、それだけ数えて戻らなかった場合も同様だ。では行く。」

暗闇の中、頷いたような気配がした。俺は摺り足で少しずつ進む。１００歩は歩いただろうか、幾つかの角を曲がった先に明かりが見える。一度戻る、シュミットが俺を迎える。

「どうだった？」

「もう少し先に明かりがあった。そこまで行こう。」

シュミットが左手の鋼の盾のベルトを閉めなおす。腰の炎の剣に右手を添えたまま進む。無言のまま先の場所についた。

「確かに明かりだな。待て！よく見ろ。あそこの床に焦げ跡がある。」

シュミットが指差す。目を凝らす・・・なにか転がっている。

「何かあるな、よし取ってくるぞ。さっきも言ったが何かあったら逃げろ。」

もう明かりを気にしなくてもいい。足音を立てないようにじりじりと摺り足で進む。転がっていたのは半分溶けた鉄の盾。手に取って戻る。シュミットと目があう、真剣な顔で俺が戻るのを見守っている。他人事みたいに可笑しい。

「とりあえずは戻ろう。最低でもこうできる魔物だ。」

「しかしまだ何を見てないぞ。」

「いや駄目だ。鉄の盾が溶けるような攻撃ができる敵だ。それだけ判るだけでも収穫だ。」

シュミットがしばらく黙る。顎に指を当てて何か考えている。

「判った、戻ろう。この情報だけでも報告する。」

「ならリレミトを使う。俺が完全無詠唱で使う。いいな?」

「まかせる。」

俺達はリレミトで外にでた。思わず深呼吸ををする。ここは毒の沼地、空気がまずい。あわててルーラを使う。城下町だ。やっと落ち着いて深呼吸ができた。座り込んで二人で顔をあわせて笑う。通りがかる人々がおかしな顔をしている。生きていることを実感した。

国務大臣は俺達の目の前で難しい顔をしている。

机の上に半分溶けた鉄の盾がある。鉄の盾といっても全部が鉄でできているわけではない。そんな鉄の塊を作っても誰にも持てない。基本木の盾の表面に鉄の板を貼り付けた物だ。だからといって簡単に溶かせるものではない。

「これはどういうことだ。」

「見たままです。そういうことのできる敵がいたようです。」

「いたようだと？では見てはいないのか？」

目に見えて大臣の機嫌が悪くなる。そこにシュミットが口を挟んだ。

「見てはおりません。この事実の報告が大事と小官が判断しました。」

「そうか、ならばよい。大儀であった。」

大儀か、俺は一礼すると踵を返した。隣のシュミットも同じくそうしている。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――

俺とシュミットはそのまま近衛騎士の控え室にいる。近衛隊長、サイモン、他大勢の騎士に囲まれている。先ほどの溶けた鉄の盾を見せている。

「発見場所は言えないが、このような物があった。」

俺がそう発言する。皆言葉を失っている。空気を読まないサイモンが言う。

「すげえな、どうやったらこんな風になるんだ?」

「わからない。予測はついているが見てはいない。」

「その予測とやらを教えろ。」

「サイモン!少し言葉が過ぎるぞ。」

隊長が苛立って叱る。だがその言葉に重々しかった空気が緩む。

「構いません。この馬鹿はいつものことです。では説明します。これは火の息によるものでしょう。」

「馬鹿な!先の大戦でドラゴンが噴いた火の息でもこうはならなかった。」

「そうだ。そんな馬鹿げた話はない。」

「ありえないな。なんらかのトリックか欺瞞だ。」

ふむ。結論を知っていなければ信じられないだろうな。あの先には間違いなくドラゴンがいる。俺は知っている。ただこれは想像を超えている。

「ならそう考えてもらってもいい。だがもしあんたらがその火の息を受けたら、盾ごと黒こげだな。」

「ケルテン！それはよい。後で私から叱っておく。これを見せたのは備えろ、そう言いたいのだな？」

流石、伊達に隊長をやってはいないとみえる。俺は黙って頷く。

「わかった。どう備えるかは検討してみる。だがこれはどこで？」

「先も言いましたが教えることはできません。これはそこのシュミット殿と決定したことです。」

「そうです。我々特務隊士の権限で口外も禁止させてもらいましょう。一般兵にまで漏れると士気に関わります。」

その言葉にその場に居合わせたうちの半分が不満そうな顔をする。内容ではなく命令されたことに対してだ。なるほど近衛騎士はエリート意識が強いか。サイモンは涼しい顔をしている。

「とりあえず事実は伝えました。あとはお任せします。シュミット行きましょう。」

俺達は近衛控え室をでた。歩きながら話す。

「あんたも貴族の割には近衛に好かれてないな。」

「ああ、俺もあまり好きじゃない。あいつらは格式とか礼儀とかうるさい。さらに俺の剣技にもけちをつけてくる。」

「なるほど、そう言うことか。さっきあんたが命令したときの反感がひどかったので気になった。」

「よく見ているな。よく言われたよ、お前の攻撃は軽い。速さはあるがそれがどうした、そんなもの効かない。ってね。」

「馬鹿は放っとけ。あんたは強い、俺が保障する。」

「おまえに保障されてもなあ、いや感謝する。俺もおまえの強さは保障してやる。」

「褒められたと思っておこうか。」

俺達国務大臣特務隊士、この城では異端者。

――――――――――――――――――――――――――――――

一度部屋に戻って荷物を漁る。２つ同じの水晶のペンダントと取り出した。その足で図書館に行く。

「はいマギー。今戻ったよ。」

「おかえりなさい。怪我は無い？」

「ああ大丈夫だ。やばくなる前に逃げ帰ってきた。」

「逃げ帰る？珍しいわね。あなたらしくもない。」

怪訝そうな顔をする。

「俺は自信過剰の騎士とは違う。彼を知り己を知れば百戦危からず。つまり勝てない相手とは戦わない。」

「それいい言葉ね。ちょっとメモするから。もう一回言って。」

「彼を知り己を知れば百戦危からず。」

「OK！書けたわ。それでどうしたの？私に会いに来ただけ？それでもいいけど。」

知識欲が満たされていい気分のマギーだ。

「この間の御褒美を持ってきた。これだ。」

俺が二つのペンダントを取り出す。一つを渡す。

「一つは俺の、もう一つは君の。これには必要な儀式がある。」

「儀式？何か意味あるの？」

「ああもちろんある。俺がいつまでも俺であるように、君が君でありますようにって意味だ。」

「何か深いわね。いいわ、やりましょう。」

俺がナイフを取り出し自分の指に小さな傷をつける。血を一滴、水晶に垂らす。水晶が真っ赤に染まる。なぜかその色は落ちない。ナイフをマギーに渡す。

「同じ様に。」

マギーが同じことをする。終わったらホイミをかける。

「これでいい。身から放さないでくれ。俺も身から放さない。」

「ふ～ん。よく判らないけどそうするわ。せっかくの貰い物だもんね。」

マギーが首にペンダントをかける。真っ赤に染まった水晶が怪しく光った。

アレフとガイラ

6／15　リムルダール近郊。

「なあアレフ。お前なんで弱いがいこつより、死霊の騎士の方が楽に倒せる？」

「えっ！判りますか。なんと言うか・・・その動きが読めるんですよ。死霊の騎士はジョルジョと同じ動きをするので・・・ああジョルジュってのは一緒に訓練していた騎士見習いなんだけどね。」

「ほう、正規の訓練を受けた者とそうでない者の違いか？」

「そう、がいこつは素人っぽい感じで何をしてくるか予想できない。だけど死霊の騎士は型通りの動きをするので少しずらして避けたり、カウンターを合わせたりしやすい。魔物がなぜなんでしょうね？」

こいつ気づいたか？学者の仮説どおりじゃねえか。あの魔物が元人間だとはとても教えられないな。俺はとぼける。

「さあな、俺にはわからん。帰ったら学者にでも聞けよ。」

「そうしましょう。では次あそこに見えるリカントにいきますか？。」

「ＯＫ、ついてこいよ！」

ガイラは愛馬ライに飛び乗り駆け出す。少し遅れてアレフが馬で駆ける。リカント達が蹴散らされた。

――――――――――――――――――――――――――――――

日が落ち、焚き火を囲む。

「トヘロスを使いました。ある程度は安全だと思います。」

「OK、そこら辺に鳴子を仕掛けた。カモフラージュも十分だ。しかしお前さん、野営もなれたものだな。」

「つい2週間前に習いました。いや習ったと言っていいのか？」

「なんだそれ？」

「師匠にですね。無理やりやらされた・・・ですかね。急に馬にのってマイラへ行くぞって言われて、ついていったらまあひどい目にあったんですよ。」

ガイラが笑いながら焚き火に薪を放る。

「驚きましたよ、食料がないと言われたときは本気で殺意が沸きました。」

「ふん、あいつらしいな。絶対わざとだ。」

「僕も後で気づきました。他にも互いに速さの違う馬を用意したのも、カエルを食べさせたのもみんなそう。」

「なるほど、俺に渡すまでに完成させた・・・そう言うことか。」

「まだ完成にはほど遠いですけどね。基本的にあの人教えてくれないんです。ただそこにヒントを置いておく。でも気づかないと捨てられる怖さがあります。」

「そうか、お前は置いていかれるのが怖かったのか。いい師匠を持ったな。」

「もちろんです。僕が選んだ師匠ですから。」

「あいつなあ、怒ると怖いんだよな。この前の病気の時な・・・俺の言うことを聞いて病を治す気がないなら一人で死ねって言われた。あれは効いたな、まじでへこんだ。」

「それ判ります。いろいろ心当たりあります。」

「まあいいさ、今日はあいつの悪口でも言おう。」

それから夜中になるまで語り続けた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

朝になる。日課の鍛錬をする。

「鋼の剣はどうだ?」

「あまり変わらないですね。基本ができていれば得物が変わっても問題ないようです。」

「そうだな、俺のミスリルナックルも違和感はない。これなら多分いけるな。次ゴールドマンを見つけたら戦ってみよう。」

「そうですね、この前は銅の剣だったので止めましたが、もういいですよ。」

しばらく鍛錬を続ける。朝食を取る、まずい飯にも慣れた。

「なあお前聞いてるか?昔、俺と学者で遺跡を探索していたこと。」

「なんとなくですが聞いてます。」

「あれなぁ、地方の小集落を回ったんだがな、力仕事と護衛を頼まれたんだ。高報酬に釣られて依頼を受けた。あの頃は平和だったから若い学者の道楽に付きあうのも悪くはなかった。」

「へえ〜・・・それもいいですね。うらやましいな。」

「それがそうでもない。あいつ何か見つけるとこっちの話を聞かん。雨の祠のところで、半日地面に這いつくばっていたときは腹が立ってたまらんかった。ずっとやることもなく待っていただけだったからな。」

「半日ですか、何かありましたか?」

「昔ここには天に届かんばかりの塔があったと嬉しそうに言ってた。地面の岩や石の基盤を調べていたらしい。まあ本当かどうかは知らない。ただ、いろんな骨董品がでてきたから金にはなったがな。」

「はあ本当ですかね?」

「さあね？まあそんなわけで俺も受け売りながらロトの伝説には詳しい。しばらく力試しが済んだら南の聖なる祠、別名虹の祠へ行く。その後にでもさっきの雨の祠にも行く予定だ。」

「そこがロトの友の末裔のいる場所ですか？」

「そうだ。昔あいつと回ったことが役にたつとはな。じゃあ今日はの第一目標はゴールドマン、次にキメラだ。キメラは上位種もいるから戦い慣れてくれ。」

しばらく歩いてゴールドマンの足跡を発見した。重いゴールドマンの足跡だ、後をつけるのはむずかしくない。果たして・・・ゴールドマンを発見した。

「よし、俺が後ろに回って脚に一撃を入れる。5分ぐらい経ったら奴の気を逸らしてくれ。」

それだけ言うとガイラは離れた。気配を消して裏に回る。アレフはゆっくり数える。1，2，3・・・・・・・・・・・・・・・297、298、299。アレフがゴールドマンの前に飛び出す。

「ギラッ！」

火球がゴールドマンの顔面で弾けた。対してダメージは入っていない。ゴールドマンがアレフを敵として認めた。振り下ろされる大きな右腕、アレフはすでにそこにはいない。ゴールドマンが敵を探そうと体を起こした。次の瞬間ゴールドマンの右膝の裏にガイラの一撃、バランスを崩してゴールドマンがひっくり返る。

「アレフやれ！弱点は額だ。」

アレフが藪から飛び出す、仰向けになったゴールドマンの顔に飛び乗り、額の刻印に鋼の剣を叩き付けた。ゴールドマンは糸が切れた操り人形の様にいきなり動きを止めた。

「やったな。ナイスだ。」

「いえ、転んでなければできません。」

ガイラが自分の攻撃の跡をみる。そこにはミスリルナックルの跡がはっきり残っている。

「改めて思うがこれはすごいな。武器のおかげだな。」

「武器を使いこなすのも強さのうちだそうですよ。」

「違いねえ。しかし学者の言ってた弱点・・・本当にあるとはな。見ろ！」

ガイラがゴールドマンの額を指さす。そこには読めない文字で何かが書いてあった。そのど真ん中に大きな傷が入っている。

「これが弱点？」

「ああ、金塊を安全に運ぶために作られた金のゴーレム、それを動かすための魔術儀式らしい。文字を消せば動きは止まる、そう聞かされた。学者の知識に感謝や。」

「じゃあこれ本当に金なんですか？持ち帰ればゴールドになります

ね。」

「ああリムルダールに持ち帰って売ろう。それでお前の魔法の鎧が買える。」

二人でなるべく細かく解体する、できるだけ馬に載せる。さあリムルダールに戻ろう。金で重いはずのその足取りは軽かった。

暗雲

６／１５　勇者支援生活４６日目

現在活動している勇者が2名しかいなくなったことを憂慮して、国務大臣から命令が下った。地方で勇者に相応しき者をスカウトせよとの事である。それについて今シュミットと食堂でぼやいている。

「シュミット、無理だ。」

「そうは言っても探すしかないだろう。俺が知っている限り城下街、ガライ、マイラはすでに余地はない。お前はどうだ？」

「リムルダールは俺の故郷だが俺以上の腕利きは少ない。街の守備隊長は俺より剣技は上だが魔法はからっきし、なにより街の守備隊長を引っこ抜くわけにはいかない。魔法の使い手の心当たりもないことはないが年齢の問題で推薦できない。」

「となるとメルキドか・・・メルキドが攻められた時向こうから脱出してきた者がいるが、キメラの翼を使って逃げてきた者でなんの役にも立たん。」

思わず二人してため息をつく。

「いずれにせよ誰かが行かねばならん・・・か。」

「俺が行く。ケルテン、お前は残れ。お前はお前の勇者の面倒を見るべきだ。」

「だが、それではあんたがっ！」

なぜかシュミットが笑っている。荒げた声が続かない。

「何を言うか、俺はメルキドの女に顔を見せに行くだけだ。ついでにめぼしい人材がいるといいな。」

ルーラで送るべきか？失うには惜しい・・・どうする？思考が絡みつく。そんな俺に気づいたのかシュミットがさらに笑う。

「ははははっ、聖水と薬草を買い込んで行くさ。玉砕する趣味はないし、やばくなったらルーラでもキメラの翼でも使って逃げてくるさ。」

「そうか、そうすればまだマシだ。だがどうやってメルキドに入る。守護するゴーレムが無差別に攻撃するようになっていると聞く。」

「噂には聞いている。まあ壁をよじ登るなり裏口から入るなりするさ。」

わざとらしくふざけてみせる。それが判るだけに止めることができない。

「・・・なら途中までも送らせてもらおう。ドムドーラまでとは行かないがせめてその手前くらいまでなら・・・。」

「そうだな。そこから先は不眠不休に近くなるからな。それまでは楽させてもらおうか。」

「ああ、野営でも寝ずの番でも務めさせてもらうよ。」

それが欺瞞なのは自分が一番知っている。それでもこの男にできることはしてやりたい。

――――――――――――――――――――――――――――

俺達は各自馬に乗っている。更にもう一頭の馬を連れて駆ける。3頭ともかなりいい馬を無理言って借りてきた。一日目は少し遠回りになるが安全にキャンプできるロトの遺跡で寝る。

「明日は岩山の洞窟の手前位まで行こう。明後日にはドムドーラ付近まで行けると思う。」

「無茶言うねえ。いやこのメルキド行き自体が無茶か。」

「そうだ。この馬は普通の馬より倍は速く走れる。更に持久力もある。明後日からはこっちの替え馬を使えば少しでも早く走れるだろう。」

「そこまで考えていたか。荷馬にしては速いと思っていたところだ。」

「ふん、今日はもう寝ろ。明日以降まともに寝れる保障はないぞ。」

「そうだな。お前さんがいる間は全部任せる。」

それだけ言うとシュミットが眠る。俺も寝るとしよう。明日明後日は不寝番は俺がやらねばなるまい。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

それからさらに二日、予定どおりドムドーラへの橋を越えた。夜は俺が不寝番をし、空が明ける頃から少し仮眠をとった。馬の休憩で停止した時も仮眠をとった。眠さで限界だがシュミットを笑顔で送る。

「では行ってくる。速ければ一週間で戻る。」

「任務なんぞ捨てていいから無事に戻って来い。あんたの死体を向かえに行くのは簡便してくれ。」

「心得た。俺はそんなに任務に真面目じゃない。じゃあな。」

シュミットが駆けていく。その姿が見えなくなるまで見守った。俺は何気に馬を引いて橋を戻る。さあ城に戻ろう。ルーラを詠唱する・・・なぜか発動しない。しまったマホトーンか！周りを見渡す。橋を渡った先に２体、後ろに２体の鎧の騎士が現れた。さらに橋の下に漆黒の鎧の騎士。

挟まれたか。まずいな、いつもの自己強化魔法も使えない。どうする？ここは逃げるべきだ。馬に飛び乗り、もう一匹の馬に鞭を強く当てる。尻をぶたれた馬が暴走する。前方の鎧の騎士が割れた、俺の馬もその間に向けて駆けさせる。馬体を強引にぶち当てて通り抜けた。しばらく駆けさせて距離をとる。懐を漁ってキメラの翼を天に投げた。護身用に一つ持っておけ、これはアレフに俺が言った言葉だ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一一一

橋の上にいた鎧の騎士が姿を消す。漆黒の鎧の騎士がゆっくり上に上がってくる。兜の上には血のように真っ赤な房。

「くっくっくっくっ！やはり思ったとおりだ。あやつめ、慌てふためいておった。俺が知っているあいつはこれぐらいの敵は蹴散らせるはずだが、魔法を封じただけでこれだ。逃がしたのは惜しかったがな、だが次は勝てるぞっ！ああっはっはっは・・・・・・・・・・・・！」

誰もいなくなった橋に男の笑い声が響き渡った。

深刻な申告

ラダトームの入り口、馬ごと戻ってきた。落馬と見間違わんばかりに馬から降りる。衛兵が駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？」

「ああ・・・ああ大丈夫だ。すまなが馬は返しておいてくれ。俺も落ち着いたら・か・・え・・・る・・・・・・・ＺＺＺ」

――――――――――――――――――――――――――――

はっ！意識が覚醒した。見慣れた部屋、俺の部屋か。俺の額には冷たいかたく絞った布。ベッドのすぐそばにはマギー、椅子に座ったまま寝ている。額の布をとり上半身を起こした。

「マギー、そんなところで寝ると風邪ひくぞ。」

マギーの顔に手を当てる。

「う、うん。何・・・・・ああ、ケルテン起きたのね、よかった。」

マギーが目を覚ます。あまり慌てた様子はない。

「ああ、また心配かけた、すまない。」

「そんなに心配はしてないわ。ただの睡眠不足、疲労でちょっと熱があったくらい。」

「そうか、ずいぶんと冷静な判断だ。で、俺はどれくらい寝ていた？」

マギーが立ち上がって窓へ歩き、カーテンを明ける。朝日が眩しい。

「そうね、まる一日にはちょっと足りないくらいね、ずいぶん寝坊なこと。それとあなたの無茶には慣れたわ。」

ベッドから降りる、少し体が硬い。ストレッチをして体を解しながら声をかける。

「それほど無茶するつもりはなかったんだけどな。最後に一つ誤算があった。」

「誤算？」

「ああ、シュミットをドムドーラ近郊まで送った帰りに魔物に襲われた。それも俺を狙っていたような気がする。」

「そんなこと判るの？」

「ああ、不意打ちで魔法を封じられた。橋の上で鎧の騎士2体ずつ両端から挟み撃ち、さらに橋の下でそれを指揮している奴がいた。漆黒の鎧に真っ赤な兜飾りの鎧の騎士・・・話に聞く悪魔の騎士とは違う。」

「よくそんな危機を逃れられたものね。」

「そうだな。連れていた馬を一頭突っ込ませた。暴走した馬で割れ

た隙間を強引に抜けた、後はキメラの翼。置いてきた馬にはかわいそうなことをした。

「そう・・・でもよくそんな瞬間的に判断できたわね。」

「戦う気がなかったからね。すぐに逃げることしか思いつかなかった・・・それが幸いしたか、多分下手に抗おうとしたら命はなかった。」

マギーが俺に近づいて抱きつく。

「私を置いて死ぬなんて許さない。どうせ死ぬならあなたの全てを私に渡してからにして、それまでは死んでも死なせない。」

「なんだ、やっぱり心配してたんだ。なんか理不尽だけど俺も死にたくないから努力する。それでいいか？」

「・・・・・・・・・・・・・・」

返事は無い。より強い抱擁、俺も強く抱きしめる。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

国務大臣に報告するため、国務大臣執務室にいる。

「シュミットをメルキドに向かわせております。現在位置を確認したいのでシュミットの誓約書をお貸し下さい。」

「そうか、何時に結果がでるか？」

大臣が抽斗をあけ、シュミットの誓約書を差し出す。相変わらず厳重だ。

「そうですね、最速で一週間といったところでしょうか。」

俺は魔法の地図を起動させる。シュミットのマーカーはドムドーラ南、動きはない。水晶球の映像で確認する。どこか薄暗い所で寝ている、休憩中か。

「無事を確認しました。必ず戻ってきます。」

「ふむ、だがそれだけでは困るのだがな。」

頭に血が昇る。まるで個々の生命には興味が無いかのようだ。心を静める。こいつに何かを期待したのが間違いだ。

「そうですね、なんらかの結果を持ち帰ってくれます。それともう一つ報告したい事が！」

「なんだね？わざわざ報告せねばならぬことか。」

「昨日襲われた魔物に、見たことの無い魔物がいました。」

「そうか、そのような瑣末なことは現場である近衛と相談するがよい。」

「はっ！申し訳ありません。では近衛隊長に報告します。これは返却致します。では失礼します。」

俺は不機嫌を隠さず、退室の挨拶をする。踵を反して退室、特に反応はない。

――――――――――――――――――――――――

「新種の魔物だと言うのか？」

近衛隊長が難しい顔で問いかける。

「そうです。通常鎧の魔物は青い“鎧の騎士”、漆黒の“悪魔の騎士”、そして真紅の“死神の騎士”がいるとされています。先の大戦で報告されたとおりです。」

「そうだな、名前は仮にこちらでつけたものだが、その認識であっている。」

「私が襲われた魔物は漆黒の鎧に真紅の兜飾り、つまりパーソナルマークを持つ個体です。４体の鎧の騎士を連れていました。」

「それが本当なら由々しきことだな。」

ここは前に俺が考察したことを伝えておくべきだ。俺はより深刻な顔で問いかける。

「これは仮説ですが・・・それもかなり不愉快な仮説になりますがよろしいでしょうか？」

「聞こう。」

「ありがとうございます。がいこつ系、鎧系の魔物についてですが、強さに個体差があるのはご存知ですか？」

「ああ、ある程度は把握している。それが何か？」

「下位のがいこつや鎧の騎士に顕著に現れる現象があります。妙に素人っぽい動きをする固体と一応の戦闘訓練を受けた固体、そう急遽の募集兵のような動きです。これが悪魔の騎士、死霊などになると正統な剣術を使用してきます。」

「なるほどよく観察したものだな。それでそれが何か？」

「ここからが不愉快な仮説です。奴らは元々アレフガルドにいた魔物ではありません。魔王の瘴気によって作られた魔物、その材料が死した人の魂かと。」

「なんとっ！」

ここにきて近衛隊長の顔が青ざめる。

「使用する魂の弱いものには下位種、それなりの強さを持つものには中位種、十分な強さをもつものには上位の体を与えたと仮定しました。これで大体説明がつきます。極端に言うと先の大戦で無くなった兵士、騎士が新たなる魔物になっている可能性は高いかと。」

近衛隊長の顔は青を通り越して、真っ白だ。

「それが事実なら我らは死ねないと言うことだ。しかもこのことは公表できない。まさか僚友と戦わなければならないとは・・・。」

「その通りです。この仮定を知っているのは勇者のガイラだけです。もしかしたらアレフも判ったかもしれません。とりあえずこれに関しては隊長に預けます。」

「判った。俺の心の内に留めよう。」

「では失礼します。」

俺は城の中を歩く。話しかけてくる者は一人もいない。

夢想

６／２０　勇者支援生活２０日目

この二日間で勇者二人のレベルを査定した。ガイラＬｖ１５、アレフＬｖ１２といったところか。

少し低めに見積もる。魔法の鎧を買うには金が足りないはず。一度戻って換金してから再度リムルダールへ・・・かなり時間がかかるな。双方向のルーラが使えないとアレフガルドは広い。

大臣執務室でアレフ、ガイラの位置を確認する。昨日はリムルダールにいたな。聖なる祠には行ったかな。多分相手にされなかっただろう。俺の魔法の基本はあそこで調査、研究した。門前払いされても懲りずに毎日通ったものだ。シュミットはドムドーラ砂漠の南端・・・無事でいろよ。

さて自らの安全が確保されると実に退屈である、我ながら悪い性だ。図書館でも行って理知的でウィットにとんだ会話でもしよう。

「は～い、マギー！やっと手が空いたよ。ここに来るのも久しぶりだ。」

「ここで一人放って置かれた私について何か言いたいことはなくて？」

「それはすまなかった。別に遊んでいたわけじゃないけど・・・ＯＫ！では今日は更なる真実について話そう。」

ちゃかして誤魔化そうと思ったが睨まれたので、興味を引く話に

すりかえる。思惑どおりマギーの目の色が変わる。

「更なる真実とは何？」

「そうだね・・・勇者ロトの冒険について。なんてどう？」

「そうね。４００年前招換され、悪の手から光を取り戻した勇者、その栄光を称えロトの称号が送られた。だがその後の消息を知る者はいない。そんな感じかしら。」

「その通り、だけどそれは作られた伝説だとしたら？」

「興味深いわね。いいわ！今日はそれで誤魔化されてあげる。」

「なんだ、そこまでバレバレか。いや誘導されたか・・・まあいいや、じゃあ資料を用意するから待っててね。」

ロトの部屋の開け、ロトの日記を取り出してきた。戻ると黒板に教卓、マギーの準備は抜かりない。

――――――――――――――――――――――――――――

「じゃあ、始まりから話そう。まず精霊ルビスの恩恵の元、平和なアレフガルドがあった。そこに別の世界から大魔王ゾーマを名乗る者が現れた。大魔王ゾーマはルビスを封印し、アレフガルドを絶望の闇に落とした。ここまではいい？」

「詳しいことは伝わってないけど、そうなのね。」

「そうなんです。なぜか事実は闇の中、誰が消したか、時間の壁に消されたか?それで大魔王ゾーマは次にどうしたと思う?」

「そうね。大魔王・・・まだ口にするのは抵抗あるわね。大魔王はアレフガルドを征服して・・・それで終わりじゃないの?」

「答えは新たなる地を征服させた。ここアレフガルドの絶望だけでは満足しなかったわけだ。それで次の目標になったのが勇者ロトのいた大地、単なる偶然か歴史の必然かは判らない。それで彼の世界を守りその後アレフガルドに現れた。」

「じゃあロトの勇者は召喚されたわけじゃない。自らこちらに来た。」

「その通り!この日記にある。彼の世界に派遣された魔王バラモスなる者を倒し、大駆逐するべく大魔王ゾーマの虎口に飛び込んだ。」

「じゃあなぜそれは伝わってないのかしら?」

「その事実を知られては嬉しくない者たちがいたから。」

「誰よ!そんなこと隠しても意味が無いじゃない。」

「ラダトーム王家。王家の力や軍隊、いかなるものを持ってしても手も足もでなかった大魔王を倒してしまった。この事実は王家の威光に傷つけること甚だしい。そうだろ、その気になればロトの勇者は王家にとってかわれた。」

「勇者ロトはそんなことしない。平和のために戦ってきたのに・・・。」

「そうだ。だから名前だけの名誉を受け取って歴史から消えた。」

「自分の世界に帰ったのじゃなくて？」

「だとよかったんだけどね・・・世界と世界の壁を開けていたのは大魔王ゾーマ、でもその大魔王を倒してしまったら帰ることはできない。ちなみに勇者ロトの父親もここアレフガルドで亡くなっている。さらに元の世界の彼の実家には母親が残っている。この悲しみはだれにも判らない。」

マギーが涙ぐんでいる。勇者ロトの悲しみか、彼の母親の悲しみか・・・それが理解できない人でないことは俺にとって嬉しい。

「話を戻そう。名誉を与えられた勇者達は最初は大事にされただろう。だがそのうち嫉まれて城から離れた。・・・実は勇者は大魔王の断末魔の叫びを聞いている。」

「断末魔の叫び？」

「だが光ある限り闇もまたある……。わしには見えるのだ。再び何者かが闇から現れよ　う……。だがその時はお前は年老いて生きてはいまい。わははは……っ。こう日記に記されている。」

「なんて禍々しい・・・。」

「だろっ！これがロトの予言の元になった。そして勇者は再び現れる魔王に対抗する為、三人の友に神器を託して歴史に消えた。」

「でも勇者の名の元、アレフガルドをまとめ、備えることもできた

はずよ。」

「その方法も無くも無い。だけど戦って平和を勝ち取った勇者にはそんなことはできなかった。一応アレフガルドはラダトーム王家によって秩序があった。一度壊した秩序は新たなる秩序を得るには時間がかかる。大魔王の予言は曖昧でいつになるか判らない。だから今ある秩序は壊せない。そういうことだね。」

「それが本当なら勇者ロトは報われないじゃない！」

マギーが激高して立ち上がる。

「俺も報われないと思う。だけどこの日記にはそれに対する文句や愚痴は書いてない。ただ残してきた故郷の母や友の安否を気遣う記述は多々ある。」

「もしあなたの言ってることが本当なら、その日記は公表すべきよ。それこそ勇者ロトに報いるべき一番の方法よ！」

「それは駄目だね。勇者ロトに報いるならまず竜王を倒すことだ。彼が憂慮していたのはその一点だ。」

「でもそれじゃ納得できない。」

「そうだね。ロトの沈黙を利用して彼の死後、都合よく伝説を作り変えた。つまりこうだ。大魔王ゾーマに対抗する為、ラダトーム王家は異世界より勇者を召喚した。はたして勇者は大魔王を退治し、後の世の脅威に対抗する為この地に血を残した。どうだい、よくできたシナリオだろう。」

「だから公表すべきって言ってるじゃない。」

「でも証拠がない。」

「その日記じゃだめなの？」

俺は日記の一ページを開き、マギーに見せる。

「読める？読めないだろう。言語が違う。これは彼の故郷の言葉、魔法の詠唱に使われたラテン語が大きな世界に散らばり、さらに細分化された言語。これを解読するだけで膨大な時間がかかる。」

「でもあなたが読めるじゃない。」

「残念ながら俺はまだ公表する気はない。」

「まだ？」

「あいかわらす君は聡いな。そうだ、俺はまだと言った。竜王が倒されラダトーム王家に権威が必要なくなったら公表する。」

「また予言者ケルテンが現れたわ。」

納得したのかマギーが俺をからかう。

「そうだね。もう一つとんでもない秘密が隠されている。光の玉の真の持ち主について。」

「ラダトーム王家がロトから譲られたとされているわ。」

「そうなっているね。もしかしたら勇者から申し送りがあったかもしれないがそれは闇に葬った。実は違う、大魔王の闇に対抗するため竜の女王から勇者に渡された。だがその後竜の女王は次の世代を生み生を終えた。その次の世代はなんと竜王。つまり彼は自身の持ち物を取り戻したにすぎない。」

「嘘っ！なぜ闇を従える者が・・・そんなことあるわけない。それはあなたの考察が間違っている。」

「かもしれない。でも大魔王の怨念、生まれた時より孤児になった竜王の渇望、これらの化学反応が今の竜王を作った。そう考察している。」

「大胆な仮説ね。でも誰にも真実は判らない。」

「そうかい。実はその竜王に聞いてみたい。“あんたの主張は正しい。だが光あった母と違い闇に落ちたあんたは元の光に戻りたいか？真なる姿を取り戻さないか？”てね！」

「やっぱりあなたは怖いわ。魔王たる竜王もあなたの掌の上みたい。」

「じゃあ今日の講義はここまで、絶対公表しちゃ駄目だよ、命に関わるから。」

「言っても信じてもらえないわ。頭がおかしくなったと思われるかも。」

俺は思わず俺なりの希望を口にしてしまった。勇者が竜王を倒すエンディング。それは人間にとってはただしい。所謂Ｌａｗエンデ

ィング。それ以外のエンディングは無いのだろうか？それを夢想している。

帰還

6／21　勇者支援生活52日目

いつも通り大臣執務室で光点を探る。シュミットは無事進行中、ガイラとアレフはラダトームに戻っている。・・・んっ？いつの間に戻った？俺は挨拶もそこそこに退室した。

換金所に走る。まずここに来るはず、そう思い走る。いたっ！冷静な体を装って話しかける。

「なんだ戻っていたのか。結構速かったな。」

「只今戻りました。ケルテンさん。」

「おう！学者、戻ったぞ。頼みがあってきた。」

よく見るとアレフのが魔法の鎧を着ている。よく金があったな？

「アレフ、その鎧どうした？手持ちの金では足りなかっただろう。・・・ああガイラが出したのか？お前甘やかしすぎだぞ。」

「残念、外れだ。俺の懐からは1Gも出していない。」

「じゃあ、どうやって？」

「ゴールドマンを倒しました。それから取れた金塊で購入しました。」

ゴールドマン、かつて金塊を安全に運ぶために作られた儀式魔法。

金塊で人型を作り魔法の儀式で仮の命を与える。その一部が野生化したと言われる。大変レアな魔物で、倒した者は一生遊んで暮らせると、平和な時代には一部のトレジャーハンターが探していた。

「なるほどね、よく倒せたな。」

「お前の言った弱点を潰したら一発だった。流石学者だ。」

そういえばそんなこと教えたな。それでも額の魔術文字を消すのは簡単ではないはず。俺が不思議に首を傾げているとアレフが得意げに語る。

「僕が正面から気をひいて、後ろからガイラが転ばしました。そこからこれで一撃です。」

そう言って腰の鋼の剣を軽く抜いた。

「OK！よくやった、降参だ。君達のレベル評価を2ずつ上げておこう。」

「そんなのはどうでもいい。俺が戻ってきたのは一つ相談があったからだ。」

「相談？俺にできることか？」

「そうだ、お前にしかできないことだ。聖なる祠の爺さんなんだが、学者、お前さん顔見知りだな？」

そういえば昔ガイラを連れて行ったことがあったな。

「顔見知りも何もあそこが俺の先生だ。最もあそこに出入りするのに二週間毎日日参して許可を得た。」

「その爺さんだが勇者の証明無き物に貸す力はないと追い出された。お前さんなら口利きしてもらえると思って戻ってきた。」

「なるほどねー。それはちょっと違うんだ。」

「何がですか？勇者の証明と言われましてもこの城での認定しかありませんよ。」

「そうだね。あの爺さん、つまり賢者の末裔の言いたいことは勇者に託された神器の一つを渡すのにふさわしい力量があるかどうか。そういうことだ。」

「でもお前さん、出入りしてたじゃないか？」

「それは目的が違う。俺の目的はあそこに残された賢者の書、つまり知的好奇心を満たすことだ。その当時はロトの神器が必要ではなかったし、俺ものすごくしつこかったから根負けした爺さんが入れてくれた。」

アレフとガイラがものすごく嫌そうな顔をする。

「それはそれはしつこそうだな。まあそれはいい。なら勇者の証明はどうすればいい？」

「なんだ答えが欲しいのか？それこそが勇者の証明、とても教えられないな。」

ロトの印、本当の名は聖なる守り。大魔王討伐後ロトの勇者から精霊に託したお守り。いまはその精霊の祠は残っていない。

「よく判りました。僕達の力の証明とあらば自ら探します。それでいいですよね、ガイラ。」

「お前も真面目だな。ＯＫ、それで構わん。スポンサーの仰せだ。」

「スポンサーね、言いえて妙だ。でこれからどうする？」

「雨の祠に行く。お前さんが地面を這いつくばっていた場所をこいつに見せに行く。」

「なんだ、覚えていたのか。あそこにあったのはルビスの塔、大魔王に石にされたルビスが封じられた塔があった。あそこにはその基礎が残っていた。」

「なるほど、ガイラがつけた戦う考古学者というのも頷けます。」

アレフ、感心するところが違う。まあこの時代では信じられないのも仕方が無い。

「まあ行けばいいさ。それとは別だが一つ問題ができた。」

「問題？なにかあったのか？」

「ああ、もう一つの勇者のパーティーだが全滅、いや消滅した。場所は海底洞窟東の自然窟。今は絶対に行くな。まずはできる限りの戦力の充実、それを目指すべきだ。」

まさかドラゴンによって王女が監禁されているなんて言えない。
そんなこと教えたらアレフなら“姫を助けるべきだ。”ガイラなら“ドラゴンか、今の俺ならやれる！”とか言いかねん。

「何がいるんだ。教えろよ、知っているのだろう？」

これだ。だから教えられない。

「同じ特務隊士のシュミットと現場近くまで行った。その魔物は見なかったが半分溶けた鉄の盾を見つけた。それだけでもどれほどの脅威があるか想像できるだろう。」

「鉄の盾をですか？それはすごい。どうやればそんなことになるのか、想像できません。」

「そうだ、アレフ。判っている危機には備えなくてはいけない。判ってくれるな、ガイラ。」

「判った、判った。具体的には？」

「メルキドで売っている水鏡の盾を手に入れる。伝説にあるロトの盾でも可だ。」

「買う方はメルキドにさえ入れれば買えるが、ゴーレムはどうする？」

「それの答えはお前らの手の内にある。それも自分で調べろ。勇者なんだろ？」

「かあ～！お前の師匠は意地悪だ。簡単には答えを教えてくれねー。

お前の言った通りだ。」

ガイラがお手上げと言わんばかりに手を挙げる。

「俺の知らないところで好き放題言われているようだな。まあいいさ、ヒントはやる。地方に伝わる伝説には真実がある。」

それだけ伝えると俺はその場を後にする。ふと思い出して振り返る。

「ああそうだ。出かける前にマギーに挨拶しておけ。口には出さないが心配してるはず。じゃあ俺は調べることができたから行く。」

自分で言ったことだがロトの盾の所在について調べよう。このアレフガルドのいずこかに存在しているはず。

神の武具

6／22　勇者支援生活53日目

今朝アレフとガイラが雨の祠へ旅立った。マイラの村経由で集落を目指すそうだ。まああそこでも門前払いをくらうんだけどな。我ながら意地が悪いと思うが今は時間を稼ぎたい。万全を期すためにはまだ調べなくてはいけないことだらけだ。

とりあえずロトの日記から探ることにする。あの日記は外に出したくないから図書館からは持ち出さないことにしている。

「やあマギー、アレフ達は挨拶に来たか?」

「ええ来たわ。すぐに旅立つから顔を出しただけだって、あなたと同じで失礼な話よね。まあ元気そうだったからいいけどね。」

うへっ!薮蛇だった。

「い・いや、その・・なんだ・・・しばらくは城に居れると思うんだ。調べたいこともあるしね。」

「ふ〜ん・・・そうなんだ。何時まで居ることやら?」

「そっそうだ。次に出かけることがあったら一緒に行かないか?まあ危険じゃなかったらだけど。」

「ケルテン、あなたの旅に危険じゃないことってあったかしら?」

・・・ありません。現状では危険じゃない場所を数える方が早いな。俺の沈黙を読んだのか、マギーが笑う。

「ほら、何も言えないじゃない。もういいわ、なんでこんな人に惹かれたんだろう?・・・で今日は何の用?」

なんか言葉の途中がよく聞こえなかったが、まあ怒りの矛先を避けることはできたらしい。

「ああ今日はロトの装備について調べようと思ってね。元々はラダトーム王家に伝わる3種の神器だ。」

「そうね。異世界より召喚した勇者にラダトーム王家から贈られた武具と言われているわ。今は所在不明だけど、それが何か?」

「見つけられれば強力な力になると思ってね。なんとか探してやりたい。」

「ふ~ん、それで手がかりでもあるの?」

ロトの鎧と剣はいずれ見つかるからいいとして、問題は盾だな。

「実はない。だからロトの日記からでもヒントを探そうと思ってね。」

それだけ言うと俺はロトの部屋の扉の前に行く。ここは以前と同じく荷物が置いてあるが動かしやすい様に台車の上においてある、カモフラージュは完璧だ。もしこれに気づいても鍵は開かないから秘密がばれることはない。ロトの日記を持ち出し図書館の開いた椅子に座る。

「マギー、ロトの装備の本当の名前を知っているか？」

「それは知らないわ。特に伝わってないから。」

「ならその由来も伝わってないな。」

「王家に伝わった3種の神器としか聞いていないわ。」

「じゃあ、今日はその話からだ。そこから何かヒントが出てくるかもしれない。神器、そう言われるのには理由がある。その名の通り神に捧げられた武具だ。」

「でもなんでそんな大層な物が王家にあるの？」

「それはまあ御伽噺や伝説のレベルの話になるがね。まず神々に愛されたある国があった。その国は神の御技によって繁栄した。だがその恩寵に溺れ、その技術で作られた武具で周辺の国を侵略した。この所業におこった神々はその技術を取り上げ、その国を滅ぼした。ここまではいい？」

「ええ、だから神々に恥じぬ行いをしましょうっていうよくある童話ね。それが何の関係あるの？」

「ああ大有りだ、神々の中でも穏健派に当たる神が全ての人を滅ぼすのはどうだろうか？ならば心清き者のみ助けようと提案した。まあ天罰推進派はそんなことをする気がなかったから、不可能な試練を与えることにした。それがオリハルコンの剣、ブルーメタルの鎧、ミスリルの盾の献上だ。どうだい、話は繋がっただろう？」

「いいから続けて！」

「そう結論を急ぐなよ。この3つの金属の加工には神の技術が必須、だがその技術はすでになくまさに不可能な試練だった。それでも力を合わせることができる人々によってそれは成された。影で穏健派の神の手助けはあったけどね。」

「それで神に神器として献上して、それからどうなったの？」

「それでも天罰は行なわれた。しかしその力を合わせる事のできる心清き人々を別の世界に移住させることにした。それがアレフガルド、そしてその中心にいた人物がラダトーム王家の始祖だ。この時に神々から改めて3種の神器が下賜されたわけだ。」

「なんとも見てきたような嘘というか・・・。」

「嘘か本当かは自分で検証して下さい。それから時がたってラダトームに王家として権威ができた頃、大魔王ゾーマが現れた。このとき大魔王によって神器が盗みだされた。さらにオリハルコンの剣は粉々に砕かれたんだけど、マイラの村に落ちてきた他の世界の住人により作り直され、鎧と盾は隠された場所から勇者が奪還した。」

「もしかしてそのマイラの住人って一文字さんの？」

「そう、ロトの勇者の世界のジパングにいた鍛冶職人が偶然ここに落ちてきた。まあそのジパングにも大魔王の手下の八岐の大蛇がいたから、世界が繋がっていたと考えていい。これは勇者の日記からも読み取れる。」

「また自分で検証しろと言いたそうね。」

「当然、教えられただけの知識だけじゃこの国一の賢者は名乗れないな。話を戻そう、ロトの勇者の足跡を辿ろう。アレフガルドに来た勇者はまずラダトームを訪れ、盗まれた神器の話を聞いた。そしてこれを集めることにした。」

「当然ね。大魔王が恐れてわざわざ盗ませたぐらいだからすごい力があったはずよ。」

「その通り。それで勇者はドムドーラの砂漠で粉々になったオリハルコンを集め、魔王の爪痕と言われる洞窟で盾を、ルビスの塔で鎧を回収した。剣はさっきも言った通りマイラで修復した。それらをもって大魔王ゾーマを倒した、というわけだ。」

「それで何かヒントはあって?」

「それはこれから考えよう。現存している都市、町、村は当時とそれほど変わらない。ガライが集落から町になり、ドムドーラは滅ぼされたが一応現存している。」

「さっきの魔王の爪痕とかルビスの塔ってどこ?」

「ああ、魔王の爪跡は今はロトの遺跡、ルビスの塔は雨の集落に基礎だけが残っている。・・・あれっ?魔王の爪痕には人口的な遺跡の地下部分に底無しの裂け目があったはず。」

「今は地下2階の石造りよ。そんな底無しの裂け目なんて聞いたことないわ?」

「なるほど、調査する価値はあるな。」

「他には怪しいところはないの？」

「そうだな・・・海底洞窟はその当時繋がってなかった。必要に応じて工事がされ始めたのが当時だった。・・・あとはメルキドの南に精霊の祠。現存はしていない。岩山の洞窟は現存、ガライの墓は当時にはない。」

「当たり前よ、ガライが勇者ロトの伝説を広めたのよ。そんな人の墓が当時にあるわけない。」

「最もだ。だけど在ったかもしれない構造物を墓として利用もできるから、絶対無いとは言えない。」

「魔王の城にあるという考えはないの？」

「それこそお手上げだ。なんとかロトによって封印されている可能性を追おう。だとするとロトの遺跡か・・・近々行ってみるか。」

呟く様に口にする。マギーの目が輝いている。なにか企んでいる顔・・・。

「じゃあ私もついて行く。ロトの遺跡なら危険も少ないし、まさか学術的調査に王宮図書館司書官を連れて行かないなんてないわよね。」

「止めても無駄だよね・・・はあ、判ったよ。しかしやはり何か考えを整理するのに、誰かと会話をするのは役に立つようだ。自分では当たり前で過ごしたことが、ふと質問として返ってくる。そこから新しく見えることもある。まあ相手の知的レベルにもよるが、マ

ギーはよい対話の相手になるな。」

「それ褒めてるの？馬鹿にしてるの？」

「いや、素直に褒めている。サイモンやガイラじゃ駄目だ、途中で面倒だと騒ぎ出す。アレフもいいけどちょっと素直すぎる。他の人は考えられないな。やっぱりマギーが一番いい。」

「じゃあもっと大事になさい。」

マギーが冗談めかして言う。大事にしているつもりなんだけどな。口には出さない、多分薮蛇だから。

しばらく他愛の無い会話をする。とりあえずやるべきことは決まった。新しい発見があるかもしれない、そう思うと心が躍る。

雨の祠

6／25

マイラの村から東、橋を渡った先の小集落。アレフが地面を鋼の剣で突付いている。

「本当ですね。ここの下は固いです。どう見てもただの草原ですけど。」

「ああ、学者がそう言っていた。ここの周りにある巨石は崩れた塔の石材だと・・・俺には風化した岩にしか見えんがね。」

「そうですね。でもここから・・・・・

アレフが言葉の途中で走り出し、５０ｍほど先で止まる。

・・・ここまでずっと堅い石畳が埋まっています。やっぱり何かあったんですよ。」

「まあそうだろうが今は何もない。俺にはそれだけでいい。過去の探求はあいつに任せる。」

ガイラがちょっとうんざりした顔をする。前に来たときはここで３時間待たされた。そんな苦い思いが蘇る。アレフが走って戻ってくる。この程度では息はきれない。

「じゃあ今やるべき探求を続けましょう。そこの集落ですよね、行きましょう。」

アレフが馬を引く。安堵の表情を浮かべたガイラも続いた。

――――――――――――――――――――――――――――

「ここが長のいる祠か、ずいぶんとボロいな。」

「そんなこと言っちゃ駄目ですよ。聞こえます。」

思わず愚痴ったガイラをアレフがたしなめる。その祠の地下から声が聞こえた。

「外で騒いでいるのはどちら様ですか。どうぞお入り下さい。ここはいかなる者も迎えます。」

「ほら、大丈夫じゃねえか、入ろうぜ。誰でもウエルカムだとよ。」

ガイラが遠慮なく階段を下る。この祠の上部分は飾りで地下に人が入れる空間がある。二人が階段を降りると広い空間が現れた。中央の祭壇に年配の女性が立っている。

「ロトの勇者に連なる者ですね。近々ここに来られると神託がありました。」

「いっいえっ！そんな大層な者ではありませんが、勇者とは呼ばれています。」

「俺もだ、血だのなんだの関係ない。だがここにはあの島に渡る為に必要なものがあるのだろう。それを受け取りにきた。」

「率直な方ですね。ですがお渡しすることはできません。」

「なんでだよっ！」

「止めてください。失礼です！」

ガイラが激高し一歩踏み出す。アレフが止める。

「そうですね。納得できないでしょうから説明しましょう。ここには雨雲の杖というロトの神器の一つがあります。これは唯一本しかない物で紛失したら替えがきくものではありません。」

「そんなことは判ってい「もうガイラは黙っててて！」

「ですから、あなた方がこれを持つに相応しい力量があるか、確かめさせて頂きます。」

ガイラがさらに何かを言おうとして、アレフに睨まれる。

「それで何をすればよろしいでしょうか？」

「それも神託で聞いています。銀の竪琴をここにお持ち下さい。それはしかるべく場所に安置されていますが、残念ながらその場所は魔物に侵されています。それを回収してきて欲しいのです。」

「判りました。その銀の竪琴、必ずここにお持ちします。」

すると老婆は優しい笑顔を浮かべる。アレフは自らの記憶にその笑顔がある気がした。

「そうですよ、私はロトの友。心優しき僧侶の末裔。ロトの願いを叶える為に代々雨雲の杖を受け継いできました。今私の代でそれが必要になったことは悲しきこととなれど、これを渡せる栄誉は他に変えられない最高の栄誉だと思います。」

「おう！アレフ行こうぜ。やるべきことは判った。その銀の竪琴とやらもいつまでも魔物の元に置いとくわけにはいかんからな！」

ガイラがアレフに声をかける。さっきまでの不機嫌はすでにない。

「ガイラさん。あなたのその率直さは好感が持てます。ですが突っ走るだけがあなたの役割ではありません。どうかご自愛なさいますように。」

「わかった、わかったよ、婆さん、ありがとよっ！」

「ガイラっ！大変失礼しました。それでは行ってきます。」

二人が階段を駆け上がる。馬に飛び乗る、行くべき所は・・・？

「おい！アレフ。銀の竪琴ってどこにあるんだ？」

「さあ、ガライの町のガライの墓にでも安置されているのではないでしょうか？」

「そっそうか。あんまりそういう芸術や伝説には興味ないんだ。」

「じゃあ、一度城に戻りましょう。」

「そうだなっ！もしかすると学者の野郎、こうなることを判ってい

たかもな！」

「ありえそうですね。じゃあ戻ったら詰問しましょう。では呪文を使います。離れないで下さい・・・・・・・ルーラ！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

勇者支援生活５６日目

ロトの遺跡に行く前にシュミットの帰還を待たなくてはいけないことに気づいて3日。毎日マギーが何時になったらロトの遺跡に行くの？と催促する。早く行きたいのは俺だ。・・・アレフたちも雨の祠に行ったきりまだ戻らない。今頃着いた頃だろうか？

昼食の後のまどろむ時間、まとまらない考えと愚痴を頭の中で反芻する。食堂の外で騒がしい音がする。だれか駆け込んできた。

「学者！お前知ってただろ！」

「何がだよっ！」

「雨の祠、普通には雨雲の杖は渡してくれませんでした。」

ああ・・・それね。もちろん知っていましたとも。俺の沈黙を肯定と受け取ったガイラがさらに言う。

「ならそう言っとけ、二度手間だろうが。」

「そうは言われてもねえ、必要になる要求が前もって判るわけないでしょう。」

俺は澄ました顔で冷静に答える。馬鹿め！俺と論戦で勝てると思うな。

「そうだけどよ。」

「だいたい聖なる祠でも同じ様な対応をされたはずです。予想の範疇ではありませんか？」

「ガイラ、もういいでしょう。確かにそう言われると反す言葉もありません。僕達の負けです。」

「ったく、この師弟は！じゃあこれには答えてくれるな？“銀の竪琴はガライの墓にある”これは間違っていないな。」

「その通り、はいといいえで答えられる質問は楽でいいな。魔法の鍵は持っているな？」

「持っています。リムルダールで買いこんであります。でも使い捨てなんですね、これ？」

「ああ、不完全な代物ですぐに壊れる。ロトの持っていた本物は永久に使えたけどな！もしかしたら鍵屋の営業手段かもしれないな。」

まあそんなことはあるまい・・・単に技術が足りないのか、便利すぎて困るのであえて品質をおとしてあるのか？予断ではあるが他人の家に無断で入ったり鍵を開けるのはもちろん犯罪である。

「じゃあガライの墓は結構大きい遺跡で強力な魔物が巣くっているから気をつけるように。やばいと思ったらすぐに離脱しろ。リレミ

トの脱出点は町の中に登録しておけよ。」

脱出の魔法リレミト。これを使用するには予め脱出地点に魔術儀式でマーキングをしなくてはならない。手間ではあるが安全の確保には便利な魔法である。

「判りました。ではすぐにでます。」
「じゃあな、学者。」

二人が出て行く。小声が聞こえる。

（やっぱ知ってやがった、意地が悪いな。）
（そうみたいですね。もしかしたらガライの墓のことも知ってたんじゃ？）
（きっとそうだ。やっぱり底意地が悪いな、お前の師匠。）

全部聞こえてますよ。しばらくは意地悪ってことでいいでしょう。

ロトの遺跡？

6／26　勇者支援生活57日目

シュミットがメルキドに到着したようだ。マーカーが動いていない。映像で確認する・・・ベッドで爆睡している、隣には心配そうに看病している女性。これ以上は見ないでおこう。

とりあえず心配材料がなくなったので任務と知的好奇心を満たすのと両立させるべく、ロトの遺跡へ行くことをマギーに告げる。一石二鳥、いや三鳥か、マギーのご機嫌伺いも兼ねているからな。

「マギー、やっと手が空いた。ロトの遺跡に行くぞ！準備はいいか？」

「何を今更、準備なんて3日前に済んでるわよ。今すぐにでも発てるわ。」

「それはそれは申し訳ございませんでした。ではわたくしも準備を致しますので1時間後にそちらの屋敷に伺います。それでよろしいでしょうか？」

「何、その気持ち悪い言い方。別に怒ってないから・・・」

――――――――――――――――――――――――――――――

一時間後、俺はマギーの屋敷に来た。旅装のマギー、隣に若い執事が立っている。

挨拶をして敷地内に入る。隣の執事が礼儀正しく声をかけてくる。

「ケルテン＝リムルダール殿、お嬢様をよろしくお願いします。」

「お嬢様をお預かりします。安心してお待ち下さい。執事どの。」

「もう、シャッテンブルグったら余計なこと言わなくていいの！行くわよ、ケルテン！」

マギーが俺の腕も引っ張る。後ろで執事が丁寧な一礼、俺が軽く会釈。多分マギーには判らないだろう男同士の会話があった。

「全く、私はもうヴィッセンブルン家の当主なんですけど、いつまでもお嬢様扱いは止めて欲しいわ！」

「さあね？俺は平民だし、貴族のしきたりやお約束は知らないな。さあ急ごう、馬を使ってもロトの洞窟まで1日はかかる。日が落ちるまでには辿り着きたい。それとも草原で野営したいかい？」

「そんなの嫌！できることならそんなことしたくないわ。」

「俺だって嫌だよ。この間はそれで大変な目にあったし、しばらくは遠慮願いたい。」

「じゃあ急ぎましょう。馬が苦手なんて言ってられないわ。」

「苦手ね、じゃあ俺が先行してペースを取る。馬に任せて無理に手綱は使わないように！」

「判ったわ、任せます。」

先日のアレフの時より十分な休憩と低ペースで、なんとか日没前に遺跡につくことができた。馬での移動では正直今までで一番疲れたかもしれない。遺跡に隣接する宿泊施設の厩舎に馬を繋ぐ、平和な時代にはここは巡礼する人相手の観光で賑わっていた。魔物があふれている現在は利用する者がいないため放置されている。

「とりあえず中に入ろう。この建物より中の方が安全だ。」

遺跡の階段を下りる。松明を取り出し先端にレミーラをかける。隣でマギーが首を傾げる。

「わざわざ松明にレミーラをかけるなんて、無駄じゃない？」

「ああ癖みたいなものでね、昔からこうしてる、レミーラを使えなかった時のなごりだ。」

「ふ～ん。」

「これでも結構実用的なんだ。火が必要なときもあるし、こうやって明かりを抑えることもできる。」

明かりの上に布を被せて光量を抑える。さらに松明を放り出す。

「あと魔物がでてきたらこうやって放り出すこともできる。手に直接かけるとこうはいかない。」

「ふ～ん、いろいろと気を配っているのね。城にいては知ることのできないことね、それだけでも来た甲斐があるわね。」

何気にマギーがニヤリとする。気持ちは判らないでもない。

「今日は食事を取ったらすぐに寝ることにしよう。慣れない馬上で疲れただろう。」

「そうするわ、ケルテンもちゃんと寝るのよ。話に聞くとこういう時無理してばかりだから。」

「心配しなくてもちゃんと寝ます。ここでは魔物はでないから頼まれても不寝番なんてしません。」

そして食事の後、光に布を被せ光量を落とす。毛布に包まって横になる。しばらくするとマギーの寝息が聞こえた。やっと俺も眠ることができる。

――――――――――――――――――――

朝になる。堅い床に慣れないマギーが体の痛みを訴える。

「体中が痛い。こんなのこの前の馬車以来だわ。」

「安全に寝れるだけまだマシだ。朝食をとったら、とりあえずロトの石碑まで行こう。道順は判っているからついてきてくれればいい。」

「道順覚えているの？」

「全然、ここは聖地として巡礼の人がよく来ていただろ、天井を見

てごらん。松明の煤の跡でいっぱい。壁にもマーキングでいっぱい。」

マギーが天井を仰ぎ見、壁のチョークの後を見る。

「なるほど確かにそのとおり、複雑な作りのわりには間抜けな話ね。」

「間抜けとは失礼だね。ここの作者の意図と違って、ある意味平和利用された結果だ。」

朝食後、歩きながら話す。しばらくして地下2階の階段を降りる。

「なんかつまらないわね。所々看板があったり緊張感のないところね。薄暗くて気味が悪いけどただそれだけ。」

「贅沢な悩みだな、この前の海底洞窟では闇の中魔物に見つからない様大変だったんだぜ。」

「ごめんなさい。無神経だったわ。」

「まあしなくてもいい苦労もあるさ。今頃アレフたちもガライのお墓で大変な目にあってるかな。」

しばらく無言で歩く。ここは無意味に遠回りさせられる。一番北側の直線路、あとは南へ道なりでロトの石碑に到着した。あまり大きくない墓石に文字が彫ってある。

「ここに来たことはある?」

「ないわね。この文面はお父様に教えてもらった通り。」

マギーが石碑の文字を指でなぞる。俺は石碑の周りを調べる。石碑の背面、土台と石碑の継ぎ目、床の石の隙間にナイフを突っ込んで外れる所はないかと試行錯誤する。

「なんか罰当たりね、墓泥棒みたい。」

「そう言うなよ。別に墓荒らしがしたいわけじゃないから・・・おっと、外れた。なんだ?何があるんだ?」

石版の後ろ側、床の一部が外れた。むき出しの土、ナイフで掘り進む。なにか堅い物に当たった。

「何っ?何があるの?」

俺はさらに掘りおこす、ぼろぼろの革に包まれた古ぼけた兜。長い間土の中にあったせいか錆びて朽ちている。

「兜か、なぜこんな所に?」

「私に聞いても判らないわ。誰の持ち物なの?ロトの勇者の物かしら。」

「違うだろうね。ロトの鎧こと光の鎧は、全てセットの装備で専用の兜もある。だとするとこれはオルテガの兜か。」

「オルテガ?」

「ああロトの勇者の父親だ。ロトの勇者の前に彼の国から魔王討伐

の為、派遣された勇者だ。勇者ロトはオルテガが消息不明になった為、次代の勇者として旅にでた。」

「なんかよく判らないわね。」

「オルテガは不幸な事故で、先にアレフガルドに落ちて戻れなくなっていたんだ。派遣した国では死んだと思われていたけどね。それでロトが次の勇者と手を挙げた。これでどう？」

「納得。それでどうなったの？」

「ああ、大魔王ゾーマの城の奥底、勇者ロトの目の前でゾーマ三将の一人キングヒドラと壮絶な相打ち、最後は息子の胸の中で亡くなった。」

「なんてこと！はでも・・・最後に会えたのは救いになるのかな？」

「だとよかったんだけど残念ながら死にいくオルテガに、自分を抱く者が誰かは認識できなかった。最後に故郷アリアハンに残した妻と息子に遺言を残しただけだ。ロトの日記に記述があった。このページは文字が震え、涙で滲んでいた。」

「誰も救われない話ね。でも一番かわいそうなのは故郷に残されたオルテガの妻、夫と息子を平和に捧げてしまったことになるわね。」

「ああ女性らしいもっともな意見だ。アレフガルドの平和の為に犠牲になったものは過分にして大きい。残されたロトの勇者の唯一の故郷への繋がり、遺品ともいえるこの兜と同じ墓で眠っている・・・か、だとしたらこれは返したほうがいいな。」

「そうね、私達には使い物にならない兜かも知れないけど、彼には大事な物。」

俺はその兜を元通りに埋め直す。腰の酒と少しのゴールドを捧げ、黙祷する。二人ともしばらく言葉も出ない。

ロトの遺跡？

「なんかしんみりしちゃったな。戻ろうか、戻りながら気になる所があったら調べる。」

それから蝋燭を取り出し火をつけた。

「それどうするの、光はここにあるのに？」

「うん、もしなにかおかしな空気の流れがあったら判るかもしれない。そう思って持ってきた。」

「いろんな方法があるのね。やっぱり面白いわね。」

「しばらく黙っててね、軽い息でも影響あるから。」

静かに歩く、炎が揺れたらその場所を探る、それを繰り返す。北側の長い回廊の同じ場所を3往復、3回とも揺れた。壁に炎を近づける、消えた！壁の隙間に手を当てるとわずかな風の流れを感じる。

「ここから風が入ってくる！この石を外そう。手元に明かりを！」

マギーが明かりで俺の手元を照らす。ナイフの刃を石と石の隙間に差し込む。隙間を埋める粘土を少しずつ掻き出し隙間を広げる。石が外す、暗闇しか見えない。さらに隣の石を外す。腕が入るぐらいになったら明かりを受け取り奥に突っ込む。照らされた広い空間。

「間違いない、ここが魔王の爪跡だ。もう少し広げて入れるようにするぞ。」

マギーが唾を飲み込む音が聞こえた。新たなる発見に緊張している。俺は噴き出す汗も拭わず作業を続ける。外した石をマギーが作業の邪魔にならないよう運ぶ。しばらくして這って入れるぐらいの穴ができた。

俺が這って中に入る。マギーも入った。改めて明かりで空洞を照らす。そこには中央に飾られた盾、その奥には大きな亀裂がある。

「あったわ！本当にあったわ。あなたの仮定どおり、盾も亀裂も全部。あははははっ！すごいわ、大発見よ。」

大喜びするマギー。俺は盾に近づき埃を払う。白銀の盾、中央に鳥を模った独特の紋章。間違いないロトの盾、又の名を勇者の盾。しばらく見とれる、言葉も出ない。

「ねえ黙ってないで何か言いなさいよ。いつもみたいに薀蓄を並べないの？」

「ああ、まさか見つかるとは思わなかったから呆然としていた。これは勇気の盾、ミスリルで作られた神の盾で間違いない。」

「そうね。じゃあアレフにでも渡す？」

「それが順当だな。持ち出すにはもうちょっと穴を大きくしないと無理だけど。」

マギーが亀裂を見下ろす。そこには完全な闇しか見えない。マギーが小石を手に取って落とした。

「ねえ、この亀裂すごいわ、石を落としても音が聞こえない。どこまで深いのかしら？」

「さあね？大魔王がいたときは全てを拒絶する亀裂だったらしい。今みたいに物を投げ入れると帰ってきたらしい。」

「なにそれ？なんか怖い。」

「大魔王の城に繋がっていて、ここから魔物が噴き出したとされている。」

「それが本当なら今も魔物がここからでてくる？」

「可能性としてはあるかも・・・でもこの遺跡には魔物がでないのは周知の事実。ということは。」

俺は振り向いてロトの盾に近づく。しばらく盾を撫で回す。さすが神器だ、ものすごい魔力を感じる。同じ様に台からも強い魔力。

「どうかしたの？」

「うん、もしかしたらこの盾がこの遺跡を護っていたかもしれない。この立て掛ける台と合わせることでこの盾の神気を増幅し魔物を封印しているのかな？」

「ふ～ん、大胆な仮説ね。でもそうだとしたら持ち出せないね。」

「そうだな、ならしばらくはここに安置しておくか。竜王の城に渡る準備ができてからアレフに渡そう。」

「じゃあ、帰りましょう。ここは埃っぽいわ。今すぐにでもお風呂に入りたい気分。」

マギーがふざけて帰りを促す。

「だけど、まだ穴を塞ぐ大仕事が残っている。」

「そうだったわね。誰か別の人に持っていかれるわけにはいかないわ。」

俺達はさっきと同じ様に穴から這い出した。積んである石を元通り壁に戻す。水筒を取り出し、掻き出した粘土に水を含ませて隙間を埋める。

「こんなもんかな?」

「ちょっと濡れて変ね。それとここだけ埃が取れて違和感があるわ。」

周りの壁と較べる。たしかにここだけ綺麗になっているな。懐から武具の手入れ用の布を取り出し壁全体を拭く。さらに埃だらけのマントを壁に叩きつけ、埃を擦り付ける。

「まあこんなところかな。どう、マギー?」

マギーが壁を見る。少し離れて見る、歩きながら自然に見る、近づいて明かりで照らす。

「こう明かりで直接照らすとわかるけど、まあ普通に歩いてたら気づかないかもね。私じゃどうしてもそこにあるって知ってるから判

るだけかな。」

「そうだといいな。今できることはここまでだ。道具が足りない。」

「でも色々持っているのね。それと使いこなしているし、改めて尊敬しちゃうわ。」

「そうか？俺の異名を聞いているだろう。戦う考古学者、俺の本業は考古学者。こんな作業をしているときが一番しっくり来る。平和になったら再開するかな。」

「それもいいわね。じゃあ、さっさと平和にしちゃいなさい。私も楽しみだわ。」

「えっ！君もついて来るつも「まさか駄目って言わないわよね！こんな面白いこと一人でやるなんて許せない。」

「いや、その駄目とか言わないけど・・・じゃあ野営とか馬とか粗食に慣れてね。あれもこれもできないなんて聞かないから。」

「あっそう！よく判ったわ。足手まといにならないようにすればいいのね。」

「まあそうですね、お嬢様。何事も鍛錬あるのみです。」

「じゃあ、帰りを見ていなさい。私が馬で先行して帰るから。」

あのルーラで帰れますけど・・・そう言い返すことのできない雰囲気だ。それから拙い手綱さばきながら城まで帰ることはできた。俺の馬にベホマをかけていたのは秘密だ。

到着後ヴィッセンブルン家で丁重なおもてなしを受けた。翌日はヴィッセンブルン家から出仕しました。

6／27

「おい！アレフ、ここさっきも通ってないか？」

「違いますよ。同じ様な階段ですけど違います。」

アレフは自作の地図に印を書き込みながら返事をする。ガイラが覗き込む。

「これ合ってるのか？大体今どっちを向いているかも判らん。」

「ガイラは屋外ではいいですけど、迷宮の中は駄目みたいですね。いや～安心しました。僕足を引っ張ってばかりかと思ってました。」

「別に足手まといなんかじゃねえ、まだ未熟なだけだ。それにお前さんの強さはバランスのいい強さだ。それは誇っていい。」

「それ言い換えると器用貧乏なんですよね。」

アレフが少し落ち込む。ガイラがその背を思いっきり叩く。

「ちょっと違うな。器用貧乏は平均的な能力だ。お前さんのは平均より高い水準のバランスだ。つまらん事言ってると師匠に恥かかすぞ。」

「痛いですよ、ガイラの一撃は鎧の上からでも衝撃がすごいんです。僕は近くにエキスパートばかりいますから、自信が持てないです。」

「そうか・・・なら学者には聞いていた評価を教えてやるよ。いいかアレフ、学者、俺、マギーの４人だ。上から順にちから、すばやさ、かしこさ、体力（ＨＰ）魔力（ＭＰ）、評価基準はＡ～Ｆ、Ａが最高、Ｆは０だ。」

ガイラはそう言うとアレフから一枚紙を取り上げて書き込む。

アレフ	Ａ－	Ｂ	Ｂ－	Ｂ＋	Ｃ＋
ケルテン	Ｃ	Ａ	Ａ	Ｃ＋	Ｂ－
ガイラ	Ａ	Ｂ＋	Ｃ	Ａ－	Ｆ
マギー	Ｄ	Ｃ	Ａ－	Ｃ－	Ａ

「っと、まあこんな感じだ。ある程度できると判断できるのがＣだ。力とすばやさはＣ＋あれば一般兵と同等の能力と考えていい。かしこさは魔法を覚えるならＣあれば問題ないらしい。現にお前さんもベギラマは使えるだろう？その他にも判断力や知識量にも影響あるらしい。体力と魔力に関しては限界を判断する基準でしかない。実際に確かめることができないからだそうだ。」

「まあそうでしょうね、限界超えたら死にますから。しかしこの分析と評価基準はすごいことですよね。」

「ああ、流石は学者、賢さＡは伊達じゃないな。俺は覚えるだけで限界だ。俺ができる判断は俺よりちからの強いやつは今までに会ったことがない。すばやさにも自信があったが学者の方が速い。そんなところだ。」

「僕はどちらもガイラに勝てませんね。しかしまあマギーさんは完全に魔法特化ですね。賢さＡ－と師匠に次ぐ高さがあります。しか

も魔力はA、すごいな。僕はどれでも一番ではないですが、著しく劣る能力はないのが取り得ですか。」

「そうだな。だがそれだけではない。例えば、俺には重大な欠点がある。」

「そんなのありましたか？」

「ああ、金属に触れているとかぶれるんだ。金属アレルギーとかいったな。これのせいで剣の修行もできなかったし、鎧も着れない。」

「そうでした。その戦闘スタイルが板につきすぎて、すっかり忘れていました。」

「残念だとは思っていたが今はそうじゃねえ、俺にはこれがある。」

そう言うとミスリルナックルをつけた右手を振る。

「これで俺の戦闘スタイルは完成した。学者には感謝してる、本人には言わないがな。だからお前さんも自分のスタイルを見つけろ。武器でもなんでもいい。それができたら一人前だ。」

「そう出来る様、心がけます。さあ休憩は終わりです。今日中に1、2階の地図は埋めますよ。」

そう言うとアレフは地図に書き込みがない方に歩き出した。ガイラがついて行く。

「なあ、別に全部埋めなくてもいいだろう。目的地につけばいいんだ。」

「駄目です。もしかしたらすごい武器とかあるかもしれません。」

そうそう見つかる物でもないがね。せっかくやる気になっているんだ。年長者としてはやる気を削ぐようなまねはしたくない。学者もそんな思いなんだろう。ガイラはそう思ったが口にはしなかった。

――――――――――――――――――――

6／28

アレフとガイラは昨日のうちに2階までを探索し終わり、一度リレミトでガライの町の宿屋で休憩した。アレフが地図を参考に先に歩く。松明を持ったガイラは後ろをついて行く。

「なあ、アレフ。ここはそれほど強い魔物はでないな。あのおばけだけは嫌だけどな。」

「そうですね。いきなり壁から出てくるし、普通の武器が効きませんから、ガイラのミスリルナックル頼みです。魔法を使えばいいのですがもったいないです。あと鉄のさそりも嫌です。剣がはじかれますから。」

「そろそろ地下3階だな、俺が前にでる。しかしもっと戦い甲斐のある敵はいないものかね。」

そういいながらガイラが階段を降りる。アレフが続いて降りる。

「そのうち痛い目に会いますよ。強敵になんか会わない方がいいで

す。」

「そうだな・・・ってここ完全に行き止まりじゃねえか。意味あるのか、この作りは?」

「僕に文句を言わないで下さいよ。じゃあ戻って別の階段で降ります。」

「次はどっちだ。右か左か?」

「迷宮内で右とか左とか止めてください。とりあえず南に向かいましょう。こっちです。」

再びアレフが先に歩く。地図で場所が確認取れている所ではその方が効率がいい。

「そうはいうがな。ぐるぐる回っているとよく判らなくなる。ここには日も星もない。」

そうこ言っていると別の下への階段に辿り着いた。

「次こそ当たりだといいですね。」

「どうせ、全部廻るのだろう?だったら当たりとか関係ないな。さて降りたら北と南に道があるぞ。どうする?」

「そうですね。ガイラに任せると大変な事になりますから、とりあえず右手をこっちの壁につけて下さい。」

言われた通りガイラが壁に手を当てる。

「じゃあそのまま、手は離さないで前に歩いて下さい。これ僕は感覚でやってました。」

「ふ～ん、適当に歩いてたんじゃないのか？」

「そんな訳ないです。まあ師匠に教えてもらいました。」

「また学者か、アレフ、本当にいい師匠を選んだな・・・おっ行き止まりだぞ。」

「予想通りです。多分この壁の向こうにさっき下りた部屋があります。判っても何の役にも立ちませんけど。」

――――――――――――――――――――――――――――――

1時間後。3階の長い回廊を歩き、魔物と戦い、ついに辿り着いたのは登り階段。

「アレフ、お前の言う通り歩いていたら、また2階に戻ったぞ。」

「だから僕に文句を言わないで下さい。さっき降りた階段とは違います。だからここから南の階段を降りれば正解です。」

「本当にそうか？大体なんでこんな面倒くさい造りなんだ。」

「そういえばそうですね。なるほど・・・何か意味があるかな？」

「ああ、そういうのは学者に任せとけ。考えても無駄だ。」

また3階への階段を降りる。ガイラが苛立っている。

「そろそろ強い魔物でも出てこいや、闘ってスカッとしたいぞ。」

「まあそうですね、でてきたのはリカントマムル、メーダロード、ドロルメイジ、ヘルゴースト。上位種ですがさほど強くなった感じはしませんね。魔法を使ってくるようにはなりましたけど・・・。」

「そうだな、気分よく闘える相手じゃねえ。卑怯ではないが面白くねえ。」

しばらく右手を当てて歩く。行き止まりだ。しかも魔物が群れている。リカントマムルを中心にリカントが群れている。八つ当たりするかの様にガイラが飛び込む。アレフが慌てて追いかける。さほど苦労することなく魔物の群れは駆逐された。

「ガイラ、戦い慣れた敵だからといって無謀すぎですよ。」

「いいじゃねえか。こいつらはリムルダール付近で嫌というほど倒したんだ。魔法も使ってこないから憂さ晴らしにちょうどいい。」

妙にすっきりした顔でガイラが言う。アレフが呆れて来た道を戻る。30分ほど歩くと降りる階段。

「やっと4階だ。ゴールは近いか?」

しかし降りた先にはなぜか登る階段があるだけ。

「どうなっている。馬鹿にしてるのか?」

アレフが地図を確認する。

「ガイラ、見て下さい。3階のこの辺に空間があります。多分ここに繋がっているのでは?」

「そうかいそうかい、どこでもいいさ。行くぞ。」

アレフが地図を片付け、慌てて追いかける。登った先でガイラが立ち呆けてている。追いついたアレフが見たのは小さな池の中央に小さな社。そして社の中には銀色の竪琴が祭られている。二人が近づく。

「これですかね?」

「だろうな。しかしまあ吟遊詩人ガライの墓とはいえ無駄に豪勢な墓だな。吟遊詩人さんよ!悪いがこれはもらっていくぜ。」

そう言いながらガイラが垣を越え、竪琴に手を伸ばす。誰も止める者はいない。

「へへっ、銀の竪琴、ゲットだぜ!アレフ、どんな音がでるのだろうな、これ?」

そう言ってガイラが竪琴の弦に手をかけた。響き渡る竪琴の音。

その澄んだ音はアレフには不吉に聞こえた。

戦場での死

６／２８　勇者支援生活５９日目

午後４時、ラダトーム城に城下町の門番衛士が駆け込んできた。城の衛士が引き止める。

「どうした、騒がしい。静かにせぬか！」

「はっ！申し訳ありません。国務大臣付き特務隊士殿はいずこですか？勇者アレフなる者が急ぎ面会を希望しております。」

衛士二人が顔を見合わせる。

「あの人なら、いつもどおり図書館だな。」

「ですね。あの筆頭魔術士殿とよろしくやってます。うらやましいですね。」

「馬鹿っ！お前死にたいのか。怒らすと相当怖いらしいぞ。大臣の息子をとっちめた話を聞いていないのか！」

「あれあの人だったんだ。俺らにはいつも笑顔で“ご苦労さん”ていい人だなって思ってました。・・・あれ、さっきの人は？」

「ああ、場所を聞いたらすっ飛んで行った。問題はなさそうだから通した。」

「そうですね、きっと特務関係ですから俺ら衛兵では止められませ

んし。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーー

バンッ！

図書館の扉が乱暴に開く。兵士が駆け込んできた。俺とマギーが目を丸くしている。

「ちょっと乱暴に開けないで「はあ、はあ、すみません。特務隊士のケルテンさんってあなたですか？」

マギーの抗議の声をかき消す兵士。

「ああ私だが、何か御用ですか？」

「勇者アレフなる者が、至急お会いしたいと来ています。」

「アレフが至急だと、何があった？　」

「それがお連れの方がいて、すでに亡くなられていますが現在我らの控え小屋に・・・」

俺は駆け出す。後半はすでに聞いていない。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーー

城下街の入り口横の衛士小屋。慌てて飛び込む、寝かされている

ガイラ、血の気は全くない。隣に涙ぐんだアレフがいる。俺の顔を見る。

「ケルテン師匠、ガイラが、ガイラが僕のせいで・・・。」

俺はガイラの脈を確認する。脈はない、間違いなく死んでいる。門番の一人に声をかける。

「伝令を頼む。国務大臣に王様の謁見許可を、勇者蘇生を至急願いたい。そう伝えてくれ。俺の名は国務大臣付き特務隊士ケルテンだ。止められたら俺の名を使え、いいな！」

「はっ！国務大臣に王様への謁見許可、勇者蘇生の件、至急伝令いたします。」

衛士が復唱し走り出した。こうなれば王家の秘術とやらが頼みだ。いまここで蘇生魔法を使うわけにはいかない。すでに大勢の者がガイラの死を見ている。

「ガイラが僕の身代わりになって・・・剣で刺されて・・・。」

アレフが涙ながらに語る。

「アレフ、落ち着け！とりあえずガイラを城に運びます、担架の用意を！」

残る衛士に指示する。用意された担架にガイラを乗せ、衛士に運ばせる。アレフを連れて城に向かう。追いついたマギーがガイラの死体を見て天を仰ぐ。まだアレフが何かを伝えようとしている。

「アレフ、走りながらでいい。最初から順に話せ。」

別に聞いたからといってガイラが生き返るわけではないが、話すことでアレフが落ち着くなら聞いてやる。すこしずつアレフが語る。

「銀の竪琴は手に入りました。でもガイラが竪琴の音をだしたら・・・。」

「そうか、迂闊にも音を奏でたか。お前ら知らなかったのか?銀の竪琴の調べは魔物を呼ぶ、故に封印されていたことを。」

「はい知りませんでした。それから魔物が現れました。がいこつ系統の魔物が全部で16体。それも4体一組が4隊、統率を取る強い骸骨もいました。」

なんとがいこつ、死霊、死霊の騎士による一個中隊か、それはきびしいな。

「アレフ、続けろ。冷静になって思い出せ。」

「はい、戦いになったのは地下4階の部屋です。社のあった部屋ではリレミトが使えませんでしたので場所をかえて脱出しようとしました。」

「盗難防止のためのシステムだな。銀の竪琴が祭壇から無くなったら働くトラップだろう。」

俺は冷静に返事を返す。俺が慌てようが泣き喚こうが状況は変わらない。ならばできる限り正答を教えてやる。

「それで地下４階に戻ったら、魔物の群れに遭遇しました。まず２つの部隊が襲ってきました。壁を背に向かえ打ちました。」

「その判断は間違ってはいない。それで？」

「はい、その２部隊のがいこつはそれほどの強さはありませんでしたが、隊長格の死霊がうまく指揮を執るためなかなか倒すことができませんでした。しかも折った腕や脚が気づくと元に戻っているのです。」

「それは死霊の騎士の仕業だろうな。やつはベホイミを使う。３部隊をうまくローテーションさせてそれすら判らない様にしていたのだろう。」

「それでも頭を破壊したがいこつは動かなくなりましたので、少しずつ敵の数は減らして、残り１部隊になりました。」

俺の仮説が正しかったことが証明できたようなものだな。生前からの部隊編成と指揮が可能とは侮れない。また近衛騎士隊長に報告せねばならぬことが増えた。

「最後の一隊は精鋭ぞろいでした。多分死霊の騎士１体と死霊３体かと思います。この時点ですでに残ったＭＰは多分リレミト一回分、もう回復魔法は使えないと判断しました。それでもなんとか死霊３体を倒したのですがそこで僕に限界がきました。死霊の騎士の突きがものすごくゆっくりと僕に迫るのが見えました。」

そこでアレフがしゃくりあげる。再び涙が流れる。

「最後まで続けろ。」

「はい、もう死ぬ。そう思った瞬間横から突き飛ばされました。立ち上がって見たのは胴を貫かれたガイラ・・・それでもガイラは貫かれたまま、死霊の騎士の頭を掴んで壁に叩きつけ倒しました。それからリレミトを使って脱出、キメラの翼をつかって戻りました。」

「よく判った。その判断は正しい、お前は間違っていない。それに正しい情報を得ることができた。」

「なんでそんなに冷静でいられるのですか?ガイラが死んだんですよ!」

「俺が慌てればガイラは生き返るのか?ならばいくらでも慌ててやる。戦場では心を動かしてはいけない、たとえ俺が死んでもお前は最善をつくせ。マギー、これは君にも言えることだ。いいな!」

「じゃあケルテン、あなたが死んでも泣いてはいけないの?」

マギーが半泣きで言う。

「そうじゃない。戦場では泣いている暇はない、全て済んだ後に泣け。それができないならそこが君の墓場になる。そう言っている。」

「でもガイラはもう死んでいるのよ!」

「まだ希望がないわけでもない。王家の秘術にかけるため謁見の許可を申請している。」

それでもどうにもならなかったら、多分俺は泣くだろう。こいつとの付き合いは長くはないが友と言っていい仲だ。だから俺はこい

つの確実な死を見届けるまで涙を見せない。

ラルス１６世

ラダトーム城　謁見室

先の勇者謁見のときと同じ様にラルス１６世、国務大臣、近衛隊長、他に文官３名、近衛３名が並び、中央のガイラの遺体、そのすぐ後ろに俺が控える。儀礼の名乗り上げが始まる。こんな時まで儀礼が必要とは怒りがこみ上げる。俺は顔を伏せているので誰からも見えていないだろう。俺とガイラの名が呼ばれた。発言が許可される。

「ご尊顔を拝し奉り恐悦至極、御前に侍りまするは国務大臣付き特務隊士勇者支援官ケルテンに御座います。」

我ながらセリフがおかしい。緊張と怒りで噛む寸前である。

「よい、緊急時だ。直答を許す、普通に話すがよかろう。」

助かった、ラルス１６世により直答の許可がでた。

「はっ！この度は小官の不手際により勇者ガイラを死亡させました。血の契約により勇者ガイラの蘇生を賜りたく存じます。」

「よかろう。それも国王の義務である。勇者ガイラをこちらに。」

その言葉で近衛２名により、ガイラの遺体が国王の段下に運ばれる。アルス１６世が階段を降り、ガイラの体に手を当てる。この際全ての臣下が顔を伏せる、王家の秘術ゆえ見てはならないようである。俺も顔を伏せる。ラルス１６世の詠唱、普通では理解できない

言葉が俺には判る。

（我はＭＰを１０放出する、ＭＰはマナと混じりて神に捧げん、
　おお神よ、この者の魂をここに戻したまえ！ザオラル。）

その独特の詠唱により全てを悟った。王家の秘術ってザオラルだったのか。なるほど血の契約の一部でザオラルの対象として登録をしてあるのか。

蘇生魔法ザオラル、ザオリク。この魔法がなぜ無差別に行なわれないのか？それは術者がよく知らないか、登録していない者は対象とはできないからである。かつてその登録は神の名の下に行なわれることになっていた。ゆえに蘇生は教会によってなされるのが常であった。ここアレフガルドでは王家の秘術として、不完全な形で残っていたのか。俺は現状ではアレフ、ガイラ、マギーを蘇生できる自信はある。術者がどの程度その対象を知っているかが成功する確率に大きく影響する。となるとこのザオラルの元々の成功率は５０％、面識の薄い相手ゆえ大きく確率がさがる。血の契約の支援効果を考慮しても成功するのは３０％か。

ふと国王と目があった。慌てて目を伏せる。しばらく無音の中時間が過ぎる。駄目か！

「ガハッ！」

ガイラが血を吐く。魂は戻ったが体は治っていない。俺は立ち上がる。

「無礼な！御前である。誰か止めよ！」

近衛騎士が俺を止めようとする。俺はかまわず駆け寄る。

「よい、その者の好きにさせよ。余の命令である。」

（俺はＭＰを8放出する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ。

おお万能たる力よ、血、肉、骨となりて、この者を癒したまえ、ベホマ！）

ガイラに当てた手が光り輝く。癒しの力が胸に開いた傷を修復する。ガイラの呼吸が安定したものになる。俺はそこで初めてここがどこか思い出した。周りを見渡すと優しげに微笑む国王、怒りを顔に表した国務大臣、我関せずとそっぽを向く近衛騎士隊長がいる。他の文官、武官は概ねしかめっ面である。

「皆、その者を責めるでない。その者は職務に忠実で勇者を救ったに過ぎず、余もそれを咎める気はない。」

「しかし陛下、こ「よい、余は咎めぬことにした。よもや聞けぬとは言うまい。それより早急にそこな勇者ガイラをしかるべく看病すべきではないのか？余やそなたらが不甲斐無いゆえ、勇者に無理をさせた結果である。余、ラルス１６世の名において感謝の意を表する。よいな、丁重に扱え。」

「はっ！では勇者ガイラを近衛の病錬にて看護いたします。近衛騎士よ、丁重に運び出せ。」

「はっ！」「はっ！」

近衛騎士隊長の声に並んで立っていた近衛騎士がガイラを運ぶ。俺もついて行こうとする。

「待て、そなた名をなんといったかな。」

「臣の配下のケルテンと申します。」

「そうか、ケルテンというか。そなたは残れ、他の者は下がるがよい。」

「しかし陛下、その者は・・・」

「よい、余に害をなせぬことはそなたも知っておろう。許せ。」

「はっ！では失礼致します。」

大臣以下全ての者が下がる。近衛隊長は好意的な目で、他のすべてはそうでない目で俺を見ていた。

――――――――――――――――――――――――――――――

今ここに残っているのは国王ラルス１６世と俺だけ。この人は何を考えている。

「よかったのう、そなたの友人が助かって。」

「はっ！陛下のおかげを持ちまして。」

「そうか、そなたにはできたのではないか？」

「おっしゃる意味が判りません。」

「そうか、まあそう答えるしかなかろう。だが先ほど余が蘇生の詩を唱えた折、そなたと目があった。あれは何かを知っている者の目だ。もしかして蘇生の呪法を知っておるのではないか？しかも先の回復魔法はどうだ？」

どう答えてよいか判らない。沈黙が続く。

「そうだ、沈黙が正解だ。そなたは聡いな。国王は象徴、権威の象徴で実権など必要ない。余の周りにはそう考える者が多い。平和な時代ならそれでもよかった。だがそのせいで娘を失うことになろうとはな。国王の座など欲しい者にくれてやったものを・・・。」

「いえ陛下、まだローラ王女を失ってはいません。必ず私の勇者が救い出してきます。」

「そうか、ならばいっそのこと娘を助けてきた勇者を婿に迎えるとするか、それを聞いたときの皆の顔が見物だの。そなたはどう思う？」

「御戯れを、私には答えることはできません。」

「よい、申せ。ここには誰もおらぬ。そなたの嫌いな権威も儀礼もない。」

ただのお飾りかと思われた国王が意外によく見ている。まさか俺のことまで見ていたのか。

「もし勇者と王女がそれをお望みなら陛下のご随意に。そうでないなら無理強いは厳禁です。反感しか買いませんから。」

「そうか、ではその時を楽しみにしよう。勇者支援官ケルテンよ、そなたの職務に励むがよい。大儀であった。」

俺はそこから逃げるように立ち去った。俺は勇者二人とともに平和を目指す。たとえその結果この王家がなくなろうとも・・・そこまで読まれていたような気がした。

復帰と復旧

６／２９　勇者支援生活６０日目

ガイラはまだ目を覚まさない。体は治っているし呼吸も正しい。いつ目を覚ましてはおかしくないはずだ。アレフも看病に疲れて隣のベッドで寝ている。

「ねえ、ケルテン。なんでガイラはあんな無茶をしたのかしら？」

「そうだな。俺は言ったよな、最善を尽くせと。ガイラはそれを実行したのではないか。」

「最善？どういうことかしら。個人の強さではアレフよりガイラの方が上、そうじゃなくて？」

「確かにそうだ。だがもしアレフが死んでガイラが生き残ったとする。その時は多分ガイラでは迷宮の最深部からは帰って来れない。そう考えると最善策であったと言える。」

「ち、ちがうさ。おっおれは只、目の前でアレフに死なれたくなかった、だけだ。」

「ガイラ、目を覚ましたのか！」

俺とマギーがガイラに目を向ける。

「ああ、ベッドの横でごちゃごちゃ言ってれば誰でも目ぐらい覚ますさ。」

「馬鹿か！お前死んでたんだぞ。」
「そうよ！もっと自分を大事になさい！」
思わず叫ぶ。マギーも彼女らしくなく叫ぶ。俺以外には他人然としているくせに・・・。
「そうか、アレフを突き飛ばして俺の胸に剣が刺さった。しゃれこうべが笑ったような気がして、妙に腹が立ったところまでは覚えている。」
「その怒りで死霊の騎士を倒したらしい。それでアレフがリレミトで脱出した。あとは城まで戻って陛下の蘇生を受けたってわけだ。でかい借りができたな、もう勇者は止められないぞ。」
「そうか、落とした命を拾ってもらったか。ならせいぜい恩を返すさ。それでアレフはどうした？」
俺が隣のベッドを顎で示す。
「そこで寝てる。限界まで使ったＭＰの反動でぐっすり寝てる。お前ら二人とも今日、明日と安静にしていろ。これは支援、査察官の命令だ。拒否権はない。」
「はいはい、わかりました。」
「それとお前の篭手は預からせてもらう。革がぼろぼろで中身が丸見えだ。今回持ち帰った素材は全て没収する、いいな！」
「ああ、いいよ。俺の分は好きにしてくれ。」

「じゃあ、俺らは行く。しっかり静養しろ。」

もうここには居れない。俺はマギーを連れて病室を出た。

「ケルテン・・・あなた泣いてるの？」

「泣いてなどいない。」

俺はマギーに顔を見られないよう先に歩く。

――――――――――――――――――――――――――――――

今俺はガイラのミスリルの篭手を分解している。誰にも見られるわけにはいかないので自室で作業中だ。ミスリルを覆っている革は使い物にならないぐらい破れている。相当剣を受け止めたようだ。これはメイジドラキーの翼膜で作ったやつで、ほんの少しだが魔法に耐性がある代物だ。代わりになる物はないだろうか？・・・なかったらとりあえずドラキーの翼膜でも取ってくるか。ガイラの荷物を漁る。

「おっ！金色の翼膜があるじゃねえか、ドラキーマの翼膜だな。よしこれで作り直そう。」

一人でぶつぶつ言いながら革を取りだす。

「おい、ケルテン。いるか？」

いきなり扉を開けてサイモンが入ってくる。慌ててミスリル板を

隠そうとして落としてしまう。サイモンの足元に落ちた板が無造作に拾われた。

「なんだこれ？やけに軽いな。何でできてるのだ。」

俺は返事をしない。俺の沈黙になにかやばさを感じたのか、サイモンが俺に金属板をかえす。

「まさか伝説のミスリルじゃあないだろ？隠さなくてもいいだろっ！」

「正解だ、まさか当てられるとはな。誰にも言うなよ。」

もう黙っていることは諦めた。下手に隠すより教えた方がいいこともある。そう判断した。

「そうか。で、それどうするんだ？」

「ああ、ガイラの篭手の中板だ。ガライの墓で酷使したらしく作り直しだ。」

「聞いたよ、一度死んだってね。陛下の魔法がなかったら終わりだったんだろ。よかったなケルテン！お前の担当の勇者が死ななくて。」

同情してるのか、からかっているのか判らない口調でサイモンがしゃべる。

「できれば普通に帰ってきて欲しかったんだがな。まさか拾った道具をいきなり使うとは想像していなかった。」

「拾った道具？なんだそれ。」

俺はガイラの荷物から銀の竪琴を取り出す。

「これだ。吟遊詩人ガライの遺品、銀の竪琴。この竪琴の調べはなぜか魔物を呼ぶ。そういう伝説だ。」

「ふ～ん。それ本当か？」

「馬鹿！手を出すな。このラダトームに魔物を呼ぶ気か！」

「わりい、試してみないと信じられなくてな。」

「だから馬鹿だと言っている。もし本当だったらどうするんだ。責任取れるか？」

「全部倒せばいい。城を護る為なら近衛も動ける。最近活動を控えさせられていて退屈だ。」

「馬鹿にも程がある。どれだけ町に犠牲がでると思っている。それと来る魔物がスライムやドラキーとは限らんぞ。それと隊長には何も聞いていないのか？」

隊長はあの話をまだしていないのだろうか、昨日のうちに更なる脅威を伝えたのだが・・・。

「ああ今朝聞いた。全員ではないが一部の近衛には話がいっている。魔物に等級があるのと統率が取れている話な。それ本当なのか？」

「お前は質問ばっかりだな。本当だ、俺が襲われたのはパーソナルマークを着けた悪魔の騎士、ガイラ達が襲われたのは死霊の騎士が指揮する1個中隊だ。油断するなよ。」

「パーソナルマークって隊長章とか一部色違いとかそういうやつか？魔物の癖に生意気だな。」

「そうだ。お前の感想は頭悪いな。それだけ魔物にも個性があるかもしれないということだ。もし竜王の再侵攻があったらお前がこの城を護るんだぞ。油断するな。」

「OK、了解だ。それまでにもっと修行しておくさ。俺も死にたくないからな。」

それだけ言うとサイモンは出て行った。何しにきたんだ。あいつももう少し思慮があれば中隊長ぐらいにはなれるのにな。今では戦時任官の小隊長がいいところだ。腕はいいからな。

ドラキーマの翼膜に型をあわせ切り取る。2枚でミスリル板を挟み、余っている部分に穴を穿つ。後はその穴に革紐を通して形を整えるだけだが、革が結構堅いので時間がかかる。しかしまあ素材がドラキーマになったから金色の篭手になってしまうな。

結局出来上がるのに5時間かかった。これで前より魔法耐性のある篭手になる。少し余計な細工もしておく、ガイラにはわからないように・・・。もし次にこれのバージョンアップがあるとしたらドラゴンの革が手に入ってからかな。それはそれで楽しみだ。俺の皮の鎧もドラゴンの革で作り直したいな。そんなことを想像していたら気づいたら机に突っ伏して寝ていた。

王家による政治

６／３０　国務大臣執務室

「大臣、今月の法務関連報告書です。」

「ふむ、後で読むからそこに置いておけ。何かあるか？」

「はい、やはり流民による犯罪が増えております。城下街の犯罪件数は先月比で＋２０％、前年比で＋２００％です。」

「兵士による巡回を増やせ。少々手荒でも構わん、牢に放りこめ。」

「しかし、兵士の絶対数が足りておりません。」

「私から近衛に増援を頼む。それでやり過ごせ。」

横から口を挟む文官が現れる。

「流民対策ですが、強制移民を検討しております。先方の承認は得ておりますが問題があります。」

「問題とは何だ、簡潔に申せ。」

「二つあります。一つは移動時の魔物対策であります。先の話に付随しますが兵士の絶対数が足りませぬ。次に移住先ですがリムルダールへの移動が不可能です。さらにメルキドに至っては連絡すらまともに行なえません。」

「ならばマイラ、ガライへの移動には近衛の力を借りる。近衛に頭を下げるのは気に入らぬが、この際は仕方あるまい。メルキドについては私の特務隊士を派遣しておる。しばし待て！リムルダールはなぜか？」

「こちらに報告書がありますが、海底洞窟の両端に毒の沼地が広がっているとのこと。集団での移動を困難、不可能にしています。」

「勇者や特務隊士が何度か通過しておる。なにか対策があるやもしれん。相談するがよい。しかしまあ、頭を下げたくもない者の手を借りねばならぬとは忌々しい。そうは思わぬか。」

目の前の二人が首を縦に振る。その表情は険しい。

「先の謁見の際も、無礼があったと聞きます。今の内に釘を刺しておきますか？」

「ふん、国王様の覚えがよろしいからな、迂闊な真似はできぬ。」

「下賤の者が調子にのりおって、我ら貴族ら皆心を痛めております。」

「もうよい！時間が足りぬ。次の報告をせよ。」

二人が後ろに下がる。その間にも書類にサインをし、決済済みの棚に移す。

「財務担当です。今月も軍事関連の予算が逼迫しております。その他にも法務、都市対策などに予算が取られています。」

「耐えよ、移民対策が済めば多少は軽減できるであろう。」

「しかし昨年のリムルダールからの税の分が惜しいですな。只一人に１０万ゴールドとは奮発しましたな。」

「それを言うな。近衛騎士隊長の推薦もあった、断るわけにもいかぬ。それに竜王対策がうまくいかねばいかに権威があろうが何の役にも立たぬ。そうであろう。」

「そうですな、命あっての権威ですか。全て終わった後、元通りとはなりませんかな。」

「元通りにせねばならぬ。竜王亡き後新しい勢力が台等するなど悪夢だ、そうならぬ様事を運ぶのだ。」

「判りました。しばらく財務関連の不足は国庫の予備から捻出します。よろしいですな？」

「仕方あるまい。だがなるべく節制せよ。」

「心得ております。では失礼を。」

財務担当の文官が立ち去る。大臣の秘書官が横から蝋封された手紙を差し出す。中身を取り出し文書を確認する。秘書官に小声で話しかける。

「ここに呼ぶわけにはいかぬな。私の屋敷ではいかん、今晩しかるべき場所を用意せよ。よいな！」

秘書官は無言で立ち去る。しばらく待っていた次の文官が書類を

差し出す。国務大臣の仕事は忙しい。

ラダトーム王家の政治体系。この国は王家による絶対君主制である。建国時、国王はいたが制限君主制であったこの国も時が経ち、ある一族に権威が集中するようになった。初代ラダトーム王家ラルス一世である。それでもまだ合議制が残っていた間は問題なかった。だがさらに時が経ち権威が絶対になったころ変化が現れた。つまりラダトーム王家による絶対君主制である。能力が高い国王が精力的に全ての決済をしていたのは初期の国王だけで、いつしか一族の者を国務大臣に据えて行政を代理させるようになった。現在のラルス16世の代理執政官が実弟のオットーである。

――――――――――――――――――――――――――――

近衛騎士団長の執務室に三人の男がいる。部屋主の近衛騎士隊長、国務大臣付き特務隊士ケルテン、文官アーベントロートである。

「近衛騎士団長どの、国務大臣からの要望書です。此度は流民の移民、及び城下街の警備の要望です。国王様の許可も得て降ります。」

「しかたありませぬな。現状では軍として働くことのできぬ近衛騎士団が、協力できぬなどとは言えないですな。半数の貴族出身の団員の反発もないでもありませんが、まあ国王様の命令だ、ありがたくお受けいたそう。」

「さすが近衛騎士団長殿、話が早い。」

張り詰めた空気の中、内に剣を構えた舌戦が行なわれている。大臣以下の文官と近衛騎士との確執は相当なものだ。俺の居場所がな

い。

「それはそうと、なぜ私がここに呼ばれたのか判りませんが？」

「これは失礼した特務隊士殿。国務大臣より移民対策問題の件でご助力頂く様言われております。」

「なるほど、しかし小官になにかお助けできますでしょうか？」

「これはこれはご謙遜を！大臣より大層な見識と伺っています。」

いちいち余計なことを言わないと気がすまないのか。いいかげんにしてもらいたいな。ささっと話を進めるよう促してみるか。

「はあ、それで何か問題でも？護衛や旅程に関しては近衛の方が詳しいでしょう。」

「ガライ、マイラに関しては問題ない。直轄地故に移住の要請もすぐに済み、移動の計画もすぐに済むでしょう。しかしリムルダールへは毒の沼地があるとのこと、安全な移動法も確立しておらぬ。さらに十分な連絡も取れていない上、誰か使者として行ってもらわねばいけません。」

「はあ、それで小官に行けと。」

「そうです。貴官の実家はリムルダールの長と聞きます。適任ではないですか！」

「たしかに使者の件は適任と言ってよいでしょうね。しかし毒の沼地の通行方法は一般人にはむずかしいですね。」

「それでも構いません。まず移住の要請の使者として行ってもらえますか？」

「判りました。使者の任お受けいたしましょう。しかしその間勇者の支援の任務はいかが致しましょう。」

「それは心配に及ばません。大臣よりしばらくは無理な行動はせぬよう言われています。先日も国王様のお手を煩わせたそうですね。」

そう来るか、俺としても時間を稼ぎたかったのもあるから渡りに船、悪い話ではないな。

「では勇者にも無理をせぬ様、助言しておきます。国務大臣殿が心配していられたと伝えておきます。」

「では話は済みましたので、私は仕事に戻ります。文官は忙しいのです。では失礼致します。」

それだけ言うと文官アーベントロートは部屋から出て行った。俺と近衛隊長は思わず顔を見合わせる。

「なんともまあ、迂遠なやつだ。もっと簡潔に話を済ませられないものかな。」

「まあそうですね。貴族出身の文官なんてあんなものですよ。個人的には好きじゃないですが。」

ため息がでる。それは近衛隊長も同じ様だ。

「俺も隊長に昇格して半年だが、文官だけでなく貴族出身の騎士の反感をひしひしと感じておる。実のところ俺は貴族ではない。」

「そういえば戦士の家系でしたね。よく近衛騎士、しかも団長になれましたね。」

「ああ騎士になるのはそれほどでもなかった。俺より剣の立つ者はいなかったし、近衛騎士でも末端なら問題なかった。居心地はあまりよくなかったがな。」

「それでなぜ団長に？」

「先の大戦だ。敵が敵ゆえに前線に出たがる貴族は少なかったので、俺らの様な者が前線ドムドーラに送られた。特別に戦時任官で副隊長、ドムドーラ方面の司令官だそうだ。死んで来いと言われた気がしたよ。」

「それは大変でしたね。それでなぜ隊長にまで？」

「竜王によるラダトーム城侵攻、城に残された団長以下近衛騎士は皆貴族出身、それで多くの犠牲がでた。戻った俺が国務大臣により団長に推薦された。いろんな思惑はあっただろうがな。」

「なるほど、実力はあるが後ろ盾のない人材ですか。」

「だろうな。だが俺は傀儡にはならぬ。敵にもならぬ。近衛が仕えるは国王のみ、それだけが俺の信念だ。それで十分ではないか、剣を振るう理由は。」

「そうですね、立派です。私が言うのも生意気ですが。」

「構わん、帰ってきたら酒でも振舞おうか。さあリムルダールへの使者の任、しかと務めよ。」

「了解です。では行ってきます。」

俺は最敬礼をもって近衛騎士隊長の部屋を辞した。

騎士の誇り

近衛騎士隊長の部屋からでる。いや～いい人だな。絶対に敵にまわさない様にしよう。そう思って近衛の控え室を出ようとすると、出口が数人の騎士によって塞がれている。

「これはこれは特務隊士殿、こんな所になんの御用でしたかな。」

嫌味ったらしくそう言う男・・・見た記憶はある。誰だっけな？

「特務に関する任務ですので話すわけにはいきません。そこを通していただけませんか？急ぎの用があるのです。」

「ほう、国務大臣付きの特務隊士ともなると、我々の様な者は話もしてもらえませんか。」

「急ぎの用があると申しました。そこを通してください。」

もう一度俺の主張を言ってみる。

「ふん、その任務とやらも怪しいな。また図書館で筆頭魔術士との任務ですかな？」

「王様や大臣の覚えがいいことを盾に調子にのるでないわ、下賤な生まれの癖に！」

「我ら近衛にも禄に任務がないのにこんな奴に任務だと？大臣も隊長も何を考えておるのか。」

先頭にいる男の他にも嫌味を通り越した悪口を言い出した。さてどうしたものか、それ以前にこいつらはどう落とし前をつけたいの

だろうか？とりあえず反論だけはさせてもらおう。俺のことは構わないが幾人かの名誉に関わる発言がある、それは許せない。

「先も申しましたが特務の任務に関しては教えられません。それに私がある特定の女性と一緒にいることが気に入らぬことは今は関係ありません。また私が下賤ゆえに上の方々の覚えがよいわけでもありません。さらに言わせてもらえば近衛の任務が私の様な者に愚痴をこぼすこととは知りませんでした。質問の答えはこんなところでよろしいですか？」

先頭の男の顔が真っ赤になっている。後ろの者たちも同じくらい赤くなっている。もうすぐ爆発するな。

「黙れ、貴様に任務のことを言われたくないわ！」
「図に乗るな！貴様ごとき下賤な者、本来ならここに来られるだけでも栄誉と思え！」
「そうだ、我ら爵位を持つ者に直答できると思うな！無礼者めが。」

うわっ！すごい勢いで罵り始めたぞ。お前らが聞いてきたんじゃないか、まあ挑発にのってやったのは俺だから仕方ない。俺が黙っているとさらに続ける。

「腕が立つとは聞いてはいるが怪しいものだな。」
「弟子ともども下品で卑怯な技しか使わぬらしいな？」

あら今の言葉で真ん中の男のこめかみに血管が浮き出してる・・・もしやこいつアレフに負けて逃げ帰ったやつじゃないか。名前はたしか・・・思い出した、名前負けのエックハルト子爵。

「ああ、思い出しました。模擬戦でアレフに負けたエックハルト子

爵、確かお前達を認めないと捨て台詞を残していかれましたね。」

「貴様っ！言うに事欠いて負けただと！あれは貴様らの罠に嵌っただけだ。まともに勝負すれば負けるわけがない。」

激高したエックハルトが俺に掴みかかる。さすがに周りの者が押しとどめるが、子爵の息は荒い。

「なるほど”俺のほうが強い”そう証明したかったのですね。判りました、では決闘でも模擬戦でもなんでもお受けいたしましょう。よろしいですね、近衛騎士隊長殿。」

俺は後ろに振り返り、困った顔をしている近衛隊長に許可を得る。

「なんだ気づいていたのか、どう治めようかと思っていたところだ。」

「まあ、これだけ騒げば出てこないわけがありません。それにあちらの文官の方々もこちらに興味深深です。」

向かいの部屋から文官何名かがこちらを覗き込んでいる。こちらと目が合うとあわてて引っ込んでしまった。

「よろしい。決闘は許さぬが模擬戦ならば許可しよう。場所はここで行なう。さらにここで見たことは皆口外しない。よいな。」

「了解です。異論ありません。」

「こっちもだ。」

それから近衛控え室が片付けられ、それなりの空間が作られた。ただし文官から見えないように扉を閉めている。これ俺に悪感情しかない連中でたこ殴りにしようとしているとも見えるな。

――――――――――――――――――――

俺の心配は無用である。立会人に近衛隊長が立ってくれたからである。ただなぜか俺の前に5人の騎士が立っている。

「先は決闘でも模擬戦でも何でも受けてやると言ったな。ならばその言葉どおりやってもらう。我ら5人が相手する。」

「はあ?それはまた大胆で恥知らずな提案を。」

「我らも貴族だ。恥を知らぬ平民と一緒にされては困るな。なにも5人同時にかかろうと言っているのではない。順に対戦するだけだ。まさか怖気づいたとは言わぬな。」

すごいな、詭弁を並べて自己正当化したよ。横の近衛隊長も呆れ顔だ。もしかすると覚えがあるのかもしれないな。目が合うと近衛隊長が肩をすくめた。

「いいでしょう。俺一人対そちら5人の五本勝負、純粋な剣の勝負でよろしいですね。」

「もういいだろう、では始めよ。」

うんざりした近衛隊長がその場を治めた。俺と一人を残して全員

で輪を作る。騎士の戦いは互いに剣を打ち合わせるところから始まる。剣を落とすか、頭、喉、胴、右手に剣を当てた者が勝ちであるが、故意に強打を当てることは無作法とされる。互いに木剣と木盾を構える。いつも通りのピオリムの二重がけはすでに終わっている。正直どんな強力な魔法よりこれが一番使い勝手がいい。

互いに剣を打ち合わせる。相手が一歩跳び下がり構える、俺は両手をだらんとたらした自然体で待つ。

「構えぬかっ！」

「構えてますよ、どうぞ。」

「ふざけるなっ！」

怒りに力が入りすぎだ、そのまま右袈裟切りが来る。それを見切って半身で避け、右篭手に下から軽く木剣を当てる。

「そこまでだ。次っ！」

次の者が出て、すぐに剣を合わせてくる。なるほど休憩はさせないか。さっきと同じく跳び下がって構える。敵の構えは右を前に出した突きに特化した構えだ。いきなり突きが来る、結構速い。半身でかわす、すぐに次の突きが来た、さっきの様にはいかない。後ろに下がりながら避ける、突き突き突き、下がる下がる下がる。背中が誰かに当たった。これ以上は下がれない。追い詰めたことが嬉しいのかニヤリと笑う。

「もらったぁ！　」

突き出される剣、悲鳴があがる。すれすれで避けた剣が後ろにいた騎士に当たっている。躊躇した相手の喉元に剣を当てる。

「それまで！中央に戻れ。」

俺はゆっくり歩いて中央に戻る。次の敵と対峙、剣を合わせる。さっきの戦法が有効と思ったのか突きの構えだ。突きが来る、左手の盾で右に受け流す。予想外の行動に相手の体が崩れた。剣を叩す。これで3勝、こいつら馬鹿ではない。前を参考に戦い方を考えてくる。

「それまでだ。次！」

次の男がすぐに剣を合わせてきた。剣の合わせ方が強い、そのまま突いてくる。突き、横薙ぎ、斬り返して左袈裟切り、俺の回避方向に合わせて次の攻撃をしてくる。さっきまでの相手と違う。手が止まった、次はこちらから攻撃をする。突き、横薙ぎ、斬り返して左袈裟切り、さっきと全く同じ攻撃をする。互いに跳び下がり距離をとる。俺は剣を納める。相手が一旦躊躇、突き出している剣に居合いで剣を当てる。剣は落ちないが右手が上に跳ね上がる。そこに俺が胴に軽く突きを入れた。

「よし、そこまでだ。」

「そこまでだな、俺様にはそんな手は通用しない。息を整えさせてやろう。」

エックハルト子爵が尊大に告げる。俺は息を整えながら左手の盾を捨てる。もうこんな奴にかかわるのは御免だ。心気を整えバイキルトを使う。

「ふん、盾がないせいで負けたとの言い訳かっ！」

剣を叩き付けてきた。力負けしない様両手で剣を扱う。エックハルトは跳び下がって盾を前に構える。俺は両手持ちで上段、奴の動きはない・・・俺は剣を盾に思いっきり叩きつけた。木盾が真っ二つに斬れた。奴の眼前に剣を突きつける。

「まだ続けるか？」

「ふざけるなっ！」

俺の剣を強引に払おうとする。払われた勢いを利用して振り上げ、剣に向かって振り下ろす。木剣が斬れた。

「もういいだろう。あんたじゃ誰にも勝てない。」

「こんなのあるか！盾も剣も不良品だ。そうでなければこんなことあり得ない。それにお前の戦い方には品がない。こんなもの認められん！」

「なるほど、それがあんたの誇りか。じゃあ相手がドラゴンだったら火の息を使うのは卑怯だ。ストーンマンは図体がでかいのは卑怯だ。そういえばいい。次の瞬間には消し炭かぺっちゃんこだ。」

エックハルトが歯を食いしばり、声を出せずにいる。

「まだ公表していないが・・・」

ここで近衛隊長を見る。隊長が首を縦に振る。

「魔物の中には騎士と同じく隊列を組む者がいる。さらにあんたらと同じ剣術を使う。先の大戦のように力任せの攻撃ばかりではない。骨だけの魔物、鎧だけの魔物、あんたらの常識だけでは通用しない。」

「しかし我らの誇りは・・・。」

「誇りで勝てるならそうするがいいさ、だがあんたと隊列を組む仲間はかわいそうだな。常識や誇りに固執して気づくとすでに死んでいる。隊列が崩れた仲間は順に撃破されるだろう。」

もう何も言えなくなったエックハルトに更に言う。

「これから近衛、それもあんたら貴族には屈辱的な任務が命令されるぞ、もう俺にかまっている暇なんかなくなるさ。次に会えるのは何時になるかな、もしかしたらもう二度と会えないかもしれない。互いに危険な任務だ。じゃあな！」

俺は剣を放りだすと出口へと歩く。乾いた音が響く。止める者はいない。

騎士の誇り（後書き）

感想に質問があったのでここに書きます。
１ゴールド＝１００円
城の兵士一月の給料は１０００Ｇです。一般人より高給取りです。

心配の塊

部屋に戻りガイラの荷物を持ち出す。二人を探す、もう病錬にはいない、どこへ行ったのだろう。城の中を探すがいない・・・結局見つけたのは宿屋だった。

「ここに移るのなら先に言っておけよ。」

「すまんな、あそこは居心地が悪くてな、昨日の内にこっちに移った。」

「そうですよ、ケルテンさん。ここの宿屋の方が気楽でいいです。」

そういわれて嬉しそうな宿屋の親父がいる。なんか気持ちが悪い。

「まあもっともな意見ではあるがな。さっきも近衛の連中と衝突してきたばかりだ。」

「もしかして僕達のせいですか?そうだったら・・・」

アレフがとても申し訳なさそうに言うのと遮る。

「ああ違う、違う。個人的な問題だ。君らのせいじゃないから気にしないでくれ。それとガイラ、預かり物を返す。」

そういってガイラの背嚢を投げて返す。それと厳重に梱包した銀の竪琴をアレフに渡す。

「絶対音を出すなよ。それ以前に梱包から出すな、いいな!」

アレフが恐る恐る手に取る。ガイラはもう触りたくなさそうだ。知らん振りで自分の袋を漁りだした。金色の篭手を見つけて取りだす。

「なんだこれは？派手すぎじゃないか、金色はないだろう。」

「だってしょうがないじゃないか、使える素材がドラキーマのしかなかったんだ。それでも前より性能は上がっている。文句があるなら今度はドラゴンの皮でも持って来い。」

そう説明するとガイラがこねくり回してあちこちを見ている。

「おい、なんでこんな所に宝石みたいのがついているのだ？」

篭手の先端の裏側につけておいた水晶に気づいた様だ。

「ああ、念の為だ。この間みたいになったら困るからな。保険をかけておく。それに一滴血を垂らしておけ。」

「ふ～ん。こうすればいいのか？」

そう言いながらガイラが指の先端を噛み切る。垂らされた血で水晶が真っ赤に染まった。

「ああいいぞ、まあこんな物役に立たない方がいいがな。アレフ、ホイミだ。」

「はい、・・・ホイミ！あの・・・僕の分はないのですか？」

「はっ、何が？」

「いえ、その宝石みたいのです。ケルテンさんもマギーさんも持ってますよね。」

「なんだ、知ってたのか。もしかして欲しかったのか？」

「いえお二人だけなら迷惑かなと思っていたんですが、ガイラも貰えるなら僕も欲しいかなと。」

そうか、欲しかったのに遠慮していたのか。

「ああ宝石はある。お前の装備はまだ買い換える余地があるからどうしようかと思っていたんだ。何かあるか？」

「ああそうだ、それで思い出しました。ガライの墓でこんな気持ち悪いペンダントを見つけたのですが・・・」

アレフが袋から髑髏のついたペンダントをだす。うわっ！死の首飾りだ。

「よくそんな物、持って帰ってきたな。」

「こいつな迷宮の地図を全部埋めるまで、次の階に降りないんだ。それで無駄にいろんな物を見つけたんだ。」

「凝り性か、俺に似ているな。まあいいや、それは死の首飾りだ。装備すると徐々に命が奪われる、しかも外すことのできない呪いの装飾品だ。売却するなよ、流通されては困るからな。」

慌ててアレフがテーブルの上に放り出した。

（俺はＭＰを１８放出する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれおお万能たる力よ、聖なる力となりて、これを浄化せよ、シャナク！）

俺がシャナクを使用し髑髏の部分に触れる。髑髏が砕け散る、残ったのは鎖と空のペンダントヘッドだけ。アレフとガイラ、それと宿屋の親父が目を丸くしている。

「今の何やったんですか？」

「うん！ああ古い物には結構呪いのアイテムがあるからな、解呪の法を知っているんだ。ここラダトームで習ったぞ。」

「お前さんには驚かないと決めていたが無理だったな。」

俺は自分の鞄から幾つかの道具を取り出す。ハンマー、ナイフなどを使ってペンダントヘッドを加工する。別に取り出した水晶をペンダントヘッドに嵌め込む。しばらく作業を続け出来上がったペンダントをアレフに渡す。

「こんなんでいいか？よかったらさっきみたいに一滴血を垂らせ。」

アレフがしばらく眺めてから、ナイフで指先に傷をつけた、垂らされた血で水晶が真っ赤に染まった。

「これで４人ともお揃いですね。嬉しいです。」

アレフが首にかける。お揃いね・・・なんとも平和な響きなんだ

ろうか。

「さっきも言ったが役に立たない方がいい代物だ。それとガイラ、拾った物をむやみに触るなよ。王様や大臣から自重せよとありがたい言葉だ。俺がリムルダールに行って帰ってくるまで無理はするな。」

「そうか、それは退屈だな。なんだったら同行しようか？」

ガイラの何かを期待するかの様に提案する。こいつは一度死んだくらいでは懲りないのだろうか？

「駄目だ。任務で行くのだから遠慮してくれ。その間に竪琴を渡してこい。いつまでも持っていては困る。」

「そうか、確かにその通りだ。」

「というわけで１０日は戻って来れない。その間は無理はするな。次の目標はメルキドだからそれに備えて金は貯めておけよ。」

「たしか２５０００Ｇぐらい必要だと言ってましたね？」

「ああそうだ。正確には２４６００Ｇ、炎の剣と水鏡の盾を購入予定だ。両方とも今の技術では作れない代物だからな。楽しみにしてろ。」

「だそうですよ、ガイラ。竪琴を渡したらマイラの村付近で稼ぎましょう。」

「そうか？ガライの墓の方が稼げるぞ。」

「却下だ。もう竪琴はないとはいえ、魔物の巣窟だ。頼む、自重してくれ。」

「判ったよ。お前さんが帰ってくるまでは自重する。」

ガイラはとても不満そうだ。多分こいつに言っても無駄だからアレフに頼んでおこう。

「アレフ、こいつの監視を頼んだ。」

「お任せ下さい。殺してでも止めます。」

「そうだ、その意気だ。」

「おい、なんかおかしくないか。目的と手段が間違ってるぞ。」

「じゃあ自重しろ。じゃあ俺はもう行くから。」

それから馬に飛び乗り城をでる。リムルダールまで１０日、この時間を１時間でも短くする。あの二人から目を離すのは心配でたまらない。

心配の塊（後書き）

前回の後書きに続きまして一部設定を

一般人の平均月収は８００G程度

物価は現在日本の１／３～１／２です。

陰謀

出発して二日俺は毒の沼地の手前にいる。今回は俺一人と馬二頭、片方の馬に疲労がみえたら替え馬と荷を積み替えて駆けてきた。ここから一日は徒歩になる、さらに水や食料、飼い葉が手に入らないので荷物を念入りに調べ、二頭に均等に積む。トラマナを使う、俺一人なのでこれで問題なく通過できる。ただし馬が歩きやすいよう海岸線に近い平らな場所を選んで通る。２時間おきに馬に水と飼い葉を与え、トラマナをかけ直す。いっそのことトラマナを公表しようか。今回の様に俺だけがこき使われることは避けることができる。

日が落ちる前に海底洞窟の北口に辿り着いた。この洞窟を通り抜けるのに急いでも５時間はかかる、無理にこのまま進むか、一晩休むか・・・駄目だな。俺だけなら無理はできるが、馬はそうはいかない。洞窟を抜けた先でも馬には走ってもらわないと困る。今日はここで休もう。魔物の気配に緊張しながら睡眠をとる・・・物音や魔物の気配がする度に飛び起きる。明日洞窟を抜けたら、トヘロスを使ってゆっくり眠る、それが楽しみだ。

断続的だが８時間は寝ることができただろうか。頭はすっきりしないが洞窟を進む。水も飼い葉も残り少ないから早く向こうまで行きたい。気は逸るが洞窟内を走らせるのは馬の脚を痛めるので、手綱を引いて歩く。まれに魔物がでてくるがメーダや魔法使い程度で強くないので即効倒す、馬も軍馬で多少の戦闘では逃げない。

３時間は歩いた頃だろうか、先方にたくさんの人骨らしき骨と金属鎧が散らばっている。地面や壁に火球を叩き付けたような跡もある。なるほど一見ここで魔物に襲われて死んだ者の死体の山・・・そんなわけあるか！俺は腰のポーチに手を入れ、アイテムを確認す

る。それから声をかける。

「無駄ですよ。そんな手に引っかかるほど馬鹿ではありません。」

「くっくっくっく！やはりこんな手には乗らんか、だが１６対１、貴様と言えどこの戦力差覆せまい！」

闇の奥から漆黒の鎧が現れる。その髪飾りは赤、鮮血の色。

「あの橋の時の悪魔の騎士だな、何者だ？」

聞いても無駄だろうが、思わず口にする。周りの骨が、鎧が立ち上がり、次々に武器を構える。

「お前には何一つくれてはやらん。死以外にはな！やれっ！」

それを合図にがいこつと鎧の騎士が隊列を組みにじり寄ってくる。前列に盾を構えた鎧の騎士８体、後ろに槍を構えたがいこつ８体。攻防一体の布陣、その後ろで嘲笑するかの様に立つ悪魔の騎士。

「数だけで俺に勝てると思うな、とりあえずこれでも喰らえ！」

手にもった聖水をぶちまける、聖水がかかった魔物から蒸気のようなものが上がる。

（俺はＭＰを２放出する、ＭＰはマナと混じりて神に捧げん、
おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ、ニフラム！」

俺のニフラムによって骨と鎧が崩れ落ちる。奥の悪魔の騎士以外

立っている者はいない。奴が慌てて叫ぶ。

「貴様っ！何をした？」

「お前に教えてやることなど一つもないな。貴様も神の元に還してやる。」

悪魔の騎士がじりじりと下がり、闇にその姿が溶けていく。

「ちっ！これまでか。まあいいこれで奴にも義理はたった。俺は引く、次もこううまくいくと思うな！」

そういい残すと悪魔の騎士は走り去った。

おかしい。聖水とニフラムの相乗効果で全て昇天させた。悪魔の騎士も範囲内にいたはず・・・抵抗された感じもなかった・・・となると人間か、最悪のシナリオだ。予想はしていたが目の当たりにするといい気分ではないな。やはりロストマジックは公表できない。そう思案しながら歩く。

――――――――――――――――――――――――――――

「私が用意した兵を全滅させて、無傷とな？」

闇の中、金色のローブを纏った魔物が不機嫌に話す。

「そうだ。何か水のような物を撒いた瞬間に全て崩れ去った。やはり肉体のないものなど使い物にはならんわっ！」

悪魔の騎士が吼える。

「ふむ、それだけでは判らぬな。そなたや奴が言う通り油断ならぬな。しかしその者の力、底が知れぬか・・・なるほど奴め、持て余しておるな。」

「ふん、俺にはそんなこと関係ない。やつに復讐できればそれで構わん。」

「お前はそれでよいだろうが、我らとしても看過できぬ問題になるやも知れん。今からでも情報はあつめさせる。そなたも遺恨など置いて、次の作戦に移れ。」

「次の作戦か、俺はどっちに行けばいい？」

「そうだな、ガライ方面だ。今度は失敗は許さぬぞ。いいな！」

闇に浮かぶ金色の姿が滲む。それが見えなくなってから悪魔の騎士が動き出す。

「どいつもこいつも俺を軽く見おって！お前ら全て俺の踏み台にしてしてやるっ！」

――――――――――――――――――――――――――――――

それから一週間、ようやく湖が見えてきた。リムルダールが浮かぶ湖は広大だ。湖の向こうにうっすらとリムルダールが見える。北側から島に渡る橋に向かって進む。途中で目印のように石が置いてある場所で止まる。俺の両親が亡くなった場所らしい。その辺で摘

んだ花を供える。ここを通るときにはかかさない。

リムルダールの橋を渡る。門番が二人立っている。見たことのある顔だ。

「ラダトーム城から国務大臣の使いできた。通行許可願いたい。」

「なんだ、ケルテンじゃないか。他人行儀な挨拶なんかいらないぜ。」

「そうだぞ、しかし変わらんな?」

門を護っていたゲオルグとドゥーマンが軽く返す。

「駄目だ、きちんとやるべきだ。何が起こるか判らん。これが大臣からの書状だ。」

俺は懐から蝋封のある書状を見せる。蝋封にはラダトーム王家の紋章、二人がそれを見る。

「よおし!通行を許可する!」

ゲオルグが真面目くさって言う。思わず噴き出す。

「お前がやれって言ったんだろう、笑うなよ!」

「すまん、あまりに似合ってないので思わずな。馬を頼む、しばらく洗ってやっていないので綺麗にしてやってくれ、。・・・それでこの街はどうだ。粗略に扱われていないだろうな。」

馬を引き渡しながら質問してみる。

「ああ、むしろ大事にされている。あんたの知り合いと言うことで皆優しくしてくれる。」
「住むところも用意してくれたし、仕事も3交代制で無理はない。食うにも困らない。今日はクロウは休みだがあいつもうまくやっている。」
「そうか、ならよかった。じゃあ俺は爺様の所へ行く。急ぎの用なんだ。」
名残惜しそうな二人に別れを告げて、我が家に行く。
「あいつ、いつも忙しそうだな。」
「そうだな。俺達も何か手助けしてやれればいいのにな。こんな所で門番じゃ何もしてやれない。」
「そう言うな。これもあいつに頼まれたことだ。ここを護ることでほんの少しでもあいつの負担を減らしている。そう思えばいい。」
「お前賢いな。そう言われればそうだ。しかし最初は恨んだものだが、今はあいつに会えたことを感謝している。」
――――――――――――――――――――
「爺様、帰った。今日は公式の使者だ。私的な話は後にしてくれ。」
「そうか、ではまず書状を受け取ろう。」

俺が書状をリムルダール自治区長に渡す。書状の蝋封を確かめナイフを入れ、書状を取り出す。しばらく目を通している。深く考え込んでいる。

「なるほど、城下町に溢れている流民を引き取れということじゃな。最大で5千人か・・・人数的には問題ない。土地もあるし仕事もある。だがどうやってここに来る？」

「いや今は移住の許可だけくれればいい。方法はいずれ考える。」

「そうか、なら返事を書こう。もちろん受け入れる。・・・それでお前はどうだ。」

「何がだ？」

「お前さん自身の話だ、もう使者の話はいいだろう。仕事はうまくいっているのか、友人は？女はどうだ？」

「ああ五月蝿い。担当している勇者二人とはうまくやってる。近衛にも気持ちのいい奴はいるし、仲良くさせてもらっている女もいる、心配はいらない。それより紹介した3人はどうだ。」

「そうか友人も女もおるか、それはよかった。お前は相手によっては壁を作るからの。」

「俺のことはもういい。それでどうなんだ。」

「よくやってもらっている。街の人間ともうまくいっておるし、仕事も真面目だ。この街の兵士にかかっておった負担も軽減できた。いい人材を紹介してくれて皆感謝しておる。」

「そっか、それはよかった。あいつらもそんなことを言ってた。実はあいつらを勇者から解任したのは俺だ。少々問題があったのでな・・・懲らしめて解任した。それで返金の手伝いをしてやった。」

「ふ～む、お前のことだ、厳しいがうまくやってやったか。それで立ち直ったのならいいじゃないか。過去はともかく今はいい青年達だ。この街ではそれだけで十分じゃ。」

「これを俺が言ったのは秘密にしといてくれ、いずれ本人達が言うまでは知らん顔で頼む。」

「誰に物を言っておる。自治区の長ともなると腹芸の一つできぬわけがなかろう。」

「そうだな、爺様に全部任せた。俺の出る幕はないな。じゃあすぐに城に戻るぞ、放っておけないやつらが何人かいる。」

「そうか、そのうちそいつらを連れて来い。わしが死ぬ前にな！ワッハッハッハッハ・・・」

「そう簡単に死ぬものか！じゃあな、元気でいろよ！」

俺はそう捨て台詞を残すとすぐに出て行った。馬を受け取り即ルーラで城に帰る。城下街が騒がしい、城に戻ると不穏な雰囲気がしている。俺がいないうちに何が起きたのだろうか？

罪と罰

ラダトーム城に戻った。ここをでてから１０日、今日は7月１０日か。

城下街では道行く人々が噂をしている。

（ここだけの話だ。この街にいた流民を近衛騎士によって処分されたらしい。）

（俺が聞いた話と違うな。流民を他の街に移住させようとして失敗したと聞いている。）

（正確な話をするべきだ。近衛によって追い出された流民が魔物に襲われて死んだ。そういうことだ。）

もしかして移住計画が失敗したのか?正確な情報が欲しい。急いで城に戻るが静まり返っている。皆青白い顔をして何かを口にするのも憚れる、そんな表情をしている。大臣か近衛騎士隊長に話を聞こう、そう考えて2階へ急ぐ。衛兵に止められた。

「国王様の謁見の準備をしております。いかなる者も通すなとの国務大臣の仰せです。」

「そうか、私は国務大臣付きの特務隊士だがそれでも駄目か?」

「あっ!失礼しました。ですが特例については聞いておりません。問い合わせ致しますのでお待ちいただけますか。」

「無理言ってすまない。そうしてもらえるか?」

衛兵の一人が階上に駆け出す。

「ところで何があった？急遽の謁見があるとは聞いていないが？」

「詳しくは聞いておりませんが、どうも近衛騎士の不手際に対する査問だそうです。」

「もしかして隊長に何かあったのか？」

「いえ、違います。ガライに派遣された部隊の近衛騎士が虚言をしたとのことです。これ以上のことは言えません。城中ではこの話をすることは禁止されています。」

「ありがとう。あとは大臣か隊長に聞くことにする。すまなかったな。」

さっき上がっていった衛兵が急いで戻ってきた。

「すぐに執務室に来いとのことです。」

「承知した。礼を言う。」

俺は階段を駆け上がった。そこには一人の文官がおり、俺を執務室に案内した。2階では謁見の準備の為たくさんの者が忙しく働いている。

「特務隊士ケルテン、只今戻りました。こちらがリムルダールからの書状です。」

国務大臣がおざなりに受け取る。

「ご苦労であった。だが無駄になったかもしれぬ。」

「どういうことですか？」

「ふむ、そなたは知らぬのも仕方あるまい。６月１日よりガライとマイラに各１００人ずつの移民団を派遣した。それぞれ近衛騎士一個中隊の護衛をつけた。」

「なるほど近衛騎士の半分を護衛につけましたか。妥当な数ですね。」

「そなたに言われるまでもない。だが５日経ってガライに向かわせた近衛騎士の４名だけが戻ってきた。派遣の途中で魔物に襲われ全滅したとの事だ。」

「それは困ったことですね。しかしガライまでなら近衛一個中隊でかなわぬ魔物などおりませんが。」

「そこを不信に思って近衛騎士隊長と詰問したのだが、鎧の魔物、骨の魔物が主に、キメラなる魔物も現れたらしい。それもこちらの一個中隊を上回る二個中隊ほどの戦力だったらしい。それで戦闘になったが少しずつ戦力を削られ、護衛対象である流民も殺されたか逃亡した為帰還したとのことだ。」

「なるほど竜王側もずいぶんとたくさんの魔物を送ってきたものです。それで何が問題なのですか？」

「それが今日になって全滅したはずの他の騎士が戻ってきた。その者らの言によると魔物との戦闘は劣勢なれど膠着しておったらしい。

さらに流民も逃亡せず戦いに加わっていたそうだ。だが一部の近衛騎士が馬で駆け出し離脱、そしてルーラで消えたということだ。残された者達でなんとか撃退はしたが近衛騎士８名が戦死、流民も約半数が死亡、それでも残りの流民をガライに届け今日戻った。そう報告を受けておる。」

「それは本当ですか？もしそうなら由々しきこと、王国の尊厳に関わります。」

「そうだ。それで双方の話を聞くために、これから王様の前で査問を行なうことになった。そなたも出よ。時間が無いゆえそのままでよい。儀礼用のマントを用意させる。」

大臣はそれだけ言うと机に戻った。忙しそうに文官となにやら話している。それにしても大変な事件がおこったものだ。一般人を連れての行軍となると通常の倍の時間がかかるのは仕方がない。さらに魔物に襲われたのも不可抗力だ。しかし護るべき者を残して敵前逃亡したとは近衛騎士の面目は丸つぶれだ。いやそれだけではすまない。城下街の噂が物語っている。

――――――――――――――――――――――――――――――

謁見室である。いつも通り玉座に王様、左に立つのは近衛騎士隊長、以下近衛騎士４名、右には国務大臣、その下にシュミット、次に俺、以下文官２名が立つ。そして真ん中に畏まるのが近衛騎士４名。

「この度はそなたらに虚言があったと報告があった。近衛騎士エックハルトよ、何か申すことはあるか！」

大臣が怒気を隠さず告げる。エックハルト、逃げたのはお前か・・・

「何を根拠にそのようなことをおっしゃられますか、我ら一切虚言など申しておりませぬ。」

「そうか、では証人をここに！」

後ろの扉が開き、ボロボロになった騎士の鎧を着た近衛騎士サイモンが入ってきた。その顔には隠すことのできない怒りがある。その怒りの視線を浴びたエックハルト等が明らかに動揺する。

「では改めて近衛騎士エックハルトよ、申し述べることはあるか！」

「ぐっ！しかしあのような下賤な者どもの護衛に近衛騎士を当てたこと自体が間違いだ。我等近衛騎士は国王様を護るためにあるのだ。下賤な者の為に失う命などない！」

「てめえ、もう一度言ってみろ！」

サイモンがエックハルトに飛び掛る。駄目だ、完全に怒りに我を忘れている。俺は刀を鞘ごと抜き、一足飛びにサイモンの首に突きつける。

「御前です。お止め下さい。」

「ケルテン止めるな。こいつのせいで俺の友が・・・」

「よい、余が許す。その者に述べさせよ。」

「近衛騎士ローゼンシュタインよ、国王様より直言の許可である。」

俺は刀を納める。サイモンが振り上げた拳を下ろす。握られた拳がぶるぶる震えている。

「あの魔物の襲撃の際、敵は約二個中隊、我等近衛騎士は一個中隊なれど、流民との協力もありなんとか戦えていた。だがこいつらが戦線から離脱したせいで、そこから戦線が崩れた。それでも我等は命に賭けて勅命を護ったのだ。・・・我等が全滅しただと、馬鹿な！なぜこいつらはここにいる！こいつ等は敵前逃亡をしたからここにおれるのだ。しかも言うに事欠いて下賤な者のために失う命などないだと勅命をなんだと思っているのだ。お前達の為に死んだ同僚に何か言えるか！！！言ってみろ！」

サイモンの怒声がこの大広間に響く。サイモンに睨まれたエックハルトは血の気を失った顔で震えている。

「そうか、近衛騎士エックハルトよ、そなたは責任を逃れる為余に虚言を申した。そうだの？しかも余の勅命には従えぬ、そう聞こえたの余の聞き違いか？」

「しっしかし陛下！」

「国務大臣、余はこの者に直言を許してはおらぬ。」

「はっ！近衛騎士エックハルトよ、黙るがよい。そなたが虚言を述べたこと、勅命に背いたことは明白である。」

「恐れながら申し上げます。」

エックハルトの後ろに控える一人の近衛騎士が伏せたまま述べる。大臣が王様と目を合わせる。王様が首を縦に振る。

「申せ、正直に申すがよい。」

「はっ！あの時エックハルト様は我々の小隊長でした。その小隊長の命令で敵を強行突破しました。そしてこの後「黙れ！それ以上は許さん！ぶぎゃっ！！！」

エックハルトが口を挟んだ。その瞬間近衛騎士隊長の剣がエックハルトを打つ。あまりの屈辱、情けなさに隊長の剣が震えている。

「続けよ」

「はい、反転して再突入するものだと思っておりましたが、突然小隊長がキメラの翼を使用しました。その後は黙っているよう命令されました。我々は元々エックハルト子爵家より選出された者でその命令には逆らえません。私の罪は明白ゆえここに正直に申し上げました。申し訳ございません。」

その騎士は涙ながらにそう話した。見覚えがある、あの模擬戦で４番目に戦った男、あの中で一番腕がたっていた。そうか子爵の家来だったのか。

「そうか、よく正直に申した。余はそなたの罪は問わぬ。さて国務大臣、ここはどう処置を行なうか？」

「ではエックハルト子爵は爵位と騎士の位を剥奪、さらにラダトームより所払いと致しましょう。国王様が罪を問わぬとおっしゃられた者以外の二名は小隊長の命令に従ったのみと言えど、事実を隠蔽

したことは間違いない。よって罰としての降格が相当と臣は考えます。」

「そうか、近衛騎士隊長はどうか？」

「寛大な処置に感謝いたします。我等近衛騎士一同更なる忠誠を誓います。」

「ではその者をここより連れ出せ。顔をみるのも不愉快だ。」

「はっ！」「はっ！」

項垂れているエックハルトが、控えていた近衛騎士に引きずられるように連れ出された。もう何も言えないようだ。

「それではこの謁見は終わりでよいな。余は疲れた。」

「はっ！ではこれにて終了いたします。皆の者、大儀であった。」

その言葉で王様が玉座より去った。俺はサイモンの肩に手を当てる。かける言葉は思いつかない。それでも俺は手を当てたまま立っていた。床にサイモンの涙が零れ落ちた。

ラルス16世の心境

国王の私室、国王と国務大臣が二人だけでいる。

「国王様、先の処分はあれでよろしかったでしょうか？」

「いまはお前しかおらん、そのような畏まった話し方は無用じゃ。全て剥奪の上追放か、死した者からすると生ぬるい処分かもしれんな。」

「そうですな、兄上。しかし爵位ある者に対していきなり死刑との前例はありませぬ。あれで妥当な線では？」

「そうか・・・まああの者にとってはその方が過酷やもしれん。屈辱の中野垂れ死ぬがいい・・・そうだ、さっきの近衛、あの怒鳴っておった者と白状した者だ。あの者等に褒美をだすのを忘れていた。呼んでくれるか？」

「ここにですか？」

「ならば大広場でも構わぬ。そんなに心配ならそなたの配下も呼ぶといい。なんと言ったかの？」

「はい、シュミットとケルテンなる者です。」

「そうだ、その二人だ。勇者の話も聞きたい。呼んでくれ。」

「わかりました。しばしお待ちを。」

――――――――――――――――――――

俺とシュミットが国王様に呼ばれた。二人で顔を見合わせる。

「もしかして、竜王討伐か王女救出の催促か？」

「ありえるな、俺の方も手駒を失ったばかりでいい材料がない。」

「とりあえず急ごう。怒られる材料は少ないほうがいい。」

俺達はわざわざ謁見の大広間の正面から衛兵の許可を得て入室する。普段の公務では大臣執務室から直通の扉で入っているから、なんとなく緊張する。玉座に国王、隣に国務大臣、二人しかいない。護衛一人すらいない。俺達が片膝を付き頭を垂れる。

「両人ともしばし待て、もう2人呼んである。」

黙って待つ。しばらくすると怪訝な顔をしたサイモンとさっきの騎士が入室する。表情は固い。

「よう来た。余の勅命を護って奮戦した者には褒美をやらねばならん。それが特に困難な場合は十分な褒美が必要だの。そなた、なんといったか？」

「この者はローゼンシュタイン男爵家サイモンにございます。未だ家督は継いでおりません。」

大臣が名前と告げ、意味ありげに一言付け足す。

「そうか、男爵の家の者か。何ゆえ家督を継いでおらぬか？」

「父が存命、さらに私は次男ですのでその権利がありません。先の大戦で兄が戦死した為近衛騎士に抜擢されました。」

「なるほどのう、では今回の褒美に男爵家相続の件許可しよう。大臣、問題ないな。」

「問題はございません。早速典礼のものに申請致します。」

「そういうことだ。余からの褒美受け取ってくれるな？」

「はっ！ありがたき幸せ。されど私だけが褒美を頂くわけにはいきません。それに死した者は何も受け取ることができません。なにとぞその者等の魂が安心して神の元にいける様ご配慮頂けませんでしょうか？」

「近衛騎士サイモンよ、言葉が過ぎるぞ！」

大臣がその無礼を嗜める。

「よい、余は構わぬ。そなたは素直で率直だのう、うらやましくあるな。心配することはない、そなた以外の者にも順次褒美を用意させる。また遺族に苦労させることは一切させぬ。それでよいか？」

「はっ！ありがたき幸せ。全ての者に代わりて御礼申し上げます。」

サイモンが涙を流して礼をする。

「よい、次にそなたは元エックハルト子爵家の従士と言うたな？」

「はい、近衛騎士ステファンと申します。平民ゆえ家名はございません。」

「そうか、平民か、苦労したであろう。そなたにも褒美をやろう。なにかあるか？そなたが希望するなら然るべき貴族の家に養子縁組させることも可能じゃ。」

「恐れながら私には褒美を頂く謂れはございません。陛下のご期待に答えることができなかったばかりか、事実の隠蔽を行いました。万死に値します。願わくば死を賜らんことを、それが一番の願いでございます。」

「聞いたか、大臣。平民出の騎士の方がよほど騎士らしいの。」

「御意、格式を重んずるばかりの者よりなんと騎士らしいことか。」

「そうだの、しかし余はそなたの一番の願いを叶えてやることはできぬ。すでに８人の近衛騎士が戦死し、一人が追放、二人が降格。つまり余は１１名の近衛騎士を失ったことになる。ここで更にそなたを失うわけにはいかぬ。自死することも職を辞することもならぬ。よいか、これは勅命だ。この勅命をもって褒美としよう。」

「はっ！近衛騎士ステファン、勅命承りました。」

「そうか、それはよかった。では大儀であった。二人とも下がってよいぞ。」

二人が退室する。お叱りもなくなんとも温情のある沙汰、ほっとした。

「特務隊士シュミット、ケルテン、両人とも前へ。」

「はっ！」「はっ！」

大臣に促されて前にでる。頭は垂れたまま片膝をつく。

「よい、面をあげよ。他に人はおらぬ。そなた達には特に苦労をかけておる。此度は勇者の活躍の話を聞きたくてそなたらを呼んだ。」

シュミットが少し前にでて沈痛な声で詫びる。

「私の担当する勇者４名とも失いました。遺体も残っていないため蘇生すら叶いません。ご期待に答えることもできずに誠に申し訳ありません。」

「別にそなたを責めているのではない。しかしそれはかわいそうな事をした。もしその者等に身内があるなら厚く遇するがよい。」

「はっ！必ずそのように致します。」

「ふむ、そなたはケルテンと言ったな。そなたの勇者はどうだ？この間蘇生させたばかりだの。」

「はい、現在ロトの残した3種の神器の一つ、雨雲の杖を手に入れた頃だと思います。何分私も先ほどリムルダールから帰ってきたばかりで確認は取れていませんが、その様に手配していました。」

「そうか、順調にいっておるか、それはよかった。しかしリムルダ

ールとはいかな用事じゃ？」

「私の命令でリムルダールの長に書状を託しました。移民の件でございます。先方の許可を得ることはできましたが無駄になったと思われます。」

「そうじゃな・・・ガライへの移民の失敗、あの馬鹿者のせいで無に帰するか。腹立だしいことよの。」

「御意。しばらくは移民の話に乗る者もありますまい。」

「言っても仕方のないこと、次の手を考えよ。そなたの手腕、期待しておる。・・・それと我が娘ローラの行方はどうじゃ？・・・生命なくとも・・せめて身体だけでも・・ここに帰してやりたい。」

悲痛な言葉、搾り出すように話す。本当は何処にいるのか、俺は知っている。まだ公表はできないが希望だけは伝えよう。

「まだお亡くなりになったとは限りません。希望はお捨てになりませぬよう申し上げます。」

「そうか、そなたは優しいのう。だが姿を消して約半年、最悪は想像しておかねばならぬ。それも王族の勤めよ。栓ない事を言うた、忘れてくれ。そなたらは竜王の討伐にのみその力を注ぐがよい。大儀であった。そなた等の職務に戻るがよい。」

「はっ！それでは期待に沿えるよう職務に勤めます。」

「はっ！失礼いたします。」

俺とシュミットが大広間から退室する。静まり返った城中を並ん

で歩く。

「ケルテン、なんだったのだろうな？俺の勇者のことを聞かれた時は心臓が止まるかと思った。」

「そうですね、しかし王様はあのように言っておられたが王女様のことは捨ておくわけにはいかん、何とか致しましょう。そう決意しました。」

「そうだな。しかしまあ何時の間に雨雲の杖を手に入れたのだ。俺の勇者ではガライの墓には行かせられなかった。」

「シュミットがいない間に行かせました。多少の誤算で一人が死にましたが陛下の温情により蘇生が叶いました。ありがたいことです。」

「そうか、それはよかった。お前なりによい忠言をしてるか、俺にはもうできないことだな。」

「・・・ではメルキドは駄目でしたか？」

「ああ、主だった者は先の大戦で亡くなったらしい。特にゴーレムの狂乱に巻き込まれて死んだ者達が惜しいと長も言っておられた。」

「そうですか。それで大臣は何か言っておられましたか？」

「それが何も。とりあえず情報を集めよと言われた。毒の沼地の通行方法については特に強く言われている。」

「それも無用になりました。移民に応じる者などもういません。城

下の噂を聞きましたか？」

「ああ聞いた。近衛騎士で流民を処分したとな。あながち間違っていないな。」

二人で大きなため息をつく。そのため息で任務を思い出したかの様に二人が異なる方向に歩き出す。その方向は明るい未来だろうか、これから訪れる困難にさらにため息がでる。

ラルス16世の心境（後書き）

設定集

城に勤めている者の給料（月給）

近衛騎士隊長　３０００Ｇ
近衛騎士　２０００Ｇ
一般兵　１０００Ｇ

国務大臣　０Ｇ
高給文官　１５００Ｇ
文官　１０００Ｇ

特務隊士　２５００Ｇ

魔法談義？

７／１０　勇者支援生活７１日目

今日はほとんど終わっている。激動の一日であったが本来の仕事をしよう。アレフとガイラは何処にいるだろうか？それを確認するため大臣の執務室にいる。魔法の地図を見ると光点二つはともにマイラにある。わざわざ確認しなくてもそれが二人と判ってしまうことが悲しい。

アレフの血の契約書を見る。レミーラを使用して再度確認するがやはり呪いのような文字はある。呪いか・・・シャナクで解除できるだろうか？だめだな、これはあいつらの命綱でもあるから解除するわけにはいかない。そもそもこれは呪いなのだろうか？装備しているわけではないし、今その呪いが発動しているわけでもない。やはりあれに頼るしかないな、もう種は蒔いてある。

二人の位置だけ確認して執務室を辞する。図書館へと足を向ける。１０日も放っておいたから何か土産が必要だろうか？何も持っていないけどな。

「やあ、マギー。今帰ってきた。」

「おかえり、そろそろ来てくれると思ってたわ。」

「なんでそう思ったの？」

「血の契約よ、この地図で判るの。ほらっ！」

手元にある本の1ページを俺に見せる。

「本当か！何時の間にそんな秘術を！！！」

覗き込むと開かれた一面には地図など書かれていない。

「嘘よ、謁見の話を聞いただけ。王家の秘術なんて判る訳ないでしょ。でもあなたの驚いた顔は面白かったから、それで気が済んだわ。」

「やられたよ、俺の負けだな。よしじゃあこの間使った魔法を教えよう。これは人間には全く効かないけど有効な魔法だ。いつもの用意をしよう。」

そう言いながら黒板を準備する。マギーが嬉しそうに教卓を引きずってくる。

「じゃあ始めよう。さっきも言ったがこれは魔物、それも実体を持たない魔物にしか効かない。」

「そんなの意味あるの？」

「意味あるも何も、つい一週間前にそれで危機を脱したさ。その魔法の名前はニフラム、神に祈り魂を正しく導く魔法だ。」

「魂を導く？魔物の魂をどうして神の元に導けるわけ？」

「そうだね、本来魔物の魂は神には導かれない。ましてや生きている対象の魂を神の元に送れるわけがない。ではマギー、なぜできるのか？その導くことのできる魔物とは何か？」

「なに、ヒントだけなの。そうね～・・・」

マギーが首を捻って考えている。俺は黙って見続ける。

「そうか、わかったわ！ゴーストね、あれこそ魂そのものだわ。」

「それでは1／3だ。まあこれは公表されていないことだから仕方ないか。あとはがいこつ、鎧の騎士だ。やつらは実体はあるがあれは仮の姿、それを動かしているのは魔に犯された魂だ。」

「そんなこと聞いていないわ、それ本当なの？」

「ああ、俺の経験測を一部の人間にのみ公表している。元々の人間の強さで魔物の強さが変わると思っていい。ちなみに生前の技能も使える。君もがいこつとは戦っているだろう。」

「ええ、直接は戦っていないけどアレフやガイラが戦っているのは見ていたわ。」

「この間海底洞窟であれと鎧の騎士合わせて16体と戦闘になった。そこで全部の魔物の魂を開放してやった。」

「はあ、それはすごいわね。いくらあなたでも普通には勝てないわね。」

「そうだね。ここでそのニフラムについて・・・

黒板に詠唱文を書く。（私はMPを2消費する、MPはマナと混じりて神に捧げん）

・・・と二行目まで書いたが、他の魔法と異なる部分がある。これと同じ魔法が他にも2つあるが気づいたかい？」

マギーが俺の魔道書の付箋のついているところを開く。ニフラムのページ、ザオラルとザオリクの見開きのページ。自慢げに俺に見せる。

「そうだ。これらの魔法は万能たる力を神に捧げる魔法。ここが神を意味する単語、こっちが捧げるという動詞だ。」

「なるほど、じゃあこの下は“おお＊＊＊神よ”ね。」

「そうだ、“おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ、ニフラム”が正解だ。これでこの魔法は使えるようになる。これは切り札になるから特別に教えた。もし魔物に知れてもこちらは困らない。」

「そうね、さっそく会得させてもらうわ。でももう二つの魔法はなに？神に奇跡に関わる魔法・・・」

マギーがザオラルとザオリクの魔法をなぞる。神を表す単語、そして魂を表す単語。

「・・・もしかして魂を戻す魔法、ということは蘇生の魔法、王家の秘術ね。でも二つあるのはどういうことかしら？詠唱文も部分的に異なるだけでほとんど同じだわ。」

「ああそれは消費ＭＰの少ないほうは大まかに神に祈りを捧げている。それと違ってＭＰの多い方は具体的に神の名を告げ、願いを伝

える。効果の違いは成功する確率だけ。」

「そう、ここアレフガルドでは精霊ルビスが信仰されているけど、本当はもっとたくさんの神々が存在しているはず。その一つの名か・・・やっぱりあなたは怖いわ。今度は神の領域に入ったわ。」

「そんな大層なことじゃない。まあ蘇生の魔法は覚えなくていい。使用に制限が多い。まず第一に戻ってくるのは魂だけで、傷ついた体は治らない。遺体のない場合、魂が戻っても再び死んでしまう場合は意味を成さない。さらに個人情報を知らない相手は対象にできない。」

「判ったわ。とりあえずニフラムを会得する。他に注意することは？」

「実は聖水がニフラムに近い効果を持っている。さっきの魔物に直接振り掛けると魂の拘束力が落ちる。これとニフラムを併用するとより強い効果が期待できる。この前も最初に聖水をばら撒いてから魔法を使った。覚えておくといい。」

「ふ～ん。でもよく聖水なんて持っていたわね。」

「護身用さ、常にトヘロスやルーラが使えるとは限らないから、その代理のアイテムを持つのは常識だ。」

「なるほど、アレフが護身用にキメラの翼を持っていたのはそういうことね。納得したわ。」

「ああそうだ。それで思い出した。明日にでもアレフをマイラまで迎えに行く。戻ったら次はメルキドを目指す。今度は危険だから俺

も同行する。だからまたしばらく会えない。」

「私もついて行く。」

「駄目だ。今度の危険は今までの比じゃない。君を護衛しながら行くわけにはいかない。」

「でもそんなの嫌よ。私だけ安全な所にいるなんてっ！」

マギーは本気だ。それが判るだけに今回は連れて行かない。

「もう一つ理由がある。君にしかできないことがある。」

「私にできること？」

「ああ、アレフが戻ってきたら雨雲の杖を勇者の部屋に保管する。管理を頼む。」

「でもあそこなら誰も取り出せないわ。」

「うん、そうだね。でも神器だから・・・もしかしたら感のいい人なら何か気づくかもしれない。偶然でも見つかると困る。君ならなんとか誤魔化せるだろう？」

「まあそうね。なら持っていけばいいじゃない。」

「それこそ駄目だ。もし失ったら取り返しがつかない。だから君に頼みたい。」

「もういいわ。陳腐な言い訳だけどそれで納得してあげる。その代

わり今日は私の屋敷で夕食を頂くこと。それが交換条件。」

「喜んでご馳走になるよ、ここ１０日ほど碌な物を食っていない。」

なんだ、俺の言い訳は全部お見通しか。でも本当に今回は連れてはいけない、危険すぎるからな。きっとそれもお見通しなんだろう。

新たなる出発

７／１１　勇者支援生活　７２日目

朝久しぶりにここで鍛錬をしようと訓練所にきました。普通にアレフとガイラがいました。昨日の夜に帰ってきたそうです。俺が見つからなかったのでここで待っていたと言われた。これからの方針を告げる。

「二つ聞きたいことがある。答えによっては予定が変わる。」

「ああ、いいぜ。」

「まず第一、ゴーレム対策はどうなった？」

「これを使います。この妖精の笛の音はゴーレムを眠らせることができるそうです。」

「よし、次。幾らぐらい貯まった？」

「この間のゴールドマンの金塊と合わせると２５０００Ｇはあります。」

「そうか、ならメルキドに行こう。今回は俺も同行する。」

アレフとガイラが嬉しそうにする。

「本当ですか？」

「ああ本当だ。二人だけではまだきびしい。だから3人で行く。」

「それは頼もしいな。あの時もそうだったな。もうゴーレムに追いかけられるのは嫌だぜ。」

「ガイラ！少し危ないことを口走っているぞ。」

「ああそうだった。あれは秘密だったな。」

「本当に頼むぞ、今回はここから馬で行くからすぐに準備をしてくれ。出発は9時だ、ガイラの馬は宿屋だな。」

「そうだ。じゃあ宿屋で待ってるから。」

いつもの鍛錬を終えてから一旦別れる。俺とアレフの分の馬、さらにもう一頭を用意して宿屋に向かう。3頭目の馬にはたくさんの荷物が積んである。俺と一緒にマギーとシュミット、そしてサイモンがついてきている。宿屋の前にガイラたちが立っている。すでに出発の準備は整っているようだ。

「かさばる荷物はこっちに載せてくれ。野営用品や水、食料、飼い葉が積んであるがまだ積載できる。それ用の馬を用意した。」

二人が自分の荷物から毛布を取り出し載せる。雨に濡れない様上から防水加工をした革を被せる。こういったことをやらせるとガイラの右にでるものはいない。

「じゃあ行ってくる。マギー、俺達の居場所はシュミットに聞いてくれ。例の地図で毎日モニターしてくれるはずだ。シュミット、もし俺達になにかあったら後は頼む。サイモン、お前は無茶するなよ。

昨日は王様の前で無茶したくらいだ。しばらくはフォローしてやれないぞ。」

「無事に帰って来い。俺一人で特務をやるのは困る。」

「わかった、わかった。しばらくは控える。せっかくうちを継げるようになったんだ、行儀よくするさ。」

「ケルテン、必ず帰ってきなさい。そうしたら私の研究成果を見せてあげる。」

「わかったよ、楽しみにしてる。」

俺はマギーを軽く抱きしめてから離れる。すこし名残惜しそうだが馬に飛び乗る。

「じゃあ行ってくる。速くて１０日、だいたい２週間で戻る。」

４頭の馬が駆け去る。後ろは振り返らない。

――――――――――――――――――――――――――――――

草原を駆ける。風が気持ちいい。なぜか不満げな二人が馬を併走させる。

「おい、よかったのか？」

「何がだ？」

「マギーさん、名残惜しそうでしたよ。もうちょっと何か言っても

よかったんじゃないですか？」

「きりがない。それに今生の別れでもないさ。もし何かあったとしても俺の遺書はシュミットに渡してある。」

「その事務的なことが気に食わん。」

「そうですよ、遺書なんて縁起でもない！」

二人から猛抗議を受ける。

「そう文句を言うな、覚悟の問題だ。それと何かあったとして無責任に消える方がずっとよくない。少なくとも自分が関わった幾人かには責任を取りたい、そんなところだ。」

そう言い放つと二人が黙る。多少は理解してもらえたらしい。人それぞれ思うことはある。それだけ理解してくれればいい。話題を代えよう。

「マイラに移民はついたか？お前らなら知っているだろう。」

「ああ、来たぜ。１００人ぐらいだったか、結構な護衛がついてきたぜ。」

「そうか、無事についたのだな。聞いているか？ガライへの移民の件。」

「宿屋の親父に聞いた。酷い話だな、民を護るはずの兵が真っ先に逃げ出すとはな。」

「昨日の夜帰ってきたら、酷い噂でいっぱいでした。今朝になったら公式の発表があったと宿屋で聞きました。まだ情報は町中には広がってませんがしばらくは大変そうですね。」

「公式発表はされたか。どの程度の発表だ?」

「さっきガイラが言ったのが全てです。流石に逃げた兵が誰なのかとか、犠牲がどの程度でたかは知りません。」

「そうか、じゃあ教えよう。マイラと同じ程度の移民団をガライに送った。途中でがいこつ、鎧の騎士、キメラ混合の二個中隊に襲われた。護衛していたのは近衛騎士一個中隊、そのうち一個小隊が敵前逃亡した。その為近衛騎士8名が戦死、移民団も約半数がなくなった。それでも残ったものがガライまで送った。」

「酷いな。それでその逃げたのはどうなった?」

「ああ、城に逃げ帰って全滅を告げた。だが後で帰ってきた騎士によって糾弾され身分の剥奪、追放処分となった。」

「それで終わりですか?そんなの納得いきません。」

「平民感情ではそうなるだろうな。だが逃げた騎士は子爵の位にあって、前例ではいきなり死刑になることはないらしい。だから爵位と財産を取り上げて追放した・・・多分生きてはいけないだろうね。」

「そうだな、俺があったらぶっ飛ばしてやる。」

「まあそんなところだ。ちなみにアレフ、お前は面識がある。一度

手合わせしてお前が勝っている。」

アレフがしばらく考えている。

「もしかして5番勝負の時の騎士ですか?ほかには騎士と戦って勝った記憶はありません。」

「そうだ。エックハルト子爵という。まあ二度と会うことはないが一応覚えておけ。それと糾弾した騎士はサイモンだ。王様の前で掴みかかろうとした。いや俺が止めなければ間違いなくそうしていた。」

「そうですか、大変だったんですね。」

「それほどでもない。おかげでサイモンは男爵の家を継ぐ許可を王様より頂けた。これで近衛も悪い血をだせただろう。もしかしたらジョルジョ辺りが昇格するかもしれんぞ。」

「もしそうなら、帰ってからお祝いをしてやりましょう。」

「そうだな、おっと無駄口が過ぎたようだ。ちょっと急ぐぞ、今日はロトの遺跡まで行こう。先頭はアレフに任せる、できるな。」

「もちろんです。任せてください。」

アレフが先頭を駆ける。俺が二番目、三番目に荷物を載せた馬、その馬が列から外れないよう最後尾をガイラの馬が駆ける。

――――――――――――――――――――――――――――――

ラダトーム城からそう遠くない場所で、近衛騎士の鎧を着た男がふらふらと歩いている。その鎧の胸には×印が紋章の上に刻まれている。俗に言う不名誉の証。

「おのれ、おのれぇ、俺がいったい何をしたというのだ。絶対に間違っている。俺は正しいはずだ。下賤な者の命など我等高貴な血の礎にしかならぬ。」

呪詛にも似たうめき声、それを聞く者はだれもいない。はずであった。

「復讐を望むか、己が正義を証明したいか？」

「誰だ？」

「誰でもよい。もしお前にその力を与えてやる。そう言ったらどうする？」

しばらく無言が続く。元近衛騎士は考え込む。静かにそれでいて力強く答える。

「それが本当なら何でもくれてやる。だからその力をよこせ！」

「その望み叶えてやろう、その代わり代償はもらう。」

「何でもくれてやる、二言は無い。俺は力が欲しいのだ。誰にも負けぬ力が！」

「よし契約はなされた。力を受け取るがいい。」

木陰より現れた金色のローブ姿、その手の杖から湧き出た黒き霧が男を包む。

「ぐわぁーーー・・・！」

黒き霧に包まれた男が倒れのた打ち回る。静かになった男がしばらくして立ち上がった。その鎧は漆黒に染まっている。男のどす黒い怨念、執念を現したかのように。

「くっくっく！ようこそ我が闇へ・・・・では行くぞ、ついてまいれ。」

悪魔の鎧となった元近衛騎士はその命令に黙って従った。

アレフの不安

7／14　勇者支援生活　75日目

眼前に広がる砂漠の向こうに町が見える。

「向こうに見えるのが砂漠都市ドムドーラだ。近くに見えるだろうが実はかなり遠い。馬はここでは走れないから徒歩で1日以上かかる。」

「何を今更、そんなこと知っている。」

「お前には言ってない。アレフは初めてだろう、今はあそこに行かないが覚えておくといい。」

さっきからアレフが目を丸くしている。

「こんな所来たことないから、驚きました。すぐそこにある様に見えますが?」

「蜃気楼という気象現象だ。今回はこの砂漠を回避して南に向かう。さあ行こうか。」

馬を南に向ける。砂漠の西側のまだ草木の生えている場所を進む。

「なあ学者、ドムドーラはどうなってる?」

ガイラが何かを期待しているかの様に俺に聞く。隣のアレフも何か言いたげだ。

「そうだな、魔物が闊歩している。その一言に尽きる。もちろんその魔物の質は最上級だ。」

「そうか、俺達でやれるか?」

「無理だ。俺とお前ならまだしも、今のアレフでは無理だ。」

「僕では足手まといですか?」

アレフが気落ちしている。

「そうじゃない。腕の問題じゃないさ、武具の問題だ。俺もガイラもミスリルの武器を持っている。それほどやばい敵だと思ってくれ。だから早くメルキドへ急ごう。」

「そうですか、でもこの鋼の剣もそれなりに使えますよ。」

「そうだな、短期の勝負なら問題ない。だが連戦となると消耗に耐えられない。お前が持っている装備で俺達に勝るのはその魔法の鎧だな。そこに炎の剣と水鏡の盾が加われば、俺達に勝るとも劣らないアレフの出来上がりだ。」

「そんなものですか?お前は弱いが武具が強い、そう言われているみたいです。」

「馬鹿かアレフ!いいかどんな武器でも使いこなせなければ只の雑魚だ。お前はそれが使いこなせる。そう思うから学者がメルキドくんだりまで同行しているんだ。そう自分を卑下するな。」

ガイラめ、俺の言いたいことが全部言われた。おいしい所を持っていきやがって！

「まあそう言うことだ。この間のシュミットも同じような悩みを持っていた。家宝の炎の剣を使うのだが、それが気に入らない騎士にとやかく言われたらしい。一度は貸してやったやつが灼熱したブレードで自傷したらしいがな。」

「そうなんですが、じゃあシュミットさんも強いのですか？」

「ああ十分に強い。俺と同じで騎士になるには少しちからが弱い。だけど炎の剣はちからで使う武器じゃないから相性がいい。一緒に戦った経験からすると・・・ちからＢ－、すばやさＢ＋、かしこさＢ－といったところかな。多分相当苦労したんだろう。貴族の近衛連中には認められなかったかもしれないが、俺は評価している。」

「そうか一度お手合わせ願いたいな。」

「またガイラの悪い癖だ。だれかれ構わず勝負したがる。心配しなくてもお前より強い相手は一人しか知らないよ。」

「聞き捨てならねえな。誰だよ、その一人は？」

しまった、口を滑らせた。仕方ない一応教えておくか。

「近衛騎士隊長アイゼンマウアー殿だ。雷神の剣、魔法の鎧、水鏡の盾、腕も武具も一流だ。当然魔法も使える。本人は武器を構えているときには使えんと言っていたがな。」

「ふ～ん、お前さんがそう評価するとは楽しみだな。」

「いや、まじで簡便してくれ。どっちが勝つにしろ只ではすまない。」

「そうか残念だ。竜王を倒したら褒美に勝負させてもらうかな？」

「ＯＫ、それでいい。それなら俺も文句は言わん。だから今は竜王を倒すべく邁進してくれ。」

俺がため息交じりにそう言う。アレフが小声で話に割り込む。

「前方右で不自然な影の動きがあります。距離は５０ｍ。」

アレフが言った場所をよく見ると、幾つかの影が影に潜んでいる。

「アレフ、ガイラ！あれは影の騎士だ。おそらく俺達を一旦やりすごして、後ろから奇襲するつもりだろう。どうする？」

「今すぐ突っ込もうか？」

「３０点。せっかくあいつ等が隠れたつもりでいるんだ。何も知らない振りをして近づいて襲撃しよう。俺が馬を引き受けるから二人で行け。襲撃する距離は任せる。」

「了解。」「任せろ！」

二人が騎乗のまま並んで歩く。２０ｍ、１０ｍ・・・５ｍ、二人が飛び降りる、一足飛びで影に襲い掛かる。反応が遅れた影の頭がガイラの拳で割れる。アレフの左切り上げ、影の騎士の肋骨が斬り裂かれる。唐竹割りで追撃。これで2体、あとは・・・・不利を

悟ったのか気配が消えた。

「よくやった。もういいぞ、敵は逃げた。」

そのまま敵に備えている二人に声をかける。

「不気味なやつだな。真っ黒ながいこつか。」

「こいつらは奇襲専門だ、夜でなくてよかった。」

「そうですね、夜だと見えないかもしれません。」

引いていた馬の手綱を二人に渡す。二人が飛び乗る。

「そうだな、夜はいつもより安全を確保してから休もう。無理をする必要はない。ガイラのトラップがあればよほどのことがない限り奇襲されることはない。」

「任せてもらおうか、俺の得意分野だからな。ただ仕掛けるのに時間がかかるから、後一時間進んだら野営地を決めよう。」

「ガイラ、お任せします。生存の達人の業、楽しみです。」

「よし進もう。日が落ちるまで後2時間。できるだけ距離を稼ごう。」

４頭の馬が駆け抜ける。それを見つめる黒い影、深夜の急襲は確実だ。

――――――――――――――――――――――――――――

一一一

ラダトームの城下街、流民街に異変がおきた。

ザシュッ！

「ギャアァァァー・・・！！！」

「きゃあ、止めて・・・殺さないで・・・いやあぁぁぁ！」

ザシュッ！ドサッ・・。

夜の闇に繰り返し響き渡る絶叫。それはしばらく止むことはなかった。震え上がって身を隠す流民街の住人達。見つからない様、息を殺し朝を待つ、その時間は無限に感じられた。

翌朝、日の光に動きだした者達が見たのは、十数に亘る斬殺死体.飛び散る血の跡がその壮絶さを物語っていた。

アレフの不安（後書き）

設定資料集

近衛騎士の鎧はカスタムメイドですので他人が装備することはほとんど無理です。

戦死、退役などで不要になった場合も作り直して他の人に支給されることはまずありません。ましてや騎士剥奪になった者の鎧を受け取る者は絶対にいません。

さらに一般的に売却することも不可能です。

騎士を剥奪された者は屈辱を刻まれた鎧だけで魔物が跋扈する街の外に放逐され野垂れ死ぬ、格式や名誉を重んじる騎士にとって最大の罰になります。

裏切り者

7／17　勇者支援生活78日目

「今夜も来ると思うか？」

「来るな。どうする、鳴子の範囲を広げるか？」

「いや、結局襲撃するふりが増えるだけだな。あいつらしつこいからな。」

こんな会話がされるのは、毎夜1時間おきに鳴子を鳴らされているからである。その度に寝ていた者も飛び起きている。おかげでこの三日ほどまともに寝ていない。性質が悪く本当に襲撃してくる場合もあるから、無視するわけにはいかない。そのくせ少しでも不利になると逃げてしまう。

「いっそのこと殺傷能力の強い罠にしたらどうですか？あいつら殺ったら気分いいですよ。くふふふ！」

いろんな意味でやばいな、アレフが壊れかけている。

「それもそうだな、なら今日は早めに野営地を探そう。洞穴とか水際とか襲撃方向が限定される場所がいい。」

「判った。俺が罠を仕掛け易い場所を探す。それでできる限り強力な罠を仕掛ける。」

「よし、そうと決まったら・・・見えるか？向こうに小高い丘が見

える。あの辺へ向かおう。アレフ、判ったな。」

「えっ！なんですか？」

「嗚呼、まあいいや。あっちに向かうぞ、ついて来い。」

俺はアレフの前に馬を進める。アレフが反応するより早く馬が向きを変える。

――――――――――――――――――――――――――――

崖を背に、左側が川、右が深い森、川に沿って砂地、そんな場所を野営地に選んだ。川は深さ１ｍ、幅は５０ｍ程度、流れはそこそこある。これなら体重の軽い影の騎士は渡って来れない。背にした崖は角度が７０度くらい。ガイラと手分けして罠を仕掛ける。さらに川に面した側に毛布を張り飛び道具に備える。

「アレフ、今日はここで寝る。無理に起きなくていいぞ。」

「はい、すみません・・・。」

俺とガイラで焚き火を囲む。すでにアレフは夢のなかだ。

「もう少ししたら手筈どおりやるぞ。ガイラ、眠気はないか？必要なら無理にでも覚ますぞ。」

「大丈夫だ。これが終わったらぐっすり寝る。」

「ＯＫ、じゃあ念の為にアレフにラリホーをかける。」

3時間後、焚き火の火が小さくなっている。崖を背に一人が毛布に包まっている。焚き火の横の座っている二つの影も動きはない。誰かが鳴子を鳴らす、起きた気配はない。一時間前も起きなかった。もう一度鳴子を鳴らす、やはり動きはない。

直立した影が闇から浮かび上がる。数は6体、その後ろから赤いローブを着た影が現れた。無言で手を振る。6体の影の騎士が襲い掛かる。一人に2本ずつ、剣が突き刺さった。予想された悲鳴も血も出ない。

うまくいった。囮に剣が突き刺さった瞬間、崖の上から用意しておいた聖水をばら撒く。動きが止まった、さらに思考詠唱、（私はＭＰを2消費する、ＭＰはマナと混じりて神に捧げん。お偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ。ニフラム）

影の騎士が糸の切れた操り人形の様に崩れる。動揺したローブが背を向け逃げようとする。その背中に飛礫、バランスを崩して倒れる。ここまでが言の中、事が進んだ。

「よしっ、逃げられると思うな！」

ガイラが飛び降りた。おいおい、下まで１０ｍはあるぞ。ガイラが完璧な五点着地、すぐに走り出す。起き上がったローブが火球をガイラに放つが、その左手の篭手で弾かれる。ローブは驚愕の表情を浮かべたまま、ガイラの拳を顔に受けた。グシャッ！嫌な音がしてローブが倒れた。

「終わったぞ、ケルテン降りられるか？」

「ああ、アレフを降ろすから受け取ってくれ。」

毛布に包まったアレフの腰にかけたロープを少しずつずらしながら降ろす。下でガイラが受け取った。俺も崖を少しずつ降りる。ガイラみたいな器用な真似はできない。

「雑な作戦のわりにはうまくいったな。しかしお前の魔法は相変わらずすごいな。」

「お前には負ける。よくあそこから飛び降りれるな。しかしまあ、こいつはよく寝てるな。」

アレフの頭をなでる。ガイラも笑いながらつつく。

「お前が魔法で寝かせたんだろう、まあ寝かせてやれ。」

「そうだな・・・ああそうだ。お前が殺ったこいつは何だろう。」

俺はガイラが倒した死体まで歩く。頭がない死体のローブを捲る、これは！

「ガイラ、これを見ろ！」

「なんだよ、今更魔物の死体なんか見てもしょうがねえよ。」

「いや、こいつ人間だ。妙に人間っぽい作戦をとると思ったらそういうことか。」

「なんだって！そんな馬鹿な、なんで人間がそんな真似を・・・」

ガイラが黙り込む。

「これは川にでも流そう。アレフには見せられない。」

「そうだな、これは俺達の心にしまっておこう。城の連中にも教えられないな。」

「そのほうがいいな。もしこれが知れたら大混乱だ。まあそれはいいとしてガイラ、お前眠れ。しばらくは俺が火の番をする。」

「ああ、そうさせてもらう。」

アレフの横でガイラが毛布に包まって眠る。火を眺めながら思考にふける。さっきの奴は自分の意思で竜王に着いたのだろうか？世界の半分をくれてやる・・・そこまではいかなくても竜王の元で立志させる、いや、できると感じさせることで寝返らせたとしたらこいつだけでは終わらない。

――――――――――――――――――――――――――――――

一方その頃、毎夜起こる斬殺事件にラダトームは震え上がっていた。事件を目撃して運良く命があった者の言によってさらなる混乱が起きていた。

「犯人は騎士の鎧をきていた。それも胸に×印があった。」

「黒い甲冑の男だった。気持ちが悪い声で笑いながら、下賤な血は消えろと言っていた。」

「城の連中は流民を邪魔に思い、その存在を消そうとしている。」

「もう王家も信じられない。だが何を信じればいいのだ。教えてく

れ、俺達は死ぬしかないのか！」

噂を重くみた王家は先の近衛騎士の敵前逃亡、その者の爵位と近衛騎士の位の剥奪を発表したがそれは余計な混乱を招いただけであった。護るべき民を捨てて逃げた騎士、甘い処分、それによって招かれた斬殺事件、ラダトームに住む平民の怒りを掻きたてた。

王家と近衛騎士の権威は地に落ちた。近衛騎士は汚名を返上するべく夜間、街を巡回している。その中にサイモンを小隊長とした４名が巡回している。

「ローゼンシュタイン小隊長、犯人はエックハルト様で間違いないでしょうか？」

「ステファン、ローゼンシュタインは止めてくれ。俺じゃないみたいだ。それと身分を剥奪された奴に様はいらないな。」

「すみません。つい癖で・・・。それで犯人はやはりそうなのでしょうか？」

「なんとも言えん。もしかしたら捨てられていた鎧を着た者の愉快犯とも考えられる。いやその可能性は薄い、残念ながらお前の希望には副えないな。」

「そうですね、あの時私が止めることができていたら、こん「ぎゃあああぁぁぁぁ！」

「聞こえたな。あっちだ、急げ！俺とステファンはこっちだ、お前達はあっちから挟め！」

二手に分かれて悲鳴が上がった方角に走る。黒い人影が走るのが見えた。行き先を遮る。挟まれて立ち止まる漆黒の騎士の甲冑。

「近衛騎士だ。何者だ、兜をとれ！」

サイモンがきつい口調で問いかける。その男は兜を脱ごうともしない。

「くっくっくっくっ！誰だだと、貴様も偉くなったものだ。それとステファンなぜお前がそこにいる。なぜ生きておれるのだ。」

「やはりエックハルト、貴様こそなぜここにいる！」

「答えることなどない。お前もステファンも俺を売って地位でも得たか。そうまでして得た地位、命は気持ちがいいか！」

「エックハルト様、私は「止めろ！もうこいつは子爵でも騎士でもない反逆者だ。ステファン、剣を抜け！お前の手で反逆者を討て！」

一瞬の躊躇いの後ステファンが剣を抜く。サイモンと残りの二人の騎士が退路を塞ぐ。

「ステファン、お前ごときが俺に勝てると思うな。お前が俺に勝った事は一度たりとてない。」

そう言い放つと悪魔の騎士となったエックハルトが剣を叩きつける。ステファンが冷静に盾で受け流す。反撃はしない。

「確かに私はあなた様に勝ったことはありません。」

「そうだろう、これから先も永久に勝つことなどできぬわ！」

エックハルトの猛攻が続く。その全てをステファンが軽くいなす。エックハルトの姿勢が崩れた瞬間、ステファンの剣が兜を捉えた。兜が脱げエックハルトの顔がむき出しになる。

「エックハルト様、私は勝てなかったのではありません。勝たなかったのです。」

「なんだとっ！貴様、なにを言って　ザシュッ！！

ステファンの剣が横に振られている。エックハルトの首が地面に落ちる。首のない甲冑が倒れる。

「近衛騎士ステファン、反逆者・エック・ハ・ル・トを・・・討ち・・まし・・・た。」

ステファンが涙を流しながら報告する。

「よくやった、ステファン。ここにいる3人が見届けた。」

首無し死体の横で４人の騎士が立ちずさむ。しばらくの黙祷の後、一人が城へと駆け出した。

裏切り者（後書き）

設定資料

国務大臣以外に大臣はいません。そのかわり国務大臣により文官に職務を振り分けられます。その職務により手当てという形で俸給が増えます。

近衛騎士サイモンの回想

7／18　ラダトーム城下　中央広場

男の首が晒されている。その横には不名誉印を刻まれた黒い鎧が置いてある。立て板には男の身元、罪状が書かれている。通りがかる者は唾を吐きかけるか、石を投げつける。無念そうな男の首は何も言わない。

昼過ぎの近衛騎士控え室で雑談をしている者たちがいる。

「ステファン、お前褒美を固辞したのは本当か？」

「本当ですよ、サイモンさん。これで全てが決着した、そう言ってお断りしました。元とはいえ自分の主人を討って手柄を得るなんてできません。騎士の手柄は戦場で立てるものです。」

「ふ～ん、なるほどなあ。お前真面目だな、貰える物はもらっておけばいいのに。」

「そういう貴官も貴族らしくないですね。男爵の家系ですのに。」

「ああ、くそ真面目な兄貴に反発して結構悪いことばっかりしてた。最初はわざと悪く振舞ってたが、いつの間にか板についてしまった。まあその頃の経験が今になって生きている、なんとも皮肉な話だ。」

サイモンが頭をかきながらそう言う。ステファンがそれを見て微笑む。

「貴族らしくない貴族に、貴族より騎士らしい騎士ですか。私はこのスタイルを貫きます。せっかく陛下に頂いた生命です。陛下の御為に使用致します。」

「そうだな、お前はそれでいいと思うぜ、俺は俺のままでいい・・・。それはそうとお前結構使えるな?」

「何がですか?」

「いや、剣の腕だ。この間のケルテンとの模擬戦でそれなりに使えると思っていたが、あれほどとは・・・それも長年あいつに強さを隠していたのだろう?」

「ええ、あの方は負けることを極端に嫌っていました。それでお手合わせする時はそうと判らない様に加減をしていました。もうそうする必要もなくなりました・・・。ケルテンというのはあの時の特務隊士の方ですね。」

「ああそうだ、俺のダチだ。俺に土をつけた数少ない内の一人だ。普段は優しそうにしてるが怒らすと容赦無い。お前も聞いているだろう?フレーゲル殿下を牢屋に放りこんだ話を。」

「噂でしか聞いていません。あの話は内密になっていますから・・・そうですか、あの模擬戦、違いますね、一方的で理不尽な五番勝負の時は、確かにかなり怒っていました。まさか木とはいえ盾や剣を斬り裂くとは信じられません。」

サイモンが自虐的にフッと笑う。

「あれな、この城に一番先にやられたのは俺だ。あいつの新人テス

トに乱入した時だ。俺が卑怯な手で一本取ったらお返しと言わんばかりにやられたよ。」

「卑怯な手とは、貴官何をされたのですか？」

「始めの号令の次の瞬間に、こう蹴りを入れてやった。」

そう言いながら、蹴りを見せる。

「それは酷い。実戦ならともかく兵士の試験でやることじゃありませんね。」

「その通りだ。あいつが他の新人を相手に上品に立ち回っているのが癪に触ってな、思わずやってしまった。」

「それでどうなったのですか？」

「ああ、澄ました顔で立ち上がって二本目の勝負を促した。盾を捨てたと思ったらいきなりベギラマ、それで仰け反ったところに同じく蹴りが来た。」

「それはそれは、貴官の自業自得ですよ。」

「まあそうだな。まさか魔法も使えるとは思わなかったからな。三本目は魔法を警戒して飛び込んだら、あの抜き打ちだ、嫌な予感がしたのでむりやり踏ん張って止まったところに、追撃で盾ごと左腕をもっていかれた。ひびが入ってたな。」

「あの抜き打ちには驚きました。剣を落とされるまで一瞬でした。初撃だけとはいえよく避けることができましたね。」

「それが只の勘なんだ、ちなみにその後来た近衛騎士隊長は、鼻先で見切って上段からの一撃を寸止め、一合だけの勝負とはいえ、あれよりすごい勝負は見たことがない。」

　ステファンがしきりに感心している。自分の手を使ってそれっぽく再現する。

「あいつが戻ってきたら、朝６時に兵舎の訓練所に行くといい。面白いものが見れるさ。」

「楽しみです。さあ今日も職務に励みましょう。城下街の巡回頑張りましょう。」

　そう言ってステファンが立ち上がる、近くで聞いていた騎士も立ち上がる。

「そういうのは小隊長である俺の号令なんだけどなっ！まあいいや、よし行こう。」

　日の光を浴びて街を巡回する４人の騎士に後ろめたいことは一つもない。胸を張り堂々としたその姿はまさに近衛騎士だった。

ーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーー

　ガイラの飛礫がメイジキメラを落とす。鎧の騎士と対峙していたアレフが一歩下がってベギラマでメイジキメラにとどめをさす。そこに詰める鎧の騎士にガイラの拳が叩きつけられる。

うん、見事はコンビネーションだ。二人とも自分のできることを把握して、やるべきことをやっている。俺はというと馬上で肘をついて見ている。しばらくすると掃討し終わった二人が戻ってくる。

「おい学者っ、お前も戦えよ！」

「馬鹿言え、俺は勇者支援官として後方支援の任に努めているだけだ。お前が戦いの愉悦に勤しんでいる間に馬がやられたらどうするんだ？」

「なに、俺のライはそんな柔じゃねえ。」

「お前一人ならそれでいいだろう。だがアレフや俺の馬もいるし、荷物を運んでいる馬もいるんだ。まだ先は長い、馬を失いたくはないだろう？」

「ガイラ、いいじゃないですか、あの程度の敵なら二人だけで十分ですよ。」

アレフが横から仲裁にでる。ガイラが不満げに言う。

「あ～あ、これだからこの師弟はかわいくねえ。理屈っぽい師匠に優等生の弟子、俺の立場がねえ。」

「言ってろ、さあ先を急ぐぞ。」

馬を引き渡して先頭にでる。ガイラが不承不承ついてくるのが判る。

「まだまだ先は長い。それにゴーレムとの戦いもあるんだ、この程

度で文句を言われたくないな。そのゴーレムだが・・・アレフ、笛は吹けるよな？」

振り返ってアレフに聞いてみる。アレフが腰の袋から妖精の笛を取り出す。

「練習しました。ただ吹くだけでなく決められた旋律もあるとのことで、雨の祠のお婆さんに習いました。」

そう言ってアレフが笛に口を当てる。

♪～・・・・♪♪！

俺の記憶にある旋律、それが流れる。

「ＯＫだ。じゃあゴーレムと戦う時は俺とガイラでゴーレムの気を逸らす。ガイラ、それでいいな。」

「判ったよ、それまでは楽にしていてくれ。どうせお前のこった本当に困ったら助けに入るんだろう？」

「さてね。ガイラはもう一回ぐらい痛い目にあった方がよさそうだ。」

「ひでえ事を言う。アレフ、やっぱりこいつは鬼だ。・・・ちょっと待て、もしかしてお前妖精の笛のことも知っていただろう？」

「何のことやらさっぱり判らないな。じゃあ少し急ぐぞ、雨が降りそうだ。」

強引に話をきって、馬の足を速める。雨が来る前に濡れない場所を探そう。濡れると体力の消耗が激しくなる。

終わらぬ恐怖

7／19　ラダトーム城下街

再び城下街が恐怖に震える。昨晩の間に起きた無差別撲殺事件、犠牲者は先と同じく流民十数人。その容疑者は・・・晒されていた黒い鎧に返り血がついている。近衛騎士達が立ちすくむ。

「これはどういうことだ。まさかこいつが動き出して殺してまわったとでも言うのか！」

サイモンが手にした剣で血だらけの鎧を突付く。なんの抵抗もなく鎧が崩れ、ガランと音を立てる。

「まさか、これは犯罪を誤魔化すために、こいつに血をかけたのでしょう。」

「そうだろうな。その証拠に今はこの通り少しも動かぬ。外で戦った鎧の騎士や悪魔の騎士なら反撃ぐらいしてくるだろう。」

近衛騎士達が重く沈む。戦場での不名誉から始まった連続事件、いつになったら終わるのか見当もつかない。

「言っても詮無いことだが、あの五番勝負の時もっと痛い目にあわせておけば良かったのかもな。そうすればあいつが出撃することもなかったかもしれん。いや、そうじゃない、これは近衛騎士全体の問題だ。」

「そうですね、それを言ったら私があの方に手加減などしなければ、

己を理解してもらえたかもしれません。私は自分の身がかわいいばかりに偽ったその結果とも言えます。」

「それこそ言っても詮無いことだ。もう過去のことは忘れよう、とりあえず今晩からの巡回を強めるように総隊長に進言してみる。こんな時にあいつがいてくれたらなあ・・・何か解決策を考えてくれそうなんだが・・・。」

「特務隊士殿ですか?そんなことまでできるのですか?」

「ああ、戦う学者、そんな異名を持っているそうだ。魔法、魔物、歴史、アイテムなどの知識がすごい。どこでそんな知識を得たのか判らんが頼りになる。強さだけで特務隊士になったわけじゃない。」

「なるほど、強さにはいろんな強さがあるんですね。」

「ああ、戻ってきたあいつに馬鹿にされないように解決しておこう。」

そうだ、あいつの真似をするか、確か言っていたな・・・必要なら何でも使う。それが権力だろうが、暴力だろうが関係ない、ただ自分より弱い立場の者を虐げることだけはしない・・・か。そうだあいつを見送ったときの3人で相談しよう。みんなあいつに負けたくないはずだ。

――――――――――――――――――――――――――――――

いつも通りマギーは図書館で魔術書を読んでいる。付箋の数はさらに増えた。書き込むわけにはいかないので別のノートに書き写す。

その時図書館の扉が急に開いた。慌てて魔術書を片付ける。

「すまんな、嬢ちゃん。困ったことがあって相談にきた。」

「なによ、近衛と特務隊士が揃って困ったこととは?でも珍しいわね、ここに近衛がくるなんて何時ぶりかしら。」

「そりゃあ、馬鹿は嫌いと高らかに公言した筆頭魔術士どのが悪い。」

「筆頭魔術士なんて呼ぶのは止めて!それと嬢ちゃんも止めてよ。私にはマギウスと言う名前があります。マギーでいいから。」

「判った。じゃあ相談ごとだ、ケルテンが戻るまでに片付けたい。多分あいつがこの顛末を知ったら責任を感じるかもしれん。」

「責任、何のこと?ここにいないケルテンに何の責任があって?」

「例の不名誉騎士の件だ。実はあの事件の前にケルテンとやりあっている。まあいつものようにとっちめたのだが、その後でのあのざまだ。」

サイモンが一通り説明する。マギーがしかめっ面で考えている。

「そうね、責任を感じるかもしれない。」

「そこでサイモンと相談して、3人で解決しようとここにきた。研究に励んでいるところを悪いが手伝ってもらう。」

「いいわ、あの人が帰ってくる前に解決しましょう。もしできなく

て帰ってきたあの人に簡単に解決されたらくやしいわ。それで何がどうなったの？」

「近衛騎士の問題だ。俺が説明する。

・・・というわけだ。それで真犯人を探し、事件を終わらせる。」

「なるほどね、あの話にさらに続きがあったのね。」

「そうだ、大臣からも早急な解決を頼まれている。それは近衛騎士もそうだろう？」

「ああ、近衛騎士の不名誉から始まった話だ。騎士の名誉の為に解決する、そう張り切っている者も多い。だが俺達にできることは巡回と訓練しかない。だから外の意見が聞きたい。何かあるか？」

聞かれたマギーが首を捻って考え込む。時折手元の紙に何か書き込む。ほうっ！シュミットがそれを見て好色な顔をする。

「じゃあ聞くわ、まずこの黒く染まった鎧は悪魔の騎士と同じ物なの？」

「ああ、そうだ。普通の悪魔の鎧には不名誉印はないがな。実際戦った鎧の騎士やがいこつも、戦場で死んだ騎士の甲冑や身体からできている。戦場の傷や失った四肢の感じからそう判った。」

「それは大体ケルテンから聞いているわ。次にこの斬殺事件の時は人間だったの？それとも魔物だったの？」

「元従士の騎士と普通に会話していた、俺が証人だ。」

「間違いなく死んだのね？」

「ああ、首が飛んで生きていられる人間はいない。」

「よく似た人とか替え玉とかそういうことはない？」

「ない。あの会話は本人達でなくてはありえない。」

「とりあえず、今夜も巡回するのね？」

「もちろんだ。これ以上の被害はだせない。」

マギーがここまでを紙に書き留める。それから一息つく。

「判ったわ。現時点でできることはそれしかないわね。ならその鎧を見張って貰えるかしら。」

「もちろんすぐ横で見張ることになっている。馬鹿馬鹿しいという意見もあるが。」

「その見張りは鎧から隠れて行って下さい。もし動くなら見張られていては動きづらいでしょう。」

サイモンとシュミットが思わず顔を見合せ、同時にため息をつく。

「私だって馬鹿馬鹿しいと思うわ。でも可能性があるなら疑ってみないといけない。」

「わかった、わかった。他の奴には任せられないな。俺がやる。」

「そうか、俺も手伝おう。大臣から厳命を受けている。やらざるを得ない。」

「では結果については教えてください。いつもここにいますから。場合によっては次の手をうちます。」

「わかった。では夜に備えて今から寝ておくとする。また明日にでも来る。」

「おれもそうする。その前に大臣にも報告しておく。」

二人が立ち上がって図書館を出て行く。残されたマギーがニフラムのページを開く。もしかしたらこれを使わないといけないかもしれない。私の一存で公表することになるかもしれない。ケルテンならどうするかしら?聞いてみたいと思ったが今ここにケルテンはいない。

――――――――――――――――――――――――――――――

城の廊下に二人の足音が響く。

「しかしまあ、あの何か考えている時の顔は綺麗だな。際立って見えた。」

「しばらく黙って聞いていると思ったら、あんたそんなこと考えていたのか?」

「ああ、美しいものを美しいと言う、俺の性だ。」

シュミットがサイモンを相手に茶化す。

「駄目だぞ。手を出すのは俺がゆるさねえ。」

「判ってる。人の女を奪うようなまねはしない。それとあいつを怒らせるのは得策ではない。」

「そうだな、じゃあ俺はこっちだから。十時に鎧の場所に集合だ。」

「了解した。」

二人が二手に別れた。十時まで3時間、今夜の見張りは特に眠くなりそうだ。そうならない様にしっかり眠っておこう。サイモンはそう思った。

マギーの覚悟

「なあ、シュミット！あいつ動いたか？」

「いや、動いていないな。」

暗闇で座り込んだ二人が薄明かりの下の鎧を見ている。その声に力はない。

「何時になったら動くんだ？」

「俺に聞くなよ、あいつに聞いて来い！」

「なあこの会話、さっきもしなかったか？」

「ああ、これで7回目だ。３０分毎に聞くな、不毛だ。いいかげんにしてくれ。」

「そうだな、いいかげんに動いてくれ、俺はもう限界だ。」

「違う、俺が言っているのはお前にだ、サイモン。いちいち答える方の身になってくれ。」

二人とも代わり映えしない状況に苛立っている。そんな折、城の方向から複数の足音が聞こえる。

「誰だろう？こんな時間に誰か来るなんて聞いてないぞ。シュミット、お前の指図か？」

シュミットが黙って首を横に振る。二人が暗闇に姿を隠す。歩いてくるのは水色のローブを着た魔術師、鎧姿の騎士が両脇を固めている。

「あら？あの二人がいないわ。どうしたのかしら？もしかして寝ちゃった？」

「寝てねーよ！」「誰が寝るかっ！」

思わず二人が暗闇から顔を出す。

「なんでここに来てんだよ、明日にするんじゃなかったのか？」

「そうね、自信と覚悟ができたってところね。ぶっつけ本番の手を使うから手伝って。」

真面目な顔をしたマギーが護衛の騎士に声をかけ、荷物を受け取る。そこから二本の瓶を取り出すと一本ずつサイモンとシュミットに渡した。

「何だよ、これは？」

「聖水よ。あいつが動き出したらそれをかけて！それで動きが止まるはず。」

「はずって、そんな不確実なのか？」

「しょうがないじゃない、さっきも言ったようにぶっつけ本番なの。ケルテンに聞いた方法だからそれ以上のことは言えないの！」

「でも動かなかったらどうする。」

「それこそ知らないわ、それに私の予想だとそろそろ動くはず。」

「なんでそんなこと判る？」

「瘴気が最も濃くなる時間帯なの。だからもう黙って待つ、いいわね！」

マギーの強い口調にサイモンとシュミットが身をすくめる。護衛の騎士を帰して三人が闇に姿を隠す。それから３０分後、じっと見つめていたマギーが話す。

「ねえ、動いていない？なにかが鎧を装備しているみたい。」

他所を見ていた二人も慌てて鎧を見る。不思議な光景だった、そこに見えない人がいるかの様に鎧の部品を見えない腕、足、胴体に装備していく。最後に兜が頭があるべき所に置かれる。そこには間違いなく悪魔の鎧と言われる魔物が存在する。

「今よ！」

マギーの掛け声にサイモンとシュミットが駆け寄る。あと２ｍの距離から聖水を振り掛けた。駆け寄る二人に反応した悪魔の鎧の動きが鈍る。

「私はＭＰを２消費する、ＭＰはマナと混じりて神に捧げん。おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ。ニフラムッ！」

ラストワードから一瞬の後、悪魔の鎧の身体が白く輝く。その光

が消えた時、鎧は崩れ去った。マギーが安堵の表情を浮かべる。あとの二人は開いた口が閉まらない。しばらくして我に返ったシュミットが問う。

「なんだ今のは？そんな魔法聞いたことないぞ。」

「だから言ったでしょ、使ったことないからさっきまで練習してたの。うまくいってよかったわ。」

「そう簡単に言うなよ。もしかしてロストマジックか、どんな効果だ。教えてくれ！」

その問いにマギーが頷く。

「さっきも言ったけど覚悟がついたのはそのこと、あなた達の前で使ったら公表することになる。その覚悟がつくまで時間が必要だった。それと間違えない様にしっかり覚えて、詠唱の練習に時間が必要だった。だから明日にしようと思ったの。でもそこまで待っていられなかった。実利より好奇心に負けたわ。」

「なるほど、効果を目で見たい、その好奇心は何よりも強い。たとえ俺に見られてもそうせずにはいられなかったか？それで効果を教えてくれ、他言はしない。」

「その通りよ。今の魔法はニフラム。神に祈り、魂を正しく導く魔法。」

「そうか、魂が宿る魔物を強制的に成仏させるか・・・。」

サイモンが崩れた鎧を手に取っている。長い話に飽きたようで手

にした鎧を明かりの下で眺める。

「おい見ろよ、漆黒だった鎧が白銀に戻っている。」

マギーとシュミットがそれを確認する。全てのパーツを一つずつ調べる。

「もうこいつは只の鎧だ。さっきの魔法で全てが終わった。そう報告しなくてはいけない。マギーどうする？」

「そうね、覚悟はできているわ。そのまま報告して下さい。」

「すまないな、俺達の力が足りない故にあんたに苦労をかける。」

「いいわ、必要なら私からも説明する。大臣でも陛下にでも・・・。」

「シュミット、もういいだろう。マギーの判断に任せよう。お前はありのままを大臣に報告しろ。それがマギーの覚悟に答えることになる。」

「わかった。夜が明けてから大臣に報告する。それまでゆっくり眠ってくれ。」

マギーがそこを離れて屋敷に向かって歩く。あわててサイモンが屋敷まで送る。残されたシュミットが鎧を集めて城に持って帰った。その表情はきびしい。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

ラダトーム城、謁見の大広間

玉座に国王、右に国務大臣、左に近衛騎士隊長、以下文官４名、近衛騎士４名が立ち並ぶ。中央には特務隊士シュミット、近衛騎士サイモン、そして筆頭魔術士マギーが控える。報告を聞いた国務大臣が早急に召集したのだ。

「陛下、この度の元近衛騎士乱心による事件が、この者らによって解決したことを報告します。」

「そうか、ご苦労であった。事の顛末を聞いてよいか?」

「はっ!特務隊士シュミットでございます。陛下の許可を得まして直言致します。此度の事件は人間による事件ではありませんでした。正確には元々人間による犯罪でしたが、死した後に魔物になったと小官は愚考致しました。ここに控える近衛騎士サイモン殿、筆頭魔術士マギウス殿の協力によってその魔物を消滅いたしました。」

「なるほどのう、しかし大臣より一つ納得のいかぬことがあると聞いた。」

「はい、臣が思うに犯行に及んだ者は漆黒の鎧を着ていたと聞きます。しかしながらここな鎧は白銀。不名誉の証があることから同一なのは明らかです。ならば如何なる方法でこの魔物を退治、浄化したのか不明であります。」

「そうか、誰ぞ説明はしてもらえぬか?」

サイモンとシュミットが顔を見合わせ、マギーを見つめる。マギ

ーが首を縦に振ると説明を始める。

「筆頭魔術士マギウスにございます。此度魔物を消滅させたのはロストマジックの一つ、ニフラムなる魔法です。この魔法は神に祈り、魂を正しく導く効果をもちます。これで納得いただけますでしょうか？」

その場にいた全ての者があっと驚く。ロストマジック、その響きに驚かぬ者などいない。

「なんとロストマジックと申したか。その詠唱、今ここで教えてはくれぬか？」

「構いません。ただし極秘により人払いを。」

「それもそうじゃ、大臣、近衛騎士隊長を除く全ての者は下がるが良い。大儀であった。」

その言により文官、近衛騎士達が下がる。最後にサイモンとシュミットが心配そうにその場を去る。大広間の大扉が閉まった後、大臣が告げる

「そなたの望みどおり人払いは済んだ。」

「はい、では・・・私はＭＰを2消費する、ＭＰはマナと混じりて神に捧げん。「あっ！」「あっ！」

ここまで静かに聞いていた大臣と近衛騎士隊長が思わず大きな声をあげた。

「いや、済まぬ。続けてくれ。」

「はい、おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ。ニフラム・・・と以上になります。」

「驚いたの、大臣。詠唱の半分程は聞いたことがある節だ。マギウスと言うたな。これはそなたが見つけた魔法か？」

「・・・・・・はい、私が書物から発見し、解読致しました。」

「そうか、余は以前にも同じような質問をした覚えがあるな。」

王様に見つめられたマギーは口を閉じた。

「なるほど、その者も今のそなたと同じ反応をした。まあよい、そういうことにしておこうか。それでこの魔法は秘術としておくか？」

「いえ、この魔法は一部の魔物にしか効果がなく、普通の人間には効果がありません。それゆえ魔法の技術が確かな者には伝授してもよいかと存じます。」

「そうか、近衛騎士隊長よ、そなたがまず伝授されるがよい。その後はそなたの判断で伝授すべき者を吟味するがいい。」

「御意。しかるべく致します。筆頭魔術士殿、よろしくお願いします。」

「はい、では後ほどお伺いいたします。」

「いえ、師事するのはこちらです。こちらから伺うのが筋です。」

「判りました。では図書館にてお待ちいたします。」

それを眺めていたラルス１６世が微笑む。

「此度の事件解決、及びロストマジックの発見、何か褒美が必要だの。大臣何か見繕ってくれるかな？」

「はい陛下、お任せくださいませ。」

「よろしい、ではご苦労であった。下がってよいぞ。」

「はい。」

マギーがこの場を辞する。背中に冷たい汗が流れる。ケルテンを守る為についた嘘を見抜かれている、そんな気がした。

長い旅路

７／２０　勇者支援生活　８１日目

ドムドーラ砂漠を抜けた。。スターキメラ、大魔道、ドラゴン、キラーリカントが出没する土地に近づいたはずだ。できるだけ戦闘は避ける為、発見したら隠れるようにする。今はドラゴンをやり過ごしている。

「アレフ見たか、あれがドラゴンだ。」

「大きいですね。ゴールドマンも大きかったですが、それ以上に見えます。」

「ああ、そうだな。全高では負けるが、全長では遥かに長い。威圧感が違うな。」

「あれよりでかい固体も見たことあるな。学者が駄目だと言うから相手にはしてない。」

「まだ駄目だ。アレフの装備強化が済んでから戦ってもらう。」

俺の言葉にガイラの目が輝いた。

「そうか、やっと相手にできるか。楽しみだ、メルキドに急ぐぞ。」

「なんか申し訳ないです。」

「気にするな。どのみち相手にしてもらうのは決定事項だ。最後に

相手にするのは竜王だぞ。これくらい倒してもらわねば困る。よしもうやり過ごせたようだ、先を急ごう。」

俺は抑えていた馬に飛び乗り、馬を進めた。アレフが続く、最後尾はガイラ。今のところ、この順番がもっとも効率がいい。

東へと駆ける、ドムドーラ砂漠を抜けて橋を渡ったのは昨日のことだ。この辺も昔は街道があってそれなりに商人や旅人が通っていた。今はその道にも雑草が茂り、馬での通行がし辛くなっている。

「上だ、前方１００mにスターキメラだ。数匹のメイジキメラを連れているぞ。どうする？」

突然、ガイラから警告。先頭を走る俺は通れる場所を確保する為、下しか見ていない。だから後ろの二人が敵を発見することが多い。

「駄目です。発見されました。こっちに来ます。」

「判った、まだ距離があるから北側の森に入る。あいつらに自由に空から攻撃させることはない。」

「了解です。」「承知。」

俺達は馬を降りて馬を引く。適当な木を見繕って馬をつなぐ。

「アレフ！あいつ等の傾向と対策は？」

「はい！メイジキメラのラリホー、スターキメラはベホイミを使うと聞いてます。戦ったことはありません。」

「じゃあどうする？」

「まず、スターキメラを倒します。回復されると長引きます。ここは空から集団で攻撃できませんから、発見次第ベギラマで落とします。」

「それでいこう。皆散開して隠れろ。スターキメラだけに固執することはないが優先的に倒そう。」

3人とも木々の陰に潜み、互いに大体の位置を確認しながら進む。アレフが中央、ガイラが右前、俺が左前、間隔は5mほど。木の枝を避けながらメイジキメラが飛んでくる。こちらを見失った様だが見逃す気はないらしい。数羽？のメイジキメラがバラバラに動く。

「ギャッ！」

ガイラが一匹のメイジキメラを飛礫で落とした。その悲鳴に散っていたメイジキメラが集まろうとする。

（俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、眠りの霧となりて奴等に纏わりつけ！）

「ラリホー！」

俺のラリホーは範囲魔法、だからラストワードをあえて発声する。集団戦闘では魔法を使用する際、味方への影響や誤射を防ぐ為に発声することにしている。メイジキメラの集団を中心に霧がかかる。5羽の内3羽のメイジキメラが墜落する。眠りの霧はすぐに晴れる、そこにアレフとガイラが突っ込んで落ちたメイジキメラに止めを刺す。残ったメイジキメラが木の枝を折りながら強引に飛び去ろうと

する。

「ベギラマ！」

アレフのベギラマが撃墜した。念のため止めを刺す・・・スターキメラの気配はない。しばらくの静寂。

「劣勢を悟って逃げた様だな。また襲撃してくるかもしれないな、学者どうする？」

「どうにもならんな。急いでここを離れよう。」

「スターキメラは知能が高いのですか？」

「ああ、かなり高い。キメラやメイジキメラは遥か昔に、鳥系の魔物と蛇系の魔物を合成した魔物だ。蛇系の習性で本来群れて戦うことはなかったらしい。」

「でもうまく連携して襲ってきますよ？」

「ああ、それを打開する為、魔族が自らキメラと合成した。それがスターキメラの始祖、そのスターキメラによって連携して狩りを行なうようになったと古い書物にあった。」

「なんとも信じがたい話だな。まあ学者先生の話はそこまでにして、先を急ごう。」

「あっすいません。僕のせいで無駄話が過ぎました。」

ガイラが馬を進める、先頭を務めるつもりらしい。アレフと荷馬

を挟んで俺が続く。アレフ、知識に無駄はない。そう言おうとも思ったが馬の足音に声は届かない。俺は消えていったであろうスターキメラに備えて空に気を配いながら馬を進める。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーー

ラダトーム城図書館。真剣な顔のマギーが黒板を指示棒で指している。その前には椅子に座って真面目な顔をしたアイゼンマウアー近衛騎士隊長。

「この文節が従来の魔法と異なります。まずここから発声を練習して下さい。」

「ふむ、先ほども気づいたのだが、それは陛下の使用なさる蘇生の秘術と同じだな。」

「そうですね、大臣も気づかれたようですが・・・。」

「人払いをお願いした理由が判りましたよ。冷や汗が止まりませんでしたがね。いや話が逸れました、続けましょう。」

近衛騎士隊長が今掻いてもいないない汗を拭く。

「発音が少々難しいですので、私の後に復唱して下さい。」

マギーの発声の後に近衛隊長が復唱する。それを5回繰り返す。ここアレフガルドでは通常魔法はこのように口頭でしか伝えられない。もちろん一つ一つの単語、文節の意味は知らない。

「しかしヴィッセンブルン殿、この魔法は別の意味でむずかしいですな。」

「わかりますか？」

「ええ、この魔法の一番の難しさは練習ができないことです。この場に対象になる相手がいません。魔法効果の成否の確かめようがありませんね。」

「その通りです。昨晩にもこれを行使する為、２時間ほどずっと口述詠唱の練習をしました。近衛騎士と特務隊士を巻き込んで、できませんでしたでは済みませんからね。」

「いえ、このような重大な秘密を公にする危険を犯してまで、我等近衛騎士の不祥事に貢献して頂けたこと、近衛騎士を代表してお礼申し上げます。」

アイゼンマウアーが丁寧に頭を下げる。マギーが少し困った顔で手を振る。

「では後１０回ほど復唱しましょうか。大体の発音は手元の紙に記述してありますが、細かいニュアンスは聞かないと覚えることはできません。」

「ではお願いしたします。」

また発声の練習を続ける。繰り返す度に精度が高まる、それを感じてマギーが納得したような顔をする。

「もう覚えられたようですね。後は御自分で練習なさるとよろしい

でしょう。」

「ありがとうございます。しかし伝承は本当に私の権限で行なってよろしいのでしょうか？」

「陛下の仰せです。それに近衛騎士隊長殿は信頼に足る人物だと今感じました。ある人物から心、技、体全てにて敵わないと聞いてます。」

「買いかぶりと言うものですよ。ある人物ですか・・・・・・もしやこの魔法は・・・。」

はっと言葉に詰まる。その意味を察したマギーが手で遮る。

「そこまでにしましょう。この魔法を発見、解読したのは私、どうかそうしておいて下さい。」

「そうですな、陛下のお墨付きです。そういうことにしておきましょう。では私に高評価をしていただいた方に私が感謝していたとお伝え下さい。」

そう言うとアイゼンマウアーは席を立ち、一礼してから図書館から出て行った。

本当にこれでよかったのかしら？近衛騎士隊長と陛下は多分全て判っている。ケルテン、早く帰ってきて欲しい。私の答えが正解だったか、それを聞きたい。

ゴーレム攻略

７／２２　勇者支援生活　８３日目

メルキドの石壁が夕焼けで赤く染まる。その直前に身の丈１０ｍのゴーレムがそびえる。

「メルキドよ、私は帰ってきた！」

ガイラが何か言っている。まあこの間はここでゴーレムに追いかけられて逃げたからな、気持ちはわからんでもない。

「来た事あるんですか？」

「ああ、何度も来ている。ただこいつには因縁があるからな。ここでその借りを返す。」

「はあ？でもあれは壊していいのですかね？」

「どういう意味だ？」

「一応、混乱しているとはいえ、街を守ってますよね。壊したらその後の防衛はどうなるのでしょうか？」

「さあ？」

「大丈夫だ。この前シュミットに聞いたら、街の人間も困っているらしい。外に出なければ襲われないとはいえ、何時その矛先が内に向くか恐れている。街の防衛ならあの石壁でなんとでもなるさ。さ

らに正門が使えないと、物流が途絶えたままになる。まあ今は関係ない話だがな。」

俺が話に割り込む。平和になってからの話が出てくるところが商人の町らしい。とはいえ平和になったらこの街の繁栄は望めない。一番近くにあったドムドーラが滅んだということは、この街がとんでもない辺境に存在することに他ならない。事実これから２００年後、ロト三国の時代には影も形も無くなっていた。

「そうですか、では倒すことにしましょう。そろそろ宿屋でゆっくり寝たいです。」

アレフが荷物から妖精の笛を取り出しながら、冗談交じりにそう言う。三人ともそれは同感だろう。誰からというわけでもなく近くの木に馬をつなぐ。やる気はまんまんだ。

「よし、作戦を言っておこう。まずこの前言ったように俺とガイラで陽動、アレフが妖精の笛で眠らせる。そこまではいい。そこで次だ、ゴールドマンと同じように、ゴーレムには仮の命を吹き込むための魔道装置があるはずだ。多分頭か、胸の辺りだ。初めから壊すことを念頭においたゴールドマンと違い、内部に埋め込まれているだろう。」

「つまり眠らせて弱点のありそうな場所を壊して弱点をむき出しにする。それからそこを破壊するということだな。」

「ああ、ただあいつの外装は見たとおり硬い岩でできているから、ガイラのミスリルナックル頼みだ。それでどっちをやる。頭か、胸か？もし外れたらまずお前の命はない。」

「なるほど、気持ちよく寝ていたゴーレムを起した俺は寝起きの一撃を受けるとそういうのだな。いいぜ、俺は分の悪い賭けは嫌いじゃねえ。で、お前さんの見立てではどこだ？」

「そうかそうか、俺にお前の命をチップに賭けをやれと・・・。そうだな、俺がゴーレムの作者だとする。ならあの巨体を動かす為にそれなりの大きさの魔法石を埋め込む。これくらいかな？」

そう言って両手を丸を作る。多分水晶に万能たる力を蓄積させた物を使うだろう。

「相変わらずお前の説明は難しいな。めんどくさい理論はいいから結論を言え。」

「まあそう言うな、まあ聞け。頭部か、右胸、左胸、もしくは胸の中央当たりに仕込むことを考える。あんまり低い位置に設置する馬鹿な事はしない。」

「まあそうですよね。まぐれでも攻撃が当たったら終わりですから。」

「さらに・・・擬似とはいえ命を吹き込むのだからなんとなく心臓の位置か、脳の位置を選択する。どちらかというと心臓の位置かな。頭は転倒した時に壊れる可能性があるし、そこまで装甲を厚くできない。」

「で、考察はいいから結論を言ってくれ。」

「判った・・・頭3、心臓6、その他1・・・心臓の位置にお前の命を賭ける。」

「お前の判断に従おう。もし死んでもお前を恨んだりはしない。」

「馬鹿が・・・。装甲を破壊したら水晶の塊が出てくるはずだ。それを打ち砕け。これもお前にしかできない。それでゴーレムは二度と動かなくなる。」

「よし、じゃあ行こうか。」

俺のミスリルブレード、ガイラのミスリルナックル、アレフの鋼の剣を打ち合わせる。これが最後になるかもしれない、その不安を消す戦いの前の儀式。

俺がゴーレムから見て右、ガイラが左で近づく。距離が５０ｍになった瞬間、ゴーレムの目が光る。ゴーレムが一歩を踏み出す。その一歩はおよそ５ｍ、あと１０歩足らずで俺達に届く。

「よし、俺から出る。ガイラは１０ｍ離れて後から来い。」

返事も聞かずに走り出す。もちろん自己強化魔法はすでにかけてある。ゴーレムが歩く方向を変える。あと１０ｍ、そこでゴーレムの動きが止まる、俺のいた場所を右脚が踏みつける、地面が大きく揺れた。俺はすでにそこにはいない。ゴーレムの股の下をくぐり、後ろに回る。ゴーレムが俺の方に向きを変えた。そこでアレフの笛の音が完成した。バランスを崩してゴーレムが仰向けに倒れた。ガイラがゴーレムの胸の上に飛び乗り、構える。

「さあ行くぞ。この賭けに勝ったら今日は俺に酒を奢れよっ！はあぁぁぁ・・・・・せいやっ！」

轟音が響き、ゴーレムの胸の装甲が砕け散る。それでもゴーレムが立ち上がろうと地面に右腕をつく。

「あったぞ！当たりだっ！」

次の瞬間、何かが割れる軽い音が響いた。ゴーレムが立とうとした姿勢のまま動きを止める。こうして４００年の長い間メルキドを守り続けたゴーレムはその役割を終えた。

――――――――――――――――――――――――――――――

開かれた城門（正確には城ではないので城門ではないが、その規模はラダトーム城にひけはとらない。）には街の人達が溢れている。群集にもみくちゃにされるのを覚悟したのだが、偉そうな男が護衛を引き連れて俺達に向かってくると、群集が真っ二つに割れた。

「私の名はメルキド自治区の長ボーメル、そちらのお名前を伺ってもよろしいですか？」

その男は冷静でむやみに人を信じない、そんな雰囲気を醸し出していた。

「こちらはラダトーム王家公認勇者アレフ、同じく勇者ガイラ。私は国務大臣付き特務隊士だ。所要でこの街を訪れた。立ち入りの許可を願いたい。」

俺はラダトーム王家の紋章が入ったナイフを見せる。大臣に仕えることになった時もらったアイテムだ。

「これはこれは失礼いたしました。もしものことがあります故、確認させて頂きました。失礼をお詫び申し上げます。もちろん街に入っていただいて構いません。城塞都市メルキドにようこそ、勇者さま。」

わざとらしいぐらいのその挨拶は、静まり返った民衆の中響き渡る。アレフが長と握手をした瞬間、歓声に包まれた。続いてガイラが握手をする、歓声は止まない。俺も握手をする。

「到着していきなりで申し訳ありませんが、我々はここまでの道中で大変疲れています。すぐにでも宿の手配をおねがいしたいのですが。」

「これは失礼しました。街で一番の宿を用意させます。もちろん代金は要りません。」

そう言うと背後の男に何か告げる。それから群集に向き直り大きな声で宣言する。

「こちらはラダトーム城より派遣された勇者アレフ様、ガイラ様です。竜王討伐の旅の途中に我等が街メルキドを開放しに来ました。その偉業は今成されました。街を代表して歓迎するしだいです。」

この宣言にさらに歓声が響く。俺達は歓迎の中メルキドに迎え入れられた。メルキドを開放するべくゴーレムを倒したのは勇者アレフと勇者ガイラ、俺の名は記さない。

メルキドの事情

7／23　勇者支援生活　84日目

昨晩は全てのお誘いをお断りして爆睡した。多分俺以外の二人もそうだろう。それほどまでに12日に及ぶ旅路は厳しかったのだ。それでも朝6時になると目が醒める、完全に習慣になっているのだ。与えられてた宿屋はこの街でも最上級に属するようだ。広い庭に下りて鍛錬を行なう。

「おはようございます。久しぶりによく寝ました。」

アレフも剣を持って現れた。並んで剣を振るう。

「何だ、お前らここでも鍛錬か？真面目だな。」

ガイラが現れる。非常に酒臭い・・・もしかしてこいつお誘いを受けて酒宴に浸ったのか。

「呆れるほどタフだな。」

「いいじゃねえか、お前らと一緒だと酒を浴びることはねえからな。学者は少ししか飲まねえし、アレフは一緒に飲むにはまだ早い。」

「酒を飲みすぎると頭の回転が悪くなる。それで不覚を取りたくないだけだ。」

「僕はお酒を買う余裕がなかったので、ほとんど飲んだことありません。」

「ああいいさ、昨日はここのお姉ちゃん達とおいしく飲めたから。」

「ほっとけ、あいつと同類とは思われたくない。お前は正統な勇者を目指すんだ。今日は街の中を見て回れ、必要と思うものがあったら購入するといい。それとくれぐれも変なお誘いに乗るなよ。」

アレフが怪訝そうな顔をする。

「あれっ？炎の剣と水鏡の盾を購入するのではありませんか？」

「ああそうだよ。この街は商店が多い、その中から然るべき店を見つけるのも修行の内、情報収集も兼ねていろいろ回るといい。俺は別の用事ができた。」

俺はそれだけ言うと部屋に戻る。朝食の後に区長の屋敷に行く。

――――――――――――――――――――――――――――――

今メルキド自治区の長の屋敷の応接室にいる。余計な飾りのない実務的な部屋だが金はかかっている。リムルダールの俺の家よりずっと豪華だ。そこに長が入ってきた。俺も立ち上がって相対する。

「これはお待たせいたしました。お養父上はお元気ですかな？」

「なんだご存知でしたか。ええ元気ですよ、私を王家に売って街を護ることを考えるぐらい元気です。」

「それはよかった。昔あの方には、同じ自治区の長としての心構え

や交渉の仕方などを手ほどきして頂きました。・・・まあその話はいいでしょう。今日のお越しは何か用件があるのでしょう。ラダトーム王家からの正式な使者ですか、それとも大臣からの非公式の使者ですかな？」

「どちらでもありません。今日の用向きは個人的な責任を取る、そういったものです。」

「責任とは？」

「ゴーレムを破壊しました、そのせいで街の人に被害がでたら気分がよくありません。特に勇者アレフは若く重荷になりかねません。」

「くくくっ、いや失礼。その若さのわりに結構な見識、驚きですな。ではその責任とやらをとってもらいます。リムルダール防衛責任者の手腕を期待しましょうか。」

「恐縮です。そこまでご存知でしたか？」

「ええ、３年ほど前にあなたの養父上に、近い未来ロトの予言が当たる可能性があると警告されました。それで極秘に調査したところ、外敵に備える準備をしていると。もちろんその中心人物について調べないことはありませんな。」

「そこまでご存知でしたか、それでは防衛施設や人員を見せていただきます。失礼ながらあまり十分な守りとは見えませんでしたね。」

「我々はゴーレムに頼りすぎていました。まさかあのようなことになるとは誰が予想できたでしょう。過去の話はよしましょう。ではご案内いたします。何か気付いたことがあったら教えてください。」

それから半日ほど街のあらゆる所をまわり、護りの不備、適正な人員の配置、ここにはない兵器の設計など様々なことと指摘、教授した。個人的には大変楽しい一日でした。

――――――――――――――――――――――――

宿屋に戻って夕食を頂く。誰の思し召しか非常に豪勢だ、アレフが恐る恐る手を出し、ガイラが豪快に食べる。食事をしながら今日の収穫を聞くと、途中から二人で行動していたらしい。

「町中回ったけど、どこにも売ってなかったぞ。本当に売っているのか？」

「ああ、3年前は売っていたぞ。汚い小売店だったけどな。」

「この街は本当に商店が多いです。それでもほとんど回ったと思うんですが。」

「仮にも国宝級のアイテムだからね、表に飾ってあるわけじゃない。まあ明日一緒に行くとしよう。」

「そうですか。ケルテンさんは今日何をしていらしたのですか？」

「ああ、この街の防衛施設の視察に行ってきた。ゴーレムがなくても大丈夫だろう。」

「なんだ、お前心配だったのか？メルキドのことはメルキドの人間に任せておけよ。」

「そうだったよ。俺の出る幕じゃなかったよ。じゃあ俺はもう休ませてもらう。視察ともなると精神的にも疲れた、慣れないことをするものじゃないな。」

アレフに心配をさせないように嘘をついた。少しの後ろめたさを感じながら部屋に戻る。

――――――――――――――――――――――――――――

「ああ、ここだ。」

鍵の閉まった裏路地の商店街にアレフ達を連れてきた。明らかに不満顔である。

「昨日もここにきたぜ。魔法の鍵を使ってまで入って、同じ魔法の鍵を買って帰った。他には碌なもん売ってなかったぞ。」

俺は黙ってアバカムを唱えて扉を開ける。後ろで何か言いたげだったが無視して歩く。間口が2m程度しかない店がいくつか並ぶ。せまい店舗には様々な物が並んでいる。一番奥の武具の店に来た。ごちゃごちゃに陳列された武器の後ろに不機嫌そうな店主が座っている。こちらをちらりとも見ない。

「あいかわらず汚い店だな。」

「汚くて悪かったな、綺麗な店がいいなら表の店にでもいくんだな！・・・ってあんたか！ずいぶんな挨拶だな。」

「事実を言ったまでだ。あの時は無理を言ってすまなかったな。」

「いや、こっちこそ頼りにならなくて悪かったと思ってる。それでどうなった？」

「ああ、これだ。好きなだけ見てくれ。」

そう言って腰の刀を鞘ごと渡す。店の主人が鞘から刀を抜き、刀身を眺めた。なにかうなっている。

「これはあの時のミスリルか？どうやって加工した？」

「ある村に伝わる秘伝の技術だ、教えるわけにはいかない。」

「秘伝か・・・そうだな、気軽に教えてもらっていいものではないな。」

俺と店の主人二人で盛り上がる。後ろにいたアレフが控えめに話に割り込む。

「あの～話が見えないのですが、お知り合いですか？」

「ああ、昔この刀が壊れた時にここに来た。修理を頼んだが無理でな、その代わりとんでもない物を勧めてきた。」

「とんでもない物？もしかして・・・」

「ああ、そうだ。炎の剣だ。これに匹敵するのはこれしかねえ、俺の自慢の商品だって勧められた。」

「その刀とやらを見たときは驚いたぞ。種類の違う鉄を使った理に適った構造、鍛冶屋としてこれ以上の驚きはなかった。だから俺の秘蔵の炎の剣を勧めたんだがな、見事に断られた。忘れられん奴だ。」

「なるほど、お前そんな前から変な奴だったんだな。」

「変な客だったことは間違いない。それで今日は何の用だ、それを見る限り、まさか炎の剣が欲しくなったってことはないだろう。」

「そのまさかだ。俺じゃないけどな。」

「もしかしてこっちのゴツイ奴の武器か？」

胡散臭そうにガイラを指差す。俺は黙ってガイラに拳を突き出す。

「俺じゃねえ、俺にはこれがある。」

ガイラがミスリルナックルを前に突き出す。それをまじまじと眺め、少し躊躇ってから言う。

「少しいいか？」

「ああ、いいぜ。」

ガイラが手渡したミスリルナックルをあらゆる方向から眺める。一本のナイフを取り出して軽く当てる。もちろん傷一つ付かない。

「さっきの刀と同じミスリルだな。どうしても教えてもらう、こいつを作ったのはどこのどいつだ　！」

「じゃあ炎の剣を売ってくれ。使うのはこいつだ。」

ここでアレフを前に押し出す。さっきまでのいきり立っていたのが嘘みたいに真剣な顔になった。

「この坊主がか？こいつに使いこなせるとでも言うのか？玩具じゃないぜ。」

「もちろんだ。俺の弟子だ、腕は俺が保障する。」

「そうか、おい手を見せろ。」

強い言葉にアレフが右手を出す。その手をとり手のひら見る、ひっくり返して手の甲を眺め、そのまま筋肉の付き方を見る。更に左手を出させて同じく見る。アレフの手を離すと店の奥に入っていく。

「どうしたんでしょうね。行っちゃいましたよ？」

俺は大げさに肩をすくめる。しばらくすると豪華な作りの剣と盾を持って戻ってきた。

「よし坊主、これを持ってみろ。」

アレフが剣と盾を持つ。店の親父が一つの鉄の鎧を狭い廊下に立てる。

「よし、これを斬ってみろ。」

「ここでですか？」

ここは武器を振るうには狭い。十分な腕が無ければ振ることすらできない。

「できないなら売らない。たとえ王様に言われようが俺の気に入らない奴には売らない。」

「判りました。少し下がってください。」

俺達が下がって場所を空ける。アレフが居合いの構え、空気が静まり返る。

「えいっ！せいや！」

アレフが気合と共に左斬り上げ、踏み込んで唐竹割りでの追撃。鉄の鎧の前面が斜めに斬り裂かれ、さらに右左に真っ二つに斬れる。すでに剣は鞘の中。アレフが笑みを浮かべる。

「これでよろしいですか？」

店の主人が壊れた鎧を手に取り眺める。しばらくすると振り返ってアレフの両肩に手を置く。

「坊主、これは今からお前の物だ、使ってくれ。」

「坊主じゃありません、アレフです。」

「そうだな、ここまでの腕を持つ者に坊主は失礼か。アレフ、お前になら只で譲ってもいい。」

「ありがとうございます。お金なら師匠に言われて２４６００Ｇここに用意してあります。」

「判った、その金で売ろう。しかしまああんたもずいぶんと根回しのいいこった。俺が売らないとは考えなかったのか？」

「さあね。じゃあもう一つの約束を果たそう。マイラの村の一文字という鍛冶屋を訪ねるといい。俺は紹介もなにもしない。」

「マイラの一文字だな、覚えた。紹介なんぞいらない、鍛冶屋が誰かの紹介で弟子入りなんてするもんじゃねえ。」

代金を払う。買うアレフも売る店の主人も満足そうだ。これで装備は整った、城に帰る前にこの辺りに闊歩しているドラゴンを倒そう、そう思った。

武器屋を出た足で正門まで歩く。

「さっき何も言わなかったですけど、こっちの盾が水鏡の盾ですよね。」

「ああそうだ。炎の剣に見合う盾はそれしかない。」

「よかった。下手なこと言って機嫌を損ねたくなかったので黙ってました。」

「見る目が無いと思われるのも損だ。己の目に自信があるならそれでいい。」

「いえ、隣でケルテンさんが黙っていたのでそれがあってるかと・・・」

「そうだ、自分に自信がねえなら一番使える奴に任せる。こいつといると便利だ。」

「ガイラ、好き放題言ってくれる。まあそれも正解なんだけどな、できないことは他人に任せる、それができれば楽だ。俺も魔法のことならマギーに任せた方が楽だ。」

「あれっ！もしかしてしばらく会ってないから恋しくなりましたか？」

珍しくアレフが俺を冷やかす。

「そうかもな。昨日は久しぶりに人と棘のある会話をした。もっと楽しめる会話がしたい。」

「そりゃあ俺達では無理な話だ。俺にできる会話はこれだけだ。」

ガイラが拳を突き出して戯言を言う。武闘家は拳で語るか、それはそれでいいのだろうな。

「じゃあ、これからそれで会話をしてもらおうか。相手はドラゴンだけど、後で何と言ってたか教えてくれ。」

「なんだよ、それ！そんなの判るわけねえだろうが！」

俺は完全にその文句を無視して歩く。正門にいる衛兵に声をかける。

「今日はドラゴンは見ていませんか？」

後ろの二人に気付いたようで敬礼をする衛兵。

「昨日からいろんな魔物が近くに来ています。大体は遠くでこちらを眺めてから姿を消します。今日見たドラゴンは東へと歩いていきました。」

「ありがとう。足跡を追います。」

「あの・・・危険です。お止めになった方がいいのでは？」

「アレフ、ガイラ、危険だとさ。何か言いたいことがあるだろ？」

「へっ！楽しみにしてたんだ。止めても無駄だぜ！」
「最終的には竜王を倒さねばなりません。その前に必ず通る道だと思ってます。」

「だ、そうだ。だから行ってくる。それにこの街のためにも倒しておいた方がいい。」

「すみません、では御武運を祈っています。」

衛兵の最敬礼に見送られた俺達は正門を出た。この街を護る石壁は高さ５ｍ、所々に１０ｍ程の塔が立っていて常時回りを見渡している。スターキメラや大魔道、キラーリカントは城壁からの弓矢でも追い返せるだろうが、ドラゴンの巨体にはそれは効果が薄い。昨日の視察でそれがわかったので簡単なバリスタや投石器を設置できるよう設計図を描いて渡した。それでも実際に設置できるまでには時間がかかるだろう。なら今のうちに倒しておいた方がいい。

「ガイラ、ドラゴンの足跡を追う。先頭を頼む。」

「任しとけ、まあ見逃しようのない足跡だけどな！」

「ドラゴンと戦うときの布陣は中央がアレフだ。俺とガイラが左右に散る。それでいいか？」

ガイラが少し不満そうな顔をしている。

「俺が真ん中では駄目か？」

「炎の息に対しては俺とガイラの装備では心もとない。アレフが盾

を構えて耐えるのが一番いい。」

「中央は譲りません、ガイラ。一番重装備の僕に任せて下さい。」

「言ってくれるねえ。よしじゃあ任せた。」

「それだけじゃないぞ、俺とガイラで前足に攻撃を与える。ドラゴンの鱗は硬いから一撃ではやれん。隙があったら炎の剣でその傷を抉ってくれ。」

「了解です。なるほどこの炎の剣が適任ですね。」

「ガイラ、お前欲張るなよ。奴に踏まれたら終わりだぞ。」

「なんか俺信用がないな。そこまで馬鹿じゃないつもりなんだけど。」

「いーや馬鹿だ。俺の言いつけを護って二回も死んでいる様なやつは十分に馬鹿だ。とりあえず後ろにはまわるなよ。ドラゴンの尻尾は受けたり避けたりできるものじゃない。」

「判った判った、最初はお前の言う通りやってやる。」

「アレフも欲張って攻撃するなよ。前脚を潰して動きを止めてから頭を攻撃するぞ。」

「よく判りました。気をつけて戦います。」

それから1時間後、揺れる大地にドラゴンの気配を感じた。

「いるぞ、あと２００ｍぐらいか？」

「ああ見えてる。アレフ、初めに俺とお前でやつの顔にベギラマだ。片目でも潰せたら儲けものだ。」

「はい、では見つからないように近づきましょう。」

息を殺して近づく。ドラゴンの尻尾が目の前で左右に振れている。

（どうする？前にでるか。）
（いや、無理に前にでることはない。こっちを向かせる。）
（どうするんですか？）

俺がいきなり枯れ木を踏みつける。ベキッと乾いた音が響く。ドラゴンが不思議そうに首だけで後ろを振り向いた。

「今だ！・・・・・・・・・・・・・・ベキラマッ！」「ベギラマ！」

俺とアレフのベギラマがドラゴンの顔を撃つ。怒り狂ったドラゴンが全身でこっちを向く。

「右目が潰れていますね。」

「そうだな。ガイラ、右足は任せる。俺が左を受け持つ。行くぞっ！」

俺達が散開した瞬間、俺達がいた場所に炎の息が吹きつけられた。アレフが水鏡の盾を構えて耐える。水鏡の盾は炎に対して耐性がある、それでも痛くないわけがない。しかしその間に懐に入ったガイ

ラが右前脚に拳をミスリルナックルを叩きつける。その痛みに炎の息が止む。

「ベホイミ！」

俺のベホイミの光がアレフを包む。それを確認したアレフも右脚側に飛び込む。ドラゴンが二人を見失って右に向き直る。俺が左脚に斬りつける、硬い！俺の一撃は表面にうっすらと傷をつけただけ。右脚はどうなった？確認するため一旦大きく距離をとる。俺の目の前を大きい物が通り過ぎる。尻尾によるなぎ払い、危なかった、距離をとっていなかったら直撃していた。

「ギャオォォ！！！」

ドラゴンの奇声が響く。よくみるとアレフの炎の剣が、右脚の膝辺りに深々と突き刺さっている。ドラゴンの顎がアレフを襲う、それを見越したガイラの拳が潰れた右目に突き刺さる。その隙にアレフが剣を抜き離脱するが、ドラゴンが痛みにのけぞりガイラが宙を舞う。受身を取れずに背中から落ちる。

「・・・ベホイミ。」

再び俺がベホイミを唱える。ガイラが跳ねる様に飛び起きる。ガイラがいた場所にドラゴンの炎の息が襲うがすでにガイラはいない。それを確認した俺は再度左脚に斬りつける、鮮血が飛び散る。ドラゴンが悲鳴を上げて右側に傾いた。こっちからは見えないが右脚を潰せたようだ。

「ベギラマッ！」

左脚の傷口に直接手を当ててベギラマを流し込む。肉が焦げる嫌な臭い、これでこっちも潰れたに違いない。前脚を失ってドラゴンが頭だけで強引な攻撃をする。その隙をつき俺が左目を刺す。これで勝負はついた。あとは動きが止まるまで徐々に攻撃を加える。アレフの剣が右目から深々と刺さり、ガイラの拳が頭をかち割った時、ドラゴンはその動きを止めた。

横たわるドラゴンを横目に俺達が座り込む。

「何とか倒せたな。空中に飛ばされた時はやばかった。学者か？ベホイミをかけてくれたのは。」

「ああ、ちょうど俺からよく見える位置で飛んだからな。」

「あの回復がなかったら焼かれていたな、礼を言う。」

「調子に乗って目なんぞ抉るから飛ばされるんだ。反省しろ。」

「いえ、僕を逃がすために時間を作ってくれたんです。反省しろとは酷いですよ。」

アレフが弁護する。アレフも深く刺したはいいが、抜けなかったのだ。

「まあ、皆失敗はあったがうまくいった。失敗を反省して次に生かそう。」

「おう、そうだな。そういえばこいつの皮と鱗で俺の篭手をバージョンアップしてくれる約束だったな。」

ガイラが嬉しそうにそう言うと、ドラゴンの死体を解体し始めた。俺もアレフも手伝う。それはとても大変な作業だったが初めて倒せた喜びと、これで作ることができるであろう装備への期待で、心地よい疲労となった。

その後街に戻った俺達は、衛兵を始めとするすれ違う全ての街の人に心配された。返り血に気付いていなかったのは三人だけの秘密にすることにしたのは言うまでもない。

ドラゴン攻略（後書き）

ドラゴンはやたらと強く設定しました。

筆者は弱いドラゴンなど認めません。

メルキド攻防戦？

7／25

ドンドンドンッ！ドンドンドンッ！

部屋の扉が多いな音を立てている。寝ぼけ眼で外を見るがまだ暗い。

「すみません！すみません！起きてください！大変です。」

扉の向こうで慌てた声がする。誰だよ、まだ起きるには早いぞ、あと1時間は寝れるはず・・・。

「魔物の襲撃です。すみません、起きてください！」

ガバッ！魔物の襲撃だとっ！俺は飛び起きた。

「判った。すぐ行く！」

慌てて扉の向こうに返事をすると着替える。最低限の装備をつけると部屋を飛び出した。ロビーへ向かう、そこには青い顔のホテルの支配人と役人風の男が立っている。

「朝早く申し訳ありません。長より至急お越しいただけるよう申し付かっております。」

「ああ構わない、緊急時だその言葉遣いもいらない。詳しい説明は歩きながら聞こう。あと支配人さん、うちの勇者が起きたら、区長

の屋敷に来る様伝えて下さい。」

それだけ言うとさっさと歩きだす。慌てて俺を呼びにきた役人もついてくる。

「何がおきた？」

「はい、街の外に続々と魔物が結集しています。その数１００は下らないと聞きます。」

「一大事だな。ゴーレムを倒したことの弊害がもうでたか。」

もう歩いている場合ではない区長の屋敷まで走る。その玄関には十数人の兵隊が立っている。青い顔をして各々が武器を手入れしている。応接室まで案内されると、そこにはメルキド自治区長ともう一人偉そうな人が座っている。やはりその顔色は青い。

「お待たせして申し訳ありません。」

「あ、ああ、こちらこそ朝早く起して申し訳ありません。紹介しておきます、こちらがラダトーム王家メルキド駐在弁務官のブルーメ男爵です。こちらは国務大臣付き特務隊士デルテン殿です。」

俺の視線が一瞬そっちに泳いだのに気付いてボーメル区長が互いに紹介した。一応一礼するが反応は薄い。

「緊急のようですので簡潔にお願いします。私は何の為に呼ばれたのでしょうか？」

「何を暢気なことを言っておる！魔物が攻めてくるのだ。勇者を率

いて迎撃せよ！」

弁務官とやらがなんか偉そうに横から命令する。かちんときたので言い返すことにする。

「失礼ながら男爵、敵の数は１００を越えると聞きます。勇者２名、私を含めて３人でどう迎撃せよとおっしゃるのですか？」

「なんだとっ！こういうときの為にそなたらの様な者が飼われておるのだっ！つべこべ言わんとさっさと行ってこい！」

口から泡を吹き出して怒鳴る。横の区長が苦い顔をしている。

「区長殿、失礼ながら弁務官殿は興奮しておられる。どこか安静にできるお部屋にご案内されてはどうですか？」

「そのようです。弁務官殿、ここは我々に任せて頂きたい。あちらにお部屋を用意させますので、どうかそちらへ。」

右手を軽く挙げ執事に促す。執事が小声で弁務官に話しかけ退室させた。

「これでやっと話ができます。私としてはたった３人で対抗させるつもりはありません。魔物との戦闘の専門家としてアドバイスして頂きたい。できれば指揮をとって頂きたいと思います。先の責任とやらを果たしていただけるものと理解しております。」

「率直な意見で判りやすいですな、お受けせざるを得ませんな。」

ボーメル区長が明らかにほっとした顔をする。

「では現状を整理しましょう。敵の数、種類、編成。それと守備の人員を教えてください。」

「では魔物に関しては、斥候に出した者に説明させますのでしばしお待ちを。その間にこちらの陣営について説明します。現状この街で登録されている兵隊は５０名、あとは私の私兵が１０名です。」

この街の人口は５万人、妥当な人数だな。だとすると後はいまから募集するしかない。

「それはすぐに召集して下さい。しかしそれでは圧倒的に足りませんね。」

そこに一人の兵士が入ってきた。区長に一礼して俺の方に向き直る。俺が口を開くのを待っている。

「報告は簡潔にお願いします。形式的な挨拶はいりません。」

「はい、では敵の陣容を説明します。ドラゴン3、金色の魔法使い1、赤い魔法使い１０、金色のリカントが５０、キメラ系の魔物が５０。まだまだ集まってきています。」

「大体判りました。金色の魔法使いは大魔道、赤いのは魔道士、リカントはキラーリカント、キメラの種類は赤茶色の固体がメイジキメラ、ピンク色の固体がスターキメラです。まず全員に固体名を徹底させて下さい。よろしいですか?」

「す、すいません。一度では覚え切れませんでした。もう一度お願いします。」

「では書きましょう。紙とペンをお願いします。」

執事が紙とペンを用意して俺に渡す。俺がそれにさっき言ったことを記述して渡す。

「では急いで伝えてください。誤った認識は負けに繋がりますので徹底してください。」

礼もそこそこに兵士が飛び出していった。

「私の部下が失礼致しました。それで後はいかが致しましょう？」

「それでは至急民兵を招集して下さい。この街の危機ですので強制的に集めて下さい。」

「強制と言われましても、こちらの言うことを聞いてくれるかどうか。」

区長が額の汗を拭く。召集する自信がないようだ。

「できないのならこの話はなかったことにしましょう。我々は城に帰還します。あなたがたも命が惜しければキメラの翼ででも使って逃げるといいでしょう。まあ財産の持ち出しは無理ですけどね。」

「そっそれは困る。しかしどうやって集めればいいのか。」

「まず町の存亡の危機だと認識させて下さい。先も言いましたが逃げるという選択肢も伝えて結構です。ただしドムドーラからの流民が、幸せに暮らしているとは思わないで下さい。」

「そこまで酷いのですか?それを私に伝えろと!」

「城下街の片隅に流民街ができています。それはそれはひどいものです。生きるか死ぬか、地を這って生きるか、その選択をしてもらいます。」

「・・・・・・・・・・。」

「集める民兵は最低で５００。半数は２０歳以上の男性を、残りは女性でも構いません。」

「しかし、戦えるものを集めるにはどうすればいいか・・・」

「ではまず狩人を弓兵として使います。多分得意分野ですので召集に答えてくれるでしょう。次に各家庭から男手を出させてください。ただし男が一人しかいない家庭からは召集しないこと。父一人、子一人の家庭なら父一人を招集、子が二人以上いる家庭は下の子を召集すること。これを徹底させて下さい。街が助かっても人がいなくなっては意味がありません。もちろん十分な報酬をだすことも伝えてください。それでも足りない場合は女性でも構いません。戦う意志のない兵士は要りません。」

「・・・わかりました。そうします。」

「先日の指摘した備蓄品は用意してますか?」

「まだバリスタや投石器は完成を聞いていません。ですが油、大鍋、薪、杓、矢、木盾は十分に用意させました。」

「結構です。では兵の指揮権限をもらいます。今ある兵員で2時間魔物を止めます。2時間経って応援が来ない場合は撤収します。よろしいですね。」

「お任せします。こちらも急いで集めますのでそれまでお願いします。」

「では行きます。」

俺が屋敷の玄関をでるとガイラとアレフが兵士に紛れて立っている。すでに戦うつもりのようだ。

「では皆さん、行きましょう。大丈夫、心配するな！我々だけではない、じきに区長殿が民兵を連れてきてくれますよ。」

俺を中心にガイラ、アレフが左右につく。その後ろに兵士３０名ほどが続いた。

メルキド攻防戦？（後書き）

原作にはないイベント発生です。

勇者が動くことによるバタフライ効果です。

メルキド攻防戦？

城壁の上に立つ。眺めは最高だ、悪いほうだが。まだ夜は明けていない、空が東から薄っすら明るくなっているだけだ。多分攻撃は夜明けからだろう。キメラ系の魔物は鳥の習性で夜目が利かないはずだ。夜明けまであと１５分程度か。

「アレフ、ガイラ、どう思う？」

「ドラゴンって個体差があるんだな。この間の奴の方が大きかったぞ。」

「そういう問題ですか？しかしこれだけ魔物が揃うと圧巻ですね。」

「いや、感想を述べてくれと言ったつもりじゃないけど・・・。」

「作戦、指揮はお前に任せる。いつも通りだ。」

「そうですよ、後ろの皆さんも指示を待ってます。」

その会話を聞いた兵士達が真面目な顔で頷く。俺は一段高い場所に登り、振り向く。

「よ～し、では班を３つに分ける。弓が得意な者は俺から見て右、そうでない者は左に移れ。」

その言葉に３０人近くが右に移る。

「では弓隊の指揮はガイラに任せる。空中の魔物だけを攻撃してく

れ。残りの者は用意した油を煮て敵襲を待つ。敵が登ってきたら頭からかけてやれ。油班の半分は俺、残りはアレフが指揮を執る。」

その命令に兵士がそれぞれの班長につき従う。俺の元には１５人。アレフの元に１５人、ガイラが３０人を受け持って困った顔をしている。

「ガイラ、人数が多いなら一人副長を指名しろ。ここを中心にして半分を受け持ってもらえ。」

「そうさせてもらう。どうも指揮するなんて慣れねえ。」

俺とアレフの兵士に大鍋を用意させる。油をなみなみと注がせて、薪でがんがん熱する。

「アレフ、油をかぶった魔物には、お前の炎の剣で着火してやれ。パワーワードは、“炎よ、敵を撃て”だ。狙いたい場所に剣先を向けるだけでいい。城壁に登られる前に必ず落とせ。槍で突け、剣で斬れ！」

兵士たちが真剣な顔で自分の担当場所に予備の薪を積み、油の入った樽を置く。

「ガイラ、弓隊で木盾を並べてくれ。」

「ＯＫ！・・・これは濡らしてあるのか？」

「ああそうだ。ギラや炎対策だ。」

「なるほどな、よおーし皆、等間隔に並べるぞ。急げよ！」

俺が用意させた木の盾は縦２ｍ、横１．５ｍ、厚さ１０ｃｍ。斜めに立てられるようにしてある。ずいぶんと重たい。運ぶのに苦労していると、街の人々がそれも女、子、年寄り合わせて十数人が城壁に登ってきている。。

「何をしている？危険だぞ。」

「何言ってるの、この街が危険なんでしょ？逃げる場所なんてないわよ！」

「そうだ、兄ちゃん。俺達にも手伝わせろよ。」

「そうじゃ、若い者ばかりに任せるわけにはいかんな。ここはわし達の街じゃ。」

「はあ・・・わかりました。皆さん、油の鍋をお願いします。危険ですから敵から見えない場所で作業してください。それと温度が上がりすぎると自然に燃えますから、気をつけて下さい。」

俺が大声で叫ぶ。兵士たちが鍋から離れて、盾の設置を手伝う。女、子供、年寄りが盾に隠れる位置に新たな大鍋を置き、薪に火を点ける。

さてここまで準備して、いきなりドラゴンで攻めてきたらどうしようか？・・・その時は覚悟を決めるしかないな。

朝日が昇る。金色の絨毯がこちらに向かってくる。空からは羽音が襲ってくる。見極めろ、今一番怖いのはドラゴンだ。目を凝らす・・・ドラゴンには動きはない。敵との距離はあと１００ｍ、矢が空を飛ぶ。ガイラと副長に選ばれた男の声が響く。

「まだ遠い！無駄に矢を使うな！」
「よく狙え。矢は効果的に使うんだ。」

近づいてきたキメラ数匹が矢に当たって落ちる。ホバリングして炎の息を放ってくるが、射手は一矢撃つ度に盾に隠れている。キラーリカントが城壁に取り付いた。城壁の高さは５ｍ、キラーリカントは２ｍを越える。一跳びで城壁の一番上に手がかかる。あちこちで煮えたぎった油を浴びたキラーリカントの悲鳴が上がる。兵士の間を縫って登ってくるキラーリカントの首を斬り裂く。噴出す鮮血、落下を確認する。

緒戦はまずまず、ボランティアの参加が嬉しい誤算だ。

「まだまだ油はあるよ！」
「これでも喰らえっ！」

女が油を次々に準備し、子供が小石を投げる。矢が次々と放たれる。相手に飛び道具がないのが救いだ。しかしあちこちで幾人かが急に動きを止める。メイジキメラのラリホー、俺は手近な兵士を蹴りつけて起す。そこに登ってきたキラーリカントに斬りつける。

「すみません。助かりました。」

「礼は後でいい。敵の侵入を許すな！」

周りを見渡す。何匹かキラーリカントが城壁に登っている。近くの魔物に斬りかかる、足元の兵士が血を流してのた打ち回っている。数合でキラーリカントを倒す。兵士は・・・近くにいた爺さんが脚を引っ張って盾の影に移している。俺が駆け寄ってホイミを使おうとする。

「ええ、ええ、わしがやるから、兄ちゃんは戦を見るんだ。」

「すまない。」

言われた通り戦況を見る。登ってきた魔物はアレフやガイラに倒されている。何箇所かで松明のようにキラーリカントの死骸が燃えている。少し攻撃の手が緩んできている。第一波はここまでだろうか？

「があああああぁぁぁーー！」

ドラゴンの吼え声が響く。その声に次の攻撃の波が襲ってくる。飛んでくる火の球、魔道士によるギラでの攻撃、皆が盾の後ろに隠れる。空いた場所からキラーリカントが登ってくる。城壁の上で白兵戦が始まる。

「非戦闘員は城壁から降りて！無理はするな！」

声を限りに叫ぶ。かけられていた梯子を降りる者はいない。子供が柄杓で油をかける。女たちが薪を投げつける。ひるんだ魔物に槍が突き刺さる。負傷した兵士たちが復活してきた。俺が、ガイラが、アレフが城壁を走る。俺が斬りつけ、ガイラが突き落とし、アレフが燃やす。白兵戦をしているところには魔法は飛んでこない。立ち上がった兵士たちも奮戦する。また攻撃の手が緩んだ。

魔物が引いていく。敵は１００ｍほど距離を置いて陣を張る。ドラゴンを中心にキラーリカントが集まる。空にはキメラの大群。さっきより魔物が増えている。盾に隠れて息を整える。ドラゴンが来たらどうする？眠らせる・・・駄目だ。敵も一匹じゃない。

「アレフ！ガイラ！ドラゴンが来たら降りるぞ！」

「おうっ！承知。」

「了解です。」

「があああああぁぁぁーー！」

ドラゴンの咆哮、予想通りにドラゴンを先頭にキラーリカントでの魚鱗、城門に突撃してくる。

「お前達は降りるな。弓が苦手な者も弓で援護してくれ。弓隊はいままでどおり対空攻撃いいな！」

俺が飛び降りる。ガイラが、アレフが続く。ドラゴンは目の前、キラーリカント達が迫る。

メルキド攻防戦？

ドラゴンがものすごい勢いで迫る。城門にぶつかったら開門してしまうだろうか？とはいえ突進を止める方法はない。ならば・・・。

（俺はＭＰを３消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、纏わりつく影となりて、敵を縛れ。ボミオス！）

ドラゴンの突進が鈍るのを確認、さらに

（俺はＭＰを３消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、内なる光となりて、我等と駆けよ。ピオリム！）

さらにもう一つだ。

（俺はＭＰを８消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、鋭き刃となりて、わが武器に宿れ。バイキルト！）

感覚が鋭くなる。ガイラとアレフが驚いた顔で俺を見つめる。

「学者っ、お前何をした！？」
「なんですっ？この感覚！！」

「話は後で聞く、ドラゴンを一気にやるぞ。」

このドラゴンは先日のドラゴンと較べると一回り小さい。首に攻撃が届きそうだ。動きが鈍ったドラゴンの懐に飛び込み、首を左から斬り裂く。まだ浅い、すぐに横に飛びのく。ほとんど同じ場所を

アレフの炎の剣が右から切り裂く。喉が切り裂かれて血が噴出す。アレフが飛び去った後に、ガイラの拳が突き刺さる。嫌な音がしてドラゴンの首がありえない方向に折れる。倒れたドラゴンが正門を塞ぐ、これでもう正門は開くことはない。

城壁の上から大歓声、俺達の周りから怒声が響く。キラーリカント達が俺達を襲う。だがアレフにもガイラにもその動きは遅く見えるはずだ。キラーリカントの爪がアレフを襲う、アレフが飛び去った後にはキラーリカントの腕が落ちている。ガイラがそのキラーリカントの頭を砕く、倒れたキラーリカントの脚をつかんで他の魔物に投げつける。投げつけられたキラーキカントが仰向けに倒れる。その首を俺が斬り飛ばす。

鬼人のごとき働きに魔物たちがありえない恐怖に慄く、立ちすくみ、後退る。俺達に一切の容赦はない。俺の刀が、アレフの炎の剣が、ガイラのミスリルナックルがキラーリカント達を駆逐する。鋭敏になっていた感覚が元に戻るころ、俺達以外に立っている者はいない。

城壁の上から縄梯子が下ろされる。あわてて登る。城壁の上で大の字になる。胸が激しく上下する、息を整え声を絞り出す。

「敵はどうした？」

「２００ｍほど離れた所で集結しています。動きはありません。」

アレフとガイラが俺を見下ろす。二人の息も荒い。

「後はドラゴンが二匹と本命の大魔道だ。悪魔の鎧と鎧の騎士が大魔道を護衛している。その後ろに骨の軍勢だ。」

「キメラたちを率いているのはこの間のスターキメラですね。なんとなく覚えがあります。」

「魔物のオールスターズだな。まだ民兵は来ないのか?」

「ああ、まだだ。油も矢ももう少ない。」

息が整ってきた。上半身を起して差し出された水を飲む。

「まだまだいっぱいいるな。あと何回耐えられるかな?」

「今のままだと後一回だ。兵士も物資も限界が近い。」

立ち上がって魔物の軍勢を眺める。

「鎧の魔物は城壁を登ることはできない。骨なら・・・できるだろうな。しかし矢が足りない、キメラたちの攻撃に対応できるのは後一回だな。よし誰か区長の屋敷に走ってくれ。もう限界だ、次追い払ったら撤退を考えるぞと伝えてくれ。」

「私が行きます。なにか伝令の証を下さい。」

水を差し出した若い女がそう言う。王家の紋章の入ったナイフを渡す。女が駆け出した。

「よおーし、援軍の催促はしたぞ。さあ次はどうくる?」

鎧の軍団が前衛、骨の軍団が後衛となり前進してくる。

「あいつら、何をする気だ?学者わかるか?」

「いや皆目、検討がつかん。あの布陣ではこの城壁は破れんぞ。」

次の瞬間、無数の矢が降ってきた。慌てて盾の後ろに隠れる。何人かの兵士が矢で倒れる。

「なるほど、骨の連中は弓が撃てたか。なかなかやってくれるじゃないの。今までの被害を報告してくれ。」

「死亡１０、重傷１５、軽傷２０です。」

「ふむ、治してやろうにもこの矢の中移動するのは大変だな。んっ?」

撃ってきた矢を数本集める、やはりそうか。こっちが放った矢が混じっている。あの大魔道め、けっこうな策士だな。もうこっちの矢が少ないことを見越しての攻撃か。

「アレフ、重傷の兵にベホイミを頼む。お前の装備なら行けるだろう。俺もこっち側の兵を治す。」

「でもその軽装でいけますか?」

「ガイラと盾ごと動くから大丈夫さ。さあ行け!」

アレフが盾を構えて重傷者のいる所へ走る。時々矢が当たっているが魔法の鎧と水鏡の盾に弾かれている。

「というわけだ、ガイラ動くぞ。」

「おう！力仕事なら任せろ。」

ガイラとそばにいた兵士と俺で木の大盾を少しずつ動かす。矢が集中して飛んでくる。何か焦げ臭い。

「学者、火矢だ。」

「ああ、気休めの水では持たなさそうだな。しかしまああれこれよく考える、ご苦労なことだ。」

「暢気なこと言ってんじゃねえ、どうする？」

「仕方ない、俺は走る。お前らは城壁にうまく隠れろ。」

（俺はＭＰを3消費する、ＭＰはマナと混ざりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、不可視の盾となりて、俺を守れ、スカラ）

スカラを頼りに走り出す。後ろでガイラがなにか言っているが無視だ。

俺は走って重傷者のいる場所に行く。たまに矢が当たるが手前で弾かれる。寝ている兵士を城壁の矢避けまで引っ張りベホイミをかける、それを繰り返す。それでも2名の命は助けることはできなかった。アレフの方はどうだろうか？ここからは見ることはできない。

しばらくして矢の雨が止んだ時、木の盾は全て燃えつきた。油の鍋も火矢によって燃えてもう使い物にならない。次はキメラと骨たちの攻撃だろうな。判っていても止める方法はすでにない。逃げようにも一緒に隠れている民間人を見捨てて逃げるのは、俺はともか

くガイラやアレフにはできまい。

メルキド攻防戦？

矢の雨が止んだ戦場に硬い物を叩く音が響く。正門の方向からだ。上から覗きこむと鎧の騎士が手にしたハンマーで鉄の扉を叩いている。さっきドラゴンで塞いだはず・・・なんたることだ、ドラゴンの死骸が少し動いている。現に今も鎧の騎士によって引っ張られて動いている。このままでは正門が破られる。

「アレフ、ガイラ、見えるか！？」

できる限りの大声で呼びかける。正門の真上まで走る。ガイラとアレフはキメラに邪魔をされて近づくことができないでいる。くそっ！援軍はまだか！もう打つ手がない。

遠くから視線を感じる。大魔道がこちらを見ている・・・金色のローブ、見えない顔が笑っているような気がした。勝ち誇っているのか、怒りがこみ上げる。ふざけんじゃねえ、俺が片手で戦ってやっているようなものなのに勝ったつもりだと・・・。

「くっくくくっあっははは！ならば勝ち誇ったまま死ね！」

（俺はＭＰを３０消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、神の怒りとなりて・・・「ケルテンさん！ケルテンさん！」

誰だ？俺の邪魔をするのは！俺の肩を揺さぶる者がいる。我に返る、アレフか。アレフが後ろを指差す。そこには多くの人々、それも武装したもの達。たくさんの矢が飛来する。次々とキメラたちが

撃墜される。

「援軍です。援軍が来ましたよ。」

アレフが座り込む。俺も力が抜けて座り込む。今初めて気づいたが雨が降っている。朝日が昇るのは見ていたが、その後は天候の変化に気づいていなかったようだ。

「これでなんとかなるか？」

駆け寄ってきたガイラに聞かれる。

「まだだな。まだやつらにはドラゴンがいる。あれに暴れられたら民兵では敵わん。それに下の鎧の騎士を止めないと門が破られる。」

「なら俺が下の奴等を止める。」

「無茶だ。敵の数を見ろ！お前一人でどうなる？」

ガイラが俺を見て意地の悪い笑みを浮かべる。

「そうだな、俺一人の力じゃ無理だ。だからさっきのをくれ。あれはやばいな、癖になりそうだ。」

「・・・馬鹿が。わかった、やってやる。だが１０分だ、それだけしかもたんぞ。」

ガイラに手を当て、無言で魔法をかける。

（俺はＭＰを3消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、内なる光となりて、我等と駆けよ。ピオリム！）

（俺はＭＰを８消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、
おお万能たる力よ、鋭き刃となりて、この武器に宿れ。バイキルト！）

（俺はＭＰを３消費する、ＭＰはマナと混ざりて万能たる力となれ、
おお万能たる力よ、不可視の盾となりて、彼を守れ、スカラ）

「よし、行ってこい！さっきより強烈だぞ、楽しんで来い！」

「よっしゃっ、まかせろっ！」

ガイラが勢いよく城壁から飛び降りる。門に取り付いた鎧の騎士を一撃で粉砕する。ガイラの勢いは止まらない。手当たり次第殴りつける、その姿はまるで狂戦士のよう。

城壁の上に援軍が登ってくる、外側から登ってこようとするがいこつ達を槍で追い落とす。まだ飛んでいるキメラ達に向かって矢を放つ。勝ちは見えた、あとは仕上げだ。アレフに小声で伝える。

「アレフ、俺が合図をしたら正門の上に立って、こう言ってくれ。＊＊＊は＊＊＊＊＊＊。＊＊よ、＊＊に＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊え。だ！」

「はい！」

俺は集結した民兵を指揮すべく大声をだす。

「城壁の外には下りるな。」

「門の内側に兵を集めよ！」

「ガイコツどもを突き落とせ。鎧の魔物は相手にするな！」
「キメラを撃ち落せ。ピンク色のがボスだ！」

指揮をとっていたスターキメラに矢が集中する。避けきれずに墜落する。地面でのたうちわまるスターキメラに次々と矢が突き刺さる。ピンク色の塊がその動きを止めた。キメラとメイジキメラの統率が乱れる。

「次は魔道士を撃て！」

離れた所でギラやラリホーを放っていた魔道士に矢が撃たれる。雨のように矢が降り注ぐ。

大魔道を見下ろす。さっきとは逆の立場になった。人間の団結力を甘く見たのがお前の敗因だ。奴にむけて首を掻き切るジェスチャー。大魔道に怒りが感じられる。もっと怒れ、感情のままに突っ込んで来い。

大魔道がドラゴンに騎乗する。杖を振り上げ、前に突きだす。その合図にドラゴン二頭が前進する。後ろに悪魔の鎧一個中隊ほどがつき従う。

そうだ、もうお前には逃げ帰る場所はない。玉砕を覚悟に特攻するしかない。アレフに視線を送る。アレフが城門の上に立ち、手にした炎の剣を天に突き上げる。

（俺はＭＰを３０消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、
　おお万能たる力よ、神の怒りとなりて、天より降れ！）

俺は膨大な魔法力を放出しマナと融合させる。あまりに大きい力を両手で支える。これから起こす現象をイメージし詠唱する。アレフの声が戦場に響く。

「私の名は勇者アレフ。神よ、天に仇なす者どもに天罰を与えたまえ！」

アレフの剣が振り下ろされ、敵を指し示す。俺の詠唱が終わる。

（ギガデイン！）

天より稲妻が落ち、轟音が鳴り響き地面が揺れる。眩しい光に皆が目を瞑り、轟音に耳を塞ぐ。戦場が静まり返る。

誰とも無く目を開く。そこには神々しいばかりに立つ勇者アレフの姿。雷に撃たれたドラゴンら魔物が絶命している。城壁にとりついたがいこつが、ガイラに纏わりつく鎧の騎士が一瞬の間の後、崩れ落ちる。まだ残っていたキメラたちが散開する。

アレフと目があう。俺が拳を突き上げるとアレフが芝居がかった声で宣言した。

「今、城塞都市メルキドは守られた！」

アレフの炎の剣が天に突き上げられる。歓声が上がる、勇者アレフの名が連呼されている。それを見届け俺の意識がとぎれた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

誰かが何かを言っている。

（あの魔法はなんだ、お前は何を隠している。）
（あの魔法はなんだ、お前は何を隠している。）
（あの魔法はなんだ、お前は何を隠している。）

（最初からそうすればよかったではないか。）
（なぜ力を見せない。）
（お前は皆を偽っている。）

俺を詰問する声が聞こえる。五月蠅い、止めてくれ。頭がガンガンする。割れるようだ。

誰かが俺の名を呼んでいる。誰だ、今は静かに眠らせてくれ。

はっ！誰かが俺の肩を揺さぶっている。

「ケルテンさん、ケルテンさん！大丈夫ですか？」

アレフの顔が目の前にある。両肩に手が置かれている。

「どうしたのですか、うなされていましたよ。」

あれっ！俺は戦の指揮をとっていたはず。

「アレフッ！戦はどうなった？」

「何を言ってるのですか。我々が勝ちました。ケルテンさんが勝鬨を上げろと言ったじゃないですか。」

ああそうだった。ギガデインをアレフを隠れ蓑にして使った。なるほど俺はそれが後ろめたいからあんな夢を見たのか。だがもうこれでアレフは勇者としての伝説を残した。

「・・・・・そうだった、神の雷を背にしたお前が神々しく見えたような気がした。」

「もう止めてください、みんな同じことを言うので困ってます。」

「諦めろ、勇者として名乗り上げたのはもう二ヶ月も前のことで、力量と功績が認められたのが今だということだ。お前の務めを果たせ。」

「務めですか？」

「ああそうだ。王女ローラ様を助け、竜王を倒す。民衆の希望になるのも勇者の務めだ。」

「希望ですか・・・。」

「難しく考えるな。どうせ引き返せるものでもない。・・・すまないがもうしばらく眠らせてくれ。勝ったのなら眠っていても誰も文句は言わないだろう。」

俺は目を瞑る。アレフが静かに部屋を出て行く音が聞こえる。俺は心地よい眠気に身を任せた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「どうだった？」

「すごくうなされていましたので、無理矢理起こしました。そうしたら戦はどうなったと聞かれました。」

「そうか、夢の中まで戦をしていたのか。」

ガイラとアレフがため息をつく。

「そうみたいです。それで僕に勇者として勤めを果たせと仰いました。民の希望になれと。」

「そうだな。ロトの伝説ほどではないが、お前も伝説を残した。すでに神の申し子の二つ名ができた。」

「あれは僕の力じゃないですよ。戦に勝ったのも皆の力のおかげじゃないですか。僕だけいいところをもっていくなんて申し訳ないです。」

アレフが両手をふって否定をする。

「がっはっはっは！俺も学者もそんな柄じゃないな。学者が指揮して、俺が奮戦して、お前が鼓舞する。それでいいじゃないか、それがやつの言う勤めというやつだ。諦めろ。」

「そんなものですかね。なんか釈然としないなあ。」

「それだけ期待されているんだ。まあそんな話はいいさ。俺はこれから飲んでくる、誘いがいっぱいで断れねえや！」

それだけ言い残してガイラが出て行く。一人残されたアレフが佇む。

「期待・・・ですか？」

返事をする者はいない。

逃亡者

時は7月25日早朝に遡る。ケルテンが戦を開始した頃、ラダトームにて異変が起きた。メルキドから脱出してきた者達が、城下街の入り口に溢れたのである。その数およそ百名、裕福そうな服装にじゃらじゃらと宝石類を身につけた者が多い。いきなりの来訪に衛兵が制止している。その中でも一番偉そうな男が衛兵にがなりたてる。

「おい、私はメルキド自治区駐在弁務官のブルーメ男爵だ。至急大臣に報告せねばならぬことがある。城まで護衛をせよ！」

「しっ失礼しました。しばしお待ちを！」

衛兵の一人がすぐ横の控えの小屋に入ると、隊長に問いかける。

「あの～、メルキドの弁務官とやらが城まで案内しろと言ってますがどうします？」

「あっ？名前を聞いたか？」

「ブルなんとか男爵とか言っていました。」

「まったくいきなり大勢で来やがって、こっちの身にでもなれよ。お前とりあえず城まで走れ。文官の誰かに報告してこい。必要ならなんらかの命令が下るだろう。」

報告してきた兵士に投げやりに命令をすると、隊長が小屋からでる。頭を掻きながらざわざわしている集団に話しかける。

「それでは皆さん、まだ朝も早いですし騒ぎになると困りますので、こちらに並んで頂けますか？」

「おい、こんなやつらと一緒に扱うとは無礼であろう。先の兵士はどうした？城に案内せよと言うたであろう！」

「只今城の役人に照会しております、それまではお待ち頂きたい。私も職務ゆえお許し頂きたい。」

その言葉に隠された殺気にブルーメ男爵が退く。

「そっそうか！職務ならしかたないな。待つとしようか、しかしここではなんだ、そこの小屋にでも入れてはもらえぬか？」

「わかりました。手狭な所ですがここでよければどうぞお入り下さい。」

兵士が男爵を案内して小屋に入れる。小屋の外では隊長、兵士による聞き取りが行なわれる。話を聞いた者の顔色が変わる。ドムドーラ陥落の再来、最悪の予感がする。早く城に伝えねばいけない。隊長はさきの命令を後悔した。もう伝令はだした、帰ってくるのを待つしかない。長く感じる１０分の後、先ほどの兵士が馬車と近衛騎士一個中隊を連れて戻ってきた。そこから近衛騎士隊長が現れる。

「近衛騎士隊長のアイゼンマウアーだ。メルキド駐在弁務官殿はいずこか？」

この街に住む者で知らぬものはいないと言われる近衛騎士隊長の登場に、兵士達が敬礼をする。

「こっ、こちらです。汚い所で申し訳ありませんがこちらでお待ちいただいています。」

「そんなに緊張しなくてもよい。そなたの判断は間違っていない。」

一言声をかけると小屋に入る。男爵の顔を見るとはっとしたように脚が止まる。

「これはブルーメ男爵、近衛騎士団長を務めるアイゼンマウアーです。以前お会いしておりますな。」

「隊長だと？前は副隊長であったな。ずいぶん偉くなったものだな。」

「これはご挨拶ですな。しかしなぜ弁務官殿がここにいらっしゃるのですか？いえここでは失礼ですな。城まで護衛致します。」

アイゼンマウアーは振り向くと近衛騎士に命令する。何人かがブルーメ男爵を囲み城へと連れ去る。

「さて皆さんにも城に来ていただきましょう。余計な事を城下に触れ回ってもらうわけにはいきません。近衛騎士の誘導に従って頂きたい。」

その言葉は威厳に満ち、聞く者に畏怖を抱かせるに十分であった。そこにいた者達は文句も言えずに城へと連行された。

――――――――――――――――――――――――――――――――

謁見の大広間にラルス１６世が玉座に座り、国務大臣と近衛騎士隊長が左右に並ぶ。近衛騎士と文官が並ぶ。特務隊士のシュミットもいる。中央にブルーメ男爵が控える。国務大臣が非常に不機嫌な声を出す。

「メルキド自治区駐在弁務官がなぜここにいるか、説明せよ。」

「メルキドに魔物の襲撃がありました。重大な異変でございますので至急ご報告に上がりました次第でございます。」

油汗を流しながら弁明するブルーメ。それを聞いた大臣の顔がさらに険しくなる。

「魔物の襲撃だと、それは何時のことだ?またメルキドはすでに落ちたのか?」

「今日の夜明け前にございます。城門が破られ魔物がなだれ込んできました。早急に報告に致す為にルーラにて帰還致しました。」

メルキドの陥落の報に謁見室がどよめく。

「静粛にせよ、御前である。ブルーメ男爵よ、その報間違いないな。魔物の数は?種類は?迎撃に当たった者はどうした?」

「魔物の数は５００以上、ドラゴンが数頭いると聞きました。それと特務隊士のケルテンなる者が迎撃の任につきました。」

「ふむ、なるほどのう。」

それだけ言うとシュミットを一瞥する。シュミットがラルス16世に一礼をし踵を返すと大臣の執務室へ向かう。謁見の間にしばらく静寂が包む。シュミットが戻り大臣に耳打ちする。

「近衛騎士隊長、この者を拘束せよ！」

その言葉に近衛騎士隊長が手を挙げる。並んでいた近衛騎士2名がブルーメ男爵に駆け寄り跪かせ、後ろ手に取る。

「国務大臣、これはどういうことですか？私が何をしたというのです？」

「馬鹿者がっ！まだメルキドは陥落しておらぬ。そなた恐ろしくなって逃げてきたな。」

「なぜそのようなことが判ります？私は見てきたのです。」

「まだ嘘をつくか、お前が言うた特務隊士ケルテンがおるなら、私はそこにいるかの様に見ることができる。それによると現在奮戦しておるそうじゃ。」

「そんな馬鹿な。その様なことできるはずがありません。」

ブルーメ男爵が口から泡を飛ばす。

「まだ言うか、そなたと共に城に来た者からも話は聞いておる。あの者等はメルキドが攻撃を受ける前に逃げ出したそうだ。緊急の民兵の強制召集から逃げたとも聞いておる。近衛騎士隊長、間違いないな。」

近衛騎士隊長が一歩前にでて告げる。

「全ての者から話を伺っています。互いに口裏を合わせられない状態での証言です。間違いはありません。」

「だ、そうだ。もう言い逃れはできぬ。そなたの処分はメルキドの戦が終わってから決めるとしよう。それまでは牢屋にでも入れておけ。」

ブルーメ男爵が項垂れる。もう逃れられぬと悟ったようだ。そのまま近衛騎士によって引きずり出された。

「国務大臣よ、それでメルキドはどうなったか？」

ラルス１６世が初めて口を開く。国務大臣がシュミットに発言させる。

「はい、私の同僚、特務隊士ケルテンと勇者２名、数十人の兵士と共に奮戦中にございます。」

「そうか、それで勝機はあるのか？」

「難しいかと思われます。なにしろ敵の数が膨大ですのでいずれ力尽きるかと。」

あまりに冷静で冷酷な判断に場の空気が凍りつく。

「では希望はないのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

シュミットが黙り込む。

「シュミットよ、何か希望はないのか？」

「先ほど大臣の仰られた民兵の強制召集さえできれば希望があります。どれだけ早く召集できるかにかかっておりますが、それゆえに難しいかと存じます。」

「そうか、距離が距離ゆえ援軍を送るわけには行かぬのう。では彼の者達の武運を祈ろうではないか。」

「はい、では更なる情報を集めましょう。」

「近衛騎士も緊急に備えよ、メルキドが陥落したら次はリムルダールかこの城か、どこが狙われてもおかしくない。皆の物、大儀であった。」

国王が玉座から下がる。その場の者があわただしく己の職場に戻る。

――――――――――――――――――――

国務大臣とシュミットが水晶球を見つめる。そこに映るのはケルテンの視線。魔物からの矢の雨、倒れる兵士、城壁にせまる魔物たち。

「やはり陥落は免れぬか。メルキドは惜しいがこの者達だけでも戻っては来ぬか？」

「無理です。技術的にはできますが、その意志が感じられません。」

シュミットが冷静に返す。水晶に映る戦況が変わった。

「後ろから矢が飛んできていますね。援軍でしょうか？」

「そのようだな。城壁に兵士が来ておるな。これでなんとかなるか？」

シュミットが黙る。水晶に移る景色から情報を得る。

「まだです。ケルテンの視線が物語っています。ドラゴンとそれを率いるあの大魔道を何とかせねばいけません。それに城門が破られてもいけません。」

映像にはガイラが城門前に降りる姿が映る。

「この勇者は何と言ったかの？」

「勇者ガイラです。なかなかの手錬です。白兵戦のみとは言えこれ以上の手錬は見たことがありません。」

二人がその戦いを黙って見続ける。見ていることしかできない、その時間は無限に感じられた。しばらくして戦況が好転する。大臣がほっと息をつく。

「まだです。ドラゴンによる特攻です。最後にして最大の攻撃、これを止めることができねば勝ったとは言えません。」

大臣が黙って水晶球を見つめる。勇者アレフが天に剣を向ける。次の瞬間、眩しい光が部屋を満たす。

「何が起きた。」

大臣が水晶球に詰め寄る。手が滑って水晶球が机から落ちて割れた。

「しまった！戦況はどうなった？シュミット見えたか。」

「いえ見えませんでした。確認する術もなくなりました。しかしまだ勇者の光点は存在しております。」

二人とも魔法の地図の光点を眺める。その光は１０分経っても、２０分経っても変わらず存在している。

「どうやら生きてはおるようじゃな。」

「そのようです。では帰ってくるのを待ちましょう。」

シュミットが一礼して退室する。さっきみた光は雷、天からの雷か！もしやあれは伝説の魔法・・・いやあの時勇者アレフは天を指していただけで、そんなことはありえぬ。判らないことばかりだ、早く戻って来い。聞きたいことは山ほどある。シュミットが浮かない顔で廊下を歩く。すれ違う者達も浮かない顔をしている。

戦の後

7／26　勇者支援生活87日目

朝がくれば目が覚める。これは幸せなことだ。いつものように鍛錬をおこなう、隣にはいつも通りアレフがいる。その顔は何かを言いたそうだ。

「何か聞きたいことでもあるのか？顔にそう書いてあるぞ。」

「ええ、昨日のことですが・・・」

アレフがとても言いにくそうにしている。俺が手で促す。

「昨日、いくつか知らない魔法を使いましたよね？」

「ああ、使った。俺が発掘してきたロストマジックだ。」

答えてもらいたいことが足りないのか、まだ不満そうである。

「わかったよ。まず効果を感じただろうが味方の敏捷性を高めるピオリム、ガイラに使った不可視の盾スカラ、武器を強化するバイキルトだ。こんなところか？」

「それであの時、自分の感覚が鋭くなったような気がしたのですね。あと最後の・・・」

アレフの言が止まり、視線が俺の後ろにずれる。俺が振り向くとガイラが壁に手をあて、脚を引きずりって歩いている。さながらゾ

ンビのようだ。

「ガイラ、どうしたんですか？」

「ああ、全身筋肉痛みたいだ。ここ数年これほどの筋肉痛に襲われたことはねえな。」

「ああ、あの状態で酷使しすぎたせいだな。アレフ、ベホイミをかけてやれ。それで軽快する。」

「はい・・・・・・・・・・ベホイミ！」

ガイラの体が薄っすらと光り輝く。今ガイラの体では新陳代謝が促進されて、千切れた筋肉組織を修復しているはずだ。ガイラが凝り固まった体をほぐす様に、柔軟体操を始める。

「いや～、起きたときは何がおきたか理解できなかったぞ。体が動かなかったからな。いや助かった、礼を言う。」

「そうか、それはよかった。それでアレフ、なんだったけ？」

「・・・いえ、何でもないです。」

まだ何か聞きたそうであったが口をつぐんでしまった。いずれ説明しなくてはならないときはくるだろう。

「そうか。じゃあ区長に挨拶したら城に帰ろう。報告しなくてはいけないことがたくさんある。」

俺はその場を後にする。報告しなければいけないことか、どこま

で報告すべきだろうか？

――――――――――――――――――――

三人共に区長の屋敷の応接室に来たがこの屋敷の主はまだいない。城への帰還の挨拶に来たとは伝えてある。ボーメル区長が応接室に入ってきた。顔色は浮かない。

「お待たせしました、遅れて申し訳ありません。お城に帰ると伺っていますが、しばらくこちらに残る気はありませんか？」

アレフもガイラも怪訝そうな顔をする。

「なぜその様なことを言われるのですか、用心棒としてですか？それとも・・・」

「いえ街の防衛のことは心配しておりません。此度のことで街の団結力が高まりましたので我々だけでも守ることはできます。それにバリスタや投石器を急いで作らせています。」

「ではなぜ？」

「この街から逃げ出した者がたくさんいます。富裕層に属する者がキメラの翼でラダトームに逃げたと思われます。じつは弁務官の居場所がしれません、同じく城に逃げたと考えた方がいいでしょう。」

「今頃、ラダトーム城は大混乱でしょうね。落ち着くまでは帰らない方がいい、そう言われるのですね。」

「そう愚考いたしました。あなたがたの責任や職務の都合もあると思いますが、わざわざ嵐の中に飛び込む必要はないでしょうか？」

「忠告ありがとうございます。しかし私の仕事はその嵐を収めることにありますので、帰ることにします。あそこには待たせている人もいますから。」

ボーメル区長がフッと笑う。俺も照れ隠しに笑みを浮かべる。

「そうですか、では帰らなくてはいけませんね。屋敷の外までですがお見送りいたしましょう。」

俺達は屋敷を辞することにした。さっきの言通りに玄関まで見送りにでてくる。ふと思い出した様に口を開く。

「そういえば民兵の方に装備して頂く武器や鎧を無償で提供されました。なんでもその方が言われるにはもう代金は勇者アレフ殿から頂いているとのことです。なにか心当たりはありますか？」

俺達は顔を見合わせる。

「僕がこの炎の剣と水鏡の盾を譲って頂いた武器屋の方だと思います。その方はどうされましたか？」

「ええ、ことが終わってから代金をお支払いしようと使いの者を出しましたが、すでに店は引き払った後でした。隣の店の方に聞いたら旅にでると言っておられたそうです。もしお会いになられましたら私が御礼を言っていたと伝えて頂けますか？」

「必ず伝えます。行き先にも心当たりがありますから。」

「そうですか、ではまたお会いいたしましょう。城塞都市メルキドはこの街を助けて頂いた勇者等を忘れません。」

硬い握手を交わす。照れくさいので少し離れてからいきなりルーラを唱える。眼下で城塞都市メルキドが小さくなっていく。

「行ってしまわれましたね。」

「ああ、彼等が再びここを訪れる時には、彼等の奮戦に恥ずかしくないメルキドを見てもらおうではないか。これから忙しくなるな。」

区長と執事が屋敷に入る。その顔には希望が見えた。

――――――――――――――――――――――――――――――

ラダトームの入り口に降りる。久しぶりのラダトームだ、感慨に耽る暇もなく衛兵が飛んでくる。

「お待ちしておりました。帰還次第、出頭せよと大臣の仰せです。」

「だろうね。いいよ、すぐに出頭する。彼等は別に行かなくてもいいよね？」

後ろに立つアレフとガイラを指差す。

「いえ、一緒に出頭するように厳命されています。」

「はあ・・・すまないね、一緒に城に来てもらうことになったよ。」

「しょうがないさ、付き合うぜ。」
「謝罪なんていりませんよ。それも勇者の務めですから。」
二人がニヤリと笑う。黙って城に向かって歩く、その後ろに二人が付き従う。
「なあ、ガイラ！その格好のままでいいか？」
「なんでだ。いつも通りだろう？」
「いやガイラ、あちこち破れて酷い有様です。背中が爪で切り裂かれてますよ。」
後ろに回ったアレフが革鎧の傷を指差す。
「いいさ、ありのままを見てもらったほうがいい。俺達の奮戦を伝えるべきだ。」
「そうだな、ガイラ。旅の汚れだけ払ってくれればいいよ。」
「じゃあ、僕もなにか見てもらいますか？」
アレフの装備を見てみる。魔法の鎧と水鏡の盾に傷は一切ない。鎧下はすでに別の物を着ているから奮戦の跡は見えない。ガイラも眺めている。
「まあいいだろう。無理して大変だったと言うこともない。立派な装備をしている、それでいい。」

これから大変なことになる前とは思えない緊張感の無さ、あの戦の過酷さに較べればこんなものはなんてことはないことだ。俺達３人の認識はそんな物だった。

戦の後（後書き）

設定資料

ギガデインの魔法が勇者専用との指摘があります。
本文でも書きましたが同じ勇者専用のライデインを、誰でもベギラマとして使用できることから専用魔法ではなく、一子相伝の魔法だとしました。

勇者ロトと一緒に旅をした賢者が横で詠唱を聞いて覚え、書に記したと仮定しました。

アレフとシュミットの悩み

城の入り口にシュミットが待っている。俺を見つけるとものすごい勢いで走ってきた。

「おい、こっちに来い！」

俺の手を強引に引っ張って城にある密談室に連れて行く。もちろん二人もついてきている。その部屋の扉を閉めて机をはさんで着席を促す。その勢いに負けて黙って座る。

「この部屋は外へ音が漏れない様に魔法で処理がされている。それは知っているな？」

「ああ、もちろんだ。」

「ならばお前らにとって都合の悪いことは全て秘匿する。それを踏まえて質問するぞ。」

いつものちゃらい感じと違い真剣な顔だ。俺は頷く。

「お前らの戦いを水晶球でモニターしていた。お前等や民兵の奮戦はいい。だが最後のあれはなんだ？」

「あっ！それは僕も聞こうと思っていたんです。」

ギガデインか。アレフが聞くだろうことは予想していたが、まさかこいつまで見ていたとはな。

「ただの気象現象だ。ほんの少し細工はしたがな。」

「気象現象だと!?そんな都合よく雷が落ちるわけないだろう!!!」

シュミットが立ち上がって机を叩く。

「事実だ。アレフもガイラもあの時雨が降っていたのは覚えているな?」

「まあ、終わってから気づいたが、確かに降っていた。」

「僕もです。」

「それがどうしたと言うのだ。」

「最後にドラゴンが突撃する前に気づいたのだが、空には雷雲が広がっていた。いつ雷が落ちてきてもおかしくない状態だったので、アレフに一芝居をさせた。」

「あの天に剣を突き上げるやつか?」

「そうだ、声は聞こえなかったと思うが、“私の名は勇者アレフ。神よ、天に仇なす者どもに天罰を与えたまえ!”と言わせた。もしお前が敵ならどうする。」

シュミットが顎に手を当てて考える。

「そうだな、感情的にも戦術的にもそんな放言をするようなやつは潰す。」

「だよな、そこまで計算してやらせた。奴、大魔道もそう考えてその時にできる一番の攻撃をした。つまりベギラマだ。ベギラマで発生した電撃をガイドに雷がやつらに落ちた。そういう小細工だ。納得したか？」

もちろん嘘だが、今朝アレフに質問されかけた時に考えた言い訳を披露する。

「もし落ちて来なかったらどうする気だったのだ？絶対成功するとは限らないだろう。」

「策を弄して損はない、駄目なら奮戦するのみだ。どうせあの時には他にやりようはなかった。」

「お前すげえな。あの中でそこまで計算していたのか？俺は暴れるのに夢中で何一つ気づかなかった。」

「自分でもこんなことに何の意味があるのかと思ってやりました。」

「ということだ。納得しとけ。」

無理矢理話を締める。シュミットがなんとも神妙な顔をしながら座る。

「そうだな、大臣にもそう報告するがそれはかまわないか？」

「かまわない。もしかして大臣も見ていたのか？」

「ああ、ただあまりの光に目がくらんでよく判らなかったようだ。その後すぐに誤って水晶球を落としてわった、もうあれは使えない。

」

「そうか、残念だ。もしかして勇者以外は場所の確認ができなくなったのじゃないか？」

「そうだ、最後にみていたお前と勇者二人の光点以外は見れない。」

まじか、水晶で映像が見れなくなったのはいいが、俺の居場所が常に知れるのは困るな。

「まあ心配するな、もう勇者は公募しないからそんなに困ることはない。」

俺の心配ごとを勘違いしたらしいシュミットがそう話す。

「そうなのか、しかしもうメルキドでは勇者アレフの名が知れ渡っているぞ。神の申し子との異名がついた。」

「そりゃあそうだろう。神の怒りを落としたんだ・・・待てよお前・・もしかしてそこまで計算して・・・。」

「さあな、でこれからどうなるんだ？」

「人をくった奴だ。これから謁見だ、しかるべく応対しろよっ！」

シュミットが半分怒って出て行った。まあ納得半分といったところか。ついでだ、謁見の前に二人にも釘を刺しておかねばなるまい。

「アレフ、ガイラ。悪いがお前らに使った魔法は秘密にしてくれ。無差別に教える気はない。」

「お前がそう言うなら、俺は黙ってる。説明しろと言われてもできねえし。」

「でもあの魔法があったら魔物の軍団に対抗できる様になります。それでも秘密ですか？」

「そうだね、その手もある。でも使えるようになるのは人間だけじゃない。魔物も使う様になる可能性がある。」

「人間にしか教えなければいいのではないですか？」

「アレフ、お前は素直でいい奴だ。もし人間全員がそうなら伝授してやってもいい。」

「どういう意味ですか！」

ふざけて返事をしたと思ったのかアレフが強い口調で聞き返す。

「莫大な報酬を目当てに裏切る奴がいないとは言えない。」

「そんな馬鹿なことありません。人間が魔物に味方するなんて！」

「それがあったんだ。お前は寝ていて知らないが、影の騎士を操っていたのは人間だった。ガイラが証人だ。」

「そんなっ！」

「いや本当だ。俺も目を疑ったが事実だ。俺が殺った魔道士は間違いなく人間だった。」

アレフが黙り込んだ。

「もう一つ言うと、敵に捕まった者が拷問の末、教えてしまう可能性もある。」

「それを言うなら、ケルテンさんもそうならないとは限らないのではないですか？」

「もちろんそうだ。だから口述では詠唱しないし、使えることを秘匿し続けている。この前はやむを得なかったから使った。俺達の敗北はメルキド５万人の死になるからな。それとお前なら秘密にしてくれると確信している。ガイラとは短くない付き合いだが、俺の秘匿している魔法については完全にスルーだ。」

ガイラが照れくさそうに笑っている。

「そんなの卑怯ですよ。そんなこと言われたら誰にも話せないじゃないですか！」

「ああ卑怯だな、それも計算尽くだ。」

「ではもう一つだけ、もし誰かに使えることが知れて、拷問を受けることにでもなったらどうするのですか？」

「秘匿したまま死ぬ。相手を道連れに死ぬ魔法もある。使いたくはないけどね。」

「そこまでの覚悟ですか、わかりました。なら僕も何も言いません。ケルテンさんを死なせるわけにはいきませんから。」

「すまんな、しかしこれから大変だぞ。王様に謁見だとさ、何を話せばいいのかね？」

「知らんな、お前が説明してくれ。武闘家は拳でしか語る術を持たない。」

「あっずるいな！都合のいい時だけそれか！そういえばドラゴンが何と言ってたか聞いてなかったな。」

「貴様とか、この虫けらがとか、死ねとか聞こえたぞ。」

「フフフッ！もういちいち面白いですね、お二人は。もういいです、悩んでいた僕が馬鹿みたいだ。全部おまかせしますよ。」

その言に俺とガイラが笑う。つられてアレフも笑い出す、密談室に笑い声が響く。その笑い声は外には一切届かない。

謁見の大広間にいる。王様を中心に右に大臣、シュミット、文官3名と並び、左に近衛騎士隊長、近衛騎士が4名並んでいる。へえー、こっちからまともに見ると結構威圧感あるな。この前ガイラの蘇生の時には気づかなかった。俺の右にアレフ、左にガイラが控えているが、緊張しているようだ。

「特務隊士ケルテン、勇者アレフ、勇者ガイラ、城砦都市メルキドより戻りました。」

名乗り上げ、帰還を報告する。余計なことは言わない。当然大臣が何かを言ってくるだろう。

「ご苦労であった。メルキドより逃亡してきた者より、メルキドが数百の魔物に襲撃を受けたと聞いておる。どうなったか報告いたせ。」

質問の内容をあえて特定しないか、ならばこちらも詳細を語ることはない。

「魔物の襲撃は初めは百数十ほど、最終的には５００以上、我が勇者2名とメルキドの兵士と民兵の奮戦により、約3時間の戦闘の結果撃退することに成功しました。」

おおっー！その場にいる者から声が上がる。大臣が場を見渡すとその声が静まる。

「聞いた話によると、そなたら3名と兵士数十名で防衛を始めたと

聞くが、誠か？」

「正確には違います。さらに十数名の民間の者の助力がありました。」

「では圧倒的に不利な状況ではないか。空を飛ぶ魔物もいたと聞く。いかにして防衛できたか？」

「矢を射、熱した油をかけ、槍で突き落とす。いたって常識的な方法にて防衛致しました。仔細は後で近衛騎士隊長に書面にて提出します故、この場での説明はご容赦下さい。」

全てをここで語る必要はないと言外に言ってみる。

「そうか、ではここからが本題であるが、最後に天より雷を招来させたと聞く。それははるか昔にロトの勇者が行使した雷の魔法に他ならぬ。その秘術を公表せよ。」

「残念ながら違います。あれは気象現象を利用した策に過ぎません。もしかすると勇者アレフの声に天が応えた結果かもしれません。」

ざわざわ、ざわざわ。立ち並ぶ者たちがざわめく。俺を見つめるラルス１６世だけが冷静に俺を見つめている。

「国務大臣、そこまでよかろう。その者達はメルキドを守った労ある者で罪人ではない。そう詰問するものではないな。だが余も聞きたいことがある、質問に答えてくれるか？」

威厳はあるが慈愛に満ちた声が響く。

「はっ！答えられることであれば。」

「そうか、では勇者アレフよ。そなたの天への呼びかけを見たいものだ。今ここでやってくれるか？」

「ここでですか？抜剣をしましたがよろしいでしょうか？」

本来ここで武器を抜こうものなら、即取り押さえられるか斬り捨てられる。許可は得ておかないといけない。

「かまわぬ。余から頼んでおる。勇者アレフよ、余の頼み聞いてはもらえぬか。」

アレフが俺をちらりと見る。軽く頷いて促す。

「では、失礼します。」

アレフが炎の剣を抜く。天を剣で指し示し

「私の名は勇者アレフ。神よ、天に仇なす者どもに天罰を与えたまえ！」

そしてアレフの剣がそこにはいない敵を指し示す。場が静まる、誰も何も言わない。いや圧倒されて何も言えない。アレフが剣を納めて恥ずかしそうに下がる。

パチパチパチッ！アレフ１６世の拍手が鳴り響く。

「すばらしい、歌劇の名シーンのようだ。その場で見たかったものよ。のう、皆の者よ。」

「はっ！御意にございます。」

ラルス１６世の無邪気ともいえる賞賛に毒気を抜かれた大臣が答える。

「その通りでございます、陛下。武人としてこれほどの高揚を感じたことはありません。」

近衛騎士隊長が賞賛する。そりゃそうだ、前線に立つ指揮官が、兵士を鼓舞する為に使う台詞をわざわざ選んだんだ。

「そうであるな。近衛騎士隊長よ、竜王が現れてここまで明るい話はなかったが、ここに来てなんとも痛快な話が聞けてよかった。国民にも触れ回るがよい、勇者アレフと勇者ガイラの活躍を！」

「御意、仰せのままに。」

「特務隊士ケルテンよ、ご苦労であったな。そなたの活躍は公表するわけには行かぬが、余の心に留めるとしよう。それでよいか？」

「ありがたき幸せ。」

なんとも言えぬ怖さがある。これは戯れ、それとも・・・。

「では3名とも大儀であった。そなたらには休息が必要であろう。下がってよいぞ。」

俺達は最後に礼をして、大広間から下がる。なんとも言えない汗が流れている。

――――――――――――――――――――

俺達が城の中を歩く。俺達を見る目が変わったのがわかる。まあ相変わらず近寄ってくる者がいないのはかわらないが、陰口を叩かれるよりはずっとましだ。遠巻きで英雄を見る目をしている。

図書館の扉を開ける。目の前にマギーがいる。

「マギー帰ったよ。」

マギーの目が俺を見つめる。上から下まで眺めている。

「なんかついてるか？いつも通りだけど。」

「いつも通りじゃないわよ！あっちこっちずたずたじゃない、何してたのよ！」

自分で見てみるとガイラの装備と同じく、あっちこっちに傷がついている。

「そうみたいだね。いやメルキドを守ってきただけだ。」

「馬鹿っ！そんなのわかってるわよ！そんなことより自分を大事になさいよ！」

マギーが胸に飛び込んでくる。ああまた泣かしてしまったな。

「ゴメン、心配かけたね。」

マギーが胸の中で泣きじゃくっている。もう抱きしめる以外にできることはない。

「学者、すまん。行く所ができたから俺は行くぞ。明日でいいから俺の鎧も治してくれ。」

ガイラが出て行った。

「僕も行きます。お疲れ様でした。」

アレフも出て行った。雰囲気を悟って二人とも気を利かせてくれたようだ。

――――――――――――――――――――――――――――――

１０分ぐらい経っただろうか。マギーが顔を起して袖で涙を拭く。

「あーっと、何か拭くものを渡すべきだけど、汚れた物しかないや。」

「いいわ、大変だったんでしょ。でも私、あなたに謝らなければならないことがあるの。」

「何、別に謝られる様な覚えはないけど。」

「ニフラムの魔法を公表したの。」

「そうか、公表しちゃったか。なにがあったの？」

「説明するわ、座りましょう。」

マギーが俺から離れて椅子に座る。俺も机を挟んで座る。

「あなた達がここを出てすぐに、街で無差別連続殺人事件が起きたわ。」

「それは酷い、犯人は？」

「胸に不名誉の証をつけた漆黒の近衛騎士。」

「最悪だな。取り込まれたのか・・・それでニフラム・・。」

「いえ、まだ続きがあるの。一度は例の従者をしていた騎士に討ち取られた。兜を打ち落として顔を確認して、さらに会話をしたそうよ。」

「んっ？俺が海底トンネルで会ったものに近いな。」

「そうなんだ。でもそこで首を落とし、首と鎧を晒して全ては終わったはずだった。」

「だったと言う事は、終わらなかったんだ。」

「そう今度は、鎧だけで動き出したわ。」

「なるほど、本当の悪魔の騎士になってしまったのか。そこまで行くと執念というか怨念を感じるな。」

「それで、シュミットとサイモンが解決するべく私に相談が来たの。それで悩んだ結果、ニフラムを使うことにしたわ。」

「ふーん、まあ間違っていないね。そこまでの怨念になると魂を救わないといけないだろうね。君の判断も間違っていない。謝る必要はないよ。」

「いえまだ続きがあるの。陛下に私が発掘、解読したと報告したわ。本当はあなたの手柄なのに。」

なるほど俺でなくか・・・手柄が欲しかった?そんなわけないな。そうか俺の盾となったのか。

「でも陛下は全てを理解しているかのようで、そういうことにしておこうと言われたわ。」

「ああ多分そうだろうね。蘇生の魔法の時もさっきもそう感じた。踊らされている気分だった・・・まあいいさ、悪意は感じなかったし。」

そう言うと、マギーが少しほっとしたような顔をした。それからいつもの笑顔に戻る。

「じゃあ、あなた達の活躍も聞かせて、まさか私にも内緒とは言わないよね。」

「OK、でも喉が渇いた、お茶を用意してからにしよう。話は長くなるよ。」

俺達の冒険の話が始まった。

魔法談義？

「と、ここまではいいかな？」

俺は今マギーに先日の防衛戦の説明をしている。ついでに近衛騎士隊長に提出する書類を書いている。

「ふ～ん、結構いろんなことするのね。油を撒いたり、火をつけたり大変ね。騎士の訓練だともっと華麗なんだけど。」

「こんなので驚いていたらまだまだだ。必要なら岩を落とす、投石器で岩を飛ばす、バリスタも使う、今メルキドではクロスボウを５００程用意させている。全部リムルダールでは導入済みだ、俺が去年に用意させた。」

「待って！去年ということは魔王復活を予期してたの？」

「もちろん、ロトの予言と昨今の魔物の出没記録から予期してたさ。準備だけしておけばリムルダールは防衛しやすい方だよ。ほとんど攻めてこなかったけどね。」

「守りやすいのはなんで？」

「ああ、そうか。君は見たことがなかったか。リムルダールは湖の中央に位置する街だ。街の中から対岸が見えないくらい広いから陸を進む魔物は襲ってこれない。もし泳いできても水際の柵で止めることができる。怖いのは空を飛んでくる魔物だが、それもバリスタやクロスボウで簡単に落とせる。備えあれば憂いなしだ。」

「へえ～、でも何で弓では駄目なの？」

「弓では熟練の技がいるからね。いざとなったら一般召集の民兵でも狙いやすいクロスボウの方がいい。」

「いろいろ考えているのね、軍人のようね。」

「馬鹿言っちゃいけない、こんなもの座学のレベルだ。現実はもっと生生しく不愉快だ。兵が傷つき死んでいくのを冷静に見続けなくてはいけなかった！」

「そんなに興奮しないで！ごめんなさい、軽率だったわ。そうあなたはそんな気持ちで戦っていたのね。」

何時の間にか、俺は大声をあげていた。先日の戦いで俺の指揮の下、幾人もの兵士が傷つき死んだ、多分協力してくれた一般の人もそうだろう。華々しい勝利の裏に犠牲になった人々がいる。だから俺は陛下や他の皆に褒められても素直に喜べなかった。

「興奮して悪かった。軍事的なことはこのまま近衛隊長に提出しておく。この街の防衛の参考にしてもらわねばならない。４００年の平和は長すぎたよ。」

「平和が長すぎたなんて皮肉ね。」

「確かにそうだ。言われてみれば嫌な響きだな・・・。」

俺が黙り込む。その雰囲気にいたたまれなくなったマギーが、俺の魔道書を開いて明るい声で話しかける。

「それですごい魔法を使ったと聞いたけどどれなの？」

「誰もがそれを聞くんだけどね、雷が落ちただけだよ。」

これはなるべく教えたくない、そう考えて心を落ち着けてから答える。マギーが軽く笑う。

「馬鹿ね、私に嘘をついても無駄よ。顔にそう書いてあるわ、私にはわかるの。」

「・・・・・そうなのか？」

「もちろんよ、どれだけ見てると思ってるの。」

「・・・・・・・・・・・・。」

黙って魔道書のあるページを開く。見開きでライデインとギガデインのページだ。マギーがそのページを眺める、指でなぞり文章を確かめる。

「こっちはベギラマと全く一緒、前に言ってた魔法ね。気づいていたわ。それじゃあこっちがその上位魔法・・・そう手から電撃を放出するのではなくて、天から落とす魔法なのね。」

「ああそうだ、だから誰にも教えないつもりだった、使うつもりもなかった。」

マギーの指が何度もスペルをなぞる。

「すごいわね、消費ＭＰ３０なんて、どれだけの集中をしなくては

ならないかしら？」

「３０秒はかかる、しかもその力を霧散させないようにするのも大変だ。もちろんおこす現象をイメージするのも狙いを定めるのも同時、だから誰にでも使える魔法ではない。１０人に教えて１人が使えればいい方じゃないかな？なんせ勇者ロトの家系にのみ伝わる魔法だ。だから君にも教えない、使いたければ自分で解読すればいい。」

「そうね、私はそれでも構わない。まずこっちのメラ、ギラ、ヒャド、バギ、イオの魔法から解読するから。」

ページを次々開きながら、５系統の魔法を告げた。

「これは驚いた。もうそこまで解読していたのか。もしかして使えるのか？」

「ええ、下級呪文はね。」

「中級、上級魔法はこんな所で練習するなよ。下手したら死人がでる。」

「えー！じゃあどこで練習すればいいの？」

「そりゃあ山奥とか海岸とか、広くて誰もいない所で練習するのさ。俺はそうしてきた。」

「じゃあ、いつになったら使えるようになるのかしら？」

俺は慌てて他のページを開く。スカラ、ピオリム、バイキルトな

どの自己強化系の魔法だ。

「そういった派手な魔法はなるべく使わない。効果がわかりやすいからね。だったらこっちの魔法を使えるようにした方がいい。」

「そこ辺の魔法は効果がよく判らないのよ。ホイミとかに近い感じはするけど、内容がわからないの。」

「ガイラやアレフに聞くといいさ。この前使ったから。じゃあこれ提出してくるから行くよ。」

「そう、今晩あなたの部屋に向かえを寄越すからお腹を空かせておいてね。」

俺は右手を挙げて返事をする。ラダトームに帰ってきた、今それを実感した。

――――――――――――――――――――――――――――――

「あれでよろしかったのですか?」

「ああ、構わんよ。しかし伝説の魔法か・・・。見物したのはそなたと弟だけで間違いないか?」

「間違いありません。大臣もはっきりとは見ていません。」

「そうかそうか、あれも漠然と違和感を感じていただけか。」

「そうですね。しかしよくできた言い訳でした。」

「そうだな、もっともらしい言い訳だったの。あの場の者も納得しておったから、それでいいとしようではないか。」

「御意。それでこの先はいかが致しましょうか?」

「監視をするだけでよい。あの者に害意は感じられぬ。」

「確かにその通りです。」

「それより弟の動きに気をつけよ。」

「と言われますと?」

「余が何も知らぬと思って好き放題しておる。」

「はっ!これまで通り監視いたします。」

「フフフッ!王家のみの伝承、国王のみの伝承、アレフガルドに散らばる伝承を集めし者か。さて誰が一番ものを知っておるのかのう。」

「・・・・・・・・・・・・。」

「では下がってよいぞ。ご苦労であった。」

男が闇に消え去る。残っているのは世を捨てたような目をした男だけ。

弓とクロスボウ

7／27　勇者支援生活88日目

目が覚める。こんなに安心して寝たのは何日ぶりだろうか？隣のマギーを起さないようにベッドから出る。天蓋付きの立派なベッドだ。

「私に黙ってどこに行くの？」

「起しちゃったか。いや、おはようだな。いつもの習慣さ、鍛錬をしないと落ち着かないから。」

「そこまでいくとほとんど病気ね。いいわ、私も行くから待ってて。」

「いいのか、脳筋の塊みたいのしかいないから嫌いだって。」

「なんとなく慣れたわ。ガイラとかサイモンとか筋肉の塊だけど、嫌いではないわ。それに見たいことがあるの。」

「そう、じゃあ玄関で待ってる。」

部屋からでて屋敷の廊下を歩く。すれ違う使用人が笑顔で会釈をする。なんとなく返す。玄関にて執事のシャッテンブルグと会う。全部知られているようでなんとなく照れくさい。形式的な挨拶の後の不意打ちがきた。

「ケルテン殿、屋敷の者全てを代表して御礼申し上げます。」

「えっ！とくに何もしてない、いや君達からしたらよからぬことしかしてないような・・・。」

「ひさしぶりにお嬢様の笑顔を見ることができました。」

「そうか、マギーはそんなに沈んでいたのかい。」

「はい、例の漆黒の騎士の件以来、ずっと籠もりきりで何か悩んでいました。」

「ふむ、それも俺のせいかも知れないけど、それでもいいのかい？」

「お嬢様があなたの為に悩んで喜ぶのなら、それについて我々から申し上げることはありません。」

後ろでわざとらしい咳が聞こえる。

「シャッテンブルグ！私のいないところで勝手なこと言わないで！」

「失礼いたしました。それでは私は失礼致します。ケルテン殿、お嬢様をよろしくお願いします。」

マギーが俺の手を引っ張って玄関からでる。

「もう皆して私を子供扱いする。ケルテンも子ども扱いしたら許さないわよ！」

「してないよ。まったくそんな気はない。」

この話題はやばそうなので逃げるように歩く。

――――――――――――――――――――――――――――――

ひさしぶりの訓練所だ。中央に人だかりができている。よく見るとアレフを中心に人が輪を作っているようだ。アレフが困った顔をして質問に答えている。俺を見つけると助けを求めるように話かけてきた。

「おはようございます。今日はマギーさんも一緒ですか？」

その場の視線が俺に集まる、次の瞬間に後ろのマギーに視線が移る。

「ああ、おはよう。マギーが見たいことがあるそうだ。」

「そうですか、それで何を見たいのですか？」

うまく話題が逸れたアレフが逆に質問する。

「弓とクロスボウを見たいの。誰か持ってきてくれない？」

俺が俺がと皆が騒いでいる。収拾がつかなさそうなので俺が口を挟む。

「ジョルジョ君、頼めるかい。」

「はい、では持ってきます。しばらくお待ち下さい。」

「ああいいよ、それと皆さん、ここは訓練所です、雑談所ではありません。手が空いているなら誰か私と手合わせ頂けませんか？」

途中から口調を変える。蜘蛛の子を散らすように人が散らばる。

「ケルテン、あなた相当恐れられてるのね。」

「失礼な、俺はこんなに紳士なのに。」

そこにジョルジョが戻ってきた。話が聞こえていたようで少し笑っている。

「持ってきましたよ。何をしましょうか？」

「とりあえずどこでもいいから、両方とも撃ってみて。」

言われたジョルジョが弓を構えて、２０m先の的を狙う。放たれた矢は的から外れた。続けてクロスボウを構えて放つ、的に当たった。マギーがじっと見つめている。

「すみません、弓は苦手なんです。こっちならまだ使えるのですが。」

クロスボウを片手にジョルジョがそう言う。

「その様ね。いいわ、ちょっと貸して！」

「ちょっと待って、今まで扱ったことはあるのか？」

「あるわけないじゃない。あったらこんなことしてないわよ。」

「アレフ！その辺の奴等全員に盾を持たせろ。怪我人がでるぞ。」

俺が大声で警告をだすと、近くで見物していた者が急いで盾を構える。気づいていなかった者もアレフに言われて慌てて盾を持った。撃つ本人が怪我をしては困るので、俺が後ろに回って一緒に弓を構える。

「いいかい、このまま後ろに引いて、放してっ！」

放たれた矢はでたらめな方向に飛ぶ。人には当たってない。

「当たらないじゃない。」

「当たり前だ。かなり練習しなくてはまともに撃つことすらできない。」

「そう、簡単そうに見えるけど。いいわ、じゃあクロスボウを貸して。」

少し避難していたジョルジョが出てきて弓とクロスボウを交換する。すでにクォレルはつがえてある。

「まだ下を向けたままだぞ、絶対人に向けるな。」

「うるさいわね、判ってるわよ。こう構えて引き金を引けばいいのね。」

マギーが立ったまま的に向かって構える。引き金を引く、的からは外れるが近い所に刺さった。見ていた者達からほっとしたような

声が上がる。

「なるほど、これなら私でも撃てるわね。昨日言ってた意味が解ったわ、それで矢はどうやってつがえるの？」

「えっ！まだやるの？」

「やっちゃ駄目なのかしら？」

「いや、駄目じゃないけど・・・。わかったよ、まずここに足をかけてこっちの弦を引っ張る。できる？」

マギーがクロスボウに右足をかけ、屈みこんで弦を引っ張ろうとする。周りからおおっ！と歓声があがった。それもそのはずローブが捲くれ上がって足が見え、豊かな胸を強調するかのように屈んでいるのだ。

「マギー、俺がやる。君のその格好は刺激が強すぎる。」

クロスボウを取り上げてクォレルをつがえる。それを渡すと再び的に向かって放った。的には当たらない。

「もういいだろ、危ないからもう止めよう。」

「危ないってどういう意味よ。まあいいわ、そんなに言うならもう止めてあげる。」

ちょっとふくれっ面で俺に渡す。クォレルをつがえて手にする。

「こうやってつがえれば誰が撃っても同じ強さのクォレルが飛んで

いく。ただ誤射の危険があるのでこの状態では人に向けてはいけない。それと撃つときは安定させるためにこう顎につけて撃つ。もっと安定させたいなら膝立ちになるか、うつ伏せで撃ったりもする。何かの上に置いて撃ってもいい。これだけ気をつければ誰でも撃てるし、そのうちコツもつかめる。」

「なんとなく解ったわ、でも私は魔法の方がいいわ。」

「ああ、そうしてくれ。見てる方が怖いから。」

そう言ってから無造作に的に向かって撃つ。クォレルが中心に突き刺さる。マギーが呆気にとられている。周りで見ていた連中からも感心したような声がする。

「何でもできて気持ちが良さそうね。うらやましいわ。」

何か棘のある言い方だ。

「この距離なら外すことはない。言っただろう、街にたくさん用意させたって。その時に散々練習をしたのさ。俺が使えなければ用意させた面目が立たない。」

「まあいいわ、そういうことにしてあげる。」

話題を変えるべきだな。

「ジョルジョ君、悪かったな。これは返しておいてくれ。」

「はい解りました。それと一つ報告したいことがありました。」

「なんだい？」

「正式に近衛騎士に推挙されました。これもケルテン殿の教えのおかげです。」

「俺は何もしてないよ。君が騎士に相応しいと判断されたんだろう。でも誰の推挙だい？」

「ローゼンシュタイン殿です。」

「ああ、サイモンか。あいつもたまにはいいことをするな。」

「ええ、感謝しています。それとケルテン殿にも御礼を言いたかったのです。」

「そうか、よかったな。困った騎士にだけはなるなよ。」

「胆に命じておきます。」

それだけ言うとジョルジョは立ち去った。やっと鍛錬ができる。俺は空いた場所を探して刀を振る。ここで鍛錬を行なうのは久しぶりだ。横でマギーがしゃがみ込んで見ている。そんな雑念も刀を振っているうちに消えた。

再会

鍛錬が終わって朝食をとる。兵舎の食堂に連れて行くわけにはいかないので、城下街にでた。アレフに聞くと、ガイラはまだ宿屋にいそうなので宿屋へ行くことにした。

「それにしてもその鎧ひどいわね。買い換えたらどう?」

改めて自分の姿を眺める。確かにひどいな、胸や篭手の一部が裂けて中のミスリルが見えかけている。

「これ一品もので買い換えることはできないんだ。」

「そう、どこで作ったの?」

「メイド　イン　俺。」

「・・・相変わらずなんでもできるのね。アレフ知ってた?」

「ええ知ってますよ。ガイラの篭手もケルテンさんの作品です。」

「そういえばそうだったわね、修理ぐらいだと思ってたわ。」

「今回は新しい素材が手に入ったから、今よりいいものが作れるな。」

「新しい素材?」

「ああドラゴンの素材だ。鱗を使うか、皮を使うか、ガイラと相談

だな。」

「でも街の前で倒したドラゴンはもったいなかったですね。全部メルキドに差し上げましたから。」

俺は気絶していたから忘れていたのだが、目が覚めた後で区長に無くなった人や強制招集した人への手当てに使わせてもらいます、と言われれば断ることなどできなかったわけだ。

「まあ仕方がないさ、これからの防衛に必要になるし・・・。」

「防衛に必要ってどういうこと？」

「うん、鱗を使って盾を作るんだ。ああ盾といっても手にもつ奴じゃなくて、立てかけて使うやつね。それと骨とか牙で鏃とか槍先を作ってもいいな。」

「加工できる物なの？」

「難しいね。でもそこまで責任もてないな。さあもう宿屋だ、まず食事にしようか。」

扉を開けて宿屋に入る。ここに来るのも久しぶりか、俺の顔を見つけた宿屋の親父が声をかける。

「おお、あんた大活躍だったってな。こいつに聞いたぜ。」

飯を食っているガイラを指さして言う。

「まあその話は後だ、飯3人分な。急いで頼む。」

「おう、ちょっと待ってろ。」

親父がカウンターの裏に入る。俺達はガイラと同じテーブルに座る。

「昨日も酒宴だったのか？」

「ああ、いろんな奴に誘われてな。俺断るの苦手だろ。」

「ガイラは断るのが苦手じゃなくて、断る気がないだけです。」

「アレフ、正解だ。この馬鹿は死んでも治らない。」

マギーが横で笑っている。こんな光景も慣れたようだ。しばらくすると朝食が運ばれてきた。結構な量である。

「ちょっと多くない？」

「まあ、冒険者向けの宿屋だからこんなものだね。余ったら誰か食べるよ。」

食べながらこの前の冒険譚を話す。宿屋だけに聞き上手だ。

「学者、それで俺とお前の鎧はどうする？」

「ドラゴンの鱗と皮はとってあるな？まさか売っぱらってないよな。」

「僕が預かってます。飲み代に化けたら困りますから。」

「そうか、鱗一枚でいいから持ってきてくれないか？」

アレフが部屋に向かって走る。速攻、竜の鱗を手に戻ってくる。手渡された鱗に懐から出したナイフの先端を当てる。ほんの少ししか傷がつかない。

「やはりな、硬くてまとも加工できない。」

「じゃあどうするんだ？」

反射的に文句を言ったガイラを無視して、今度は俺の刀を抜いて先端を当てる。これならいける。

「鋼程度では加工に時間がかかりすぎるから、ミスリルを使わないといけないな。」

「おいおいお前ら何とんでもないこと言っているんだ？」

宿の親父が口を挟んだ。

「そういえば知らなかったか、俺のこれはミスリルだ。アレフの盾もそうだ。ガイラの武器もな。」

「・・・・・何をさも当たり前みたいに言ってるんだ。」

「まあ事実なんだけどね。じゃあ加工する為に道具から手配しないといけないな。」

「ならマイラへ行きますか？」

「そうするか、温泉で療養するのもいいな。」

「ならちょうどいい。一つ頼んでいいか？」

宿の親父がまた口を挟んだ。

「なんだ、護衛の依頼でも入ったのか？」

「その通りだ。昨日からの客なんだが、マイラの村まで護衛してほしいと依頼された。こんな時勢なので受けてくれる冒険者などいないと、言ったんだけど聞かなくてね。５０００Ｇまで出すと言って聞かない。お前らがマイラに行くなら頼まれてくれ。」

「構わんぞ、お前らはどうだ？」

「ガイラ、当たり前のように返事をするな。」

「僕も構いませんよ。」

「アレフ、そこは少し渋るとか、報酬の交渉とかするものだ。まあいいさ、受けてやるよ。」

「すまん、恩に着る。これは俺のおごりでいいから。じゃあ依頼人を連れてくる。」

依頼人を向かえに二階に駆け上がっていった。気分は上々の様だ。

「フフッ！儲かっちゃったね。」

「そうでもないよ、５０００Ｇの報酬なら、仲介料の１割つまり５

００Ｇがあの親父の懐に入るからね。」

「へえ～、それなら奢りも解るわ。」

依頼人の男を連れて戻ってきた。見たことのある男だ。

「紹介します、鍛冶のリヒャルトさんです。」

「ああ知ってる。メルキドの武器屋だった人だ。」

「何だ知り合いか。」

「僕の武器と盾を売ってもらいました。しかし店の武具を全部無償で提供したと聞きました。よろしかったのですか？」

アレフが申し訳なさそうに質問する。

「あいつら碌な武具も持たずに戦に出ようとしてやがった。見てられなくてな、それで全部放出した。全部なくなった店を見てたら、何の未練もないことに気づいて街を出てきただけだ。行きたい所は決まってたからな。」

「そうですか、ではマイラまで僕が送ります。よろしいですか？」

「よろしいも何もこっちから頼むさ、アレフ。」

アレフとリヒャルトが硬い握手を交わす。妙に波長があった二人だな。

「まあついでの話だ、皆で行くよ。」

「じゃあ、私もついて行くわ。いいわね？」

語尾に強い口調、これは何を言っても聞かないパターンだ。アレフとガイラがニヤニヤしている。

「解ったよ、今回は馬車を用意してくれるかい？」

「いいけどどうして？」

「いつもの様に突っ走る訳にはいかないよ、あれは普通の人には酷だからね。」

「いいわ、じゃあ昼までには準備させるわ。それでいいわね？」

マギーが依頼人のリヒャルトに確認する。リヒャルトが困惑した顔をしたまま首を縦に振った。

「じゃあ一旦屋敷に戻るから、ここで待っててね。」

それだけ言い放つと嬉しそうにマギーは出て行った。

「よかったんですか？結構いいところのお嬢様みたいですけど、俺ごときに馬車までだしてくれて？」

「いいところのお嬢様どころか、貴族の当主だよ。まあ当人が喜んでやるって言ってるんだ。断る理由もないさ。」

「はあ。」

困惑する二人に俺達三人は笑っている。また一緒に旅ができるのだから、それは楽しいものになるだろう。

護衛の旅路

宿屋の前に停められた馬車にリヒャルトが目を丸くしている。アレフとガイラが当たり前の様に荷物を運び込んでいるのが対照的で面白い。

「なあ、あんた。これ本当に乗っていいのか？後でとんでもない料金取られるとか無いよな。」

「無い無い。遠慮しないで乗ってくれ。なっ！マギー。」

「ええ、いいわよ。どうせ屋敷に置きっ放しの馬車だし、たまには使わないとね。」

「はあ？じゃあ失礼して・・・よっと！」

リヒャルトが困惑した表情のまま、遠慮がちに馬車に乗る。俺は御者台に乗り手綱を握る。アレフとマギーが馬車に乗り込んだのを確認してから発車させる。ガイラはライに乗って並走している。

「あんまりスピード出すなよ。今回の旅はのんびり行こう、４日ぐらいかかるかもな。」

「了解。こんな旅も悪くないな。」

のんびりと馬を進める。ガイラの姿が見えないと思ったら、兎を狩って戻ってくる。疲れたらアレフと交代する。トヘロスが効いているので近づく魔物はいない。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

日が落ちる前に馬車を止めて、アレフと二人でテントを張る。この前の簡易なテントと違って立派なものだ。マギーは馬車の中に簡易ベッドを作ってご満悦だ。

「お～い、飯ができたぞ！」

ガイラが俺達を呼ぶ。今日狩った兎と、その辺で採ってきた野草でつくったガイラ特製の料理、ラダトームで買ってきたパンと一緒に食べる。

「もっと大変な旅になると思ってたよ。お前さんらに頼めてよかった。」

「そうでもないさ、依頼料に見合った待遇だよ。」

「だよなあ、マイラまでの護衛に、５０００Ｇなんて聞いたこともないな。」

「そんなものなのか？・・・まあ払った金は戻ってこないからいいか。しかしこれ旨いな、まさかこいつが料理をするとはね。」

食事をしながら会話が弾む。俺達にとっては当たり前のことでも他人には驚きなんだろうな。

「食事が終わったら、マギーとリヒャルトは寝てくれ。俺が一番でアレフ、ガイラの順番でいいか？」

「俺はいいぜ。アレフは真ん中で辛いぞ、代わろうか。」

「僕もそれでいいです。馬車の中でゆっくりしてましたから。」

食事が終わって食器を片付ける。いつもは食器なんて使うことはないから洗うのが面倒だ。しばらくしてアレフ、ガイラ、リヒャルトがテントに入った。念の為にもう一度トヘロスをかけて、焚き火を前に座る。話しかける相手もいない時間が過ぎる。前はこんなことは当たり前だったのに、静寂が身に沁みる。衣擦れの音、魔物か！焚き火の明かりにマギーの姿。

「眠るには早いわ、ちょっといい？」

「なんだ、マギーか脅かすなよ。なんの用だい。」

「これよ。」

マギーの手に数枚の紙、そこには幾つかの魔法が記述してある。

「アレフ達には聞いたのか？」

「ええ、時間はいくらでもあったから。自己強化魔法みたいね。」

「そうだよ、地味で見た目からは効果が知りにくい魔法だ。」

「なるほどね、遺失魔法を秘匿するケルテンらしい選択だわ。」

焚き火に薪を投げ入れて間を繋ぐ。

「それだけじゃない。消費ＭＰが少ないから俺には負担が少ない。

それと詠唱時間を短くする意味もある。」

「へえ～、そこまで考えてたの？でも私とあなたじゃ、そんなに使用できるＭＰが違うのかしら？」

「ああ、全然違うね。俺が大体１５０、君は２００以上だ。一度限界まで魔法を使って調べてみたいな。」

「そんなに違うの？それやってみたことあるわよ。前そんなこと言ってたでしょ。」

「そういえばそんな話をしたな。それで答えは？」

「ベギラマで２８回、そこからホイミ２回、約２３０かな。」

「まあ予想の範疇だな。とはいえＭＰ１２や１８の魔法を連発するのはお勧めできないな。だからさっきの自己強化魔法がお勧めだ。正確な効果と詠唱文は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

俺の教えた魔法をマギーが使う。効果を確認してそれを繰り返す。俺の魔法講座はアレフが起きてくるまで続いた。

――――――――――――――――――――――――――――――

朝になって俺達がいつもの鍛錬をする。マギーはまだ起きてこない。俺達を見ているリヒャルトがまたまた目を丸くしている。全て終えてからリヒャルトに近づく。

「いや～、アレフの手を見たときから解ってはいたが、改めてあんたらのすごさが解ったよ。」

「こんなのは毎朝の習慣さ。」

「そう言えるのがすごいことさ。しかしまあ、師匠と弟子と言うだけあってあんたとアレフはそっくりだな。」

「そうか？構えも剣筋もまったく違うと思うがな。」

「そういうものじゃないな。説明しづらいが戦いに対する姿勢というか、雰囲気がよく似ている。」

「ふ～ん。そんなものかね。俺が教えたのは基本動作の徹底、剣速の速さ、そこに込められた力、そして油断をしないことだけだね。」

「それだけ教えれば十分だ。アレフはいい師匠を持ったようだな。」

そこに鍛錬を終えたアレフが近寄ってきた。

「何の話をしてるのですか？」

「ああ、お前が強いという話だ。」

「いや、止めてくださいよ。僕なんてまだまだです。」

「そりゃあ、お前さんの比較対象が大きすぎるな。俺みたいな一般人から見ると十分強い。」

「そこまでにしておこうか。アレフの目標は竜王討伐だ。こんなも

ので納得してもらっては困る。」

リヒャルトが納得したかのようにふむふむうなっている。アレフも隣で照れくさそうにしている。

「じゃあ俺は今最高の護衛を雇っていると思っていいみたいだな。」

「お～い、飯ができたぞ。」

ガイラの声が響く。こんな時勢に旅の途中で安心して食事が楽しめる。そう考えると最高の護衛というのも納得できる。

職人二人

8／1　勇者支援生活93日目

マイラの鍛冶屋一文字に来ている。今俺の目の前で鍛冶屋一文字が、俺の出した竜の鱗の山を相手にいろんな道具を試している。

「確かに硬いな。」

「そうだろう、俺としてはこれでスケイルメイルを作ろうと考えてる。」

「なるほどな、鉄で作っても重さの割に防御効果が見込めないので流行らない鎧だが、これならありだ。だがどうやって穴を開けるかが問題だな。」

「だからここに来たんじゃないか。ミスリルで錐と針を作ってくれ、径は2mmぐらいでいい。材料はまだあるだろう?」

「簡単に言ってくれるな。どうやってそこまで加工する?叩いて薄くするのはまだ簡単だが細くするのは難しい。まさかそこまで削れとでも言うつもりじゃないだろうな?」

少し険悪な雰囲気に、俺と一文字以外の皆が息をのんでいる。

「俺の刀の時みたいに、薄く延ばしてから畳んで少しずつ細くすればできないか?」

「お前なあ、あれ作るのに3ケ月かかったのを忘れてないか。それ

と細さが違う、ずっと繊細な作業になる。」

「そうだったな、忘れていたよ。」

「板になった物を切るわけにはいかないのか？」

横からリヒャルトが割り込んできた。

「あっ！お前誰だよ？素人が口を挟むんじゃねえ！！」

腹立ち紛れに一文字が怒鳴る。怒鳴られた本人は涼しい顔をしている。むしろ後ろの３人の方が青い顔をしている。

「すみません、紹介が遅れました。僕の炎の剣と水鏡の盾を売ってくれた武器屋で鍛冶屋のリヒャルトさんです。」

「何！炎の剣と水鏡の盾だと・・・見せてみろ！」

その勢いに負けたアレフが剣と盾をさしだす。しばらく眺める、剣を鞘から抜きあちこちを斬りつける。

「熱っ！」

ブレードの部分を指で触れる。火傷をしたのは全く気にしていない。次に水鏡の盾に手元のハンマーを叩きつける。続いてナイフで表面を引っかく。もちろん傷一つつかない。

「噂には聞いていたがすごい代物だな。あんたが作ったのか？」

「残念ながら違う。うちに代々伝わる武具だった。」

「なんで手放した？」

リヒャルトがアレフを前に押し出す。

「こいつが使うに相応しいと判断した。武具は使う人間を選ぶ、そうじゃないのか？」

二人がしばらく睨みあう。他の４人は声も出せずに成り行きを見守るだけである。二人がほとんど同時に笑い出した。俺達は呆気にとられている。

「面白い奴を連れてきたな。メルキドからとは酔狂な奴だ。店はいいのか？」

「ふん、この前の魔物襲来の時に全部放出した。それでここにミスリル加工の業を習いに来たわけだ。」

「リヒャルトさんは非常招集された民兵の為に、武具を無償で提供したんです。」

アレフが口を挟む。少しでも助けになろうとしているのが解る。

「なるほど、俺のところに業を盗みに来た、そういうことだな。」

「違いねえ、言い方は悪いがその通りだ。」

一瞬の間の後、また二人が笑う。

「いいぜ、どうせ俺もこいつに解読してもらっただけだ。俺だけの

技術じゃない。」

一文字が俺を指さす。その言葉にリヒャルトが呆れたような顔をする。

「あんた、答えを知っていて黙っていたのか？」

「ああそうだ、俺はここに伝わる秘伝書を読んだだけだ。勝手に教えていいものじゃないだろ。」

「その通りだ。まあそれはいいさ、それでさっきの質問に答えてくれないか？」

「ああ、切れるかという質問だったな。熱しても溶けるまではいかない。赤熱化して柔らかくなったこいつを叩いて変形させるのが限度だ。」

「そうか、あの拳につける武器は削って作ってあったが、それはどうした？」

「これを使う。」

数本の棒やすりを机の上に並べる。リヒャルトが手にとって水鏡の盾にこすりつけようとする。

「これは駄目です。」

アレフが慌てて盾を取り上げた。一文字が余っていたミスリルの塊を差し出すとやすりを当てて削る。

「これは何でできている。この粉末は何だ?」

「俺も知らない、こいつ特製の粉だ。作り方も教えてくれない。」

二人が俺を見る。さらに何か言いたげなので肩をすくめて誤魔化す。

「一つ考えがある。このミスリルの粉末はあるか?」

「ああ、もったいないから全部とってある。どうするつもりだ?」

「これなら溶けるかもしれん。」

「なるほど・・・・・・・・・・・・・・・・だな。」

「やってみよう・・・・・・・・・・・・・・・・」

完全に二人だけの世界に入ってしまった。俺達はここをでることにした。

「何はともあれ、リヒャルトさんも良かったですね。」

「そうだな、弟子という感じではなかったけどな。」

「またへんな奴が増えたな。」

「そうね、この人に関わると大体人生が変わるわ、良くも悪くもね。」

「良くも悪くもとはえらい言われようだな。まあ俺のせいで不幸に

なったやつがいないわけじゃないか。」

「僕は不幸になんかなってませんよ。きっとガイラもマギーさんもそうです。」

俺を見つめる3人の目が優しい。そうだな、これからもそうあってほしい。そうするべくこれからも努力をしよう。そう思った。

――――――――――――――――――――――――――――

ある屋敷の暗い部屋に顔を隠した男が二人、テーブルを挟んで座っている。

「約束と違うではないか？」

「約束とは？」

「互いに軍事活動はしない、そう決めたはずだ！」

「その通りですな。何かありましたか？」

「メルキドに軍隊が攻めてきたと報告を受けておる。」

「知りませんな。きっと一部の者の暴走でしょう。それより先日ラダトームより１００名ほどの軍隊らしき集団が動きましたが、あれは何でしたかな？」

「あれは貴殿らが追いだしたドムドーラの民だ。いつまでも城下に住まわせるわけにはいかぬ。」

「なるほど苦労してますなあ、では互いに何もやましいことはないですな。」

「くっ！では漆黒の騎士、あれは何だ？」

「それこそ知りませんな、そちらこそ勇者なる者どもに何かさせておるようですが？」

「あれこそ軍隊とは直接関係ない。一部の有志の活動だ。」

「そうですか。しかしそれ以外にもなかなかの手駒をお持ちですな。まあ飼い犬に手を噛まれぬ様、気をつけた方がよろしいですよ。」

「何のことやら解らぬが、忠告ありがたく受け取っておこう。」

「そうですな。では失礼致します。私も報告とやらを受けねばなりません。」

闇の中に金色のローブが消えていく。残された男が呟く。

「好き放題いいおって！・・・しかし飼い犬に噛まれるとは・・・・・。」

屋敷の外を足音も立てずに離れていく金色のローブ。

「我々を利用しようとはおろかな男だ。我が息子を次の王にか・・・気持ちは判らんでもないがな・・・。しかしあの時の雷はなんであったのだ？勇者アレフといったか、まさかあのロトの勇者に連なる者ではなかろうな。ならば今の内に手をうっておかねばならん。あ

の者を使うか・・・・。」

闇の中、支えを失った金色のローブが地に落ちる。主人を失った布が、風に吹かれていずこかに消えていった。

マギーの参戦

８／２　勇者支援生活９４日目

ドラゴンの皮はなめして革にしなければいけない。自分でするには量が多いので鍛冶屋一文字に紹介してもらったマイラの工房に発注することにした。ちなみに一ヶ月かかると言われたが、特急料金を払って１０日でお願いしてある。

さて注文した錐ができたか鍛冶工房に見に来た。むっとした熱気の中で二人が作業をしている。

「どうだ、うまくいったか？」

「昨日のうちに鋳造しておいたのがこれだ。今削っている。」

二人でミスリルの棒にやすりを当て少し削って、ドラゴンの鱗で試すことを繰り返していたようだ。割れたドラゴンの鱗がいくつか散らばっている。

「何時できるんだ？とりあえずでいいから一つくれ。」

「とりあえずの品物などやれん！」

二人同時に怒鳴らなくてもいいのに・・・・。

「わかった、わかった。ただ時間が惜しいから早くよこせ。針の方は１０日後でいいから。」

「俺のは駄目だ。リヒャルト、そっちはどうだ？」

「もう少し調整すればいけそうだ。３０分待ってくれ。」

「じゃあそうする。」

シャッシャッシャ！ゴリゴリゴリ！シャッシャッシャ！ゴリゴリゴリ！・・・・・・・・・・手持ちぶさなので穴を開けられた鱗を手に取って見る。まずまずの出来だ、こっちのは駄目だなと一人でつぶやく。３０分待って声をかけて、さらに３０分待たされる。

「まあこんな物か。いいぞ、持ってけ！」

リヒャルトから渡された錐を、割れたドラゴンの鱗に当てて回すと軽い力で穴が開いた。

「うん、いい出来じゃないか。あと5本ぐらい作ってくれ。」

「おう、それじゃ例の粉をくれ、もう在庫がない。」

「了解、じゃあこの袋はもらってくぞ。」

石炭の袋を一つ担いで外にでる。後ろでなにやら聞こえるが無視することにした。

「おい、石炭をどうするんだ？」

「知らん、いつもあれを持っていく。絶対に教えてくれんのだ。」

まさか遺失魔法で作ってますなんて言えない。背中に視線を感じながら宿屋へと急ぐ。しばらくはここに逗留することにしたので、

宿屋の一室を俺専用の工房にしてもらった。４人部屋のベッドを取り除いて大きな長机を置いてある。その机にはドラゴンの鱗が山と積まれている、座っていたマギーが俺に気づく。

「やっと終わったわ。もうこんなの嫌よ！」

少しお冠である、まあドラゴンの鱗をサイズごとに分別させたから仕方がない。

「まだまだ、これからそれに2個ずつ穴を開ける必要がある。」

「それ本気で言ってるの？こんなにいっぱいあるのよ。」

「もちろん本気さ。これで俺の鎧を作るんだ、俺の命に関わるからね。」

「そう、命がかかってるんじゃ仕方ないね。私も手伝うわ！」

「うん、ありがとう。でもまだこれ一本しか道具がないからいいよ。ああそれよりガイラとアレフは何処へ行った？」

「まだ村の中にいるはずよ、昼から外に行くと行ってたから。」

「そうか、じゃあマギーも一緒に行くといい。」

マギーが少し不満そうな顔をする。

「例の自己強化魔法の実践だよ。実際に使ってみないとね。」

「まあそうだけど、あなたはどうするの？」

「ここで作業してる。１０日までに自分の分は作っておきたい。それが終わったらガイラの服を作る。次行く敵に備える。」

マギーが今度は不思議そうな顔で俺を見つめる。俺は目を逸らして手元の作業をする。

「次の敵？どこへ行くつもりなの？」

「あ～、そう遠くない場所だ。」

「誤魔化さないで！また危険なことなんでしょ？」

俺は作業の手を止めない。次はローラ王女を助けに行くつもりだ。危険なことは解っているがドラゴンは二度倒しているから不可能ではないはず。個体差と場所だけが問題だ。

「ちょっと聞いてるの！」

「ああ、聞いてるよ。この先危険じゃないことなんてない。でも俺の予想では今のままでも竜王に勝てる力はあると思う。」

「はあ！なに言ってるの？」

「まあ目の前に竜王がいて戦えるならの話だ。実際は敵の真っ只中を行かなければならないから無理だね。だから強そうな敵は先に潰す。それと現状の膠着状態を壊す。その為の一手だ。」

「もういいわ！アレフもガイラも勇者だったわ、だから成すべきことがある。それはケルテン、あなたもそう、私に止める権利はない・

・・。どうせ止めても聞いてくれないでしょ？」

「ああ、止めない。止めて平和がくるならそうするが、今のところそうはならないと思う。」

「じゃあ、私も連れて行って！もう待っているだけなんて嫌！」

「えっ！危険だって・・・。」

「危険は承知してる、それでもいい。もう無事を待っているだけなんて絶対に無理！私にだってできることはあるはずよ。」

返事を返すことができない。しばらく無言が続く。部屋の外からノックが聞こえた。

「どうぞ。」

遠慮がちにアレフとガイラが入ってくる。

「すみません、全部聞こえちゃいました。」

「悪いな、昼が近いから飯に誘おうと来たら、扉の外まで聞こえた。聞く気はなかったがな。」

「こっちこそすまん・・・お前らの意見は？」

「俺は構わんぞ、誰が入ろうが俺の役割は変わらん。」

「僕もいいですよ。何回か一緒に戦ってますけど、マギーさんがいると僕も前に出て戦えます。」

「簡単に言うな。マギーに接近戦はできないから、誰かが守ってやらなければいけないんだ。」

「別に守ってもらわなくてもいいわ！」

「お前馬鹿だろう？」

「俺が馬鹿だと！もう一回行ってみろ、どういう意味だ！」

「ああもう一回いってやる、馬鹿だ！こんな簡単なことが解らないとはらしくないな。」

「簡単だと？」

「そうです、簡単ですよ。ガイラと僕が前衛、マギーさんが後衛、ケルテンさんが中衛でマギーさんをまもればいいんです。」

「あっ・・・・。」

確かにそうだ。戦いに連れていかないことを前提に考えていたから、気がつかなかった。武闘家、勇者、賢者、魔法使いのパーティーと考えれば理想的だ。もっとも俺はパラメーターの割り振りをミスった賢者だけど。顔を上げて三人の顔を見ると、二人の賛同を得たマギーの目が輝いている。

「はあ・・・どうせ言っても聞かないのは君だろ、マギー。」

「そうよ、私はわがままな貴族の一人なの。決めたことは王様にでも言われなければ変えない。」

マギーが冗談めかしてそう言う。そこの二人、暖かい目で見守るな。

「俺一人が悪いみたいだな。まあいいか、次は連れて行く、その後のことはまた考える。それでいいな！」

「それでもいいわ。アレフ、ガイラ、改めてよろしくね！」

「よろしくお願いします。」

「おう、よろしくな！」

三人で盛り上がっている。俺としては考慮しなくてはいけないことが増えて頭が痛い。ローラ王女を救出するまで最短で2週間か・・・それまでに十分な準備をしよう。

魔法談義？

８／５　勇者支援生活　９７日目

ここ数日の日課
６時　起床　鍛錬
８時　朝食
９時　鱗の加工、アレフ含む　兼　魔法講習、マギーのみ
なめし工房の手伝い、ガイラのみ
１２時　昼食
１３時　ドラゴンスケイルの製作　実戦、俺以外
１８時　夕食
１９時　魔法講習
２１時　就寝

この様に何かなければ俺は宿屋からほとんど出ていない。たまに鍛冶屋に使えなくなった錐を交換しに行くだけだ。アレフ曰く、マギーは自己強化魔法を効果的に使えるようになったらしい。そのせいかガイラとアレフの筋肉痛がひどい。朝になるとアレフがベホイミをかけているのを見る。

ドラゴンスケイルの加工も先が見えてきたので、今日の魔法講習は新しい魔法を教えようと思う。

「マギー、今日はこれからの戦いに必須の魔法を教える。」

「必須、そんなにすごい魔法なの？」

「すごくはない、むしろ地味と言っていい。その名はフバーハ、炎

の息を和らげる魔法だ。」

「ずいぶんと限定的な魔法ね。」

「そうだね。でも大事な魔法になるから必ず覚えてくれ。この魔法は空気の膜を張って外側からの熱気をある程度減少させる。詠唱文は、

私はＭＰを6消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、空気の球となりて、この場に留まれ、フバーハ！

と詠唱だけならそう難しい魔法でもない。魔物に知られても困らない。」

マギーが手元の紙に記述している。書きながら口にしている。

「そうね、じゃあドラゴンが出てきたら使えばいいのね。」

「駄目です。これは一定の気流のある場所を作る魔法なので、どこに作るかを見極めないといけない。敵も移動できるし、敵の懐に飛び込むガイラにはあまり意味がない。ＯＫ？」

「なるほど、ドラゴンを間近で見たことないからイメージできないわね。」

「最低でも自分だけは守ってくれ。まあ全員炎への耐性はある装備だからそれで構わない。」

「そうなの？」

「ああ、俺はドラゴンスケイル、ガイラは竜闘着、アレフは水鏡の盾、君は水の羽衣、みんな炎の耐性がある。もっとも俺とガイラのはまだ未完成だけどね。」

「だからあんなに必死に鱗に穴を開けていたのね。」

「そうだよ、それに今の鎧よりずっと防御力が高くなるからね。何年も前から作るつもりだったんだ。」

「魔法の鎧とか金属の鎧は着ないの？」

「金属の鎧は重いから嫌だ。魔法の鎧なら軽いからいいけど、肩当てがいらない。あれがあると腕の動きを阻害して、俺の流儀に合わない。」

「いろいろ考慮しなければいけないのね。」

マギーがしきりに感心している。俺もちからがＢあれば、他の選択もあったんだけどね。

「あともう一つ魔法を教えておく。俺には使いこなしにくい魔法だ。」

「そんな魔法、私に使えて？」

かなり不思議そうな顔だ。

「魔法自体は俺でも使える。だが消費ＭＰが１８だから俺にはきび

しい。」

「ああ、なるほどね。でもそんな魔法が必要になるの？」

「なるよ、マギー、ベホマは知ってるかい？」

「もちろん、ホイミ、ベホイミの次に書いてあったから解読しやすかったわ。」

「そうか、じゃあその次にあったベホマラーだ。これは一定の範囲にいる者全てにベホイミをかける魔法だ。一度に複数の目標が回復するから、いざという時に使える。」

「ベホマの後にあった魔法ね、第４小節だけ解読できなかったのはそういうことだったのね。」

「そうだね、そこと消費ＭＰ以外はベホイミと一緒だからね。さっきも言ったけどエリアにかける魔法だから難しい。なんせ敵にも効果があるからね。詠唱文は

私はＭＰを１８消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ。

おお万能たる力よ、血、肉となりて、かの地にある者を癒したまえ、ベホマラー！

だ。範囲の設定が大事だからよく練習しておいてくれ。」

「ちょっと待って、その次にも同じ様な魔法があった覚えがあるけど？」

「ああ、あるよ。同じくエリア回復魔法だ。その名もベホマズン、消費ＭＰ６２、全ての者を全快させる魔法。正直実戦で使いこなせる自信はない。」

「消費ＭＰ６２！力の融合と維持にどれだけの集中がいるのかしら？」

「俺は練習で１分かかった。知ってる魔法で一番消費ＭＰが大きい。だからこれは無理に覚えなくていい。詠唱文は想像どおりベホマとベホマラーを足したものだ。」

「じゃあまずベホマラーを覚えることにするわ。」

それだけ言うとマギーは教えたフバーハとベホマラーの詠唱練習を始めた。複数の強化魔法、フバーハ、ベホマラーとこれだけあれば対ドラゴン戦も大丈夫だろう。とりあえず教えることがなくなった俺は、ドラゴンの鱗に穴を開ける作業を再開した。

――――――――――――――――――――――――――――――

今日は俺も昼からついていくことにした。俺以外の３人は楽しそうだ。

「予め言っておくが、俺は手を出さない。いつも通りにやってくれ。」

「せっかくなんだから一緒に闘ってくれてもいいじゃない！」

「そうですよ、たまには体を動かした方がいいですよ。」

「学者、サボるな。」

三人が異口同音で俺を戦わせようとする。

「そうだな、必要だと思ったらそうする。まあこの辺ならその必要もないだろうがね。」

そうこう言っているうちにがいこつの集団を見つけた。アレフとガイラがマギーに近づく。その瞬間にマギーのピオリムが発動する。二人が敵に向かって走る。さらにマギーのスカラがガイラにかけられる。アレフとガイラが敵中で無双状態だ。マギーは近づく敵に備えている。しばらくして敵を駆逐した二人が戻ってくる。その表情は自慢げだ。

「マギー、魔法の選択とコンビネーションはそれでいい。お互いの意志の疎通が十分にできているようだな。」

「それはもう5日も一緒なのよ、当然だわ。」

「そうか、攻撃魔法は使ってるか?」

「まあ、極まれにこっちに来る魔物がいる時ぐらいかしら。」

「もしかしてさっきみたいに完全思考詠唱か?」

「そうよ。」

「攻撃魔法を使うときは、ラストワードだけは発生するようにした方がいいな。誤射の心配がなくなる。」

「解ったわ、誤射のことは考えなかったわ。」

「まあね、いつも余裕があるわけじゃない。もしかしたら君が狙われていると思ってカバーに来た味方を、誤射するかもしれない。そういう時の合図になる。焦っている時には何が起こるか解らない。」

「そういやあ、学者と一緒の時はそうだったな。言われて初めて気づいた。」

「ガイラ、僕もそうしてましたけど。」

「そうだっけ?全く気づいていなかった。ガハハハッ!」

ガイラが豪快に笑う。つられて皆が笑う。困ったものだ、これからもっとコンビネーションを良くするよう考えなくてはいけないな。明日からも実践に付き合うことにしよう。

竜闘着

８／１０　勇者支援生活　１０２日目

いつも通り朝の鍛錬をしている。最近ふと気づいたことがある。

「ガイラ、お前もしかして、ちから上がってないか？」

「お前もそう思うか？前に比べて速く強くなったような気がしてた。」

「ああ、なんとなくだが業の切れが違う。なにかあったのか？」

「さあ？特別なことはしていない。毎日朝の鍛錬、なめし工房での手伝い、昼からの実戦、それだけだ。」

「あの～、僕もなんとなくそう感じているのですけど。」

横からアレフが口を挟む。

「アレフもか？ちょっと基本動作を見せてくれ。」

アレフが剣を振るのを眺める。前、後ろ、横から見る、確かに鋭くなっているな。俺は変わっていない・・・。何が影響した？

「もしかしてピオリムじゃない？ここ１０日ぐらいほとんどの戦闘で、私がピオリムをかけているわ。」

「なるほど、メルキドでも俺が使ったな。あの後は筋肉痛に悩まさ

れていた。ガイラ、最近はどうだ？」

「そうだな、前みたいにアレフに回復してもらうほどではなくなった。」

「じゃあそれで間違いないな。」

「そんなことあるのですか？ただ魔法の効果で素早くなっていただけですよ。」

「ああ、限界に近い負荷を与えてから十分に休息を与える、そういうトレーニングがある。超回復というのだけど、まさかこんなやり方があったとはな。」

「まあいいじゃないですか、僕もガイラも前より動けるようになったのですから。」

「だな！筋肉痛に耐えてきた甲斐があったというものだ。」

二人が素直に喜んでいる。待てよ、見たところ各自の能力はこんな感じか。

アレフ	Ａ－⇒Ａ	Ｂ⇒Ｂ＋	Ｂ－	Ｂ＋	Ｃ＋
ケルテン	Ｃ	Ｂ	Ａ	Ｃ＋	Ｂ－
ガイラ	Ａ⇒Ａ＋	Ｂ＋⇒Ａ	Ｃ	Ａ－	Ｆ
マギー	Ｄ	Ｃ	Ａ－	Ｃ－	Ａ

もう俺では相手にならんところまで来たな。

「そうよ、勇者が強くなって悪いことなんかないから、それでいい

じゃない。」

「確かにそうだ。ただ維持するためには、しばらく同じ位の負荷を続けないといけないかもしれない。」

「そんなの私がいれば問題ないわ。」

いやそれは君がＭＰタンクだから言えることだ。俺は必要なければわざわざピオリムなんか使わない。

「まあいいや、ガイラ、例の革はもうできていそうか？」

「ああ、昨日の話だと予定通り納品できると言ってた。」

「なら朝食の後に取りに行くか。お前の装備を作ってもらうぞ。」

「そうか、楽しみだ。」

鍛錬を終えて朝食をとる。ガイラが速効で食事を済ませて、そわそわしている。俺はわざとゆっくり食事を取る。いつもと同じ時間に行けばいいのだ。

――――――――――――――――――――――――――――――

革工房ブリー、この１０日間ドラゴンの皮をなめしてもらっている工房だ。これが何の皮なのかは伝えていない。ガイラにも言わないようにしてある。目の前に茶色に染まったドラゴンレザーがある。手にとって触ってみる、革としては上出来だ。

「ちょっと端を切るぞ。」

懐からナイフを取り出して刃を当てる、切れないほど硬いことはない。耐火性を調べてみたいがここではできない。

「いい出来だ。ではここからこいつの服を作って欲しい。」

「これでか?普通の革に比べて丈夫だからいい物はできると思うが、問題があるな。」

「それは想定の範囲だ。一文字に頼んだ専用の針がここにある。」

「なんだ用意がいいな。今手元にある針では縫えないと話をしていたところだ。引き受ける前に一つ質問がある。いったいこれは何の皮だ?」

「はあ・・・まったく職人という奴はどこに行っても同じだな。実はドラゴンの皮だ。この間メルキドで狩ってきたばかりだ。」

「なるほど今まで扱ったことのない皮だと思っていた。よし、その針を貸してみろ!」

俺が懐から皮で包んだ針を取り出して渡す。針を革に刺して反対側に抜く。

「これもすごいな。兄ちゃん、あんた何者だ?城の人間なのは知っているが・・・。」

「国務大臣付き勇者支援官だ。横にいるのが勇者ガイラ、竜王を倒す為にどうしても必要な装備だ。」

「本当か！わしが１０日もこき使ってたこいつが勇者か？」

「正真正銘、勇者だ。だからこれで服を作ってくれ。こいつの流儀に相応しい服だ。名前だけは決めてある。竜の革で作られた武闘着、竜闘着だ。」

「竜闘着か、いい名前だ。その名前に負けない物を作らせてもらおう。」

「ありがたい、頼む。」

その言葉にガイラと親父が固い握手をしている。

「幾つか注文がある。いいか？」

「ああ言ってくれ、中途半端な物はつくらねえ。」

「まず作りは今こいつが着ている物と同じにしてくれ。それでこいつが納得するまで付き合ってくれ。」

「当然のことだな。次はなんだ。」

「縫い目が表に出ないようにしてくれ。予想では耐火性が強いはずだ、縫い目から燃えては困る。」

「それも当然だ、縫い目が表になるような無様な作りはしない。」

「なるほど、そういわれればそうだ。あとはこれを使ってくれ。」

懐から袋を取り出して渡す。中身を確認している。

「これもドラゴンの素材か？」

「そうだ、鱗だ。この部分をこの鱗で補強をしてくれ。」

ガイラの服の心臓の位置、前も後ろも空いた穴を縫ってある場所を指し示す。

「これはひどいな。あんたよく生きてたな？」

「いや、その、なんだ。まあ、運が良かっただけだ。」

ガイラが困った顔で答える。まさか一度死んだとは言えないからな。

「注文はそんなものか？必要なら染めることもできるがどうする？」

「時間が惜しい。いつまでも魔物をのさばらせてはおけない。」

「確かにそうだ。解った、特急でやらせてもらう。おいその服をすぐに脱げ、すぐに取り掛かるぞ。」

ガイラの武闘着が脱がさせる。革工房ブリー、総員での作業が始まった。

出発、王女救出

８／１５　勇者支援生活１０７日目

なんと5日で竜闘着が完成した。革工房ブリーでは目の下に隈ができている職人でいっぱいだ。もっとも持ち主となるガイラの目の下の隈が一番ひどい。ここ3日ほど一時間置きに仮縫いと調整に付き合っていたからだ。それでもそのガイラは、今俺の目の前で完成した竜闘着に袖を通して御満悦だ。

「どこかおかしな所はないか？なければそれで完成だ。」

「ああ、もういいぜ。少し新品の堅さが残っているが、直に柔らかくなるだろう。」

「少しでも変なことがあったら持って来いよ。いつでも手直ししてやる。」

「了解。じゃああありがとな！」

それだけ言うとガイラが出て行った。眠そうな顔をしていたから速攻で宿屋だろうな。まだ用件が済んでいないのに困った奴だ。

「まだ料金を払ってませんでしたね。なめしの料金を含めて１５００Ｇでしたね。」

「５０００Ｇでいい。」

「それじゃあ割りが合わないでしょう。正規の料金と特急料金は払

いますよ。」

「いや、それはいい。ただ条件がある。次にドラゴンの皮が手に入ったら優先的に売って欲しい。あんな素材を他所の工房に渡すのはもったいない。」

なるほど、職人魂が騒ぐか。紹介した奴もそうだったな。

「解った。近いうちに手に入る予定がある。まずここに持ってくるよ。はい５０００G、ここに置いとくよ。」

金の入った皮袋を作業台の上に無造作に置く。目前で金を数えている、しばらくして納得したのか、懐に収めた。

「じゃあまた来る。残った革はそちらで処分してくれていい。」

「そうか悪いな。ありがたく貰っておく。」

俺が工房から出る。これで装備は揃った、技量も人材も十分だろう。ローラ王女を助けたら一気に物語は進むはずだ。とりあえずガイラが十分に休んでから、海底洞窟に向かおう。

――――――――――――――――――――――――――――――

翌朝になってもまだガイラは起きてこない。俺とマギー、アレフはすでに朝食を終え、宿屋のロビーでガイラを待っている。すでに荷物はまとめていつでも旅に出かけることはできる。

「あ～、久しぶりに良く寝た。まったく職人という奴は頑固で困る。

」

「まあそう言うな。そんな奴でなければ任せられん。」

「確かにお前の言う通りだ。で、なんでそんな旅支度なんだ？」

「なんの為に装備を整えたんだよ。」

「本番ですよ、次の目的地へ行きますよ。」

「本番？何処へ行くんだ？」

ガイラの目が急に輝く。戦いの話になると人が変わったかのようだ。

「海底洞窟だ。例の勇者４人組が全滅したところだ。何がいると思う？」

「半分溶けた鉄の盾を見つけた場所だな。ドラゴン、それも強い個体だろう？」

「正解。なんでそう思う。」

「あの時お前は必死で止めた。メルキドでアレフの装備を買って、ドラゴンを実際に倒した。さらにここで俺とお前の装備を作ってから、自信有り気に行くとなった。答えは明快だ。」

「そこまで解ったのなら、早く準備をして来い。」

ガイラが自分の部屋に駆け込む。５分とたたずに戻ってくる。

「ほら何をしてるんだ。早く行くぞ。」

アレフとマギーが呆れ顔だ。もちろん俺も呆れている。言ってもしょうがないので黙ってついて行くことにした。今回は馬を用意していないのでガイラの馬に野営用品を載せ、全員徒歩で進む。

「これからの予定だが、毒の沼地まで2日、毒の沼地の横断に1日、海底洞窟で1日か2日。それで目的地に着く予定だ。」

「どうやって毒の沼地を通るの？」

「前はガイラの薬草を使いました。今回もそうしますか？」

「いや、俺が魔法を使う。公開する予定だった遺失魔法の一つトラマナを使う。」

「どんな魔法なのかしら？」

「ああ、外部の影響を受けない空間を作る魔法だ。効果範囲は術者から半径２ｍほど、術者と共に移動することができる。」

「ずいぶんとピンポイントな魔法があるのね。」

「元々は溶岩の上を安全に通ったり、魔法の結界の中を通ったりする魔法だ。もちろん毒の沼地にも効果がある。」

「学者は相変わらず便利だ。アレフ、お前もそう思うよな？」

「便利って道具みたいに言っちゃ悪いですよ。」

「なんとでも言え、実際便利な魔法だ。」

マギーがいるのでいつもより速度は遅い。歩きながら会議をしているような感じもある。

「それにしてもなんで前のドラゴンより強いやつが、あんな場所にいるんだ?」

「さあな、守るべきものでもあるんじゃないか?」

「魔物に守るべきものがあるのですか?」

アレフが驚いて聞き返す。マギーもガイラも同感な様だ。

「おいおい、君等は魔物全てが破壊の権化だと思っているのか?」

「いや、まあ俺にとっては関係ないから気にしていない。」

「なるほど、ガイラらしい答えだ。敵か味方か、簡単でいいな。アレフはどうだ?」

「正直考えたことありませんでした。」

「私もそうよ。魔物は人間を襲ってくるもの、そういう認識でしかないわ。」

「実に残念な答えだ。まず魔物に対する認識を変えよう。魔物にはいくつか種類がある。第一に野生生物が瘴気によって凶暴化したもの。スライム、ドラキー、メーダ、キメラなどがこれにあたる。次

に魔王の意志に従う魔物。竜王の手下ではドラゴン、魔法使い系、リカント系がこれだ。そして成仏できない魂の魔物、鎧系、骸骨系、ゴースト系だな。」

「それが本当なら竜王がいなくなったら、襲ってこなくなる魔物もいるってことね。」

「そうだな。まず魔物にされた魂は成仏するだろうね。それと野生生物も滅多なことでは襲ってこない。ガイラもそれは知っているだろう？」

「そうだったな。竜王が現れる前からも、その野生生物に該当する奴等はいた。巣に近づくとか繁殖期でもなければ襲ってこなかったな。まあ大量発生した時は退治の依頼がきたもんだ。」

「そうだ、よく旅費を稼ぐのに依頼を受けたものだ。」

「そんなことしてたのですね。」

「結構いい金になったんだ。まあそれはいいとして、問題なのは自分の意志で魔王に従う奴等だ。意志がある、つまり自分で考えて行動することができる。」

ここまで話して一息をつく。俺以外の三人も考えもしていなかったことに息を飲んでいる。

「竜王自身も破壊の権化でないことも解っている。光の球を盗んだり、王女を誘拐させたりと忙しいやつだ。破壊の権化ならアレフガルド中を暴れまくっているはずだな。」

「それもそうね。だから竜王と意志を持っている魔物は恐ろしい、そう言いたいのね。」

「ああ、なんらかの策謀があるかもしれない。竜王側に勧誘を受ける者もあるだろう。」

「それは考えすぎじゃない。いくらなんでも竜王につくなんてないわよ。」

「マギー、俺達を3日に亘って狙い続けた影の騎士を操っていたのは人間だった。それと君が解決した漆黒の騎士も、俺を襲ってきた赤い飾りの悪魔の騎士もそうだったと考えている。」

マギーが黙って考え込む。アレフとガイラも深刻な顔をしている。

「今言ったのは公にしないでくれ。疑心暗鬼になった挙句、人間同士で争うことになる。まあそういったことのできる敵だと思ってくれるだけでいい。」

三人が黙って頷く。竜王の最後の誘惑にかられる様な人物ではないことは解っているが、念の為に伝えておく。

「さあ、もう少し急ごうか。先は長いぞ。」

わざとらしいくらい明るい声をかける。まずローラ王女を救出して人間にとって明るいニュースをもたらす。そのことによって竜王の誘惑にかられる者は減るはずだ。

竜王の眷属

８／１７　勇者支援生活　１０９日目

毒の沼地が目の前に広がる。

「じゃあ通れる様に魔法を使うぞ。

俺はＭＰを2消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、浄化の力となりて、我に付き従い穢れを取り除け、トラマナ！」

俺の周りに薄っすらと光る空間ができる。三人が俺と一緒に歩く。ガイラの口には特製のマスクが装着されている。

「半信半疑だったがなんともないみたいだな。」

「そう言う台詞はその口についてる物を取ってから言え。」

ガイラが黙ったままマスクを外した。マギーが魔法の効果範囲から顔を出す。顔をしかめてむせている。

「けほっけほっ！毒の沼地って嫌な臭いがするのね。」

「マギーさん、止めた方がいいですよ。長い間吸うと体調が悪くなりますよ。」

「ええ、もう頼まれても吸わないから。ねえケルテン、この魔法は熱や魔法障壁にも効くと言ってたわね。本当に何でも効果があるの

？」

「ん？対象となる障害によって詠唱文が違うよ。」

毒の沼地の南側、海岸線に沿って歩く。マギーが何かぶつぶつ言っている。

「あのさあ、これで熱を防ぐことができるなら、フバーハはいらないのではなくて？」

「この魔法は効果が現れると少しずつ浄化の力が失われていく。だから強い炎とかにはすぐに効果を失ってしまう。フバーハなら効果時間以内なら効果を失うことはない。」

「なるほどねえ、でも溶岩の上も歩けると言ってなかった？」

「言ったよ、でも効果時間が短い。もっともこのアレフガルドに溶岩を通過しなくてはいけない場所なんてないから必要ないね。」

「たしかにそうね。じゃあ魔法障壁は？」

「ラダトーム城の一部、メルキドの一部にそんな空間があるよ。効果は実践済みだよ。」

「おしゃべりはいいから急ごうぜ。」

ガイラが急いている。俺の歩く速度が遅くなっていることに苛立っているな。

「悪い悪い。じゃあ先を急ごう。マギー、また詳しく教えるから。」

俺が足を速める。皆が寄り添って歩く。トラマナの光が徐々に薄れると、再びトラマナをかける。

――――――――――――――――――――――――

夕方に海底洞窟の北口に辿り着く。前と同じく、夜は洞窟内で過ごした。

「マギーは来たことなかったな。ここから南が本道だ、リムルダールのある島に続いている。ちなみにこの洞窟は４００年前に手で掘られたものだ。」

「ふ～ん、それは大変だったでしょうね。」

「だろうね。それでこっちが自然道、多分掘ったときに偶然見つかったものだろう。こっちは特に暗いからマギー、明かりを頼む。」

そう言って背嚢から松明を二本取り出して渡す。マギーがレミーラを使う、一本はガイラ、もう一本はマギーに持たせる。隊列はガイラ、俺、マギー、アレフの順番だ。広いところでは二列で進む。

「こっちでいいのか？お前しか道を知らないぜ。」

「前は真っ暗の中進んだから、いまいち記憶に自信がない。左手の法で進んでくれ。」

「おっ、アレフの言ってたあれか。」

「そうですよ。すみません、ガイラ止まって下さい。まだ地図が書けてない。」

マギーが明かりで手元を照らし、アレフが紙に地図を書いている。ガイラが呆れた顔をしている。

「またこれだ。ガライの墓でもこうだったぞ。」

「これは必要なことなんです。この海底洞窟は東側だけしか書いてなかったから、気になっていたんです。」

「アレフ、これすごいわ！帰ったら持ってる地図を頂戴。図書館に収めるから、いい？」

マギーが興奮気味で話している。少し気になったのでアレフの手元から一枚手に取る。道の幅、長さ、高さまで全て書かれている。

「ずいぶん詳細な地図だな。俺でもここまで書かないな。」

「やりすぎですか？」

「もうちょっと簡略化してもいいが、マギーが図書館に地図として収めてくれるなら、これぐらいでもいいかな。勇者アレフの地図として自信を持って後世に残せるな。」

「なあ、もう進もうぜ。俺は帰る道さえ確保できればいい。」

「すみません。じゃあこんな感じでいいです。」

アレフが地図を懐にしまう。5分おきにアレフが立ち止まって地

図を書きながら進む。前にシュミットと来たときと違い、明かりがあるせいなのか、人数が多いせいなのか、襲ってくる魔物もいない。およそ半日で目的地についた。

「この辺だ、ここを曲がった先からは未知の領域だ。」

「少し獣臭いような、焦げ臭いような・・・ちょっと見てくるか。」

ガイラが足音を忍ばせて先行する。しばらくして戻ってくる。

「そこを曲がった先は大空洞になっている。敵は見えなかった。このまま進むか?」

「行きましょう。ここで逡巡していても仕方がありません。僕達以外の勇者が亡くなった場所ですから、調べるべきでしょう。」

「俺も賛成だ。ガイラもマギーもいいな。」

二人が頷く。4人で進む、曲がったそこはドーム状の大空洞。何かがいる気配はない。壁に沿って進む、いきなり大空洞に男の声が響いた。

「これはこれは高名な勇者アレフ殿ですな。お会いできて光栄です。」

暗闇に礼服を着た端整な顔立ちの男が立っている。こいつが声の主のようだ。

「失礼ながら、あなたは誰ですか?なぜ僕のことを?」

「これは失礼しました。私は竜王様の眷属のオピオーン、短い間ですがお見知りおきを。」

うやうやしく頭を下げる、だがその言葉には人を馬鹿にしたような雰囲気がある。

「竜王の眷属だと、ならばなぜドラゴンの姿をしていない！」

「これは仮の姿です。それより勇者アレフ、あなたの話をしましょう。我々の手の者より聞いてますよ、天に祈り雷を落とすことができると。それは誠でしょうか？」

「アレフ、答える必要はない。」

「失礼な人ですね。今私は勇者アレフと会話しているのです。少し黙っててもらえますか？」

オピオーンなる者が殺気を放つ。アレフとガイラが構え、マギーが一歩退く。

「アレフと会話したいなら、まずその人を馬鹿にしたような話し方をやめるんだな。聞いていて虫唾が走るぜ。」

「人間ごときにずいぶんと舐められたものです。あなた方など一息で消し炭にできるのですよ。」

「馬鹿か貴様、そんなことは対策済みだっ！」

「ガイラ！余計な事は言うな。」

「なるほど、あの者が言っていた曲者とはあなたですか。では対話の相手を代えましょう。あなたは何を知っているのですか？」

「ふん、大物ぶってはいるがお前自身が何者か解っていないようだな。竜王の眷属だと？可笑しくて腹がよじれるわ。」

「どう言う意味だ！」

俺の言葉に、オピオーンが声を荒げる。。

「竜王に眷属などいない。」

俺以外の全ての者が呆気に取られている。

「もしかしてお前、竜王の本当の姿を知らないんじゃないか？もしそうならお前、信頼されていないな。かわいそうに・・・捨て駒だったりして、プププッ！アハハッハハハハハハッ！」

思わず噴出す。広い空間に俺の笑い声だけが響く。端整な顔をしたオピオーンの顔が真っ赤に染まる。闘いは近い。ここにいる者全てにそれだけは解った。

王女救出

「何が可笑しいっ！！！」

一人馬鹿笑いをする俺に激高したオピオーンが怒鳴った。俺は馬鹿笑いを止める。

「もう許さんぞ、奴との約束など知るもんか！人間どもよ、跡形も無く消してくれるわっ！」

オピオーンの人型が薄れ、その影が徐々に大きくなる。俺は左手を後ろに回して人差し指と中指を立てる、さらに手を開く。

「アレフ、前へ。ガイラ、右頼む。皆固まれ！」

二人に声をかけてからピオリムを使う。

（俺はＭＰを3消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、
　お万能たる力よ、内なる光となりて、我等と駆けよ。ピオリム！）

目の前に巨大なドラゴンが姿を現す。口を大きく開け、思いっきり息を吸い込む。次の瞬間、ものすごい勢いで炎が叩きつけられた。激しい息を吐き終えたオピオーンが勝ち誇って、炎の跡を見つめる。

「何・・・だと・？」

そこには盾を構えたアレフを先頭に無傷の４人が立っている。ドラゴン、オピオーンは口を開いたまま立ち呆ける。

「マギー、アレフを頼む。ガイラ、アレフ行けっ！」

同時に右手を横に突き出して、親指を立てる。さらにガイラを目標にバイキルト。

（俺はＭＰを8消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、
　おお万能たる力よ、鋭き刃となりて、かの者の武器に宿れ。バイキルト！）

飛び出したアレフの炎の剣がドラゴンの左前脚の鱗を切り裂く。そこにガイラの右ストレート、鮮血が飛び散る。

「ガアァァァァァ！！おのれぇー、人間めぇ！」

痛みと屈辱にドラゴンが吼える。アレフとガイラのいる場所に右脚が横殴りに振られる、すでに飛びのいて二人はいない。

「マギー、俺にもだっ！」

ドラゴンの懐に飛び込む。

（俺はＭＰを3消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ、
　おお万能たる力よ、酸となり、この者の蝕め、ルカニ！）

ドラゴンに手を当てて魔法を発動する。さらに飛びのきざまに居合いでその場所を切り裂く。魔力の乗った刀がドラゴンの鱗を切り裂く。

「うがぁぁぁ、馬鹿なっ！俺様の鱗がぁ・・・貴様っ、何をした！？」

自慢の鱗をいとも簡単に切り裂かれたオピオーンが、思わず疑問を口にする。間が開いて、俺達が仕切りなおす。アレフがマギーの前に戻り、ガイラが大きく右に離れる。俺はガイラと正反対の位置。

「たいした鱗でもないな。お前、カルシウム取ってるか？」

右手の人差し指でドラゴンを指しながら、またまたわざとらしい挑発をする。ドラゴンの首が反射的に俺の方を振り向く。

「ベギラマッ！」

マギーの手から放たれた電撃がドラゴンを射抜き、左目が弾けた。

「ぐあぁぁぁ！」

ドラゴンの顔が苦痛に歪む。それでも首をもたげて大きく息を吸う。

「すうぅぅぅ！ぐふっ！」

大きく息を吸った隙を突いて、ガイラが懐に飛び込みわき腹に強烈な一撃。ドラゴンが思わず吸った息を吐き出してしまう。アレフが位置の下がった首を切り付ける、一瞬遅れて鮮血が飛び散る。痛みにのた打ち回ったドラゴンの頭がむちゃくちゃに振られ、巻き込まれたアレフは吹っ飛ぶ。俺とマギーの目があう、マギーが頷く。一瞬の隙を突いて息を吸ったドラゴンの火の息が、倒れたアレフを

襲う。

「ベホイミ！」

マギーのかけ声と共にアレフの体が光輝く。

「ギャァァァァァーーー！！！」

突然ドラゴンが悲鳴をあげ、左に傾く。ガイラの拳がドラゴンの左脚を打ち砕いたようだ。がら空きの右脚に飛び込み、さっきの傷を再び斬る。ガキッ！骨に当たった嫌な感触、構わず振り抜く。手ごたえがあった。ドラゴンが踏ん張れずに前に倒れた。飛び起きたアレフが、目の前のドラゴンの左目に炎の剣を付きたてる。ドラゴンの首がものすごい勢いで上に振られるが、炎の剣からアレフの手から離れている。

「グァァァァァ！！なぜ俺様が人間ごときに、なぜだぁ！なぜだぁぁぁぁっ・・・。」

刺さったまま傷口を焼き続ける炎の剣、その痛みにドラゴンの全身がのた打ち回る。首が、尻尾が辺り構わず叩きつけられる。俺達は距離をとってそれを眺める。徐々にその動きが小さくなる。ドラゴンの声が細くなり、その動きが止まる。

「まだだっ！油断するな・・・・・・・・・・ベギラマッ！」

俺の手からでた稲妻がドラゴンを貫く。ドラゴンの尻尾がビクンと跳ね上がって地面に落ちる。それを最後に完全にドラゴン、オピオーンは動きを止めた。

「最後はやりすぎじゃなかった？」

マギーが咎めるかの様に俺に呟く。

「そうだね。」

俺も呟く。何時の間にかアレフとガイラも近くに立っている。二人は俺を咎めることはない。

「学者、お前とマギーでやってたハンドサインはなんだ？俺達は聞いてないぞ。」

ガイラがふざけて俺に聞く。

「ああ、敵に情報を与えてやる必要はないからな。二人で決めておいた。人差し指を立てて敵を指す、これは攻撃の合図。二本指を立てたら、フバーハの合図。手を完全に開いたら全員を回復、親指を立てたら武器の強化、他にもいろいろある。」

「僕へのベホイミもそうですか？」

「それは違う。俺とマギーのアイコンタクトの結果だ。」

「そうよ、私が回復すると合図をしたわ。」

「助かりました。ありがとうございます。」

「礼なんていらないわ。アレフが最初に前で炎を受けたのも、ガイラが飛び込むのも、私が回復するのも全部役割があってのこと。そうでしょ？ケルテン！」

「そうだ。今回はまず自尊心の強い奴を挑発して炎の息を吐かせた。その為にわざわざ固まってやったんだ、絶対にそうすると確信していた。直前にマギーにフバーハ、炎が治まるころにベホマラー、奴から見たら消し炭にするつもりの炎が、全く効果が無かった様に見えただろう。」

「それはかわいそうだな。俺も渾身の一撃を微動だにせず受け止められたら、自信を失うな。」

「そうだ、そこからはもうおまけみたいなもんだ。とりあえず復習は後だ。こいつが何を隠していたのか調べよう。」

　俺とマギー、アレフとガイラの二手に別れて、探索する。しばらくしてアレフの声が響いた。

「こっちです。こっちに牢屋があります。」

　アレフが手にしている明かりが振られる。俺とマギーが駆け寄る。アレフとガイラが中を見て立ちすくむ。

「どうしたの？誰かいるの？・・・・キャッ！」

　覗き込んだマギーの口から悲鳴が上がる。汚いぼろぼろのドレス、がりがりの足に鉄球のついた足枷、汚れた長い金髪、そこにいたのは美しかった面影の見えないローラ王女だった。

　――――――――――――――――――――――――――――――――

黄金のローブを身に纏った者が、ドラゴンと人間達の死闘を眺めていた。

「まさかあのオピオーンがああも簡単に殺られるとは・・・しかしオピオーンも口ほどにもない。せめて奴等に奥の手ぐらい使わせてから死ねば・・・。何も収穫を得ることはできなかったではないか。」

視線の先で人間達が牢屋に集まる。

「あの者との約定は果たせなかったか。もう縁は切るつもりだったからよしとするか。どうせならローラ王女は生きておる、返してやろうか。そう伝えた時の驚く顔でも見たかったのだが・・・。」

足音も無く黄金のローブが移動する。

「鎧の騎士と骸骨の一個中隊、影の騎士による暗殺部隊、メルキドに送った軍、そしてオピオーン。全てあの者の手駒を中心にやられておる。私も危うく数百年の英知を失うところであった。まずこの手駒を奪うことにするか。」

黄金のローブが床に落ち、朽ち果てた。すでにそこには何もいない。

アレフとローラ

「ひどい・・・・・・・・・・・・・。」

アレフがあまりの凄惨さに絶句する。牢屋の中には生活に必要そうな物は何一つとしてない。汚い皿とおそらく排泄物を入れる壷、粗末な毛布だけ。そこに何とか服装で女性と解る人物が倒れている。

「誰なんでしょうか？」

アレフが聞いて当然の質問をする。俺は答えを知っている、それでもこの倒れている人物がローラ王女とは思えない。

「誰でもいい、助けるぞ。アレフ、鍵を出せ！」

ガイラが強い口調で命令する。慌ててアレフが魔法の鍵を取り出して牢屋を開ける。俺とガイラが中に飛び込む。俺達の気配に目を覚ました女性がか細い声で悲鳴を上げた。

「いやあぁぁぁーーーーー！来ないで！！！」

その女性が壁際に逃げ、弱々しく俺達を拒絶する。俺とガイラが近づくとさらに逃げようとする。

「駄目だ。俺達では怯えさせるだけだ。」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう。僕が無理にでもここから出します。」

アレフが俺たちを押しのけてその女性に近づく。アレフが膝をつき、手を差し伸べる。

「僕は勇者アレフです。あなたを助けに来ました。」

一瞬の躊躇の後、その手を握る。

「勇者・さ・・ま・・・？」

そのまま、アレフに体重を預けるように倒れた。慌ててアレフが息を確かめる。

「大丈夫、気絶しただけです。でも生きているのが不思議なぐらいです。なんとかできませんか？」

「解らん、まずここから出よう。アレフ、そのまま抱いていてやれ。」

アレフが抱いたまま牢から出る。広い場所で顔を確かめる。

「この人、やせ細っているけど綺麗な人です。なんとなく見覚えがあります、もしかしてローラ姫じゃないですか？」

俺は着ている服を調べる振りをする。答えは知っているから、もっともらしく誘導する。

「この服を見てくれ、汚れてはいるが絹だ、それもところどころに金糸や銀糸で刺繍がしてある。こんな服を着れるのは貴族か王族しかいない。そうだろう？マギー！」

マギーがその服の裾を手に取って調べる。

「ここまでの服は私も持っていないわ。それにこの御顔は間違いなくローラ王女様よ。」

「そうか、ならマイラに連れ帰って養生してもらおう。」

俺の言葉に三人が不思議そうな顔をする。

「なんで?すぐに城に帰るべきよ。」

「マギーさんの言う通りです。王様もお待ちのはずです。」

「学者、こればかりはお前が間違っていると思うぜ。」

三人から猛烈に批判される。普通ならそう考えるだろう。しかし俺はアレフとローラ姫のフラグを立ててやりたい。屁理屈をこねてでも俺の意見を通してみせる。

「駄目だ。今の姿のまま城に連れ帰ることはできない。きっと本人にとっても後々まで残る屈辱になり兼ねない。マギー、もし君ならこの姿で連れかえられたいか?」

「そっ、それはお断りしたいわね。」

「そうだろう。せめて自分で歩けるぐらいまでは養生させたい。多分自分では歩けないだろう。」

皆の視線がローラ王女の足に集まる。痩せこけて骨と皮だけだ。

「改めて見ると酷いな。確かに自力で歩けるとは思えんな。」

「そうだ、ガイラ。それに何ヶ月も体を洗っていないだろうからマイラで綺麗になってもらいたい。アレフ、納得したか？」

「それでも2、3日したら城に連れ帰るべきです。」

「そうだな、精神が正常ならその選択もあるだろう。」

「精神が正常？どういう意味ですか？」

「さっき俺とガイラを見て逃げようとした。たしかに見下ろすように立った俺達に非があるが、それにしても怯えすぎだ。多分精神に異常をきたしているいるだろう。こんな状態で城に帰ったら取り返しのつかないことになる。」

俺の屁理屈に三人が押されている。

「まあ、俺の取り越し苦労かもしれん。まずマイラへ戻ろう。」

「そうね、様子を見てから考えましょう。じゃあすぐにルーラで行きましょう。」

そうだ、ルーラでマイラに戻ればすぐだな。・・・あれ？なんか忘れているような気がする。

「あっ！ルーラは駄目だ。」

「なんでよっ！こんな時まで何言ってるの！」

「俺達3人は常に居場所が知られている。ここから急にマイラに戻るわけにはいかない。」

「じゃあ、どうするのよ。もうルーラを公表してしまえばいいじゃない！」

マギーが俺に食ってかかる。

「これだけは駄目だ。あまりにリスクが大き過ぎる。」

「リスク、リスクって、あなた心配しすぎじゃない。今は緊急時なのよ！」

「絶対に公表しない。これはずっと前から決めていたことだ・・・・・・・よし、ならこうしよう。マギー、王女を連れてマイラへ跳べ。それで宿屋で静養させる。俺達はなるべく急いで戻る。」

「でも私一人では運べないわ。」

「村の入り口に着いたら、門番に頼んで協力してもらえばいい。魔物に捕らわれていた人を助けたとでも言えば手伝ってくれるだろう。」

「解った、口論している時間が勿体無いわ。なるべく早く戻ってきてね。」

アレフが自分のマントにローラ王女を包んで地面に降ろす。マギーが手を当てて呟く。リレミトの魔法が発動して二人が消えた。

「さて、アレフ。お前も急いで戻れ、ガイラの馬を使えば、お前だ

けでも早く戻ることができるだろう。」

「なんでですか？別に僕じゃなくてもいいじゃないですか。ケルテンさんなら何かできるでしょう。それにガイラだって薬師としてできることがある。僕は何もしてやれない！」

アレフが悔しそうに言い放つ。

「いや、駄目だ。俺やガイラでは恐れさせるだけだ。さっきも見ただろう。」

「そうだ、アレフ。俺のライを貸してやる、すぐに戻れ。マギーの嬢ちゃんの言い草じゃねえが時間が惜しい。そうだろっ！」

ガイラはそれだけ言うと口笛を吹く。待機させておいたライが走ってくる。ガイラが鼻筋を撫でながら声をかける。

「ライ、悪いがこいつを乗せてやってくれ。暴れるんじゃねえぞ。」

そしてアレフに手綱を渡す。ガイラが手を離しても暴れることはない。

「すみません。お借りします・・・・・・・・リレミト！」

アレフとライの姿が消える。俺とガイラがため息をつく。

「おい、なんでそんな必死にアレフを行かせたんだ？」

「さっきも言っただろう。俺達では怖すぎる、それだけだ。」

「下手な言い訳だな。そうとは限るまい、他に理由があるだろう。」

俺はさらに深いため息をつく。最近よく思考を読まれているようだ。

「俺やお前が城に王女を連れ戻る、その光景を想像できるか？」

「いや、俺の柄じゃないな。・・・なるほど、勇者アレフに箔をつけるか。神の申し子、勇者アレフが誘拐された王女を連れ帰る、最高の光景だな。」

「そういうことだ、俺は影でいい。お前も自由でいたい。アレフは勇者としての覚悟ができてきた。俺は背中を押してやるだけだ。」

「勇者の師匠として名前が残るかもしれんぞ。」

「ふん、言ってろ。さてと帰る前にとっととドラゴンを解体するぞ。革工房に約束してたんだ。」

「そういやそんな物あったな。オピオーンだっけ？かわいそうだから名前だけは覚えといてやるか。」

二人で黙々とドラゴンを解体する。手を動かしながら思考が巡る。アレフとローラを会わせる、これをしないと未来の歴史が大きく変わってしまう。これからの歴史を誘導していることに恐怖を感じた。

心の病

８／２１　勇者支援生活１１３日目

マイラの村に戻った、すぐに宿屋に駆け込む。あまり広くないロビーにマギーが座って佇んでいる。

「今戻った。マギー、こんなところでどうした？」

「ああ、おかえり。姫様がアレフ以外誰も近づけないの。私はまだましだけど、他の人に会おうものなら悲鳴あげて逃げ出しちゃうわ。」

「やはりそうか、とても城に帰れるような状態じゃないな。」

「そうよ、それでアレフが四六時中一緒にいる。部屋の中でずっと手を握ってるわ。魔法か秘術で何とかできないの？」

「そんな便利なもの知らないよ。できるのは目を覚まさせることと、一時的に混乱させることぐらいかな。どちらも意味ないな。ガイラ、精神に効くような薬は知らないか？」

「残念ながら知らないな。うちの流儀ではまず精神を鍛える、ということになっている。」

「あっそう。なら徐々に日常に戻すとするしかないな。」

「日常ってどういうこと？」

「そうだな・・・いつもの食事に、いつもの衣服、使い慣れた物があるとなおいいかもな・・・よし一度城に戻って何が持ってこよう。」

俺のその言葉に二人が不思議そうな顔をしている。

「城には知らせないんじゃなかったか？」

「そのつもりだったが、そうはいかないようだ。一部の信頼できる奴に頼もう。」

「誰に頼むの？」

「シュミットしかいないな。できれば大臣にも伝えたくないんだが、最悪知られてしまうかもしれない。」

さらに不思議そうな顔をされる。

「大臣にも秘密なの、なんで？」

「大事にしかねない。すぐにでも近衛騎士団をつれて向かえに来る可能性が高い。」

「ありそうね。あの人体面を気にする人だから。」

「はあ、そういう訳でガイラ、留守番頼めるか？俺とマギーで城に戻る。」

「ああ構わんよ、それで俺は何をすればいい。」

「そうだな、姫様の食事を頼む。できるだけ滋養強壮効果のある食事がいいな。得意分野だろ。」

「まかせとけ！俺の得意分野だ。」

「ＯＫ，あとはドラゴンの素材を鍛冶屋と革工房に卸しておいてくれ。戻るのは早くて3日後だ、じゃあマギー行くぞ。」

背負っていた荷物を降ろすとそのまま宿屋をでる。マギーの馬車ごと城に戻るべく厩舎まで急いで歩く。馬車に馬を繋いでからルーラを使う。次の瞬間、久しぶりのラダトームの景色が見える。

「悪いが俺は急いで城に戻る。マギーは屋敷か図書館にいてくれ。」

それだけ伝えて城に走る。後ろでマギーが何か言ってたようだが耳に届かない。城に入ってからは走るのを止めて、急ぎ歩く。基本的に城内は走ることは禁止されている。なにか俺とすれ違う武官が騒がしい。文官はそうでもない。二階に上がる、近衛騎士の控え室が目の前、そこにいたほとんどの騎士が驚いた顔をしている。

「あれっ？どうかしたか・・・。」

「お前、それ・・・。ちょっと来い！」

たまたまそこにいたサイモンが俺を控え室に引っ張り込む。

「なんだよ、俺は忙しいんだ。用があるなら急いでくれ。」

「お前、わざとやってるのか？それの鎧はなんだ、見ない鎧だな。」

しまった、ドラゴンスケイルのままだった。どう誤魔化そうか・・・。

「ああ、特注の鎧だ。今までの鎧はメルキドで悪くなったから作り直してもらった。」

「なるほど・・・それドラゴンの鱗だよな。」

その声にその場にいた全ての騎士がざわつく。

「やっぱり解るか？」

「解らんはずがないだろう。そんな大きい鱗なんか他にない。」

「しまったな。公表する気はなかったんだが・・・手遅れだよな。」

「そうだろうな。まあドラゴンを狩ったお前等にしか作れない鎧だからな、もしかすると欲しいと言う奴が現れるかもしれない、覚悟はしておけよ。」

「おう、忠告はありがたく受け取っておく。」

それはまずいな。幾ら金を詰まれても売る気はないが、面倒くさいことになるかもしれない。いやいや、今はそれどころではない。

「サイモン、シュミットを見ていないか？」

「知らないな。誰か特務隊士のシュミット殿を知らないか？」

近衛騎士達がいろいろ言っている。ほとんどの者が知らないよう

だ。

「思い出した。そういえば3日ほど前にドムドーラに行くと言っていた。なにか調査することができたらしい。」

ドムドーラに何の用だろう?魔物の巣窟に忍び込んでまで調べることなんかあるだろうか?しかしシュミットがいないとなると誰に相談するべきだろうか。

「隊長は?」

「ああ、隊長なら部屋にいるぜ。」

無言で立ち上がると近衛騎士隊長の部屋まで歩き、ノックをする。返事も待たずに入室する。そこには書類に埋もれたアイゼンマウアー近衛騎士隊長が座っている。俺を訝しげに見る。

「緊急に付き非礼はお許し下さい。他に相談できる者がいません。」

「緊急かつ誰にも相談できない話か。お前がそこまで慌てるとは相当な問題だろうな。解った、聞こう。」

俺は扉を閉めて、誰も聞いていないか確認する。

「この部屋は外部に音が漏れない様になっている。心配はいらない。」

「そうですか。ではいきなりですが本題に入ります。実はローラ王女様を助けだしました。」

「なんだとっ！それは誠か！」

いきなり立ち上がって声を荒げる。

「誠です、今はマイラの村で保護しています。ただ長い牢生活で健康を害し、さらに精神を病んでいます。」

「なんと、ではすぐにでも迎えを出さねばなるまい。」

「いけません。現状ではアレフ以外の誰にも心を開きません。この城から大挙して押し寄せれば取り返しのつかないことになります。故に他の誰にも相談できないのです。」

「ではどうせよと言うのだ？」

アイゼンマウアーが難しい顔をしている。

「まず健康を取り戻してもらいます。同時に病んだ心も癒して頂きます。誘拐される前に着用していた服や寝具などを用意して下さい。それで日常に戻れるように取り計らいます。」

「心の病か・・・それは近衛の領域ではない。お前の見立てに頼るしかないな・・・よろしい私がなんとかしよう。これは陛下にも話してはいけないか？」

「話さない方がよろしいでしょう。元に戻らない可能性もあります。余計な希望は抱かせない方がよろしいかと・・・。」

「・・・・そうか。わかった、そうしよう。それで用意した物はどうすればいいか？」

「ヴィッセンブルン家の屋敷にお持ち下さい。そこに馬車を用意しています。」

「では明朝5時に持っていく。それでいいな。」

「お願いいたします。苦労をかけます。」

「元々近衛騎士の不手際から始まった話だ。王家の為に尽力するのは近衛の務めである。」

「確かにそうですね。では失礼致します。」

俺は退室した。その部屋の中で近衛騎士隊長が決死の覚悟を決めたことには少しも気づいていなかった。

託された物

8／22　勇者支援生活　114日目

早朝5時、ヴィッセンブルン家の屋敷にいる。

「アイゼンマウアー隊長は来てくれるかしら?」

「今は待つしかない。隊長の気が変わって俺達を拘束する為に、兵士を連れてくる可能性もある。もしくは入手に失敗して捕まっている可能性もある。」

「もし拘束しに来たらどうするの?」

「全力で抵抗する。黙って捕まる気はない。」

「そう、あなたらしい、そういう時だけは覇気と自信に満ちているわね。」

「普段の俺にはそれがないみたいな言い方だな。」

「そうよ、せいぜい学者の卵っていうところかしら?武を職業とする人には見えないわ。」

「それは俺にとって褒め言葉だな・・・静かに!誰か来た。」

俺達は馬車の影に姿を隠す。薄く明るくなった空の下こちらに向かってくる人がいる、人数は3人か。先頭にいるのはアイゼンマウアー隊長か。

「私だ、ケルテン、いるか？」

間違いないアイゼンマウアー隊長だ。俺が姿を現すとほっとしたようだ。

「よく来ていただけました。来てくれないかと思ってました。」

「話は後だ、荷物はここに積めばいいのか？」

「そこでお願いします。」

アイゼンマウアーと残りの二人が荷物を馬車に積む。トランクケースが二つ、布団らしき包みが二つ。

「確かに渡したぞ、姫様のことを頼む。」

アイゼンマウアー隊長が祈らんばかりに声を絞り出す。その言葉に嘘はない。

「私が嘘をついているとしたらどうしますか？」

「地の果てまで追いかけてでも殺す。だがお前は嘘はついていないことは私には解る。」

「大した自信ですね。その根拠はなんですか？」

「お前が嘘をつくときは完璧な理論武装をする。現状でお前の知識と分析力を上回る人材はいないから、そのもっともな理論に騙させない者はいない。だが今回の頼みにはそれがない。これでも人を見

る目には自信がある。」

「そこまで信頼されたら期待に答えなくてはいけませんね。誠心誠意務めさせていただきます。でもなんでそこまでしていただけるのですか？」

「私の忠誠は陛下の為だけにある。たとえ一時的に陛下のご不興をかったとしても、それが陛下の為ならなんでもやる。」

「只一人の為の忠誠ですか、それで納得できました。」

「俺の話はもういいだろう。もう行くがいい。」

俺は一礼して手綱を握る。

「待てっ！これを渡しておく。」

アイゼンマウアーが懐から巨大な赤い宝石のついたペンダントを出して俺に渡す。

「これは？」

「解らん、お前ならこれが何か解るだろう。」

「なぜこれを私に？」

「解らん、昨日お前の話を聞いた後、家で何気に見つけた。気になったので持ってきた。」

「これが何か知ってますか？」

「だから知らぬと言っている。ただ我が家に大昔から伝わる物とだけ聞いている。こうして手にしたのも２０年ぶりぐらいだ。なぜ昨日手にしたか不思議でたまらん。」

「そうですか。前にも言いましたが隊長は勇者と共に闘った戦士の末裔です。これは勇者が戦士に託した太陽の石、つまり勇者の三種の神器の一つです。」

「なるほど、勇者ロトの導きか。ならばお前の勇者に渡せ。そして竜王を倒すのだ。」

「たしかに承りました。必ず期待に答えます。」

「よし、もう行け！」

俺は手綱で馬に合図を送り、城下街をゆっくりと走る。しばらく走らせると後ろに乗っているマギーが呟いた。

「まだ見送ってるわよ。」

後ろを確かめたマギーの一言に何か言い知れぬ不安を感じた。

――――――――――――――――――――――――――――――

ラダトーム城に朝が来る。そこに異変が見つかった。一人の侍従が国務大臣の執務室に駆け込んでくる。

「大変です、王女様の部屋に異変です。」

「なんだとっ！どういうことだ！！！」

「解りません。毎朝の掃除に入りましたところ、寝具がなくなっているのを発見しました。」

「案内せよ！私自ら行く！」

その侍従が大臣を連れて城内を走る。そのあまりの剣幕にすれ違う人が割れる。ローラ王女の部屋の扉を開ける。天蓋付きのベッドにあるはずの布団がない。

「なんだ、これは・・・説明せよ！」

「いえ、私はいつもの様に朝のベッドメイキングに入っただけです。その時にはこうなっていました。」

「ぬう、もうよい！昨晩の見張りは何処だっ！？」

その怒声に外に立っていた近衛騎士二人が慌てて近づく。

「我々は朝からです。昨夜の者は交代しておりません。」

「すぐに連れてこい！」

一人がすぐに早足で離れる。しばらくして先ほどの騎士に連れられた眠そうな騎士二人と近衛騎士隊長がやってきた。

「こんな朝早くからどういたしましたか？」

「どうしましたかではない、近衛騎士隊長どの。これを見たまえっ！」

アイゼンマウアーと二人の騎士が部屋を覗き込む。

「寝具がありませんな。侍従どのが片付けたのですか？」

「いえ、私が入ったときにはすでにありませんでした。」

「それは不思議ですな、それだけですかな？」

「解りません。」

「では侍従殿、調べてください。なるべく他の者は立ち入らぬ様にしましょう」

侍従が机、鏡台、箪笥を調べる。いくつかの箪笥が調べられた後に報告する。

「いくつかの衣服がなくなっています。盗まれたのでしょうか？」

「それは確かですか？勘違いということはないでしょうね。」

「間違いございません。侍従を務めて３０年、どこに何があるかははっきりと解っています。」

「では盗まれたと考えるべきでしょう。お前達、昨晩に異常はなかったか？」

「いえ、特に異常はありませんでした。」

連れてこられた騎士二人が互いに顔を見合わせて答える。顔を真っ赤にした大臣が怒鳴る。

「現にこうして盗まれておる！近衛はたるんでおるのではないか！近衛騎士隊長どの、なんらかの責任は取っていただけないといけませんな。この件は陛下に報告します、よろしいですな！」

「仕方ありません、そうして下さい。」

大臣がどんどん足音を立てて早足で立ち去る。

「隊長、申し訳ありません。」

「嗚呼、私に任せておけ。お前達に悪いようにはしないから控え室に戻りなさい。」

アイゼンマウアーの手が近衛騎士の背を軽く押す。肩を落とした騎士が足を引きずるように戻っていった。

ことの結末

ラダトーム城　謁見の大広間

ラルス１６世が玉座に座っている。左に国務大臣、縦に文官が並ぶ。反対側には誰も立っていない。国王の眼前に近衛騎士隊長と近衛騎士２名が片膝をついて控える。

「陛下、誠に残念な報告をせねばなりません。」

「残念とな、しかしなぜ近衛騎士隊長がそこにおるのか？」

ラルス１６世の問いにも、顔を伏せたままのアイゼンマウアーの顔色は一切変わらない。

「それはこれからの報告に関わりあることでございます。昨晩ローラ王女の部屋に盗賊が入りました。王女の衣服や寝具の一部が盗まれています。その警備を行なっていた者と警備の責任者でございます。」

「そうか、余の未練のせいでこの者達に罪を犯させてしまったか、すまぬな。」

ラルス１６世の意外な一言に国務大臣があせる。

「えっ！いえ、陛下。そういう問題ではありません。警備の職にある者の怠慢にて盗難を防ぐことができなかった。そのことに罪がございます。」

「そう言うてやるな。誰もいない部屋の警備など緊張感を持ってできるものでもあるまい。」

「恐れながら申し上げます。」

近衛騎士隊長アイゼンマウアーが直言の許可を得る。

「大変ありがたいお言葉ですが、陛下の御意志に添えなかったのは私の罪でございます。綱紀粛正の為にも罪に相当する罰を賜える様お願い申し上げます。」

「そっ、その通りでございます。罪に対する罰をおろそかにしては国家の根幹に関わります。」

国務大臣としては罪がなかったことになりそうな雰囲気に困惑していた。、そこに罪人である近衛騎士隊長自身の告発があり、それに同調する形で断罪する。

「そうか、近衛騎士隊長自身がそう言うのなら罰せぬわけにはいかぬか。しかしその罪に対してどの程度の罰が相当するのか解らぬな。国務大臣、そなたはどう思うか？」

「はっ！警備担当の者は2週間から1ヶ月の登城停止、責任者である近衛騎士隊長は3ヶ月から半年の俸給の返上ではどうでしょうか？」

「なるほどのう、流石国務大臣のさじ加減は上手であるな。近衛騎士隊長、それでどうだろう。」

「恐れながら、罪は私だけに留めていただきたい。どうか部下には

緩怠な処置を。」

「何を馬鹿なことを！せっかくの陛下の温情に異議を唱えるか！」

自身の意見を否定された大臣が憤慨する。

「いえ、何と言われましても聞けませぬ。ここ2ヶ月で近衛騎士のうち11名を失い、さらに2名を失うことはできません。これも全て私の指導力不足故にございます。」

「ではそなた一人でどう責任を取るのだ？」

「指導力の足りない者では隊長の任は務まりません。それ故に私は近衛騎士隊長の任を辞するつもりであります。」

「しかし、現役の近衛騎士隊長が辞任するなど前例がございません。」

あまりのことに大臣が動揺して、異論を述べる。ラルス16世と近衛騎士隊長アイゼンマウアーの視線が交わる。アイゼンマウアーの真剣な目にラルス16世がふっと笑みを浮かべた。

「辞めたいと言う者を止めるのは無理であろう。その願い聞き入れてやろうではないか。それで他の者は一切不問、余はそれで構わぬ。」

「はっ！ありがたき幸せ。」

「しっ、しかしそれでは・・・いや、どうしていいのか・・・・・

・・・」

大臣も困惑が過ぎて何を言っているのか解らない状態になっている。

「もうよい。余が決めたことだ。アイゼンマウアーよ、長いことご苦労であった。もう下がってよいぞ。」

「はっ！では失礼いたします。」

最後に大きく頭を下げるとアイゼンマウアーが大広間から退場した。さらにその後について二人の近衛騎士も退場する。その場に残された者は重い雰囲気に言葉を発することもできない。

「そなたらも下がってよいぞ。もう用件は済んだであろう。」

ラルス１６世の言葉に救われた文官たちが退場する。最後に退場しようとした国務大臣に声がかかる。

「国務大臣、そなたは残るがよい。」

「はい、何用でしょうか？」

全員が完全に退場するまでラルス１６世は口を開かない。大臣もそれは解っているので同じく口を閉ざす。そして二人だけが大広間に残された。

「そなた、ならぬぞ。」

「はあ？何がでしょうか？」

「退役した近衛騎士隊長がどんな形であろうとも、すぐに死すようなことはあってはならぬな。」

「おっしゃる意味が解りません。」

「そうか、ならばよい。つまらぬことを言った。下がってよいぞ。」

「それでは失礼致します。」

国務大臣が不満そうに立ち去る。玉座に残ったラルス16世が一人呟く。

「何が起こるのかさっぱり解らなくなってきたな。さてこの戯曲を書いたのは誰であろうか？できれば最後までこの戯曲をみたいものだ。」

――――――――――――――――――――――――――――――

「なんで隊長が辞めなければならないのですか！？」

近衛騎士の中でも最も遠慮がなく声が大きいサイモンの声が控え室に響く。その言に半数の近衛騎士が頷く。

「それは私に罪があるからだ。」

「しかし、あの様な軽微な罪で辞めることはないでしょう？」

「いや軽微ではない。それにそれを決めるのは私自身だ。」

「でも隊長の代わりなんていません！力量でも人格でも隊長に匹敵する者などいません。」

サイモンが必死で食い下がる。半数ほどの近衛騎士もそうだ、そうだと口にする。残る半数はそうでもないようだ。

「後任に関しては陛下と国務大臣が決定するであろう、それに従うべきだな。それに私が辞めることに納得しておる者もおるようだ。やはり辞めることを決めたのは間違っていない。」

周りを見渡したアイゼンマウアーの視線を避ける者達をサイモンが睨む。それは貴族階級にある者達、サイモンにはそれが腹立たしい。

「俺のことはもういいだろう。いま近衛騎士そのものの存在に疑念が生じている。瑣末なことで内紛をしている場合ではないだろう。近衛騎士は陛下にのみ従う、その本分を忘れるではない。ではしばらくは引継ぎ事項を書類にせねばならぬので部屋にこもる。誰も邪魔をしてくれるな。」

それだけ言うと近衛騎士の隊長室にアイゼンマウアーが入る。近衛騎士控え室になんとも言えない暗い空気が漂う。

――――――――――――――――――――――――――――――

荒野を馬車が疾走している。

「もう少しで日が暮れるな。馬車を止めるぞ。」

「ええ、そうしましょう。この子達ももう限界だわ。無理しすぎじゃない？」

「なるべく急いで戻りたいからな。馬にはベホマでもかけてやるさ。」

「回復呪文を馬に使うなんて聞いたことないわ。」

「まあそうだろうね。それはいいとして、荷物は何があった？中身は確かめたんだろう？」

「布団上下が一式、枕一つ、替えのシーツが2枚、寝巻きが3組、下着も3組、普段着ていた服が一式、そんなところかしら。」

マギーが上目遣いで指を折りながら答える。

「急の話にしては十分だな。しかしどうやって用意したのだろう？無茶してなければいいけど。」

「そうね・・・・・さっきの宝石を見せてくれるかしら？」

「ああ、これだ。」

腰の袋から取り出して渡す。その見事な宝石にマギーの目が丸くなる。

「これすごいわね。さっきも見たけど手にしてみると圧巻ね。これが太陽の石って本当？」

「間違いない、ものすごい魔力を感じる。それに隊長が持っていそうなのは予想していた。どうやって受け取るかが問題だった。これほどの物だ、ただ下さいと言って貰える物ではないだろう？」

「確かにそうね。魔法の品としてでなくても宝石としての価値も想像できないわ。でもなんで隊長が持っていると思ったの？」

「ロトの勇者が3人の友に託した神器だ、一つは僧侶、一つは賢者、そして戦士の家に代々引き継がれていると考えていいだろう。隊長は武具から戦士の家柄と解っていたからね。」

「まあ、そうね。じゃあこれで後一つね。」

「う～ん、それがそうでもないんだよな～。」

「どういう意味？」

「賢者の子孫は偏屈でね。勇者の印を持って来いと言っているんだ。前にアレフとガイラがそれで追い返された。」

「何よ、それ！」

「まあいいさ。当面の問題から処理しよう。マギー、今日からは不寝番もやってもらうよ。」

「解ったわ、まず食事にしましょう。」

それから馬車に積んできた食事を取る。今回は人数が少ないのと馬車からあまり離れたくないので携帯食料を3日分積んできている。あまりおいしくない、いやまずいと言うべき物だが贅沢は言ってら

れない。それが解っているのでマギーも文句を言わなかった。

魔法談義？

８／２４　勇者支援生活　１１６日目

今日中にはマイラの村につきたい、そう思って馬に無理をさせている。それで馬の息が上がる度に二人で手分けしてベホマをかけてきた。一度馬車を止めて桶二つを持って水場に走る。いくらベホマを使っても水がなくては馬がもたない。水をいっぱい汲んでから馬車に戻った。マギーが馬のそばに立っている。

「マギー、ベホマはかけてくれたか？」

「まだよ、一つ試して欲しいことがあって待ってたの。」

「ふ～ん、で、何がしたいんだ？」

「同時にベホマを使用して欲しいの。私がこっちであなたがそっちの馬、比較したいから口述詠唱で頼むわ。」

「何をしたいのかはよく解らないけどいいよ。」

「じゃあ、いくわよ。せーの　！」

「俺はＭＰを８消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ。
「私はＭＰを８消費する、ＭＰはマナと混じりて万能たる力となれ。

おお万能たる力よ、血、肉、骨となりて、この者を癒したまえ、ベホマ！」

おお万能たる力よ、血、　肉、　骨　となりて、　この者を

癒したまえ、　ベホマ！」

俺の方が気持ち早く詠唱が終わり、馬に光に包まれる。続いてもう一頭の馬も光に包まれた。

「やっぱりそうだ。」

マギーの眼が輝いている。何か発見した時の眼だ。

「それで何が解ったんだ？」

「私の方が発動が遅い。」

「ただ単に熟練の問題じゃないか？俺が教えたわけだから、君の方が遅くてもおかしくないよ。」

「そうじゃないわ、前半部分はほとんど同じ速さだったけど、後半の回復イメージの辺りから違いが出てくるの。」

「そうか？それこそたまたまじゃないかな。」

「いいえ、違うわ。昨日から何回か見てたけど毎回同じだった。確認の為に口述で詠唱してもらったというわけよ。」

「ふ～ん、じゃあ詠唱の熟練の問題はどうなんだ？」

「それこそ愚問ね、ただ文として読むならもっと速くできるわ。つまり魔法効果の発現速度には個人差がある。そう仮説していたけどそれが証明できたわ。」

「・・・・・なるほどね、つまり回復魔法は俺の方が得意ということだけは解ったんだな。」

「そうね、他の魔法に関しては検証が必要になるわ。」

「さてと、仮説の話は後にしようか、水を積んだら出発しよう。」

草を食んでいる馬をマギーに任せて、もう一度水を汲みに行く。桶に蓋をして馬車に積む。馬を馬車に積みなおして御者台に座る。マギーが乗ったのを確認して発車させる。しばらくして隣にもぞもぞとマギーが移動してきた。

「どうした?後ろでゆっくりしていてもいいぞ。」

「ちょっと気になることができたわ。さっき何か考えたでしょ?ちょっと間があったわ。」

「あいかわらず聡いな。ちょっとだけ披露しようか。」

手綱を軽く引いて速度を落とす。

「魔法は大まかに分けて二系統がある。魔法使いの魔法と僧侶の魔法だ。」

「魔法が使える者が魔法使いじゃないの?」

「まあその通りなんだけどね。大別すると敵に効果を及ぼす魔法と、それ以外の魔法だな。」

マギーが怪訝そうな顔をする。

「もっと簡単に言うと攻撃魔法が魔法使い、回復魔法は僧侶と思えばいい。今のアレフガルドでは高等な魔法がないからごちゃ混ぜで使用されている。本来魔法使いの素質がある者が魔法使い用の魔法を使い、神に仕える者が僧侶魔法を使用する。そのどちらも使える者が賢者と言われた。」

「ふ～ん、じゃあ私は魔法使い寄りで、あなたは賢者なのかしら？」

「どうだろうね、俺は賢者にしてはＭＰが少なすぎる。まあ今の時点では解らないことばかりだ。検証が必要になるな、それもたくさんのサンプルデータが必要だ。いずれ平和になってからやりたいことが増えたよ。」

「それ面白そうね、私も手伝うわ。だから平和にしましょう。」

そう言ってマギーが俺の肩に顔を寄せた。

「じゃあ急ぐぞ、しっかり掴まってろ！」

馬を走らせる。そうすることで平和が少しでも近づく、そう思った。

――――――――――――――――――――

日が落ちるころ遠くにマイラの村の明かりが見えてきた。もう見えるぐらいの距離だがまだ1時間以上かかりそうだ。もうすぐだ、今日中に到着したい。だが馬も限界に近い。そうだいいことを思いついた。

「マギー、ルーラを使うぞ。」

「いいの？ルーラは公表したくないと言ったのはケルテン、あなたよ。」

マギーが少し不満げに言う。

「根にもつね～。まあそうだけど、このぐらいの距離を跳んでもあの地図じゃ解らないさ。縮尺の問題だよ。」

「確かにそうね。じゃあ私が魔法を使うわ・・・・・・・・・・・・・・・ルーラ！」

マイラの村の入り口に辿りついた。門番が驚いているが、もう俺達がこの村に来て結構な日にちが経っているので顔見知りだ。

「なんだ兄ちゃんらか、脅かすなよ。また変わった実験か？」

「あ、ああ、まあそんなところだ。入ってもいいかい。」

「ああいいよ、何をいまさら！」

「じゃあ、通るよ。」

すぐに宿屋に馬車をつける。その音にガイラが飛び出してきた。

「戻ったか、もう今日は来ないかと思ってたぞ。」

「これでも結構急いだんだけどね。で、姫様はどうだ？」

「んー、まあアレフ以外を近づけないのは変わりない。食事は取れるようにはなった。それと昨日ぐらいからアレフと話せるようになった。」

「そうか、進歩はあったんだな。なら荷物を運んでくれ。とりあえず部屋の前までいい。」

「了解。」

ガイラと俺で大きい荷物を運ぶ。小さい荷物はマギーだ。ローラ姫の部屋からはなにか声が聞こえる。小さくて何を言っているかは解らない。軽くノックをする。

「アレフ、戻ったぞ。」

中で物音がする。しばらくして焦燥しきったアレフが出てきた。

「お前、寝てるのか。顔色が悪いぞ。」

「大丈夫ですよ。これぐらいたいしたことありません。それで持ってきてもらえましたか？」

「ああ、ここにある。運ぼうか？」

「いえ、僕がやります。まだ他の人には会わせることはできません。」

「そうか、じゃあお前に任せる。なにかあったらすぐに言えよ。」

俺はガイラとマギーに目で合図をしてここから立ち去る。しばらくして扉が閉まる音がした。

正気

8／25　マイラの村　宿屋

一番奥の部屋に豪華な布団にローラ王女が、すぐ横の椅子にアレフが座ったまま寝ている。

「う～ん、よく寝たわ。セバスチャン、お水を持ってきて頂戴・・・・ってここはどこなの!?きゃあああああ!!!あなた誰!?」

背伸びして起き上がったローラ王女がいきなり悲鳴を上げる。その悲鳴にアレフが目を覚ました。

「あの・・・ローラ・姫様?・・・どうか致しましたか?」

あまりの言い草に、アレフは動揺して月並みな返事しかできない。

「説明しなさい。ここは何処なの?」

「・・・・あの～ローラ姫様、まず落ち着いて下さい。いいですか、ここはマイラの村の宿屋です。」

その答えにローラ王女が首を捻る。その顔は助け出したときよりはふっくらして、表情が表に出た分綺麗に見える。不謹慎ながらアレフはそう思った。

「あっ!私!!!」

口に手を当てて驚く。そして今いる場所と自分の姿、そしてアレ

フを順番に眺める。

「あっあの～、ごめんなさい。ちょっと驚いておかしなことを言いました・・・いえ、まずお礼を言わなくてはいけません。勇者アレフ様、助けていただいてありがとうございました。」

「思い出してもらえましたか。急に驚きました。でもよかった・・・。」

アレフが笑顔を見せ、その目からは涙が流れている。ローラ姫が手を差し伸べ、その涙を拭いた。

「私の為に涙を流してもらえるのですね、アレフ様・・・。ありがとうございます。」

「えっ！いえ恐れ多いことでございます、ローラ姫様。でも本当によかった。ずっとあのままかと思っていました。」

「ずっとあのまま・・・あっ！」

アレフに介護させていたこの４、５日の醜態を思い出してローラ王女が真っ赤になって布団を頭からかぶる。布団から少しだけ顔をだして質問する。

「あの・・・アレフ様。私なにか変じゃなかったでしょうか？」

「い、いあ、その、特に・変なことはありません・・・でした。」

とっさのことに返事に困ったアレフがどもる。当然のことながらローラ姫は変だった。突然奇声を上げる、誰かの気配に怯えて逃げ

ようとする、意味の解らないことをつぶやくなど枚挙に暇がないほどだ。さらに何から何までアレフが手を貸していたのだ。それを思い出してアレフが赤くなる。察したローラ王女が再び布団にもぐる。居心地の悪くなったアレフが席を立つ。

「ローラ姫様がお目覚めになったことを連れの者に報告してきます。よろしいですか？」

「・・・はい。」

隠れたまま小さな声で答える。それを確認したアレフが部屋の扉を開けて廊下に出た。そこにはケルテン、ガイラ、マギーが立っていた。

――――――――――――――――――――――――――――

アレフが王女様の部屋から出てきた。アレフの表情が少し明るくなっていることにきづいた。

「ここじゃ王女様に聞こえるから、こっちに来い。」

アレフを別の部屋に連れ込む。ガイラとマギーもついてくる。

「どうしたのですか？今から呼びに行こうと思っていたんですよ。」

「あんな悲鳴が聞こえれば、誰でも飛んで来るぞ。王女様は大丈夫か？」

「ええ、姫様が正気を取り戻しました。」

ガイラとマギーが安堵の表情を浮かべる。多分俺もそうだろう。

「ならとりあえず着替えていただこう。寝間着のままでは俺達が困る。マギー、着替えをアレフに渡してくれ。」

「わかったわ、ちょっと待ってね。」

俺に促されたマギーが服を取りに急ぐ。あっという間に戻ってきてアレフに渡した。

「昨日までと違いますが僕でいいのですか?」

「仕方ないわ、前に私が着替えさせようとした時は駄目だったのよ。まだアレフ以外には任せられないわ。」

「そうですか、ではそうします。では行ってきます。」

アレフが着替えを持って出ていく。

「まさか一晩で戻るとは思わなかったぞ。いや、学者やっぱりお前はすごいな。」

「褒められても素直に喜べないな。アレフの介護が功を奏したのかもしれないし、用意した寝間着と寝具のおかげかもしれない。ただ単に自然回復の可能性もある。俺が一番驚いている。」

「なんにせよ、よかったじゃない。」

「そうだな。あとは王女様にお会いしてから考えよう。」

「そうだな、無礼者って言われたらどうする？」

「その時は平身低頭謝るよ。」

正気に戻ったと聞いてほっとした。だがまだこれからが問題が山積みだ。

――――――――――――――――――――――――

アレフが着替えを持って部屋に入る。一人残されて心細くなっていたローラ王女が安堵の表情を浮かべた。

「ローラ姫様、着替えをお持ちしました。ご自分で着替えられますか？」

「ええ、自分でできますわ。」

「ではここに置いておきます。私は部屋の外に出ていますので着替え終わったら呼んで下さい。」

アレフはベッドの横に着替えを置く。そしてローラ王女に背を向けて出て行こうとした。

「駄目っ！一人にしないで！」

「でも僕がいたら着替えられないでしょう。」

「それでもここにいてっ！お願いアレフ様、もう一人にしないで下さい。」

思わず振り向いたアレフは涙を流して懇願しているローラ王女を見た。その姿を見たアレフに、懇願を断ることは不可能だった。

「解りました、僕はどこにも行きません。ではここで後ろを向いていますから、その間に着替えて下さい。」

背中を向けたアレフの後ろで衣擦れの音が聞こえる。その衣擦れの音に振り向きたい衝動がアレフを襲う。正直昨日までアレフが着替えさせていたのだが、人形の着せ替えをしている様で何も感じなかったのだ。しかし今は勝手が違った。なんとも言えない感情にアレフが戸惑う。

「アレフ様、もうこっちを見てもよろしいですわ。」

ローラ王女の言葉にアレフはほっとしたような、残念なような気がした。

「では振り向きますね。ローラ姫様。」

改めて許可を得るとアレフが振り向いた。そこには綺麗な服に着替えたローラ王女が立っていた。まだ痩せてはいるが美しいその姿にアレフが声を失う。

「どこか変でしょうか?」

「そっ、そんなことありません。とても綺麗です。」

「アレフ様・・・」

「ローラ姫・・様・・・・・・・・・。」

そして二人の姿が重なった。

アレフとローラは立ったまま抱き合っている。別に何をするわけでもないのだが、二人にはそれが一番心地よく感じられた。外から控えめなノックが聞こえる。

「失礼致します。なにか不都合でもございましたか？」

女性の声が聞こえた瞬間、二人はとっさに離れる。互いに目が合いさっきの痴態を思い出して顔を伏せる。そこにもう一度外から声がかかる。

「大丈夫でしょうか？」

「あ、すみません。もう少しで終わります。」

外からの催促にアレフが慌てて返事をする。ローラ王女も慌てて着崩れた服を整える。整え終わったところでアレフに悪戯を注意された子供のような笑顔で合図をする。アレフがにっこり笑ってから外に声をかけた。

「お待たせしました。皆さんをお連れ下さい。」

ローラ王女がアレフに差し出された椅子に腰をかける。アレフはその隣に立つ。再び扉からノックが聞こえる。

「失礼致します。入ってよろしいですか？」

アレフが歩いていき、軽く扉を開ける。

「どうぞお入り下さい。王女様がお待ちです。」

こうしてやっとのことで王女への謁見がなった。

――――――――――――――――――――――――

5分前のこと。ローラ王女の部屋の二つ隣の部屋に俺とマギー、ガイラがいる。アレフが出て行って15分は経っただろうか？

「おい、遅くないか？」

「ああ、遅いな。マギー、そんなに着替えに時間がかかる服だったか？」

「そんなことないわよ、5分もあれば着替え終わるわ。」

三人とも黙ってしまった。どうしたものだろう・・・。

「おい、学者、声かけて来いよ。」

「なんで俺だよ。ほとんど面識ないから嫌だよ。そうだ、マギー。君が行ってくれ。少しは話したことあるだろう。」

「えっ！私？」

「外から軽くノックして声をかけるだけでいいから、頼む！」

右手を顔の前で立てて頭を下げる。

「もうしょうがないわね。」

文句を言いながらマギーがでていった。残された男二人がほっとしている。さらに待つ・・・5分ほど経っただろうか?マギーが戻ってきた。

「もういいって、ケルテン、言上は頼んだわよ。」

「ああ解ってる。俺の独断でなったことだ、責任は取る。」

俺が先頭に立って部屋をでる。王女の部屋の前で声をかける。

「失礼致します。入ってよろしいですか?」

軽く扉を開き、アレフが顔を出す。少し顔が赤い。

「どうぞお入り下さい。王女様がお待ちです。」

アレフが俺達を案内する。部屋に入ると奥の椅子にローラ王女が鎮座している。俺が先頭、右にマギー、左にガイラがつき、片膝をついて頭を下げる。

「まず王女様におかれましては、ご無事お祝い申し上げます。」

「そのような堅苦しい言葉はお止め下さい。私は助けていただいたのです。まだお礼を言ってませんでしたね。お名前を教えて頂けるかしら?」

「はい、私は国務大臣付き特務隊士ケルテン、こちらに控えるのが

もう一人勇者ガイラ、そして王国魔術士ヴィッセンブルンにございます。」

「まあ叔父様の部下でしたのね。それと勇者ガイラ様、その節は大変失礼致しました。せっかく助けに来ていただいたのに逃げるようなことをしました。」

「いや、俺は気にしてない。」

「ちょっとガイラ！」

慌ててマギーがガイラをたしなめる。ローラ王女が咎めることはない。

「構いません。先も申したように助けて頂いたのはこちらです。ヴィッセンブルン嬢、代々筆頭魔術士の家系の者ですね、魔術士でありながら危険を承知で助けに来ていただき、誠にありがとうございます。」

「誠に恐れ多いことにございます。そのお言葉、亡き父、兄も神の元で喜んでいると思います。」

マギーが改めて頭を下げる気配がした。ここまでは只の挨拶だ、問題はここからだ。

「一つ問題があります。申し上げてよろしいですか？」

「問題？どうか致しましたか？」

「はい、王女様を救助した後城に戻らず、ここにて静養させたこと

は私の独断です。もしこのことが罪に問われることがあったとしても、他の3人は不問にして下さい。」

顔を上げてじっとローラ王女を見つめる。その迫力にローラ王女がたじろいだのが解る。

「その独断には罪があるのですか？」

「ないとは申せません。陛下よりは王女様の救出は厳命されていませんでした。君主としては正しい判断と思われます。しかし国務大臣からの厳命は、救出後すぐに城に連れて戻るべしとされていました故、私に罪ありと思われます。」

「・・・ではなぜ厳命に背いたのでしょうか？」

「まず第一にあの時王女様は正常な精神状態でありませんでした。」

「その通りです。今考えても寒気がします。それで？」

「次に体調の問題です。ご自分で歩くことができないぐらい衰弱していましたので、静養が必要と判断しました。」

「それはお城に戻ってから静養してもよいとは考えなかったのですか？」

「理由が二つあります。まずあの姿のまま城に帰ることで、王女様の恥辱となることを避けました。」

「たしかにあの姿のままで帰るのはあまりに恥ずかしいことですね。」

「さらにあの姿では王女様ご本人と確認できない可能性がありました。穿った物の見方をすれば偽者、もしくは魔物の策謀とも取れますので正気に戻るまではお連れできませんでした。」

「よく解りました。まだしばらくはここに逗留することにしましょう。」

「よろしいのですか？もう帰ることはできると思いますが？」

「そうですか？アレフ様、鏡を貸して頂けますか？」

ローラ王女が横に立っていたアレフに声をかける。アレフがベッドの横から鏡を取り手渡す。鏡を手にしてローラ王女がいろんな角度で自分の顔を眺める。

「はあ、こんなげっそり痩せた顔でお父様にお会いになることはできませんわ。これは私の我が侭です。私の命令には従えませんか？」

「いえ、王女様のご随意に。」

「ありがとうございます。では今日は疲れましたのでこれで終わりにしていいかしら？」

「では我々は失礼させて頂きます。なにかあったらお呼び下さい。王宮なみのお世話はできませんができる限りのお世話をさせていただきます。」

「では一つお願いがあります。しばらくはこのまま勇者アレフをお貸し頂けませんか？」

「どうぞ。勇者の称号は陛下との契約にございますから、異論はありません。」

「そうですか。ではアレフ様、これからもよろしくおねがいしますね。」

「はい、お任せ下さい。」

アレフが王女の隣で片膝をついて礼をする。もう二人の視線は俺達を見ていない。俺達は声もかけずに退室することにした。後のことは知らない。

夕べは（以下略）

「なあ、あれでよかったのか？」

「何がだ？」

「姫さんとアレフのことだよ。」

「仕方ないだろ、アレフしか受け付けないんだから。」

「でも何があったのかしら？」

「う～ん、どうなんだろうな。つり橋効果とか、刷り込みの一種かな。なんにせよ究極の恐怖から救ってくれたのがアレフだった。それだけのことだな。」

「でもあのままでいいの？まずくない？」

「まずい。でも俺達が王女様の機嫌を損ねたらもっとやばい。」

三人ともため息をつく。俺としては計算通りではあるが、なんとも言い難い状況でもある。

「それにしても思っていたより聡明な方かもしれない。まず城に連れて帰らなかったことを理解してもらえる様に誘導した。それに対して私の我が侭でここに滞在するとされた。」

「あなたの言うことを理解して、旨く口裏を合わせる、そう表明したのね。」

「ああそうだ。しかし、私の我が侭ですときたか。あの陛下の子だけはある。」

「学者よ、それは褒めているのか？」

「まあそんなところだ。実はもう一つ危険な話を混ぜた。気づいたか？」

ガイラが首を捻る。その隣でマギーが得意げな顔をしている。

「当然よ。ケルテンが言った“陛下よりは王女様の救出は厳命されていませんでした。君主としては正しい判断と思われます”この言葉は不敬と言われても仕方のないことで、それを理解して受け流したのよ。」

「ふ～ん、そんなものか？」

「俺が臣下でありながら主君の行為を評価したんだ、大臣がいたら激怒していただろう。もっとも陛下ならやはり笑って聞き流しただろうな。」

ガイラがまだ難しい顔をしている。納得していないようだ。

「まだ解ってないみたいね。陛下は王女の命はどうでもいい、そう言ったとわざわざ教えてやったのよ。」

「それ人の親としておかしくないか？」

「ああ人の親としては間違っている。君主は全ての民を平等に扱う

べきである。だから君主としては正しい。俺はそう言ってやった。」

「難しいことを言う、流石学者だ。まあ俺はいいさ、アレフと姫さんの恋路がどうなろうが、王家のしきたりがどうだとか知ったこっちゃねえ。目の前のだれかが不幸せになるのは見たくない。」

「ふん、だったら無粋なことを言ってないで見守ってやれ。マギーもそれでいいか？」

「反対するぐらいなら、あなたと一緒になんか居ないわ。」

確かにその通りだ。マギーは貴族の付き合いより俺を優先している。つまりローラ王女のことも理解しているということだ。仲間の協力も得られた、当の本人達の意志も間違いないだろう。後は時を待つのみだ。

――――――――――――――――――――

時は3日ほど遡る。ラダトーム城下街の古ぼけた屋敷の一室で男が座っている。他には誰もいない部屋で一人で酒を飲んでいる。

「なあ、アイゼンのだんな！本当にあれでよかったのか？」

「何がだ？」

突然影から男の声がする。驚きもせず返事をする。

「俺っちなら何の痕跡も残さずに盗むこともできたんだ。それをわざわざ解るようにやれとは、まったく意味が解らねえ。」

「それでは意味がない。私のさせたことは陛下を偽ることに他ならない。たとえそれが陛下の為とは言え、偽ったままお仕えすることなどできない。」

「相変わらず不器用なやつだな。俺っちみたいに器用に生きようぜ。」

「器用な奴は退役した近衛騎士隊長の所には来ないな。もう私と一緒にいても何の益もないぞ。仕事を回してやることもできぬからな。」

自虐的にそう言い放つ。

「損得だけでだんなの所に来てるんじゃない。ただ俺っちのせいでだんなが辞めさせられたと聞いて、わざわざ忍び込んできたんだ。そう邪険にするなよ。」

「では心配してくれてありがとう、とでも言えばいいのか？」

「止してくれ、だんならしくねえ。何か手伝ってやれることはないか？」

「特にないな。私が陛下の為にしてやれることはすでにない。それに一族の務めとやらも意図せずに終わった。昔お前が盗みに来た例のあれのことだ。」

「もしかしてくれてやったのか？もったいねえ。」

「価値の解る者に託した。ロトの勇者の秘宝、太陽の石とはな。あ

の者に教えてもらわねば、私のルーツも一族の務めにも気づかなかった。」

「そんなすごいお宝だったとはな。やはり俺っちごときの手に入るお宝ではなかったか。まあそれはいいや。だんな、本当に心残りはないのか？」

男の問いにしばらく無言で考えている。

「そうだな、姫様のことが気にならないと言ったら嘘になる。私が言えることではないがな。」

「なら俺っちが見てきてやる。それでだんな絡みの仕事は終わりだ。」

「迷惑をかけるな。そうだ、もしケルテンという男にあったら私がよろしく言っていたと伝えてくれ。なかなか面白い男だぞ。」

「承知した。」

一言だけ残して影の気配が消える。残された男はグラスに残った酒を一気にあおる。

――――――――――――――――――――

マイラの村に朝がやってくる。あれからアレフとローラ王女の姿は見ていない。ガイラが食事を部屋の前まで運び、それが食されたことだけは知っている。朝の空気を吸いにロビーにでてくると、宿屋の主人が声をかけてきた。

「お連れ様は夕べお楽しみだったようですよ。」

「余計なことは言わない方がいいな。命がいくつあっても足りないぞ。」

俺の脅しのような返事に不思議そうな顔をしている。

「逗留している客が誰であろうと何をしようと他言無用、まあそう言うことだ。」

意味深な言葉を残して宿屋から外にでて村はずれを歩く。さてしばらく逗留するとは言っていたが、何時までここにいればいいだろうか。その間、何をしようかな・・・。

木陰から何かの気配、刀の柄に右手を当てる。

「何だ?誰かいるのか?」

「なんだ、俺っちに気づいたのか、感のいい奴だ。」

ヒュッ!何か光る物が俺に向かって飛んで来る。刀ではじき落とす。木陰からにやついた男が姿を現す。その立ち振る舞いに隙はない。

「やるねぇ、そんな簡単にいなされると自信をなくしそうだ。」

「誰だと聞いている。竜王の手の者か?」

正眼に構えてまま、答えを待つ。返事はない。

「答える気はないようだな。」

男に向かって踏み込み斬りつける。すでにそこには誰もいない。

「確かに面白い奴だ。アイゼンのだんなからよろしくだとよ。確かに伝えたぞ。それと俺っちからの忠告だ。大臣には気をつけろ」

「アイゼンのだんなだと・・・近衛隊長がどうかしたのか?」

木陰から気配が消えた、返事は返ってこない。大臣・・・?近衛騎士隊長・・・?城に何か異変が起きているのだろうか?

湯浴み

控えめにノックをする。物音がしてしばらくしてから、扉が開いてアレフが出てきた。

「やあアレフ、夕べはお楽しみでしたか？」

「あっ、あの、すみません！」

真っ赤になったアレフがものすごい勢いで謝罪する。

「なんだ、謝らなければならないことでもしたのか？」

「いや、でも僕、ローラ様にあんなことしてしまって・・・」

「もしかして無理矢理なのか？」

「違います！！！そんなことしません！」

大声で否定する。これには怒気が混じっている。

「じゃあ、俺がとやかく言うことじゃないな。謝る必要はない。俺も貴族の名家のお嬢様に手を出しているしな。」

「でも王女様ですよ。」

「関係ないな。城に戻ったら元の駕籠の鳥、今は夢の中・・・そう思えばいい。」

「夢の中・・・ですか？」

「だから今だけは好きな様にさせてやれ。・・・そうだ、湯を持ってきたんだ。せっかくの美人だ、綺麗にしてやれよ。」

俺は持ってきた台車をアレフに押し付ける。ビア樽いっぱいの温泉の湯、大きなたらい、まっさらなタオル数枚が乗せてある。

「じゃあな、またしばらく留守にする。一週間後にでも迎えにくるから後は任せた。」

それだけ言ってさっさと背中を向けてそこを後にする。台車の軋む音、扉が閉まる音が聞こえた。

――――――――――――――――――――――――――――

「ローラ様、お湯をお持ちしました。」

「聞こえていました。身体を綺麗にしたいです、アレフ様手伝っていただけますか？」

「しかし、いいのですか？」

「アレフ様、もう私にはあなたに隠すことはありません。ですから手伝って下さい。」

「・・・はい、ではこちらにたらいを用意します。」

たらいをベッドから離れた場所に置いてお湯を張る。そこまで抱

き上げて連れて行く。まだローラ王女は一人で歩けるほどは治ってはいない。アレフが後ろからお湯をかけて、金色の髪を洗う。

「怖い方だと思っていました。」

「ガイラですか?見た目は怖そうですがいい人ですよ。」

「違います、さっきの方です。オットー伯父様の部下だと言ってましたから、なにかあると思っていました。」

「伯父様とは国務大臣のことですか?」

「そうです。お父様の弟で国務大臣、王位継承権第2位。さらに王位継承権4位のフレーゲル様の父上です。私が生きて帰ることは喜ばないでしょう。私がいなくなればいずれフレーゲル様が次の国王となることは明白ですから・・・。」

深く沈みこんだローラ王女の声がアレフにだけ聞こえる。

「たとえそうだとしても、ローラ様に害をなすことはありません。」

「大した自信ですね。どうしてそう思うのですか?」

「僕の師匠なんです。戦いの心得、剣から魔法まで全て、旅の仕方、町の防衛、何から何まで教えていただきました。意味もなく人を傷つけたりしない人です。」

「信頼されているのですね。実はさっきの会話で解っていました。アレフ様に対する思いやりが感じられましたから・・・。でも意地悪ではありますね。」

ローラ王女がくすくす笑いながらそう言うと、アレフが口を尖がらせて付け加える。

「それは間違いありません。わざと大切なことを言わないことがあります。」

「それも思いやりの一部なんでしょう。昨日の会話をおぼえていますか？」

「まあ大体は・・・。」

「私はあの方にここにしばらく逗留すると言わされたのです。解りましたか？」

ローラ王女の頭から湯をかけて汚れを流す。数回繰り返してからタオルで水気を取る。

「・・・・そうなのですか？」

「そうですよ。自分の意見を押し付けるのではなく、選択肢を少なくすることで答えを誘導してきたのです。しかもその答えは自身の上司の思惑に添えないことなのに、顔色一つ変えないで私をじっと見つめてきました。やはり怖い方、敵にはしたくないですね。きっと伯父様も使いこなせていないのでしょう。」

「あの会話にそんな意味があったのですね。気づきませんでした。」

思い出したかの様に新しいタオルを取り出して、ローラ王女の身体を拭く。

「もう一つ恐ろしいことがあったのですよ。私の命はいらない、そうお父様が言ったと言いました。」

「そんなこと言いましたか？」

「ええ、間違いなくそう言いました。しかもそれが王の務めだとも言いましたね。あの方にとっては王家も貴族も、他の全てが手段に過ぎないのかもしれません。どういった出自ですの？」

「リムルダールの自治区長の家で育ったと聞いてます。ただ養子だそうですが・・・。それと魔物が蔓延る前からアレフガルド中を探検していたそうです。ガイラがつけたあだ名は闘う考古学者です。」

「闘う学者ですか・・・なるほどあの見識はそこから来ているのかしら？他の方にもあだ名はあるのですか？」

「そうですね。ガイラはサバイバルの達人だそうです。野外生活、薬草、食料の調達の達人です。」

「すごいですわね。想像もつきませんわ。それと疑問があったのですが、なぜ勇者様が二人もいるのですか？」

「王様がお触れを出して勇者を募ったのです。その勇者の支援をしているのが特務隊士の師匠なんです。」

「じゃあ、もっとたくさんいますの？」

「いえ、２０名ほどいたそうですが、今は僕とガイラの二人しかいません。」

「そう、とても大変なことなのですね・・・。もう一つ聞いていいですか？ではあなた達の中で一番誰が強いのですか？アレフ様ですか？」

「僕なんて足元にも及びません。それ以前に純粋な戦闘力ならガイラ以上の者なんていませんし、魔法を行使させたらマギーさんに敵う者もいません。でも師匠はそのどちらにも引けを取りません。」

「アレフ様はどうなんですか？」

「師匠が言われるには、僕は高水準のバランス型だそうです。何でもできるが一流ではない、そう言われているような気がします。」

「アレフ様は何でもできるのですね。私には何もできませんから、うらやましいです。」

「・・・・・・・・・・。」

アレフは黙って体を拭き続ける。そこに込められた力から何かがローラ王女に伝わる。

「城に戻ったら駕籠の中の鳥に戻ってしまいます。今は夢の中として私の好きな様にさせて頂きますね。」

身体を湯で流し終えたアレフが乾いたタオルで水を拭き取る。

「これで終わりです。新しい寝間着を用意します。」

「そうですね。体が温まったら少し眠くなりました。しばらく眠る

と致しましょう。」

アレフが手伝って用意した寝間着に着替える。着替え終えたローラ王女をアレフが抱き上げてベッドへ運ぶ。

「せっかくですから話に聞くマイラの温泉にも入ってみたいですね。」

「そうですね。でしたらよく食べてよく寝て元気になりましょう。」

ローラ王女が頷いてから目を瞑る。その手はアレフの手を握ったまま、ベッドの横の椅子に腰掛けたアレフはそのままローラ王女を見つめている。

後任人事

「さてこれからどうしよう？」

「なんだ、珍しいな。お前らしくもない。」

「俺が悩んでいたら可笑しいか？」

「ああ、可笑しいな。大体は俺達が何か聞いたら、即答するのが学者だ。そうだよなマギー。」

「そうね、ガイラの言う通り。何を悩んでいるかしら？」

「実に不本意な言われようだな。アレフを待つことなく城に戻るかどうか考えている。」

「わざわざ戻る必要があるのかしら？」

「ああ、今朝、村はずれで俺を見張っている奴を見つけた。声をかけたらナイフを投げてきた。結構な手練だ・・・・。」

「そういうやつは俺の所に来いよ。面白そうだ。」

ガイラが楽しそうに俺の言葉を遮る。

「最後まで言わせろよ。アイゼンのだんなからよろしく、それと大臣に気をつけろ。そういい残して消えた。近衛隊長や大臣に何かあったのだろうか、どちらも調べるには一度城に帰らないといけない。」

「帰ればいいじゃないか、アレフと姫さんはあと一週間は戻らない予定だろ。」

「その通りだとは思うわ。何を悩んでるの？」

「大臣に気をつけろ、これがひっかかる。極論を言うと大臣は王女が戻ることを望んでいない。」

「ひどい話だな。それは本当か？」

「確証はない。ローラ王女がいなければ大臣かその息子が次の王だ。俺が大臣なら今のうちに暗殺を考える。」

ガイラが足元の小石を蹴飛ばす。

「嫌な考えだな、それを考えることのできるお前が嫌だ。」

「そうか？マギー、俺が言っていることはおかしいか？」

「残念ながらそうは言えないわ。私の図書館には王国の歴史、それも表向きに公開できない歴史がいっぱいあるわ。そういった例で溢れているわ。」

「かぁー、なんでもっと気持ちよく生きられないかな。」

「どちらにしてもここにいては何も解らないわ、戻りましょう。なんだったら私だけでも戻るわ！」

「方法としてはありだな。だが藪を突付くと蛇がでてくるかもしれ

ないぞ。」

「望むところよ、私を軽く見ると痛い目にあうわ。何か解ったらルーラで戻ってきて教える、それでいい？」

マギーの目が輝いている。

「学者、俺にも解ってきたぞ、これは止められないな。」

「正解だ。なら幾つかやって欲しいことがある。まずアレフは例の海底洞窟で大怪我をしたことにしてくれ。これで俺達がここにいる理由ができる。次に近衛騎士隊長にあって何があったか聞いて欲しい。意味深によろしくとは気になる。あとこれを例の部屋に片付けておいてくれ。」

懐から太陽の石を取り出してマギーに渡す。ガイラが目を丸くして覗き込む。

「おい、なんだよこれ？すげえ宝石だな。」

「太陽の石だ。」

「ほう、太陽の石って名前がついてるのか。色といい大きさといい、相応しい名前だな。」

「ケルテン、適当に教えないでよ。ロトの三種の神器の一つでしょ！」

「まじでかっ！見つけたのなら早く言えよ。じゃああと一つじゃねえか！聖なる祠のじじいさえ説得できれば全部集まるぞ。」

「じゃあ勇者の証を見せるのだな。」

「それが解らんから困っているんだろうが、まあ姫さんを城に帰してからにするか。」

「まあそう言うことだ。マギー頼んだぞ・・・そうだっ！一週間後までに白馬も用意しておいてくれ。」

「白馬？へんなこと頼むのね。全て私に任せておきなさい。じゃあ行くわね。」

マギーが厩舎へ歩く。俺達もついていって見送る。目の前で馬車ごと光となって消えていった。

――――――――――――――――――――――――――――――

「陛下、近衛騎士隊長の後任人事の件でお話があります。」

「ふむ、そうであったな。何時までも空白であってよい問題ではないな。だれか適任者はあるか？」

「むずかしい問題です。前任者はやはり平民出身ということで、貴族出身の近衛騎士をまとめることができなかった。この点を考慮せねばなりません。」

「ではそれに相応しい者を近衛騎士から隊長に上げるのか？この前のローゼンシュタインなる者はどうだ。見込みはありそうだの。」

ラルス16世が楽しそうに言う。

「それはなりません。まだ小隊長ですので飛び越された者を纏めることはできないでしょう。」

「そうか、なかなかの名案だと思ったのだがの。では副隊長から昇格させるのが適当か。」

その言に国務大臣の顔が曇る。

「駄目でございます。先代に武ではるかに劣ります。今の近衛騎士を纏めるには何かと不足でしょう。」

「難しいのう、ではどうすると言うのだ?」

「ここは武ではなく格によって纏めてはどうでしょうか?」

「ほう、格とは何を意味するか?」

「地位や家柄であります。現状の近衛騎士全てよりはるかに上の格の者で纏めます。いかがでしょうか?」

「なるほど、名案だの。では誰か心当たりがあるのだな?」

国務大臣の表情が明るくなる。強引な理論によって自分の意見を通すことができた時、この男はなんとも言えない快感を得る。さらに今回は特別である。

「ここは王家の者によって纏めるつもりです。つまり私の息子フレーゲルをこの任に当てます。よろしいですね。」

「そなたの息子は武に長じておったかの？」

「長じているとは言えませんが一通り修めております。それに魔法は近衛騎士以上に長じていますから問題ありますまい。」

「そうか、しかし少々人格に問題があったと記憶しておるがどうか？」

「その記憶は正しかったと言わざるを得ません。ですが先日あの特務隊士に王家の心得を教授されたことで変わりました。それ以来、上は貴族から下は平民まで人を募って見聞を広めております。今なら私の大臣の座を譲ってもいいと考えていました。」

国務大臣が自信有り気に一気にまくし立てる。その言は自信に満ち溢れ、説得力があった。

「そうか、ならば今おる近衛騎士皆に相談して決めるがよい。ただし無理強いはするな。」

「はっ！当然でございます。ではその様に取り計らいます。」

国務大臣は人が悪い笑みを浮かべて立ち去る。現状の近衛騎士の大半の賛同を得るなど簡単なことだ。半数の貴族出身者が反対するはずもなく、残りの平民など金なり地位をやればこちらに靡く。何も嘘は言ってない。

――――――――――――――――――――

「なんであのぼんくら殿下が近衛騎士隊長なんだよっ！」

「声が大きすぎます、気をつけてください。誰が聞いているか解らないのですよ。」

夜の兵士宿舎の食堂でサイモンが大声で騒いでいる。同じテーブルのステファンがたしなめる。

「知るかっ！俺のモットーは人を褒めるときは大きな声で、悪口を言うときにはより大きな声でっだ！！！」

「ますいですよ。近衛騎士を辞めさせられますよ。」

「それこそ俺の知ったことじゃねえ。アイゼンマウアー隊長がいたから俺は近衛騎士でいれたんだ。辞めろと言われたらすぐにでも辞めてやる。」

ステファンが慌てて回りを見渡す。目が合った者は視線を逸らせて見なかったふりをする。

「大体陛下も陛下だ。いくら大臣からの推挙とはいえ、この人事は駄目だろうがっ！！！」

「わーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

サイモンの不敬とも言える発言に慌てて、大声を重ねる。

「アイゼンマウアー隊長は近衛騎士は陛下にのみ従う、そう言い残しました。私はそれに従おうと思います。」

「お前は本当に優等生だな。まあお前は大臣の多数派工作に乗っていないよな。」

「当然です。反対すべきことには反対をしなくてはいけません。そこに金や地位が関わってはなりません。」

「他の連中もそれぐらい優等生だったら、こんな不愉快な人事に文句を言う必要なかったんだがな。まさか平民出身者のうち半数以上が賛成すとは思わんかったぞ。」

「仕方ありませんよ。金や地位で言うことを聞かなかったら、次は家族を盾に取った脅迫です。ここまでされると賛成に回らざるを得ません。」

サイモンがテーブルを拳で思いっきり叩く。その物音に何かを言う者はもうここにはいない。いつの間にか食堂にサイモンとステファン以外はいなかったのである。

「くそっ！こうなりゃ魔物が襲撃してこないことを祈るしかねえぜっ！」

サイモンが残りの酒をあおり、食堂から出て行った。テーブルの上に残された数え切れないグラスが、存在感を主張している。それでもサイモンの足取りは酔っているようには見えなかった。

マギーの闘い

マギーはルーラでラダトームに戻った足で即城に走る。ふと気づくと慌てているのは自分だけではないことに気づいた。文官、武官ともに慌しく歩き回り、何かを運んだり、書類を渡したりしている。立ち止まっているのは門番の衛兵のみであるのだ。

「ねえ、何かあったの？」

その門番に問うてみる。

「フレーゲル殿下が近衛騎士隊長になられるとのことで、閲兵式の準備で大変だそうです。」

「はあ？意味解んないですけど・・・。なんでフレーゲル殿下が隊長？アイゼンマウアー隊長はどうなったの？」

「さあ？よく解りませんが警備不首尾の責任を取って辞任したらしいですよ。それで後任にフレーゲル殿下が選ばれたのです。」

「なによそれ！それで誰もが納得するとでも思うの！」

「私に言っても知りませんよ、只の一兵卒に過ぎませんから。もういいですか、これ以上はやばいので・・・。」

「ごめんなさい・・・。でもよく分かったわ、ありがとう。」

そう言ってマギーはそこを早足で去る。開放された衛兵はほっとして、もう一人いる門番と顔を合わせた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

国務大臣の執務室入り口で、マギーが執務官に用件を告げる。普段直接の用件がないので面倒な取次ぎが必要なのだ。目の前で早急の者が順番を飛ばして大臣に会う。待たされる時間をいらいら過ごす。ふと顔を上げると大きな地図が目に入った。

「あれが例の魔法の地図ね・・・なるほど、確かにマイラの村付近に三つ光点があるわ。あれさえなければもう少しケルテンも自由に動けるのに・・・・なんとかできないかしら？」

マギーが思考に更ける。気づくと誰かに肩を叩かれていた。

「順番です。国務大臣がお会いになられます。」

「ごめんなさい、失礼いたしました。」

マギーは３ｍほど進んで大臣の執務机の前に立つ。国務大臣が書類から顔を上げてマギーを見た。

「これは珍しいこともあるものだ。司書官殿をしばらく見なかったと記憶しておるが、いかが致しておった？」

「はい、新しい武具の技術の研究にマイラに行っていました。それに関してはいずれ書類にて報告致します。」

「ほう、新しい武具とな？興味深い話ではあるな。報告を楽しみにしよう。それで用向きはなんだ？」

「特務隊士殿から、海底洞窟の探索の際に勇者アレフが大怪我を負ったとのことで、しばらくマイラから動けませんと伝言を承っています。」

「そうか、仕方あるまい。特に急ぐ用件はない、もし会うことがあったら大事に致せと伝えてくれ。」

「必ずお伝えします。それと挨拶が遅れましたが、殿下の近衛騎士隊長内定おめでとうございます。」

「ふむ、素直に礼を言っておこうか。何代か振りの閲兵式を行なうと、あれも張り切っておる。今はその準備で忙しいのだ。用向きはそれで終わりか？」

「はい、ではお忙しい様ですので失礼すると致しましょう。」

マギーは執務室から立ち去る。それと入れ替わりで別の者が大臣に対する。用件が終わって冷静になってみると順番待ちの列に並ぶ者達の異常さに気づいた。普通なら文官しかいないはずなのに、大勢の武官も混じっていた。

（なるほどね。まだ就任していないから、その分こちらの仕事が増えているのか。この人事を決めたのは大臣だから自業自得よね。そうだ、前近衛隊長はどうしたのかしら？）

マギーの足が近衛騎士の控え室に向かう。距離は遠くないので１分も掛からず辿り着いた。入り口に立っている騎士が暗い顔をしている。中からは対照的に馬鹿みたいに陽気な声が聞こえる。

「中の人達は楽しそうね。あなた達はどうなの？」

思わず入り口に立っている騎士に声をかける。マギーにだけ聞こえる様に小さな声で話す。

「どうもこうもないですよ。先代に押さえ込まれていた貴族出身の奴等が好き放題です。我々のような平民出身者は肩身が狭いです。」

「ふ～ん、私も貴族だけど・・・。」

その言葉に明らかに困惑した表情を浮かべた。

「冗談よ、最近へんな人と一緒だから私も人が悪くなったかしら。まあいいわ、前近衛騎士隊長殿はどうしているか、知ってる？」

「性質の悪い冗談は止めて下さい。隊長のことはよく知らないんです。城下に家をお持ちとは聞いてますが場所は知りません。」

「そう、ありがとう。」

「これはこれは筆頭魔術士殿、今日は例の無礼な特務隊士殿と一緒ではないのですか？」

何時の間にか中にいたであろう近衛騎士達が割り込んできた。

「今日は私一人よ、あなた達と違って特務隊士殿は忙しいの！こんな所で油を売っている暇はなさそうよ！」

売り言葉に買い言葉、マギーが舌で攻撃する。

「ひゅ〜、怖い怖い。まあ下賤な者は辺境で忙しくしているのが相応しいな。」

その言葉に取り巻きが下品に笑う。

「そうね、こんな所でありもしない手柄を自慢するしかない連中に褒められても、特務隊士どのは不本意でしょうよ。」

「おかしなことを言われる。どうも下賤な者に交わると品がなくなるらしい。それは貴族の者としてどうかと思いますが・・・。」

また取り巻きから下品な笑い声を上げる。さらに下品な言葉が聞こえた。

「関わるだけでなく、本当に交わっているらしいぞ。」

「おお、汚らわしいこと。代々伝わる高貴な家柄に相応しくないですな。」

「誠に・・・貴族の秩序を考えていただきたいものですな。」

「ふん！陛下に顔も名前も覚えてもらえないような貴族とやらが何を偉そうに！立派なご先祖様の顔に泥を塗るようなことはしない方がいいわよっ！」

マギーの声が近衛騎士の控え室どころか、廊下を飛び越えて文官の部屋まで響く。何事かと何人もが顔をのぞかせる。

「ヴィッセンブルン嬢、そこまでにしよう。」

一人の近衛騎士がマギーの肩に手を置く。それを跳ね除け、睨みつける。

「サイモン！あなたもこいつ等の味方をするのっ！」

「そうじゃない。ここはあなたがいるのに相応しい場所じゃない。今は止めた方がいい、俺のいる場所であなたに何かあったらケルテンに会わす顔がなくなる。」

マギーがサイモンを睨みつける。サイモンはその視線を逸らすことなくじっと見つめる。怒気を逸らす様にふっと笑顔を浮かべて見せた。

「・・・・・・・・・・分かったわ。ローゼンシュタイン殿に免じてここは引きましょう。」

マギーが大きな足音を立てて出て行った。取り残されたサイモンが頭を掻きながら同僚に声をかける。

「こんな所で女性相手に口喧嘩をしている場合じゃないだろう。閲兵式まで時間がないぞ。」

その言葉に集まっていた者達が仕事を思い出したように消える。先ほどまで口論していた者達もぶつぶつ言いながら控え室に姿を消した。

「サイモンさん、助かりました。すみません、私達では止められませんでした。」

初めにマギーと話していた騎士が謝った。

「それは無理ってもんだ、謝る必要はない。しかし階下まで声が聞

こえたぞ。」

「本当にすみません。そういえばさっきの方が前近衛隊長のことを聞いてましたよ。なにかご存知ですか？」

「そうだな、全く知らないでもない。わかった、それとなく伝えることにする。」

サイモンは控え室に入ることなく、立ち去った。

「どうも俺の役割じゃないな。こういう時こそ、あいつの出番だろうが・・・。」

サイモンが呟きながら歩く、その顔は険しい。

マギーの闘い？

憤慨したままマギーは歩く。自分のことはともかくケルテンのことまで貶されたのは我慢ならなかった。もしあのまま口論を続けていたら、秘匿している魔法でぶっ飛ばしていたかもしれない。あそこで止めてくれたサイモンに怒りをぶつけたが、本当は謝るべきだったかもしれない。冷静になったらそう考えることができた。

図書館の扉を開ける。マギーの代理で入っていた文官がマギーに気づいた。

「早いお帰りですね。もっと長い間、ここにいなければいけないと思ってましたわ。」

その言葉には棘はない。ただ素直に驚いているだけのようだ。

「ごめんなさいね、リンデ。まだ用事は終わっていないの、だからもうしばらくここを頼めるかしら。」

「構いませんよ。この間教えていただいたニフラムはまだ修得に至っていません。外は急に騒がしくなりましたからね。ここは静かでいいですね。」

「そう言って貰えると助かるわ。ちょっと一人になりたいから、しばらく出ていてくれるかしら。」

「じゃあ、食事にでも行ってきます。一時間ほどで戻ります。」

マギーに従って素直に図書館から出て行く。彼女はジークリンデ、

愛称リンデ、魔法の弟子の一人で、文官の見習いをしている。素直で魔法の才があるのでマギーが司書官代理の名目で留守を任せている。

（太陽の石を隠さなければいけないわ。）

マギーがロトの部屋の扉の前から荷物をどける。扉が見えるようになってから、扉に手を当てて集中する。鍵が開く音が確認してからドアノブを握る。扉を開けて中に入る、念のため内側から鍵をかけた。

（ケルテンには言ってないけど、もうアバカムは使えるのよね。）

懐から太陽の石を取り出して雨雲の杖の隣に置く。棚には最後の鍵も元の宝箱に入れて置いてある。

（そのうち、ここは王家の宝物庫よりすごい財宝が並ぶかもしれないわね。それを管理しているなんて歓喜の極みね。）

扉を開けて外にでる。そこで思わぬ者に出会った。

――――――――――――――――――――――――――――――

「マギーさん、さっきは悪かった。」

扉を開けながら軽い口調でサイモンが図書館に入る。

「あれっ！誰もいない。そんな馬鹿な、さっきここに入るのは見たし、代理の子が出て行くのも見たぞ。」

サイモンが図書館の中を歩き回る。棚と棚の間、魔法実習室、カウンターの内側、何処にもいない。

「おっ！何だこれは？でかい荷物だと思ったら台車に載っているのか・・・んっ？この扉は・・・。」

ガチャッ！いきなり扉が開いた。サイモンが驚いて飛びのく。

「誰っ！そこにいるのはっ！」

出てきたマギーが驚く。思わずしても無駄な質問をしてしまう。

「すまん、俺だ。サイモンだ。さっきのことを謝ろうと思ってきたんだが、謝ることが増えたみたいだな。」

「見たのっ！見たわよね。」

「ああ、扉があったんだな。知らなかったよ。」

「ちょっと、どいて！」

マギーがサイモンを押して、扉の前から退ける。カモフラージュの荷物を元に戻す。黙ったまま図書館の中央まで歩く。仕方なくサイモンは後をついていく。

「何怒ってんだよ。」

マギーの辺りから魔法力の高まりを感じる。

「ちょっと待てよ、さっきの扉のことは誰にも言わないから物騒な真似はよせっ！」

「それ本当ね。もし誰かに言ったらあなたを殺すわ。言ってる意味分かるかしら。」

「ああ、君が本気なのは分かった。絶対誰にも言わない。騎士の名誉にかけて約束する。」

マギーの周辺に集まっていた魔法力が拡散した。

「今のは一体何だよ、あんなに魔法力が集中したのは初めて感じたぞ。」

「それも秘密よ。その気になれば一人ぐらい跡形も無く消すこともできる魔法もあってよ。」

「おい！それもしかしてロストマ・・・」

マギーがその言葉を手で遮る。

「これ以上は詮索しないで！これは諸刃の剣なの。」

「諸刃の剣ね、分かりやすい喩えだ。了解だ、これ以上は詮索しないことにするよ。」

「よかった、あの人の友人を一人失うところだったわ。」

「そこまで本気かよ。怖い女だな。」

「そうよ、あの人の為なら何でもするわ。それがあの人の望みなのだから・・・。」

「ケルテンが羨ましいな、ここまで想ってもらえるとはね。じゃあ、俺の用件だけ伝えて帰るとするか。アイゼンマウアー隊長の居場所を探しているのだろう？」

「そうよ、なんで知ってるの？」

「さっきの騎士に聞いた。俺もどちらかと言うと少数派でね、なんとかアイゼンマウアー隊長の復帰を望んでいる。」

「結構不器用なのね、出世できないわよ。」

「余計なお世話だ、俺のことはほっといてくれ。アイゼンマウアー隊長だが近衛に入る前は冒険者をしていたらしい。だからその道の者に聞いた方がいいだろう。」

「そうしてみるわ。ありがとう、わざわざそれを言う為に来てくれたのね。」

「礼を言われるまでもない。さっきも言っただろう、俺は少数派だって。だから俺なりにできることをしたまでだ。じゃあ俺は行くから後は任せた。」

サイモンはおどけた口調でそう言うと出て行った。次にやるべきことは決まった。まだまだマギーの闘いは終わらない。

――――――――――――――――――――

「すみません。アイゼンマウアーという冒険者を知りませんか？」

マギーは城下街の宿屋に来て、聞いている。宿屋の従業員の幾人に聞いてみたがよい答えは返ってこない。それでも諦めずに別の従業員にも聞く。

「ここ半年は冒険者も見なくなったねえ。そのアイゼン何とかという人は何時ごろの人かしら？」

若い女の従業員に逆に質問される。そういえば何も知らない。

「いつの人だかは知らないわ。年齢は３０半ばから上、多分ここ一、二年はいなかったと想うわ。」

「じゃあ知らないわ。だったらここの主人に聞いた方がいいわね。親父さ～ん、親父さ～ん、綺麗な女の人がお呼びよ～！」

その女中が奥に声をかける。

「なんだよ、大声で人を呼ぶなっていつも言ってるだろうがっ！で俺を呼んでいるのは誰だよ。」

文句を言いながら宿屋の主人が表に出てきた。

「なんだ、あんたか。学者の知り合いだったな。俺になんか用か？」

「アイゼンマウアーという人を探しているの！知らないですか？」

「ほう、久し振りにその名前を聞いたな。近衛騎士になった時は無

理だと行ったんだが、いつの間にか隊長になったと聞いて驚いたものだ。で、それがどうした?」

「近衛騎士隊長を辞めました。それで居場所を探してます。何か知りませんか?」

「辞めただと、そうか続かなかったか。やっぱり平民では駄目なのかね。」

「そうではありません。自分から辞めたそうです、なにか理由があるはずです。」

「ふむ、辞任ねえ・・・責任感の強いやつだからな。町のはずれにあいつの家がある。まだ住んでいるか分からないが行ってみるといい。」

「どこの屋敷ですか?教えてください。」

「屋敷なんて大層なもんじゃないさ、ただの家だ。地図を書いてやるからちょっと待ってろ・・・・・・・・・よしこれでいいだろう。ほらっ!」

「ありがとうございます。失礼します。」

マギーの手に地図が渡される。受け取ったマギーがすぐに外に飛び出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1157y/

勇者って一人じゃないんですか？

2011年12月13日11時30分発行